

上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 26

—更埴市内その5—

こうしょくじょうり やしろ  
更埴条里遺跡・屋代遺跡群

おおざかい くぼがわら  
(含む大境遺跡・窪河原遺跡)

—古 代 1 編—

本 文

1999.3

日 本 道 路 公 団  
長 野 県 教 育 委 員 会  
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 26

—更埴市内その5—

こうしよくじょうり やしろ  
更埴条里遺跡・屋代遺跡群

おおざかい くぼがわら  
(含む大境遺跡・窪河原遺跡)

—古 代 1 編—

本 文

1999.3

日 本 道 路 公 団  
長 野 県 教 育 委 員 会  
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー



更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡遠景



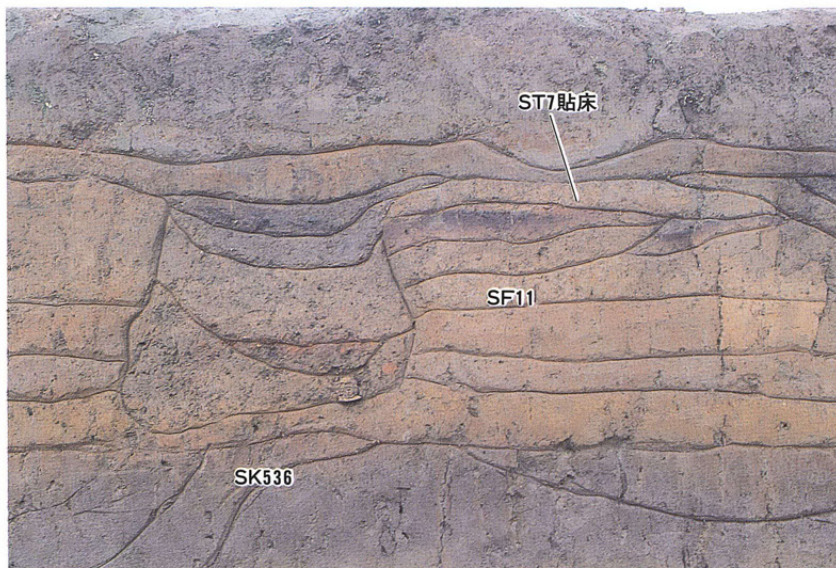
- I層
- III層
- IV層
- V-KA-1~5層
- VIII層

更埴条里遺跡A地区 西壁断面



- I 層
- II 層
- III-1層
- III-2層
- IV-1層
- IV-2層
- VI 層
- VII層

屋代遺跡群①区 西壁断面



- I 層
- III-2層
- SF8

屋代遺跡群①区 ST7・ST9・ST15付属鍛冶関連遺構断面



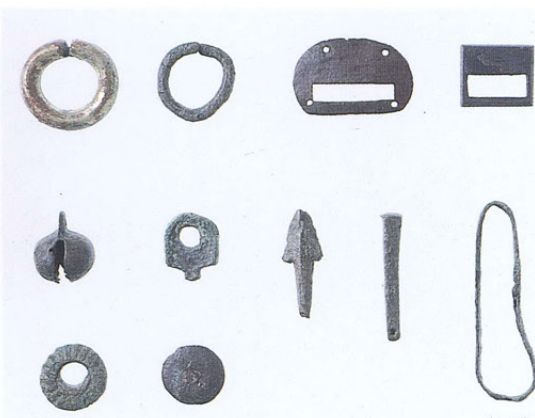
(1/1)

屋代遺跡群⑥区 SB5134出土ガラス玉鋳型



(4/1)

鋳型に付着していたガラス



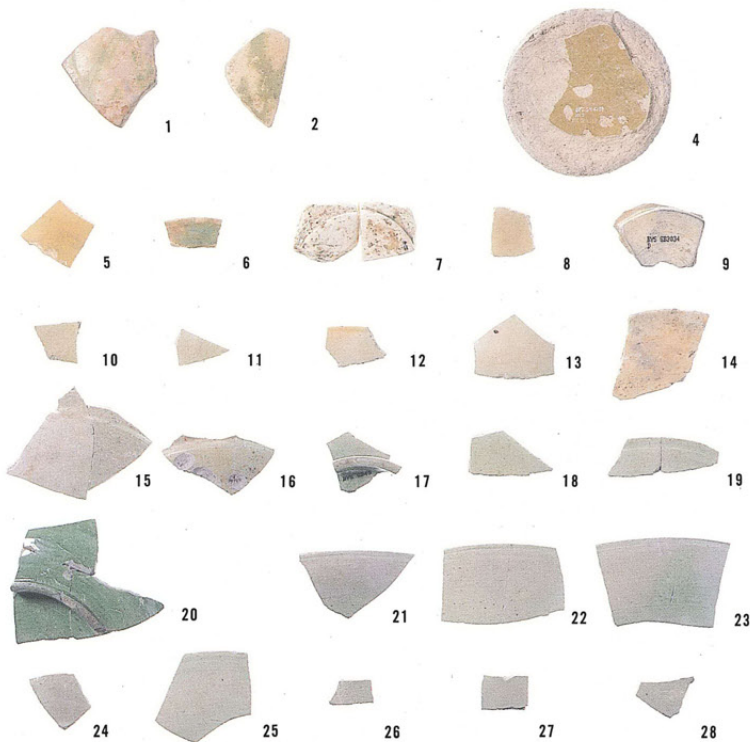
(1/2)

屋代遺跡群出土 金属製品



屋代遺跡群出土 奈良三彩 (二彩)  
(下の拡大写真)

屋代遺跡群出土 緑釉陶器



屋代遺跡群・更埴条里遺跡出土 奈良三彩 (二彩)・緑釉陶器

奈良三彩 (二彩)

1 : ②区 IV層

2 : ①区 III-2層

緑釉陶器o類

3 : SD62-4

4 : SK4139-1

5 : SB5013

6 : SB6120

7 : SC2-2

8 : SD281

9 : SB3034-9

10 : SD291

11 : SD291

12 : SD237

13 : SB9043

(更埴条里遺跡)

14 : I区 S4 IV-Y5-1層

緑釉陶器a-1類

15 : SB6085 掘方-10

16 : SB6085-8

17 : SB49-4

18 : SB74

19 : SB74a-5

緑釉陶器a-2類

20 : SB9067-17

(更埴条里遺跡)

緑釉陶器b類

21 : VII区 カクラン

22 : VII区 OS18 IV-1層上面

23 : VII区 カクラン

(図版117-3)

緑釉陶器x類

24 : SB41

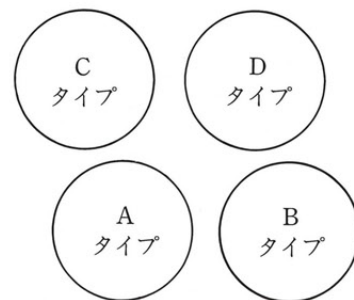
25 : SD273-7

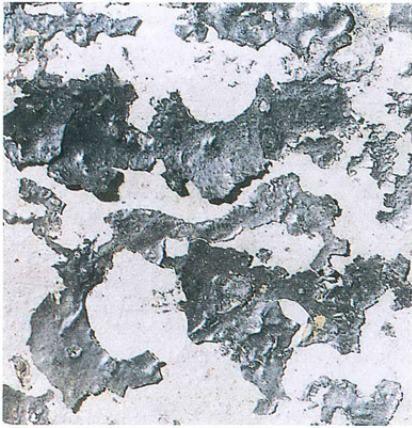
26~28 : SD273

13・20以外はすべて屋代遺跡群



須恵器の質A・B・C・Dタイプ of 具体例





1 No.14須恵器杯内面の漆 2.6×



2 No.2外面の漆文字「十」 2.6×



3 No.15土器内面の漆 2.6×



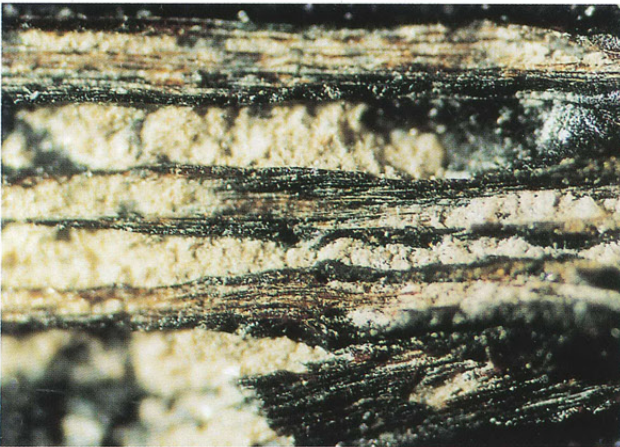
4 No.27紡錘車



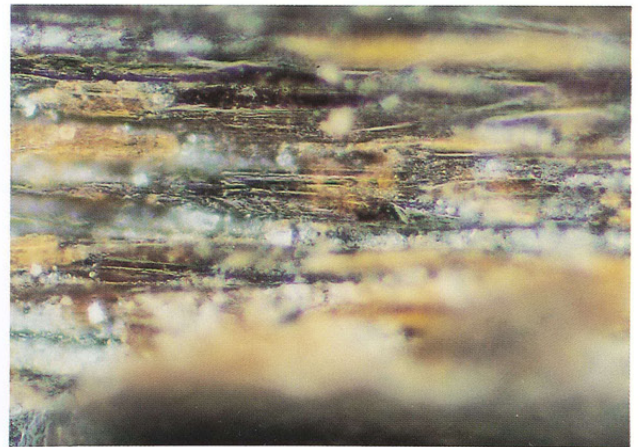
5 同左



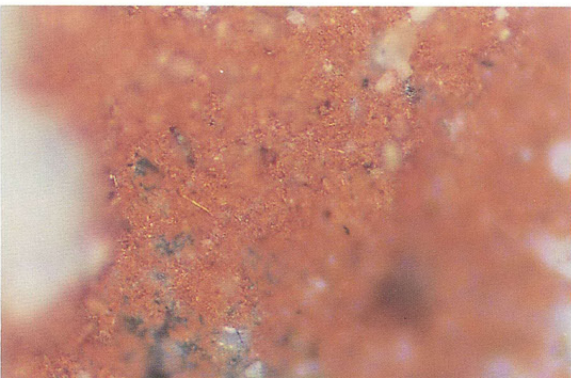
0.9× 6 同左 2.6×



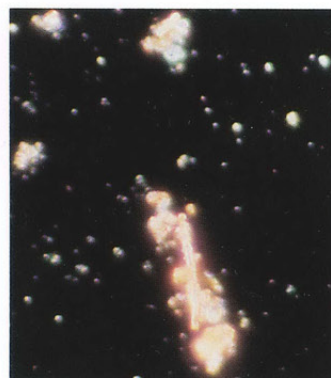
7 No.27紡錘車補強糸 33×



8 同左 260×



9 No.21土器内面の赤色顔料 260×



10 同左 660×



11 同左 660×

# 序

屋代遺跡群周辺の地区は、古代より水運や陸路の拠点として、多くの文物や情報が運ばれてきました。例えば、近年の発掘調査からは、この地域の稲作開始に北陸・東海の両地方が深く関わっていたことが指摘されています。また、中央との関係を見ますと、古墳時代には畿内の王墓と同型式の前方後円墳が県内で最初に築造（森將軍塚古墳）されています。さらに「屋代木簡」の出土によって、飛鳥・奈良時代には、郡の役所である埴科郡家とともに初期国府が存在していた可能性も浮上してきました。このように、各々の時代にもたらされた最先端の情報は、交通の要所である屋代地区に蓄積され、社会・経済・文化の発展に役立ってきました。また、これらの情報を掌握するため、政治の拠点にもなってきました。

上信越自動車道、中央自動車道が開通した現在、屋代地区は東京方面・名古屋方面・上越方面からの高速道路が出会う地として、高速交通網の拠点となりました。人やモノの動きが活性化することは、経済のみならず文化面での発展にもつながると期待されます。この点では、昨年度の冬季オリンピック開催によって、国内はもとより、広く世界の国々へと繋がる“道”が敷かれたと考えることもできましょう。

文化は一方的に受容するものではありません。先のオリンピックにおいては、スポーツ以外の分野でも、信州の文化を世界へ向けて発信する機会になりました。特に、郷土芸能や祭りの数々、あるいは「おやき」などの食文化は、多くの人々が知る事となりました。しかし、短期的な祭典では、比較的目に留まりやすいこれらの分野以外、例えば考古資料のような「モノ」を主体とし、長期にわたる地道な調査や普及活動などが必要な分野は、その性格上、アピールしにくいものでした。オリンピック後は、こうした在地の基層文化へも継続的に目を向け、広く世界に発信すべき時だと考えられます。

更埴条里遺跡は、埋没条里遺構の発掘とその学際的な研究が国内で最も早く行われた遺跡として著名であります。また、屋代遺跡群から出土した木簡は、古代地域社会を語る上で必須の一大発見となり、平成10年6月には「木簡学会」の研究集会在県立歴史館で開催されるまでになりました。本編では、これらの研究を踏まえ、古代における耕地開発の実態や木簡が使用されていた時代の景観、人々の暮らしの様子を明らかにするよう努めました。今後さらに、こうした資料を文化として育て、各方面に発信していけるよう願っております。

わたしたちは、通常考えられるよりはるかに迅速な調査により、高速道路の早期開通につなげ、オリンピックにささやかな貢献を行ってきたと自負しております。至らない点多々あると思われかもしれませんが、この一冊が、地元の基層文化にスポットをあてるための材料となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査開始から本報告書の刊行に至るまで、深い御理解と御協力をいただいた日本道路公団、同上田工事事務所、長野県土木部高速道局、更埴市、同教育委員会、ちくま農業協同組合、地区対策委員会、地権者会等の関係機関、また、地元協力者の方々、発掘・整理作業に従事された多くの方々、直接御指導・御助言をいただいた長野県教育委員会文化財保護課に対し、心から敬意と感謝を表す次第であります。

平成11年3月10日

(財)長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

所長 佐久間鉄四郎

## 例 言

1. 本書は、上信越自動車道建設工事にかかわる更埴条里遺跡、屋代遺跡群、および屋代遺跡群に属する大境遺跡、窪河原遺跡の発掘調査報告書の第4分冊（更埴市内その5）である。

1. 本書は、上記の遺跡における7世紀前半～9世紀後半の遺構・遺物を中心としている。各遺跡の概要については、当センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』8・9・10・11・12・13・14、日本考古学協会発行の『考古学年報47』、同『水辺の祭祀資料集』、『木簡研究』18・20などで紹介しているが、事実報告に関しては本書の記述を持って最終報告とする。ただし、全時期にまたがる分析などは現在も継続中であり、平成11年度刊行予定の『総論編』に掲載する予定である。

1. 本書で使用した地図は、日本道路公団作成の上信越自動車道倉科・雨宮地区平面図および更埴JCT～長野地区平面図（1：1,000）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（1：50,000）、更埴市発行の地形図（1：10,000）を使用した。

1. 航空写真は、更埴地区の全景写真については長野県立歴史館から提供を受けたものと、国土地理院に著作権のある昭和23年米軍撮影の写真を使用した。また、各調査区の写真は（株）新日本航業、（株）共同測量社に撮影を委託したものである。航空写真のモザイク作成は松尾カメラに発注した。

1. 本報告書には次の方々から玉稿を賜った。記して謝意を表する（掲載順）。

第1章第3節4(2)、第6章第2節1、第3節3、第4節、第8章第9節2

(株)パリノ・サーヴェイ 高橋 敦・田中義文・辻本崇夫

第6章第2節2 (株)古環境研究所 松田隆二・脇元三郎

第6章第3節1、第8章第9節1 国立歴史民俗博物館 辻誠一郎

第6章第3節1 流通科学大学 南木睦彦

第6章第3節1 国立歴史民俗博物館 住田雅和・辻圭子

第6章第3節1 多賀町教育委員会 福田美和

第6章第3節2 元大阪府立大学 藤下典之

第6章第5節 元長野県埋蔵文化財センター 輿水太仲

第6章第7節 京都大学霊長類研究所 茂原信生

獨協医科大学 櫻井秀雄・今野 渉

第7章第2節 (株)川鉄テクノリサーチ 岡原正明・伊藤俊治

第7章第3節 東京大学アイソトープ総合センター 小泉好延

東京大学原子力研究総合センター 小林紘一

第7章第4節 国立歴史民俗博物館 永島正春

1. 執筆分担は次の通りである。

第1章第3節1・2 市川桂子

第2章第2節2、第3章第2節、第8章第8節 河西克造

第1章第2節2、第5章第1～3節、第8章第1～2節 鳥羽英継

※第8章第1節中、須恵器胎土分析については（株）第四紀地質研究所 井上 巖氏の原稿を抜粋して掲載した。

第2章第4節6、第5章第6節、第8章第6節 平出潤一郎

第7章第2節2 水沢教子

第2章第5節、第5章第5・7・8節、第8章第3・4・7節 宮島義和



第1章第1節、2節1、第3節3、4(1)、第4節、第2章第1～3節、第4節(6以外)、第3章第1節、第4章、第5章第4節、第6章第1・6節、第7章第1節、第8章第5節、第9章

寺内隆夫

1. 遺物写真の撮影・焼き付けは田村 彬が、脆弱遺物の保存処理は県立歴史館 白沢勝彦・寺内貴美子、埋蔵文化財センター 白田広之、水沢教子、相沢秀樹が担当した。
1. 本書の編集・校正は担当者の合議の上、最終的には寺内が行い、小林秀夫・広瀬昭弘が校閲した。
1. 遺構記号・遺構番号は、すでに1996『屋代遺跡群出土木簡』、1998『弥生・古墳時代編』などで公表されているものがある。それらを活かし混乱をさけるため、原則として発掘調査時の記号や番号を変更していない。そのため、欠番などが存在する。
1. 註・参考文献は各章あるいは節の末にまとめた。
1. 発掘調査・報告書作成にあたり下記の諸氏・諸機関にご指導・ご援助をいただいた。記して謝意を表する次第である。(敬称略、五十音順)

会田 進、明科町教育委員会、赤羽貞幸、穴沢義功、飯田市上郷考古博物館、市沢英利、出河裕典、伊藤俊治、井上 巖、井上喜久男、今野 渉、井原今朝男、岩崎卓也、上田市信濃国分寺資料館、上原真人、江浦 洋、大沢 哲、大塚文人、大塚昌彦、大平 茂、岡田正彦、岡原正明、岡谷市教育委員会、小口達志、小野紀男、金箱正美、鐘江宏之、金子裕之、神谷佳明、河内晋平、北野博司、北御牧村教育委員会、木下正史、桐原 健、金田章裕、北原糸子、国下多美樹、工楽善通、倉沢正幸、栗野克巳、小泉好延、国立奈良文化財研究所、国立歴史民俗博物館、更埴市教育委員会、肥塚隆保、興水太伸、小林紘一、小林高雄、齋藤孝正、酒井潤一、斎野裕彦、坂井秀弥、坂城町教育委員会、佐久市教育委員会、櫻井秀雄、笹沢 浩、佐藤和彦、佐藤信之、塩尻市平出博物館、四賀村教育委員会、茂原信生、渋谷恵美子、清水みき、下平博行、白沢勝彦、菅原弘樹、助川朋広、鈴木三男、住田雅和、高木勇夫、高島英之、高橋 学、滝沢敬一、田口昭二、辰巳和弘、巽淳一郎、館野和己、玉田良英、辻 圭子、辻誠一郎、辻本崇夫、土橋 誠、寺内貴美子、寺崎保広、傳田伊史、戸倉町教育委員会、豊科町教育委員会、直井雅尚、中井一夫、永島正春、長野県立歴史館、長野市教育委員会、長野市埋蔵文化財センター、長野市立博物館、長野市立東条小学校、能代修一、林 謙作、早川万年、林 幸彦、原 明芳、原田和彦、原田信男、平川 南、平野 修、平林 彰、福島邦男、福島正樹、福田美和、藤川智之、藤下典之、古越永子、穂積裕昌、堀口萬吉、前島 卓、松井 章、松本市教育委員会、松田隆二、丸子町教育委員会、翠川泰弘、南木睦彦、宮沢恒之、宮下健司、宮本長二郎、村上 隆、牟礼村教育委員会、望月町教育委員会、望月由佳子、百瀬新治、森 明彦、森嶋 稔、矢島宏雄、矢島洋子、矢田 勝、山岸猪久馬、山口 明、山口英男、山崎ます美、山田真一、山田昌久、山中 章、山中敏史、横山かよ子、義江彰夫、若尾正成、和田 萃、綿田弘実、渡辺 昇、渡辺博人

また、センター内の調査研究員、あるいは現地調査に携わった方々から多くの助言を得ている。

校閲・執筆者以外で、古代の調査・整理に関わった調査研究員は以下の通りである。

相沢秀樹、青木一男、井口慶久、市川隆之、出河裕典、伊藤克己、伊藤友久、稲場 隆、上田典男、上田 真、白居直之、白田武正、大久保邦彦、岡沢康夫、奥原 聡、大和龍一、川崎 保、木内英一、小林清人、桜井秀雄、澤谷昌英、島田正夫、清水 弘、下島浩伸、下平博行、武居公明、田中正治郎、谷和隆、月原隆爾、常長虎徹、寺内貴美子、徳永哲秀、中沢道彦、中平智明、中村 寛、夏目大助、贄田明、西 香子、西嶋 力、西村政和、西山克己、野村一寿、馬場信義、伴 信夫、廣田和穂、深沢重夫、福岡正樹、藤沢袈裟一、藤原直人、湊井英知、本田 真、町田勝則、松岡昭彦、松岡忠一郎、水沢教子、

宮入英治、宮下祐治、宮脇正実、百瀬忠幸、百瀬長秀、柳沢 亮、山極 充、山中 健、吉江英夫、吉沢信幸、依田 茂、若林 卓

1. 本調査には、ベトナム文化・情報・スポーツ省のグエン・テ・ファン氏が研修で参加している。
1. 本書で報告した記録および出土遺物は長野県立歴史館が保管している。

# 凡 例

1. 本書に掲載した実測図の縮尺は原則として下記のとおりで、該当個所のスケールの上に記してある。

## 1) 主な遺構実測図

遺構分布図 1:500 遺構割付図(集落跡) 平面図 1:120 割付図付き断面図 1:80  
 建物跡個別平面図 1:80 溝・流路個別図(屋代遺跡群⑥区) 1:40~1/200 断面図 1:60  
 土坑個別平面図・断面図 1:30~1:60

## 2) 主な遺物実測図

土器拓本 1:3 実測図 1:3~1:4 土製品・石製品 1:1~1:2 石器 2:3~1:4  
 木製品 1:3~1:9 鉄製品・鉄滓・骨角製品 1:3

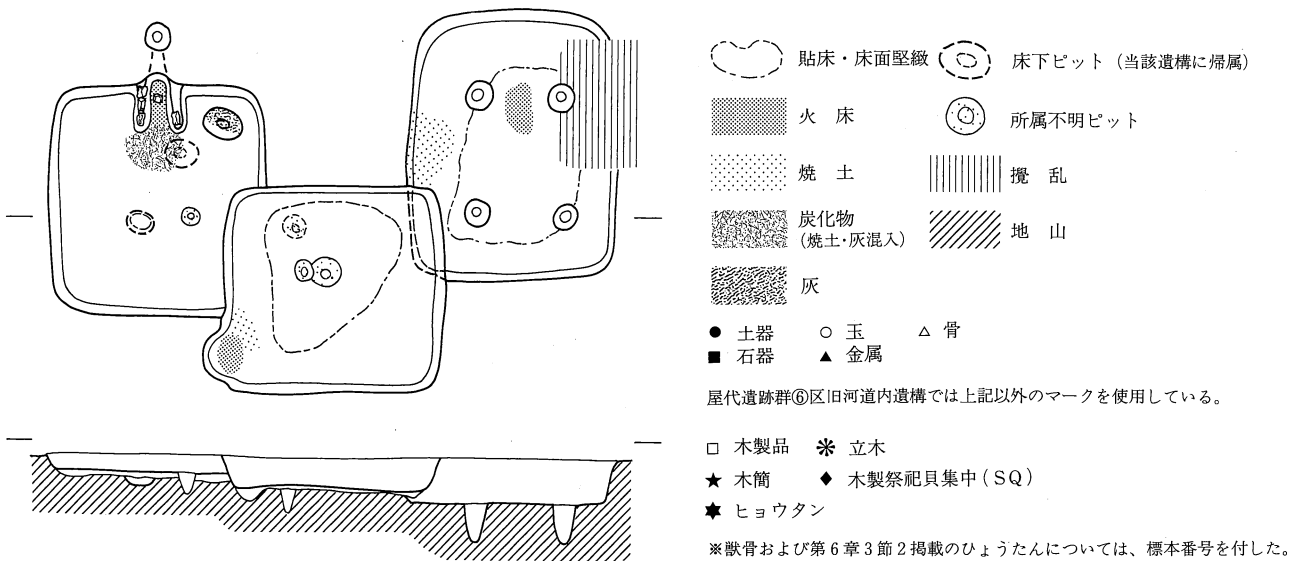
1. 本書に掲載した主な遺物写真の縮尺は、下記の通りである。

土器甕・壺類 1:4 杯・小型壺など 1:3 その他の製品は原則として実測図の縮尺に準じた。

1. 遺物の出土地点表記は、図版中に出土遺構名またはグリット名を表記した。

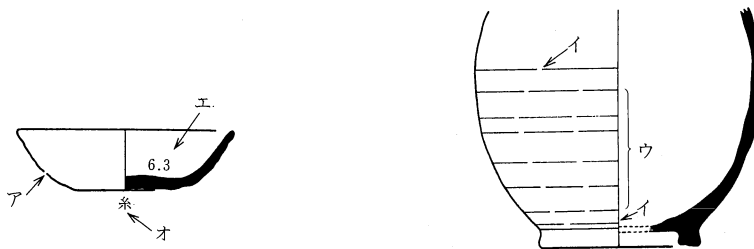
1. 実測図中のスクリーントーンなどは下記のように用いた。これ以外の場合は、当該項目の中で説明するか、図中に凡例を示した。

## 1) 遺構実測図



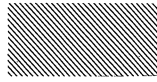
## 2) 遺物実測図の表現

### 土器実測図の表現



- ・ 実測線の不連続の部分は、破片資料を回転実測した際の欠落部分を示す(ア)。
- ・ 実測図の断面は須恵器の質Dタイプは黒ぬり、非クロロ土師器・黒色土器・土師器は白ぬきで、その他のものについては以下のようにスクリーントーンで区別している。

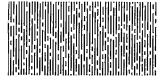
須恵器の質Aタイプ



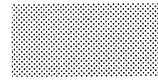
須恵器の質Bタイプ



須恵器の質Cタイプ



灰釉陶器・緑釉陶器

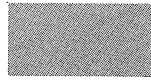


- ・ 実測図の断面以外のスクリーントーンは以下のように区別している。

黒色土器



すす



付着物



- ・ 実測図の線の種類は、回転へら削りの場合ロクロナデから回転へら削りが始まる部分は1マスあけた線(— —)で表し(i)、回転へら削りの単位は2マスあけた線(— — —)で表した(w)。手持へら削りは削った範囲を図示した。器面のミガキは非ロクロ土師器の場合は書き入れ、ロクロ使用の土器はミガキがある場合は書き入れていない。したがって、黒色土器A、黒色土器Bにはほとんどミガキを伴うが図面にはミガキはかき入れていない。ミガキの有無で土器の種類が判断できる。
- ・ 糸切りの須恵器杯Aの内面底径は、実物からデパイトで計測し、実測図の内面部分にcmを省略した数字で書き入れた(s)。へらキリの須恵器杯Aは、編年の指標とならないため特別の例を除いて未記入である。
- ・ 編年上重要な杯Aの底部調整は、図中に以下のような略号で底部近辺に記入した(t)。

(略号) (底部調整)

糸 → 回転糸切り未調整をさす

回へ → 回転へら削り

手へ → 手持へら削り

へ → へら切り、へら切り後ナデも含む

糸+手へ → 中心部糸切り、底部周辺を手持へらけずり

糸+回へ → 中心部糸切り、底部周辺を回転へら削り

- ・ 特に、特徴的な土器については土器番号の下に簡単に説明を書いた。
- ・ 灰釉陶器と緑釉陶器の断面のスクリーントーンは同じだが緑釉陶器は土器番号の下に緑釉と書いた。
- ・ 同じ遺構番号の遺物が2プレート以上にまたがる場合は—①、—②と表記した。また、遺構番号の横の( )内にそのプレートにおける個数を記入した。

木質遺物 実測図および一覧表中の木製品、屑の木取りと、木製品の欠損部、炭化した範囲、黒漆が塗布された範囲については以下のスクリーントーンで示した。



板目I



板目II



斜め



征目



追征目



欠損部



芯持ち



削り出し



炭化した範囲



黒漆の塗られた範囲

# 本文目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

## 第1章 遺跡の概観と調査の概要

第1節 本編の範囲	1
1 報告書作成の方針	1
2 本編の範囲	2
第2節 歴史的環境と周辺遺跡	3
1 遺跡の位置	3
2 古代の屋代地区	3
第3節 地形・地質環境と基本層序	9
1 善光寺平南部の地形・地質環境	9
(1) 長野盆地南部の地形 (2) 遺跡周辺の地形	
2 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の層序	11
(1) 七ツ石層 (2) 反町層 (3) 屋代層	
3 調査対象となった層序	14
(1) 層名 (2) IV・V層の特徴	
4 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の環境変遷	15
(1) 検討会の設置 (2) 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の環境変遷	
第4節 調査・整理の経過	18
1 調査の概要	18
(1) 調査の実施にあたって (2) 調査の手順	
2 整理の概要	20
第2章 飛鳥時代から平安時代前期 (IV・V層検出) の遺構と遺物出土状況	
第1節 概観	21
第2節 後背湿地 I 群内の遺構と遺物出土状況	22
1 概観	22
2 更埴条里遺跡 A～C 地区	22
(1) V-KA-5層上面検出水田跡 (V-KA-5層水田) (2) V-KA-1層上面検出水田跡 (V層水田)	
3 更埴条里遺跡 D～J 地区	24
(1) 溝と道路状遺構 (SD・SC・SX) (2) 土坑 (SK)	
第3節 自然堤防 I 群内の集落跡の概要	25
1 概観	25
2 更埴条里遺跡 J・K 地区集落跡	25
3 屋代遺跡群①区集落跡	25

4	屋代遺跡群②区集落跡	26
5	屋代遺跡群③a区集落跡	27
6	屋代遺跡群③b区集落跡	28
7	屋代遺跡群④～⑥区集落跡 (④b区南グループ)	28
8	屋代遺跡群④～⑥区集落跡 (④b区北グループ)	29
9	屋代遺跡群④～⑥区集落跡 (中枢部)	29
第4節	集落跡検出の遺構と遺物出土状況	31
1	掲載方法	31
2	竪穴建物跡 (SB、SKの一部)	31
	(1) 概要 (2) 竪穴建物の構築・使用に関して (3) 竪穴建物の廃絶と遺物出土状況	
3	掘立柱建物跡、礎石建物跡 (ST)	44
	(1) 概要 (2) 掘立柱建物、礎石建物の構築・使用に関して (3) 掘立柱建物、礎石建物の建て替えと廃絶	
4	井戸・土坑ほか (SK)	50
	(1) 概要 (2) 分類 (3) I群1類 井戸跡 (4) I群2類 いわゆる焼土坑 (5) I群3類 廃棄用土坑 (6) I群4類 2基セットで掘方を持つ柱穴 (7) I群5類 盛土用の土砂供給用掘削坑 (8) I群6類 用途不明の掘削坑	
5	炉、焼土跡 (SF)	53
6	鍛冶関連遺構	53
	(1) 更埴条里遺跡K地区 (2) 屋代遺跡群①区 (3) 屋代遺跡群④～⑥区	
7	遺物集中 (SQ)	57
8	性格不明の遺構 (SX)	57
9	柵列ほか (SA)	57
	(1) 概要 (2) SAの分類 (3) 設置場所の特徴	
10	溝・自然流路 (SD)	58
	(1) 概要 (2) 溝・自然流路の分類	
第5節	屋代遺跡群⑥区旧河道内遺構	109
1	概観	109
2	第5水田対応層古段階	111
	(1) 水田跡 (2) 自然流路 (SD) (3) 湧水溝 (SD、SX)	
3	第5水田対応層新段階	113
	(1) 下層自然流路 (SD) (2) 下層湧水溝 (SD、SX) (3) その他 (SD) (4) 上層自然流路 (SD) (5) 上層湧水溝 (SD) (6) その他 (SD) (7) SD7045= SD8032堆積土内遺物集中廃棄地点	
4	第4水田対応層	117
	(1) 水田跡 (2) 自然流路 (SD) (3) 湧水溝 (SD) (4) その他 (SD、SX) (5) SD7045= SD8032堆積土内遺物集中地点 (SQ)	
5	第3水田対応層	121
	(1) 水田跡 (2) 自然流路 (SD) (3) 湧水溝 (SD) (4) その他 (SD) (5) 土坑 (SK)	

6 第2水田対応層	126
(1) 水田跡 (2) 自然流路 (SD) (3) その他 (SD) (4) 自然堤防側の開発と遺構	
<b>第3章 平安時代、洪水砂埋没直前 (IV-1層上面) の遺構と遺物出土状況</b>	
第1節 概観	129
第2節 水田域 (条里遺構)	130
1 概観	130
2 更埴条里遺跡の水田跡	130
3 屋代遺跡群①～④区の水田跡	133
4 屋代遺跡群⑥区の水田跡 (⑥区第1水田)	135
<b>第4章 自然災害痕跡</b>	
第1節 古代における自然災害痕跡	140
1 洪水痕跡	140
(1) 9世紀後半の大洪水 (2) 古代の洪水と被害地区	
2 地震痕跡	140
(1) 液状化現象による砂脈 (2) 砂脈の検出された地区と時期 (3) 調査方法	
(4) 9世紀中～後半の砂脈と噴砂 (5) 7世紀後半代の砂脈	
<b>第5章 遺物</b>	
第1節 土器	143
1 古代の土器の分類	143
(1) 土器の種類 (2) 器種 (3) 使用の場における分類 (4) 集計法	
(5) 土器分析上の新たな視点	
2 各遺構出土土器	149
(1) 竪穴建物跡 (SB) 出土土器 (2) 畦畔 (SC) 出土土器	
(3) 溝・自然流路 (SD) 出土土器 (4) 土坑 (SK) 出土土器	
(5) 礎石建物跡 (ST) 出土土器 (6) 水田関連包含層出土土器	
第2節 墨書・刻書土器	186
1 墨書土器	186
2 刻書土器・篋書土器	186
3 複数出土例がある文字関連資料について	187
第3節 土製品	196
1 瓦塔	196
2 布目瓦	196
3 硯	196
(1) 円面硯 (2) 温硯 (3) 朱墨硯 (4) 転用硯	
4 土錘	198
5 紡錘車	198
6 その他の土製品	198
第4節 石器・石製品	201
1 概要	201
2 各器種の属性	201

第5節 玉関係遺物	205
1 概要	205
2 各製品の説明	205
第6節 金属製品および鉄生産関連遺物	209
1 概要	209
2 銅・青銅製品	209
3 鉄製品	210
4 鉄生産関連遺物	217
第7節 古代の木質遺物	239
1 木製品	239
(1) 木製品の分類 (2) 木製品の解説	
2 屑	261
(1) 屑の分類 (2) 樹種からみた屑と製品の関係について (3) 屑の解説	
第8節 骨角器・加工痕のある骨	289
1 骨角器	289
(1) ト骨 (2) 紡錘車 (3) 篋 (4) 鏃 (5) その他	
2 加工痕のある骨	291
<b>第6章 微化石と動・植物遺体の分析</b>	
第1節 IV・V層を対象とした動・植物相の復元	293
第2節 植物珪酸体(プラント・オパール)・花粉・珪藻分析	294
1 古代の環境と土地利用	294
はじめに (1) 更埴条里遺跡の条里水田 (2) 更埴条里遺跡K地区を境とした土地利用状況の変化	
(3) 屋代遺跡群の条里水田 (4) 屋代遺跡群②・③区の島の状況 (5) 屋代遺跡群⑥区水田	
(6) 屋代遺跡群⑥区旧河道	
2 更埴条里遺跡IV・V層におけるプラント・オパール分析	300
(1) 目的と方法 (2) 分析結果 (3) IV層期の稲作 (4) V層期の稲作	
第3節 種実	303
1 屋代遺跡群の古代の大型植物遺体群	303
はじめに (1) 現地で採取された植物遺体群 (2) 水洗選別で得られた植物遺体群	
(3) 注目すべき植物群の記載	
2 更埴条里遺跡・屋代遺跡群から出土したウリ科の栽培植物	324
はじめに (1) 出土遺体数 (2) 出土種子の特性	
(3) ヒョウタン仲間の出土果皮(果実)の特性	
3 竪穴住居跡から出土した炭化種実	332
第4節 木製品・自然木、炭化材の樹種	333
1 屋代遺跡群⑥区出土木製品・自然木および更埴条里遺跡出土木製品の樹種	333
(1) 同定の目的と方法 (2) 樹種同定結果の概要 (3) 木製品の用途と樹種の関係	
2 屋代遺跡群⑤区SB5004出土炭化材の樹種および灰状物質の材料	336
第5節 屋代遺跡群⑥区出土の昆虫遺体	338
1 昆虫遺体発掘の概要	338



2	昆虫遺体の採取	338
3	昆虫遺体の保存状態と処理	338
4	種の同定	339
5	考察	339
第6節	貝類・魚骨	341
第7節	上信越自動車道屋代遺跡群出土の脊椎動物遺存体	342
	はじめに	342
1	出土脊椎動物骨のリスト	342
2	脊椎動物遺存体の出土状況と特徴	342
3	種別の考察	343
	(1) 出土したヒト (2) 出土した脊椎動物	
4	屋代遺跡群の時代別出土状況	346
5	出土脊椎動物の全体的特徴	347
6	まとめ	347
<b>第7章 手工業生産物に関する成分分析</b>		
第1節	IV・V層出土の手工業生産物を対象とした成分分析	379
第2節	金属製品成分分析	380
1	更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土 鉄製品・鉄滓・羽口等の分析・調査	380
	はじめに (1) 調査項目および試験・検査方法 (2) 各分析条件および装置一覧	
	(3) 分析結果	
2	屋代遺跡群出土銅製品の材質について	393
第3節	更埴条里遺跡・屋代遺跡群から出土したガラスの材質分析	394
	はじめに	394
1	ガラス試料と分析方法	394
2	結果	395
3	考察	397
	(1) 古代ガラスの材質 (2) 更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土のガラス	
第4節	古代の漆・赤色関係資料	399
	はじめに	399
1	漆関係資料	399
2	赤色関係資料	400
<b>第8章 成果と課題</b>		
第1節	屋代遺跡群における古代の土器	401
1	時間軸の設定	401
2	食膳具の変容	403
	(1) 須恵器 (2) 黒色土器A (3) 黒色土器B (4) 土師器 (5) 非ロクロ土師器	
	(6) 搬入系土器 (7) 食膳具の変遷	
3	煮炊具の変容	452
	(1) 土師器 (2) 煮炊具の変遷	
4	貯蔵具の変容	458

(1) 須恵器 (2) 灰釉陶器 (3) 黒色土器B (4) 貯蔵具の変遷	
5 実年代の比定	460
第2節 古代の土器 重要遺物のまとめ	467
1 灯明具	467
2 カマジルシ	470
3 穿孔土器	472
4 底部縁辺加工土器	472
5 模倣土器	473
6 奈良三彩(二彩)	473
第3節 木製祭祀具の変遷	474
はじめに	474
1 人形の変遷	474
2 馬形の変遷	475
3 鳥形の変遷	476
4 蛇形の変遷	476
5 祭祀具の変遷から得られる課題	476
第4節 考古資料としての削屑	483
はじめに	483
1 資料化の方法	483
2 資料の検討	483
3 今後の課題	491
第5節 集落の変遷	493
はじめに	493
1 各集落内遺構の時間的位置づけ	493
(1) 新旧・並行関係把握の素材 (2) 新旧関係の把握方法と前提条件	
(3) 並行関係の把握方法と前提条件	
2 更埴条里遺跡K地区集落の変遷	495
(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証 (2) 更埴条里遺跡K地区集落の変遷	
3 屋代遺跡群①区集落の変遷	499
(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証 (2) 屋代遺跡群①区集落の変遷	
4 屋代遺跡群②区集落の変遷	501
(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証 (2) 屋代遺跡群②区集落の変遷	
5 屋代遺跡群③a区集落の変遷	503
(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証 (2) 屋代遺跡群③a区集落の変遷	
6 屋代遺跡群③b区集落の変遷	506
(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証 (2) 屋代遺跡群③b区集落の変遷	
7 屋代遺跡群④～⑥区集落の変遷1 —④b区南グループ—	508
(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証 (2) 屋代遺跡群④b区南グループの変遷	
8 屋代遺跡群④～⑥区集落の変遷2 —④b区北グループ—	508
(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証 (2) 屋代遺跡群④b区北グループの変遷	

9	屋代遺跡群④～⑥区集落の変遷 3 —中枢部—	509
	(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証 (2) 屋代遺跡群④～⑥区集落の変遷	
10	高速道更埴条里遺跡、屋代遺跡群における古代集落の動向	517
	(1) 集落の構成 (2) 古代集落の動向	
	おわりに	522
第6節	鍛冶関連遺構	525
	はじめに	525
1	竪穴建物跡内鍛冶関連遺構	525
2	鍛冶専用大型建物に伴う鍛冶工房群	526
3	課題	527
第7節	祭祀遺構と祭祀具集中廃棄 (SQ)	529
	はじめに	529
1	祭祀遺構としての湧水溝	529
	(1) 湧水の役割 (2) 湧水溝の分類 (3) 導水型と湧水坑型の変遷 (4) 祭祀遺物 (5) 祭祀の性格	
2	祭祀具集中廃棄 (SQ)	532
	(1) 祭祀具の組み合わせと廃棄地点の変遷 (2) 組み合わせのもつ意味 (3) SQ 出土地点の特徴 (4) 祭祀の性格	
3	課題	535
第8節	条里水田の成立と展開	541
1	条里型地割について	541
2	条里水田の施工時期と埋没時期	542
3	条里水田とV層水田について	542
4	大畦 (坪) 間距離と半折距離について	543
5	洪水直前の田面と洪水の季節	543
6	条里水田の水利形態	544
7	J地区 SC1002について	544
第9節	古代の環境と開発	546
1	更埴条里遺跡・屋代遺跡群の環境史 (2)	546
2	古代の環境と開発	550
第9章	結語 —7世紀前半～9世紀後半の更埴条里遺跡・屋代遺跡群—	551

報告書抄録

奥付

図版・写真図版

## 挿 図 目 次

<p>図1 屋代遺跡群⑥区～窪河原遺跡の旧河道……………2</p> <p>図2 周辺遺跡……………6</p> <p>図3 長野盆地の地形……………9</p> <p>図4 地形分類図（遺跡周辺）……………10</p> <p>図5 遺跡周辺の地質……………10</p> <p>図6 総合柱状図……………13</p> <p>図7 総合柱状図に基づく更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の古環境変遷……………17</p> <p>図8 仮地区名と分割調査……………18</p> <p>図9 竪穴建物の平面形分類とその消長……………32</p> <p>図10 時期別竪穴建物の主軸方位……………34</p> <p>図11 竪穴建物の床面積……………35</p> <p>図12 竪穴建物の掘方分類図……………36</p> <p>図13 竪穴建物の断面形分類図……………37</p> <p>図14 竪穴建物の柱配置と4主柱穴竪穴建物軒数の推移……………37</p> <p>図15 竪穴建物（住居）のカマド位置と時期別傾向……………39</p> <p>図16 カマド脇ピット（貯蔵穴？）分類図……………40</p> <p>図17 カマド各部位の残存率……………40</p> <p>図18 竪穴建物跡の埋土分類図……………42</p> <p>図19 竪穴建物跡の遺物出土位置分類図……………43</p> <p>図20 掘立柱建物・礎石建物の主軸方位……………46</p> <p>図21 掘立柱建物・礎石建物の柱間数と面積……………47</p> <p>図22 いわゆる焼土坑模式図と分布状況……………51</p> <p>図23 ST7・9・15および付属鍛冶関連遺構群の変遷……………54</p> <p>図24・25 古代の土器 器種分類1・2……………146・147</p> <p>図26 須恵器杯Aの質の表記法……………149</p> <p>図27 刻書土器・篋書土器の筆順（正しくない例）……………187</p> <p>図28 墨書土器の諸特徴の分析……………192</p> <p>図29 刻書土器・篋書土器の諸特徴の分析……………193</p> <p>図30 複数出土の文字とその出土遺構および器種……………194</p> <p>図31 時期別文字関係資料出土地点……………195</p> <p>図32 朱墨硯の諸特徴の分析……………197</p> <p>図33 転用硯の諸特徴の分析……………198</p> <p>図34 土錘の消長……………198</p> <p>図35 紡錘車の消長……………198</p> <p>図36 紡錘車の時期的材質変化……………198</p> <p>図37 石臼の法量相関グラフ……………201</p> <p>図38 砥石の法量相関グラフ……………202</p> <p>図39 楕円礫（いわゆる薦編石）の法量相関グラフ……………203</p> <p>図40 鎌の装着角度と刃先湾曲曲線……………212</p> <p>図41 紡錘車の時期別、材質別重量比較……………213</p> <p>図42 鎌・鍬・刀子出土状況（地区別、時期別）……………214</p> <p>図43 鉄生産関連遺物出土状況（地区別、時期別）……………217</p> <p>図44 出土鉄滓地区別重量比……………217</p> <p>図45 3地区鉄生産関連遺物出土推移……………218</p>	<p>図46 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 SB76出土羽口実測図……………219</p> <p>図47 鉄生産関連遺物構成図……………222</p> <p>図48 斗西遺跡出土の幣串形木器……………240</p> <p>図49 神明原・元宮川遺跡出土の人形……………241</p> <p>図50 滋賀県栗東町の股木人形……………242</p> <p>図51 平城京跡出土の鎌形……………245</p> <p>図52 網針類例……………249</p> <p>図53 舞錐概念図……………249</p> <p>図54 側板接合法の分類……………249</p> <p>図55 木簡、短冊状の板、斎串の法量比較……………256</p> <p>図56 的場遺跡出土の浮子……………256</p> <p>図57 大森A遺跡出土の浮子……………259</p> <p>図58 自在形木製品……………259</p> <p>図59 下寺観音堂遺跡出土木製品……………260</p> <p>図60 削屑概念図……………262</p> <p>図61 同定資料数に対する樹種数の推移……………263</p> <p>図62 SQ8006出土削屑の傾向……………265</p> <p>図63 削屑2-A類、2-B類の比較……………266</p> <p>図64 屋代遺跡群⑥a区北壁の主要珪藻化石群集……………295</p> <p>図65 更埴条里遺跡A地区西壁F地点の主要花粉化石群集……………295</p> <p>図66 屋代遺跡群⑥区旧河道内の主要花粉化石群集……………296</p> <p>図67 更埴条里遺跡A地区西壁F地点・K地区トレンチ西壁中央の植物珪酸体組成……………297</p> <p>図68 屋代遺跡群②i区、③a区 IV-1層上面サンプル採取地点……………297</p> <p>図69 屋代遺跡群②i区、③a区（平安水田・畝状遺構面）の植物珪酸体組成……………298</p> <p>図70 更埴条里遺跡A・J・K地区IV-1層、A地区V-1層プラント・オパール分析、サンプル採取地点……………301</p> <p>図71 IV層・V層におけるプラント・オパール分析結果（更埴条里遺跡）……………301</p> <p>図72 屋代遺跡群の各水田対応期から産したモモ核とオニグルミ核の産出状況……………306</p> <p>図73 屋代遺跡群の各水田対応期から産したモモ核の概形（左）とサイズ分布（右）……………308</p> <p>図74・75 屋代遺跡群のモモ核とオニグルミ核1・2……………321・322</p> <p>図76 屋代遺跡群のモモ・クルミ類以外の大型植物遺体……………323</p> <p>図77 ヒョウタン仲間の種子出土遺跡の分布……………324</p> <p>図78 更埴条里遺跡・屋代遺跡群から出土したヒョウタン仲間（ユウガオ属）の種子……………326</p> <p>図79 更埴条里遺跡・屋代遺跡群から出土したヒョウタン仲間の種子の大きさ変異……………327</p>
--	--

図80	出土遺跡別および現世のヒョウタン仲間の種子の大きさ	328	図132	黒色土器A椀・小椀における器形の多様性	423
図81	屋代遺跡群から出土したメロン仲間（キュウリ属）とトウガンの種子	329	図133	黒色土器A皿Aの形態	423
図82	屋代遺跡群（SD8041）から出土したメロン仲間（M-1）の種子の大きさ変異	329	図134	黒色土器B椀・小椀における底径値の時期的変化	424
図83	出土遺跡別にみたメロン仲間の種子の大きさ	329	図135	土師器皿Aの形態	425
図84	屋代遺跡群から出土したヒョウタン仲間の果実の形	330	図136	更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土の畿内系土器	426
図85	屋代遺跡群から出土したヒョウタン仲間の果実の加工	330	図137	灰釉陶器の供給地の時期的変化	427
図86	屋代遺跡群⑥区出土の貝類	341	図138	古代8期前半の大原2号窯式の灰釉陶器	428
図87	屋代遺跡群出土のイヌ	349	図139・140	緑釉陶器の分類 その1・2	428・429
図88・89	屋代遺跡群出土のイノシシ 1・2	350・351	図141	緑釉陶器の消長	429
図90・91	屋代遺跡群出土のニホンジカ 1・2	352・353	図142	須恵器供給地の時期変化	430
図92～93	屋代遺跡群出土のウシ 1～3	354～356	図143	屋代遺跡群出土須恵器の胎土分析 比較用サンプル収集集録	432
図95～98	屋代遺跡群出土のウマ 1～4	357～360	図144	長野市周辺の窯跡領域図	433
図99～105	鍛冶関連遺物の分析・調査（更埴条里遺跡・屋代遺跡群）1～7	386～392	図145	戸倉町・更埴市周辺の窯跡領域図	434
図106	銅椀分析データ	393	図146	佐久平周辺の窯跡領域図	435
図107	銅鈴分析データ	393	図147	松本平・岡谷市周辺の窯跡領域図	436
図108	資料3（79）ガラス玉・カリ石灰ガラス	395	図148	飯田市周辺の窯跡領域図	437
図109	資料14（14）ガラス玉・ソーダ石灰ガラス	395	図149～152	屋代遺跡群出土須恵器 胎土分析結果 その1～4	438～441
図110	資料13（98）両者に分類できないガラス玉	395	図153～155	須恵器胎土分析結果と肉眼観察による産地推定 その1～3	442～444
図111	資料22（99）鑄型に付着していた針状ガラス・ソーダ石灰ガラス	395	図156～158	古代各期の食膳具 その1～3	453～455
図112	資料4 ガラス小片・ソーダ石灰ガラス	395	図159	甕・小型甕の調整手法による分類と対応関係	457
図113	糸切り底の須恵器杯A、内面底径平均値の時期的変化	403	図160	実年代の比定	461
図114	特徴的な器形・調整を持つ須恵器杯A	404	図161	灯明具の分類	467
図115	須恵器杯A、色調別時期的変化	406	図162	灯明具の諸特徴の分析	468
図116	須恵器杯H、色調別・形態別時期的変化	408	図163	灯明専用器	468
図117	須恵器杯H、法量の時期的変化（口径）	409	図164	小さな孔をともなう灯明具	468
図118	須恵器杯G、法量の時期的変化	410	図165	口縁部に意図的に割れ口をもつ土器	468
図119	須恵器杯B、底部糸切り底の範囲	411	図166	カマジルシの諸特徴の分析	470
図120	須恵器杯B、時期的変化	413	図167	「その他」のカマジルシの具体例	470
図121	須恵器杯蓋H	415	図168	更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土の穿孔土器	472
図122	須恵器杯蓋H、法量の時期的変化（口径）	415	図169	更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土の底部縁辺加工土器	472
図123	須恵器杯蓋Aと杯Gの法量の対応関係	416	図170	更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土の模倣土器	473
図124	杯蓋Bの形態	417	図171	金子裕之氏による人形の分類	475
図125	須恵器杯蓋Bの時期的変化	418	図172	屋代遺跡群における人形の変遷	478
図126	黒色土器A杯Aの形態分類	421	図173	屋代遺跡群における馬形A類の変遷	479
図127	黒色土器A杯A、A形態の時期的変化	421	図174	屋代遺跡群における馬形B類・鳥形・蛇形の変遷	480
図128	黒色土器A杯A、B形態の時期的変化	421	図175	都城および地方における人形・馬形の変遷	481
図129	黒色土器A杯Aの時期的変化	419	図176	第5水田対応層出土削屑 長さ、幅の相関	484
図130	椀・小椀、法量からみた分類	422	図177	第4水田対応層出土削屑 長さ、幅の相関	485
図131	黒色土器A椀・小椀にみられる灰釉・緑釉陶器の模倣	423	図178	第3水田対応層出土削屑 長さ、幅の相関	486
			図179	第2水田対応層出土削屑 長さ、幅の相関	487
			図180	削屑 分類別、材精度別厚さの割合	488
			図181	更埴条里遺跡K地区集落 遺構新旧関係図	494
			図182	更埴条里遺跡K地区集落変遷図	497

図183	屋代遺跡群①区集落 遺構新旧関係図	498
図184	屋代遺跡群①区集落遺構変遷図	500
図185	屋代遺跡群②区集落 遺構新旧関係図	502
図186	屋代遺跡群②区集落変遷図	503
図187	屋代遺跡群③a区集落 遺構新旧関係図	504
図188	屋代遺跡群③a区集落変遷図	505
図189	屋代遺跡群③a区集落 礎石建物群配置図	505
図190	屋代遺跡群③b区集落 遺構新旧関係図	506
図191	屋代遺跡群③b区集落変遷図	507
図192	屋代遺跡群④～⑥区集落 遺構新旧関係図	511
図193～195	屋代遺跡群④～⑥区集落変遷図 1～3	512・515・516
図196	1期前半：ST4201段階の集落景観	519
図197	屋代遺跡群④f区鍛冶関連遺物出土状況	525

図198	春内遺跡1号炉、屋代遺跡群SF8対照図	527
図199	屋代遺跡群⑥区湧水溝の変遷模式図	530
図200	俵田遺跡SM60遺物出土状況	534
図201	第5水田対応層古段階 祭祀遺構SQ配置図	536
図202	第5水田対応層新段階 祭祀遺構SQ配置図	537
図203	第4水田対応層 祭祀遺構SQ配置図	538
図204	第3水田対応層 祭祀遺構SQ配置図	539
図205	第2水田対応層 SQ配置図	540
図206	条里水田、V-1層水田、V-KA-5層水田の大畦方向	541
図207	屋代遺跡群における古代の植物誌	549

## 目 次

表1	更埴条里遺跡・屋代遺跡群の時期区分	2
表2・3	周辺遺跡1・2	7・8
表4	更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の土地利用変遷と古環境	16
表5	屋代遺跡群①g区鍛冶関連遺構SF・SK一覧表	55
表6	竪穴建物跡(SB)一覧	62
表7	掘立柱建物・礎石建物跡(ST)一覧	82
表8	井戸跡・土坑(SK)一覧	86
表9	炉・焼土跡(SF)一覧	92
表10	屋代遺跡群①区集落内SX一覧	93
表11	柵・杭列跡・材木別など一覧(SA)	93
表12	溝・自然流路跡(SD)一覧	95
表13	屋代遺跡群⑥区湧水溝、東西自然流路変遷表	111
表14	条里水田 大畦観察表	136
表15	条里水田 田面計測表	137
表16・17	古代の土器 器種分類表 その1・2	144・145
表18	古代の土器 器種分類表 出土遺構	185
表19	墨書土器一覧表	188
表20	刻書土器・篋書土器一覧表	191
表21	朱墨書・漆書土器一覧表	191
表22	瓦塔一覧表	196
表23	布目瓦一覧表	196
表24	硯一覧表	197
表25	土錘一覧表	199
表26	紡錘車一覧表	200
表27	その他の土製品一覧表	200
表28	遺構別石器・石製品一覧表	203
表29	屋代遺跡群石製模造品、鋳型中ガラス計測表	207
表30	屋代遺跡群白玉、管玉、丸玉計測表	207
表31	屋代遺跡群ガラス玉計測表	208

表32	屋代遺跡群玉関係石材計測表	208
表33	金属製品地区別出土点数	209
表34	鉄生産関連遺物出土量	209
表35	銅・青銅製品一覧表	209
表36	鉄製品出土点数	211
表37	鎌観察表	211
表38	金属製品遺構別出土点数	215
表39	鍛造剥片・粒状滓等検出結果	218
表40	鍛冶関連遺構遺物出土量	219
表41	鉄生産関連遺物地区・時期別出土量	221
表42	金属学的調査用考古観察表(1～10)	223
表43	銅・青銅製品観察表	233
表44	鉄製品観察表	233
表45	鉄生産関連遺物観察表	236
表46	屋代遺跡群木質遺物の樹種一覧	264
表47	更埴条里遺跡木製品一覧表	269
表48	屋代遺跡群木製品一覧表	269
表49	屋代遺跡群削屑、切屑一覧表	285
表50	屋代遺跡群⑥区自然木樹種一覧	288
表51	屋代遺跡群骨角器一覧表	292
表52	屋代遺跡群加工痕のある骨一覧表	292
表53	更埴条里遺跡IV層・V層におけるプラント・オパール分析結果	300
表54	更埴条里遺跡IV層・V層(水田面・遺構面)におけるプラント・オパール分析結果	300
表55	屋代遺跡群の古代の現地採取大型植物遺体群	304
表56	屋代遺跡群SD7035の水洗選別大型植物遺体群	312
表57	屋代遺跡群SD7030の水洗選別大型植物遺体群	314
表58	屋代遺跡群⑥区西壁セクションの水洗選別大型植物遺体	316

表59	屋代遺跡群から出土したヒョウタン仲間の取り上げ資料数と遺構区分	325	表77	化学成分分析結果	382
表60	更埴条里遺跡・屋代遺跡群から出土したウリ科栽培植物の種子特性	327	表78	調査・考察結果のまとめ	383
表61	炭化種実同定結果	332	表79	鉄生産関連遺物関係科学分析分析結果	385
表62	木製品・自然木の種類構成	334	表80	羽口・炉壁関係化学分析分析結果	385
表63	炭化材樹種同定結果	336	表81	耐火度試験結果	385
表64	屋代遺跡群採取の昆虫遺体同定結果一覧	340	表82	ゼーゲルコーン温度比較表	385
表65	屋代遺跡群出土のニホンジカとイノシシ（あるいはブタ）の出土重量の概略と比較資料	344	表83	ガラスの材質分析結果	396
表66	屋代遺跡群出土のウシおよびウマの骨重量と比較資料	345	表84	杯Bの分量による分類	409
表67	屋代遺跡群から出土したウシの主な四肢骨の計測値	345	表85	緑釉陶器一覧表	429
表68	屋代遺跡群から出土したウマの主な四肢骨の計測値	346	表86	須恵器器種別、産地の変化	445
表69	屋代遺跡群から出土の哺乳動物骨の出土点数の時代的推移	347	表87・88	須恵器産地別、供給器種と供給時期の変化 その1・2	446・447
表70	ウシ在来種の四肢骨計測値	347	表89	長野県内の須恵器胎土分析用サンプル一覧表	448
表71	ウマ在来馬の四肢骨計測値	348	表90	屋代遺跡群 産地別須恵器分類表	449
表72	他の遺跡から出土したウシとウマの計測値	348	表91	図120掲載遺物の出土遺構一覧表	464
表73	屋代遺跡群出土脊椎動物骨 遺構別一覧	361	表92	灯明具一覧表	469
表74	屋代遺跡群出土脊椎動物骨 種別一覧		表93	カマジルシー一覧表	471
表75	資料および調査項目一覧表	381	表94	穿孔土器一覧表	472
表76	各分析条件および装置一覧	382	表95	底部縁辺加工土器一覧表	472
			表96	模倣土器一覧表	473
			表97	図175掲載木製品出土遺跡一覧表	482
			表98	削屑、厚さの平均比較	489
			表99	長野県内出土鉄斧一覧	491
			表100	更埴条里遺跡・屋代遺跡群の集落変遷	523
			表101	立地別グループ内における湧水溝の変遷	531

## 付 図 目 次

付図1	更埴条里遺跡・屋代遺跡群全体図および基本土層図	付図8	屋代遺跡群 古代の土器の消長（食膳具） 編年表1
付図2	竪穴建物一覧表（表6）使用の分類記号	付図9	屋代遺跡群 古代の土器の消長（煮炊具・鉢類等） 編年表2
付図3	屋代遺跡群⑥区 西壁セクション図1	付図10	屋代遺跡群 古代の土器の消長（貯蔵具） 編年表3
付図4	屋代遺跡群⑥区 西壁セクション図2	付図11	屋代遺跡群 古代の土器の消長 編年表4
付図5	屋代遺跡群⑥区 中央ベルトセクション図		
付図6	屋代遺跡群⑥区 北壁セクション図		
付図7	条里水田等高線図、田面傾斜および水口方向図		

# 第1章 遺跡の概観と調査の概要

## 第1節 本編の範囲

### 1 報告書作成の方針

**地域一括・時代別報告** 平成7年度、上信越自動車道関係の整理がはじまるにあたり、更埴条里遺跡と屋代遺跡群（含む大境遺跡、窪河原遺跡）については、遺跡別とはせず一括して報告する方針を立てた。

**間断ない遺跡** その主な理由は、更埴条里遺跡A地区から屋代遺跡群の窪河原遺跡までの全長2.3kmをほぼ全面発掘し、その間、遺跡が途切れなかったことによる。このことは、従来の遺跡別（地区別）報告では、同一時期の水田面や水路をみすみす分断してしまうこと。また、同時期の集落と水田との位置関係などといった、調査対象地域全体の様相がつかみにくくなってしまふこと。などを意味していた。

**景観復元** さらに、例えばⅢ-2層とした洪水砂は、更埴条里遺跡A地区から屋代遺跡群⑥区の約2kmにわたって、9世紀末の水田や住居をパックしていた。この洪水砂を剥ぐことによって遺物・遺構の有無とは関係なく、一時期の「地表」を検出することが可能となった。これにより人間活動の痕跡を点（一定の範囲）でおさえる狭義の「遺跡」や、その集合・ネットワークとしての「遺跡群」をとらえる作業だけでなく、一時期の「景観」を復元しうる可能性が強まった。「景観」復元を目指すという課題を掲げるためにも、全地域を統合した報告書作成を選択した。

**キー層による時代別分冊** 時代別分冊方式をとった理由は、現地表面直下から地表下8mにわたって、江戸時代から縄文時代に至る遺構・遺物が層位別に検出できたことにある。膨大な資料をまとめるにあたり、大きな環境の変化をもたらしたと思われる層を「キー層」として、時代別の分冊方式を採用した。

**自然環境分析** 各時代別分冊では、「景観」を復元するにあたって狭義の考古資料以外の微化石や動・植物遺体の分析を重視し、多くの研究者に参加を願った。『総論編』では、それらを基に自然環境と人間の営みの相関関係とその変遷を主眼として、まとめてゆく方針を立てた。

**長野自動車道関連** また、窪河原遺跡については、上記の方針から、平成2年度に調査を実施した長野自動車道分についても含めた。ただし、本編に該当する資料は上信越自動車道関連のみである。

**分冊の区分** 各分冊の表題と刊行予定年度は以下のとおりである。

第1分冊 『長野県屋代遺跡群出土木簡』平成7年度刊行

第2分冊 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—含む大境遺跡— 縄文時代（Ⅶ層～Ⅸ層）編』平成11年度刊行予定

第3分冊 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—含む大境遺跡・窪河原遺跡— 弥生・古墳時代（Ⅵ層）編』平成9年度刊行

第4分冊 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—含む大境遺跡・窪河原遺跡— 古代1（Ⅳ・Ⅴ層）編』本編

第5分冊 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—含む大境遺跡・窪河原遺跡— 古代2・中世・近世（Ⅱ・Ⅲ層）編』平成11年度刊行予定

第6分冊 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—含む大境遺跡・窪河原遺跡— 総論編』平成11年度刊行予定



2 本編の範囲

第4分冊では、IV-1層上面～VI層上面で検出された遺構を対象とする。時期的には7世紀前半～9世紀後半である(表1)。

7世紀前半(古代0期)から

古墳時代との境は、自然堤防以南では明確な層理面を形成していない。そのため、屋代遺跡群⑥区の旧河道(旧千曲川か?)を埋積した砂層を基準にした。

旧河道の斜面最下層には、古墳時代の溝とともに7世紀初頭の遺物を出土したSD7071が存在している。この溝は、旧千曲川本流(図1-A流路)傾斜面の流路の一つである。SD7071を含む旧河道は7世紀後半までの間に急速に埋積する。このことは、千曲川本流

の位置が北へ移動し、環境が大きく変化したことを示している。そこで、この旧河道の埋積がはじまった7世紀前半(古代0期)以降を本編に含めた。

他地区では調査範囲のほぼ全域に広がるVI層との境を基準とした。VI層は弥生時代～古墳時代後期の遺構・遺物を包含している。VI層は黒褐色を呈し、灰褐色を主としたIV層との区分が比較的わかりやすかったことも加味した。ただし、VI層上部は上層水田の影響により色調が変化した地点もあった。よって黒褐色土層=VI層とした分層では、必ずしも時期区分と一致するとは限らない。しかし、IV層下部には7世紀代の遺物がほとんど含まれていないことから、大局的には支障はないと考えている。

9世紀後半(古代8期前半)まで 更埴条里遺跡・屋代遺跡群のほぼ全域を覆う洪水砂(III-2層)を基準とした。この洪水は古代8期に起きており、洪水前にも洪水後にも8期の土器を伴出する遺構が存在している。しかし、洪水砂によって景観が一変したことを重視し、洪水直前までを本編所収とした。

なお、窪河原遺跡に関しては『古代1編』に関わる遺構は見つかっていない。そのため、本編では層位・環境変遷についてのみ記載を行った。

表1 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の時期区分 (アミかけ部分内は本編掲載)

層位	屋代遺跡群⑥区層位	時代	中時期区分	遺構	備考
I	I	近・現代		水路、畠	
II	II	中世後半～近世		集落・水田・畠	
III-1	III-1	古代～中世前半		集落・水田・畠	
III-2	III-2	古代	古代8期後半		全域を覆う洪水砂
IV・V	第1水田対応層	古代	古代8期前半	集落・水田・畠	
	第2水田対応層		古代7期後半	集落・水田・畠	
			古代7期前半	集落・水田・畠	
			古代6期	集落・水田?	
			古代5期	集落	
			古代4期	集落	
			古代3期	集落	
			古代2期	集落・祭祀施設・水田	紀年銘木簡 養老7(723)年、神龜3(726)年
第3水田対応層		古代1期後半	集落・祭祀施設・水田	紀年銘木簡 戊戌(698)年、(和銅)7(714)年	
第4水田対応層		古代1期前半	集落・祭祀施設・水田		
第5水田対応層		古代0期(古墳9期)	集落	屋代⑥区旧河道埋積進む	
VI	VI	古墳	古墳8期	集落・祭祀施設・水田	屋代①区などで小規模な洪水
		弥生	古墳1期	集落・水路など	
VII	VII	縄文晩期後葉		焼土跡など	全域で砂堆積
VIII	VIII	縄文晩期中葉		掘立柱建物、焼土跡など	
IX	IX	縄文後期～晩期			
X	X				
X I	X I	縄文後期前葉		焼土跡など	自然堤防側に砂層多数
X II-1	X II-1				
X II-2	X II-2	縄文中期後葉			
X III	X III	縄文中期中葉		集落など	自然堤防側に砂層多数
X IV	X IV	縄文中期前葉			
X V	X V	縄文中期前葉			
X VI	X VI	縄文前期後葉		焼土跡など	
X VII～X IX	X VII～X IX	不明			大形礫出土
不明	不明	縄文前期中葉			河道への遺物混入

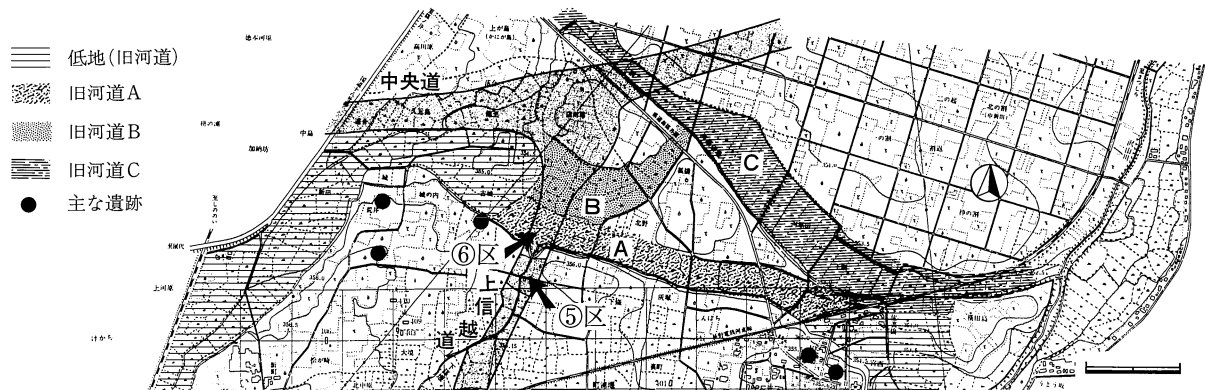


図1 屋代遺跡群⑥区～窪河原遺跡の旧河道

**掲載の基準** VI層上面で検出できた遺構の内、埋土や遺物から明らかに古墳時代に属すると判断できたものについては『弥生・古墳編』に掲載し、それ以外は本編に掲載した。遺物は出土層を重視し、原則的にはIV層から出土したものだけを掲載の対象とした。そのため、洪水によって上層へ巻き上げられた可能性が高い遺物であっても、III-2層から出土した場合は原則的に『古代2・中世・近世編』に掲載した。また、IV層出土であっても明らかに混入と判断できる遺物については除外した。

**時期区分** 全地区を対象とした時期区分は、土器の特徴から0～8期に区分している(表1)。また、屋代遺跡群⑥区については、洪水砂によって埋没した水田に対応する層を基準に、第1水田対応層(9世紀後半洪水直前)……第5水田対応層(7世紀後半)といった大時期区分を併用している。

## 第2節 歴史的環境と周辺遺跡

### 1 遺跡の位置(図版1、図2)

**更埴市・千曲川右岸** 更埴市屋代から雨宮地籍、千曲川右岸の自然堤防上には多くの遺跡が立地している。これらの遺跡を総称した名称が屋代遺跡群(・雨宮遺跡群)である。その中で、古代以降に形成された比較的新しい自然堤防II群に立地するのが窪河原遺跡である。屋代遺跡群の中心部は自然堤防I群上に位置しており、調査対象範囲の一部は大境遺跡(屋代遺跡群④区の一部)と命名されている。更埴条里遺跡との境は便宜的に五十里川とした。更埴条里遺跡は自然堤防の南側に広がる後背湿地I群を中心としている。

**調査対象地区の位置** 上信越自動車道はこの地域を南北に縦断する形で計画され、発掘対象地区は更埴条里遺跡A地区(更埴市屋代字七ツ石)から窪河原遺跡(更埴市雨宮字窪河原)の全長約2.3kmにわたる。各調査地区の地籍名は、図版1に示したとおりである。国土座標では、更埴条里遺跡A地区南端が、第VII系X=58.8km、北端の窪河原遺跡がX=62.0km。東西は窪河原遺跡で広くY=-31.9kmから-32.10kmである。北緯36°31'50"~36°33'、東経138°8'付近にあたる。

### 2 古代の屋代地区

**古代の小地域** 屋代地区の古代の歴史的環境を考えるにあたって、周辺遺跡も含めてまとめたものが表2～3と図2である。善光寺平南縁部の遺跡分布図は、これまでも数多く作成されている。ここでは、これらをすべて参照した上で、屋代遺跡群のあり方がよりつかみやすいように、千曲川と山麓部とによって区切られる地域を古代の小地域と仮定して、小地域ごとに遺跡を把握しなおした。これによって古代の居住域、墓域、生産域、窯跡等の関係把握がより明確になると考えたためである。古代の小地域の地形区分については、『更級埴科地方誌』(森嶋1978)に準じ、必要に応じてごくわずかな変更を加えた。各遺跡の存続時期は、屋代遺跡群の編年観で行った。表作成にあたっての留意点は以下に示すとおりである。

- ① 対象とする年代は『古代1編』の対象である古代0期～8期(7世紀前半～9世紀後半)とし、掲載遺跡は『石川条里遺跡』(白居1997)を基本として、それ以後に報告された遺跡と未掲載のものをつけ加えた。この時期の遺構が確認されていない例は、遺跡名の右側が空欄になっている(表2・3)。
- ② 新しく加えた遺跡の基準は、報告書が刊行されているか、『更級埴科地方誌』(森嶋1978)等の文献に遺物の図が提示され、それによって遺跡の時期が限定できるものに限った。
- ③ 各遺跡の存続期間は、住居が発見されている時期は黒ぬりとし、土坑や溝等の遺構や包含層から遺物が発見されている場合は点線で表現してある。したがって、遺物が多くても住居が確認されない場合は点線になっている。

- ④ 遺跡存続期間の棒グラフは、幅の広狭で遺構の多少を表す。これは各遺跡内においての多少であって、他遺跡と比較してのものではない。
- ⑤ 棒グラフの太さは3段階とし、一番太いものは住居が多い場合（3軒以上）を示し、中ぐらゐの太さは2軒程度の場合を示し、細いものは一軒のみの場合を示している。2～3時期にまたがってしか時期判断できない遺構も多く、さらにすべての遺構の遺物が報告書に掲載されているとは限らないので、一応前述の基準にそってグラフ化を試みたが、厳密さは欠ける場合も多い。

**7～9世紀の遺跡の消長** この時期、屋代遺跡群と周辺での遺跡のあり方を見ると、以下のことが指摘できる。

- ① 古代の小地域を7つにわけたが、屋代遺跡群の属する古代の小地域は周辺の丘陵、山地も含めて屋代沖積面としてとらえられる。屋代沖積面は善光寺平南縁において対岸の塩崎沖積面とともに発掘調査された件数が多く、居住域、墓域、生産域、窯跡がわけてとらえられる数少ない古代の小地域の1つである。
- ② 屋代沖積面の居住域は地形的にみて、a. 屋代・雨宮自然堤防面（自然堤防I群）、b. 千曲川後背湿地内微高地面（後背湿地I群）、c. 有明山山麓、倉科・森扇状地面の3つの地域にわけてとらえることができる。古代0期～8期における居住域の消長は以下のことがいえる。遺跡名は特に細かくあげないが、具体例は表2を参照されたい。
- ア 古代0期～8期まで長期に継続する集落は、aの屋代・雨宮自然堤防面に多くみられ、屋代遺跡群、雨宮遺跡群として把握される。
- イ 古代2期から居住域の拡大がみられ、bの千曲川後背湿地内微高地面にも安定した集落が成立する（新幹線更埴条里遺跡5区等）。
- ウ cの地域では明確でないが、a・bの地域で古代6期以降、新たな集落が成立し集落数が急増する。これらの地域では、古代8期前半で廃絶する例が多い。この時期は大洪水がおそう時期であるが、その洪水の少し前に集落が廃絶している例が複数みられる（屋代遺跡群②区・③区、松ヶ崎遺跡、新幹線屋代遺跡群6区）。これは洪水砂をとりのぞいた時にほとんど遺構は検出されず、その下を掘り始めた段階で多くの遺構が検出されるといったことで判断できる。
- オ 8期後半以降、居住域の中心はbの千曲川後背湿地内微高地面へ移る（新幹線更埴条里遺跡3・4区、高速道更埴条里遺跡K・I・J地区）。
- ③ 墓域では、古墳は屋代沖積面を取り囲む山際にまんべんなく造られ、大穴古墳群では古代2期までは新たな築造がみられる。しかし、発掘された例は非常に少なく、詳しい状況は把握できないのが現状である。古墳以外の墓は古代7～8期に検出例は多いものの、十分な分析はできなかった。
- ④ 生産域は古代8期の洪水砂で覆われた水田面を中心に複数の遺跡で発掘例があり、居住域と生産域の立体的な把握が可能となる。特に屋代遺跡群⑥区での古代1期前半～2期にかけての水田域の発見は、他の地域面には顕著な例がなく重要である。
- ⑤ 窯跡については1例のみ報告されているが（矢ノ口窯跡）、すでに資料が散逸しており、他に新たな窯跡の発見もなく具体像は明らかになっていない。屋代遺跡群への須恵器の供給は、胎土分析の結果、主に更級洪積台地面、信田丘陵面、佐野川扇状地面の各窯跡群からなされていることがわかった。

## 引用・参考文献

ページ数の関係で、(財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『北陸新幹線 埋蔵文化財発掘調査報告書4 篠ノ井遺跡群他』 p.22～p.26に示されたもの以外のものについて記述する。

- 1 更埴市教育委員会 1964 『池尻遺跡』
- 2 更埴市教育委員会 1978 『更埴市姨捨杉ノ木古墳発掘調査報告』
- 3 更埴市教育委員会 1984 『大宮遺跡』
- 4 更埴市教育委員会 1985 『五輪堂III』
- 5 更埴市教育委員会 1987 『更埴市倉科地区・八幡地区工業団地計画地試掘調査報告書』
- 6 更埴市教育委員会 1988 『白石・石原A・峯遺跡』
- 7 更埴市教育委員会 1988 『大境遺跡』
- 8 更埴市教育委員会 1988 『城ノ内遺跡II・大境遺跡III』
- 9 更埴市教育委員会 1988 『北中原遺跡II』
- 10 更埴市教育委員会 1988 『五輪堂V』
- 11 更埴市教育委員会 1990 『外西川原遺跡』
- 12 更埴市教育委員会 1991 『舞台遺跡』
- 13 更埴市教育委員会 1991 『南沖遺跡III・五輪堂遺跡VI』
- 14 更埴市教育委員会 1991 『城ノ内遺跡III・荒井遺跡II』
- 15 更埴市教育委員会 1995 『更埴条里水田跡高月地点遺跡』
- 16 更埴市教育委員会 1995 『大境遺跡VI』
- 17 更埴市教育委員会 1996 『諏訪南沖遺跡III』
- 18 戸倉町教育委員会 1985 『戸倉町の遺跡（地区）』
- 19 戸倉町教育委員会 1990 『三島平遺跡』
- 20 戸倉町教育委員会 1990 『円光房遺跡』
- 21 戸倉町教育委員会 1993 『三島平遺跡II』
- 22 (財)長野県埋蔵文化財センター 1996 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 22 清水製鉄遺跡・大穴遺跡』
- 23 (財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 23 更埴条里遺跡・屋代遺跡群—弥生・古墳編—』
- 24 森嶋 稔 1978 「第二節 更埴地方古代の歴史地理的把握」『更級埴科地方誌 第二巻』
- 25 白居直之 1997 「第二節 歴史的環境と周辺遺跡」『中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書15 石川条里遺跡 第1分冊』

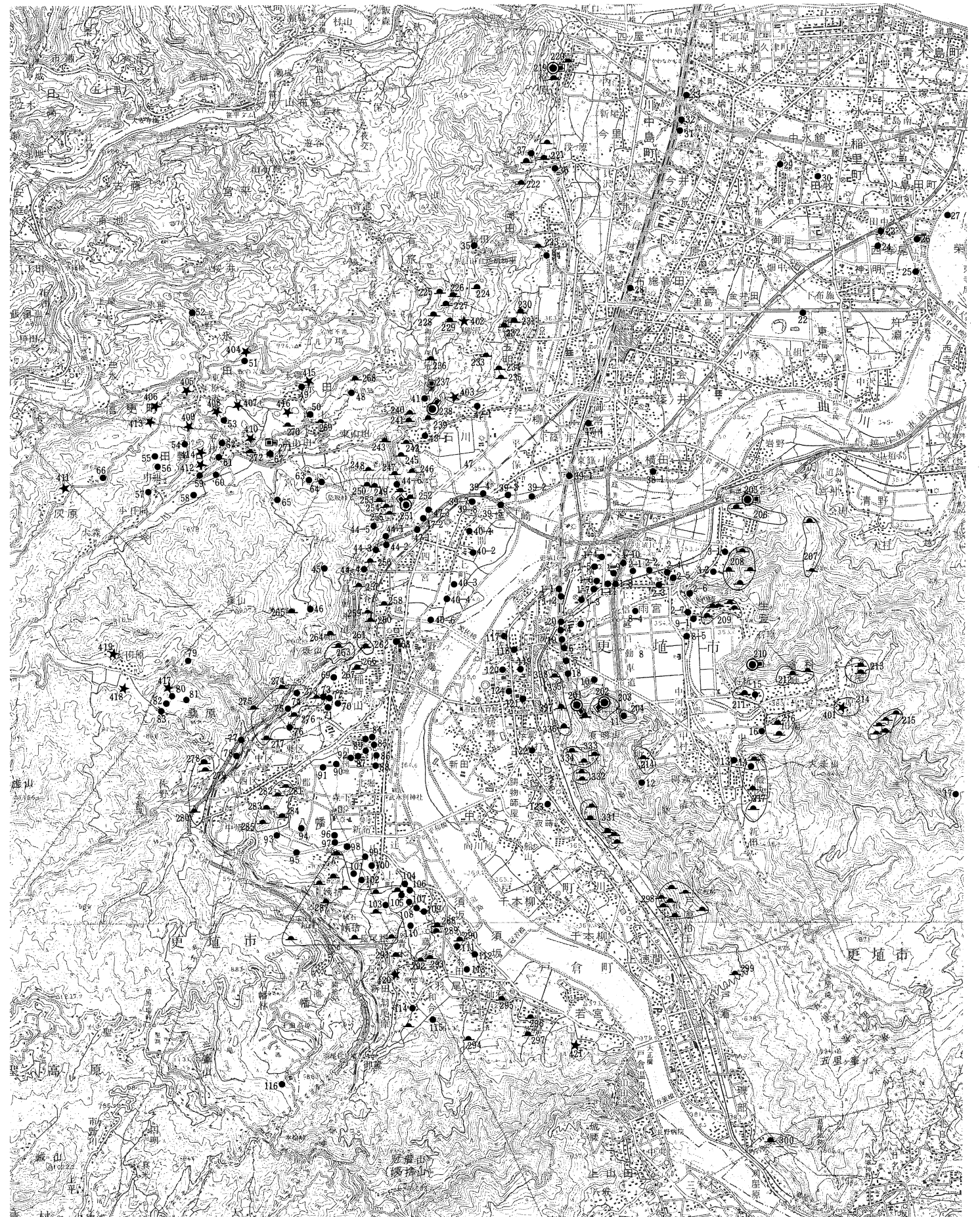


図2 周辺遺跡

表2 周辺遺跡 1

屋代沖積面	番号	遺跡名	備考	7C		8C			9C				
				0期	1期 前半	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	
①屋代・雨宮 自然堤防面	1-1	地之目・一丁田											
	1-2	◎屋代6区											
	1-3	馬口											
	1-4	城ノ内											
	1-5	荒井											
	1-6	松ヶ崎											
	1-7	北中原											
	1-8	◎屋代③区											
	1-9	大城											
	1-10	◎屋代④・⑤・⑥区											
屋代遺跡群 (1)	4	◎屋代2区・郷津											
	7	大塚											
	8-1	◎屋代①・②区											
	2-1	下条											
	2-2	灰塚											
	2-3	大日堂											
	2-4	雨宮陸寺跡											
	2-5	大宮											
	2-6	唐崎											
	2-7	生仁											
雨宮遺跡群 (2)	3-1	土口											
	3-2	日ノ尾											
土口遺跡群 (3)	5	◎更埴条里3・4区											
	6	◎更埴条里5区											
②千曲川後背湿地 内敷高地面 更埴条里遺跡 (8)	8-2	◎更埴条里K地区											
	8-3	◎更埴条里J地区											
	8-4	町田											
生菅遺跡群 (9)	9-1	島											
	10	屋代清水											
③有明山・山麓 倉科・森扇 状地面 有明山 森 倉科 森	11	大穴											
	12	清水製鉄											
	202	森將軍塚古墳盛土											
	13	中ノ宮											
	14	県山											
	15	北山											
	16	南薬木											
	17	百瀬											
	201	有明山將軍塚古墳(前方後円3m)											
墓域	202	森將軍塚古墳(前方後円10m)											
	203	森將軍塚古墳群(15基)											
	204	大穴古墳群(6基)											
	205	土口將軍塚古墳(前方後円5m)											
	206	土口北山古墳群(7基)	後期										
	207	堂平古墳群(10基)	不明										
	208	土口古墳群(5基)	後期										
	209	生菅北山古墳群(5基)	後期										
	210	倉科將軍塚古墳(前方後円3m)											
	211	倉科北山古墳群(前方後円2.2m)	後期										
倉科 森	212	大峽古墳群(前方後円2.2m)	後期										
	213	竹尾古墳群(5基)	後期										
	214	矢ノ口古墳群(13基)	後期										
	215	杉山古墳群(22基)	後期										
	216	田端古墳群(3基)	後期										
	217	森古墳群(3基)	後期										
	218	岡地古墳群(2基)											
①屋代・雨宮 自然堤防面	19	◎屋代1区											
	20	◎屋代3・4区古道											
	1-3	馬口											
	1-7	北中原											
	1-6	松ヶ崎											
	1-11	町浦											
	8-1-1-8	◎屋代①・②・③・④区											
	1-9	大城											
	8-5	本誓寺											
	10	屋代清水											
②後背湿地	8	◎更埴条里											
	8	更埴条里1965年											
③旧河道	18	◎更埴条里2・3区											
	1-2	◎屋代6・7区											
窯跡	1-10	◎屋代⑥区											
	21	窪河原											
	401	矢ノ口窯跡											

殖生・戸倉沖積面 その1	番号	遺跡名	備考	7C		8C			9C				
				0期	1期 前半	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	
墓域	298	柏王古墳	1~7号まで										
	299	中山古墳	1基										
	300	上ノ平古墳	1基										
	331	寂崎古墳群											
	332	虚空蔵古墳群											
	333	打沢古墳群											
	334	打沢古墳											
	339	畑塚古墳											
	335	小島古墳群											
生産域	124	東沖	時期不明の水田址2面										
	121	小島	時期不明の水田址2面										

川中島扇状地面	番号	遺跡名	備考	7C		8C			9C				
				0期	1期 前半	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	
居住域	①扇端部	22	南宮										
		23	田中沖I										
		24	田中沖II										
		25	藁川原										
		26	八幡原										
	②扇中央部	27	花立										
		28	築地										
		29	上九反										
		30	田牧居婦										
		31	於下										
③扇頂部	32	長峰											
	33	今里											
④共和山麓台 地面	34	寺内											
	35	新田											
	36	滝沢尻											
	37	光林寺裏山											
	219	腰村1号古墳(前方後円3m)											
	220	腰村古墳(2号,3号)	後期										
	221	境内古墳群(1~3号)	後期										
墓域	柳沢古墳群	222	岡田裏古墳(1基)	後期									
		223	寺内古墳(1基)	後期									
		224	上大久保古墳(1~2号)	後期									
		225	北石津古墳(1基)	後期									
		226	駕籠石古墳(1基)	後期									
		227	大部塚古墳(1基)	後期									
		228	將軍塚古墳(1基)	後期									
		229	南石津古墳(複数)	後期									
		230	海道北山古墳(1基)	後期									
		231	大平1号古墳(1~3号)	後期									
生産域 窯跡	30	田牧居婦											
	402	小金山窯跡											

信田丘陵面	番号	遺跡名	備考	7C		8C			9C				
				0期	1期 前半	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	
居住域	48	小山田池											
	49	寺屋敷											
	50	幸塔原											
	51	鹿の入											
	52	大崎											
	53	天神山											
	54	かじか沢											
	55	瀬原											
	56	天池											
	57	寺平											
墓域	58	家の入											
	59	釜上											
	60	大清水											
	61	大峰(圓筒形)											
	62	平林											
	63	宮下											
	64	桑山											
	65	戸口											
	66	大上											
	67	山田屋敷											
窯跡	268	小山田藤塚(1~5号)	後期										
	269	白山塚古墳(1基)	後期										
	270	赤田大塚古墳(2基)	後期										
	271	田野口大塚古墳(前方後方)											
	272	桜田塚古墳(1基)	後期										
窯跡	404	鹿の入窯跡											
	405	前田窯跡											
	406	原市場窯跡(瓦も)											
	407	鍋割窯跡											
	408	いもじゃくば窯跡											
	409	城の腰窯跡											
	410	松ノ山窯跡											
	411	灰原古窯跡											
	412	信田日向古窯跡											
	413	東前田古窯跡											
窯跡	414	大塚古窯跡											

表3 周辺遺跡 2

塩崎沖積面	番号	遺跡名	備考	7C		8C			9C			
				0期	1期前半	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期
居住域	①松節・横田自然堤防面 横田遺跡群(38)	38-1	富士宮									
		39-1	◎篠ノ井									
		39-2	大規模自転車道									
		39-3	市道山崎唐倉線									
		篠ノ井遺跡群(39)	39-4	◎篠ノ井								
			39-5	聖川堤防								
			39-6	聖徳権								
			39-7	中部電力鉄塔								
			39-8	市営体育館								
			40-1	市道角間線								
		塩崎遺跡群(40)	40-2	塩崎小学校								
			40-3	市道松節小田井神社								
			40-4	伊勢宮								
			40-5	塩崎中条								
	40-6		市道篠ノ井南253号線									
	41		海の上									
	②塩崎山麓台地面 石川方田遺跡群(42)	42-1	石川方田遺跡群									
		上石川遺跡群(43)	43-1	上石川廃寺跡								
			44-5	塩崎城見山砦								
			44-1	鶴前(中電鉄塔)								
			44-2	◎鶴前								
		長谷鶴前遺跡群(44)	44-3	鶴萩七尋岩蔭								
			44-4	長谷								
			44-6	上見林								
			45	下辺								
			46	猪平								
	③千曲川後背湿地内微高地 石川条里遺跡(47)		47-1	◎石川条里								
		47-2	枡下									
		47-3	消防塩崎分署									
	墓域	～古墳～ 石川古墳群	236	湯ノ入古墳群(7基)	後	期						
			237	姫塚古墳(前方後方32m)								
			238	川柳將軍塚古墳(前方後円形93m)								
			239	宮下1号古墳(2基)	後	期						
			240	飯綱社古墳(1基)								
			四野宮古墳群	241	大和田1号古墳(3基)	後	期					
				242	城古墳(1基)							
				243	鎧坂古墳群(6基)	後	期					
				245	虚空蔵平1号(3基)	後	期					
				246	丸山・圃内古墳(4基)	後	期					
		247		池ノ上古墳(1基)	後	期						
		248		薬師山古墳群(7基)	後	期						
		249		四之宮將軍山古墳(円墳1基)								
		250		八ッ塚1号古墳(8基)	後	期						
		251		中郷古墳(前方後円形50m)								
		越古墳群	252	中郷古墳陪塚(2基)								
			253	大伯母古墳(1基)	後	期						
			254	小日向古墳(1基)	後	期						
255			秋葉山古墳(1基)	後	期							
256			鶴萩古墳(1基)	後	期							
257			平古墳(1基)	後	期							
258			八幡宮古墳(1基)									
259			城山古墳(1基)	後	期							
260			東谷古墳	後	期							
261			東谷古墳群(2基)	後	期							
262			湯ノ崎1号墳(1基)	後	期							
263			塚穴古墳群(4基)	後	期							
264			越將軍塚古墳(円墳33m)									
265			篠山古墳									
266		湯ノ崎古墳群(かつて数基)	後	期								
267		一本松古墳(1基)	後	期								
～古墳以外～		47-1	◎石川条里									
		40-6	市道篠ノ井南253号線									
		40-3	市道松節小田井神社									
		39-8	市営体育館									
		39-5	聖川堤防									
		39-2	大規模自転車道									
		44-5	塩崎城見山砦									
		44-3	鶴萩七尋岩蔭									
		39-4	◎篠ノ井									
		39-1	◎篠ノ井									
生産域		47-1	◎石川条里	?								
		47-4	◎石川条里									
		47-5	◎石川条里									
	39-7	篠ノ井遺跡群(中電鉄跡)										
	39-5	聖川堤防										
403	湯ノ入古窯跡											
佐野川扇状地面	①稲荷山自然堤防面	68	大牧									
		②桑原山麓台地面	69	元町								
			70	治田池下								
			71	治田池畔								
			72	後安								
			73	湯ノ崎								
		桑原遺跡群	74	小坂西								
			75	小坂西沖								
			76	返町								
			77	鳥林								
	78		雁塚									
	高地面		79	篠山								
			80	池尻								
			81	佐野山								
			82	佐野山								
			83	峠								
		③佐野川微高地面	84	志川								
			85	六反田								
			86	よこまり								
			87	れんげば								
			88	よこみぞ								
	八幡遺跡群		89	青木								
			90	北稲付								
			91	真光寺								
			92	青木廃寺遺跡								
			93	赤坂								
		④八幡山麓部	94	石原A								
			95	白石								
			96	社宮司								
			97	峯								
			98	宮川								
	99		西外川原									
	100		東中曾根									
	101		西中曾根									
	102		舞台									
	小坂古墳群		273	検見塚古墳(1基)	後	期						
		274	遠見塚古墳(1基)	後	期							
		275	宝殿1号古墳(1基)	後	期							
		276	小坂塚古墳(1基)	後	期							
		277	塚ノ口1号古墳(1基)	後	期							
		吹上塚古墳群	278	吹上塚西古墳(1基)								
279			吹上塚東古墳(1基)									
280			中原古墳(1基)	後	期							
281			矢先山1号古墳(1基)									
282			矢先山下古墳(1基)	不	明							
八幡古墳群	283		山ノ神古墳(1基)	不	明							
	284		鶴塚古墳(1基)	後	期							
	285		こがの峯1号古墳(1基)	後	期							
	286		姨捨山古墳群(11基)	後	期							
	287		姨捨杉ノ木古墳(1基)	後	期							
	姨捨山古墳群	417	池尻古窯跡									
		418	向山古窯跡									
		419	上日向古窯跡									
	更級洪積台地面	居住域	103	下吉野A								
			104	下吉野C								
横沢遺跡群			105	下吉野C-1								
			106	下吉野C-2								
			107	西久保								
			108	上ノ田								
			109	平田								
高地面			110	籠田								
			111	三島平								
			112	市田								
		113	円光房									
		114	和合									
		墓域	115	花柳								
			116	大池B								
			288	双子塚古墳1号(1基)								
			289	双子塚古墳2号(1基)								
			290	三島古墳(1基)								
			291	椋塚古墳(1基)								
			292	藤ノ木古墳(2基)								
293			堂城山古墳(1基)									
294			大新田古墳(1基)									
295			勝山古墳(1基)									
窯跡	420	廻嶺山古窯跡										
	421	西洞古窯跡										

### 第3節 地形・地質環境と基本層序

#### 1 善光寺平南部の地形・地質環境

##### (1) 長野盆地南部の地形 (図3)

長野盆地は南北長さ40km、東西幅8～10km、標高330～400mの紡錘形をした盆地である。西側は西部山地、東側は河東山地に明瞭に区分される。盆地の周辺は流入する中小河川の扇状地で埋められる。長野市街地の中心部は裾花川扇状地上に発達し、盆地南部は犀川扇状地からなる。盆地の中央部を南北に流れる千曲川は、それらの扇状地の発達に影響され自由蛇行している。

千曲川氾濫原上には、自然堤防や旧河道の砂堆・中州などの微高地と旧河道・後背湿地などの微低地があり、微地形を形成している。千曲川は更埴市稲荷山・八幡付近で河床勾配を1/1,000mと緩め、北西から北東方向へ流れの向きを変え、蛇行を始める。千曲川の左岸側には八幡・稲荷山・塩崎・平久保・旧篠ノ井(東篠ノ井・横田)、東福寺にかけて大規模な自然堤防が発達し、その西側には後背湿地が発達する。右岸側も雨宮・清野・松代・牧島の自然堤防とその東側には後背湿地となる湾入低地が形成されている。

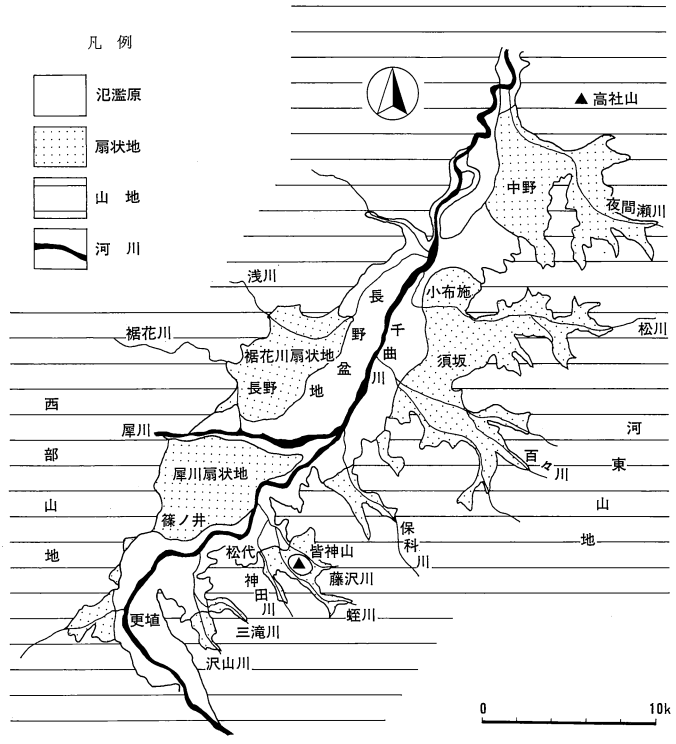


図3 長野盆地の地形 (『中部地方I』赤羽・花岡1988に加筆)

##### (2) 遺跡周辺の地形 (図4)

長野盆地東側の河東山地は壮年期の侵食地形を示す。河東山地から延びる主な尾根は北西-南東方向に延び、さらに枝状に小さな尾根が広がる。山麓線は入り組んでおり、千曲川氾濫原と山地との境界線はリアス式海岸線のようなものである。更埴条里遺跡はその枝状に広がる一重山と唐崎山の尾根に囲まれた大規模な後背湿地に位置し、屋代遺跡群は更埴条里遺跡の北側に形成されている雨宮の自然堤防上に位置する。

**地形区分** 自然堤防の頂部は北西-南東方向に傾斜が見られ、雨宮集落では長野電鉄河東線雨宮駅の南部にある雨宮坐日吉神社の辺りで標高355.9m、屋代工業団地周辺では長野電子工業辺りで標高356.7m、屋代高校北部で357.5mである。雨宮の自然堤防の北・西側には比高差約1～1.5mの明瞭な小崖が発達し、崖に沿って幅約50～180m、長さ約5kmにわたって数本の明瞭な旧河道が確認できる。この小崖をもって氾濫原をI群・II群に区分した。I群は細粒の堆積を主とし、II群はそれより粗粒の堆積物からなる。更埴条里遺跡は後背湿地I群に、屋代遺跡群は自然堤防I群に、窪河原遺跡は旧河道に囲まれた自然堤防II群に位置する。自然堤防I群と後背湿地I群との境界は不明瞭である。発掘で得られた所見では後背湿地I群と区分されている中にも古代の集落域が存在する。堆積物は連続しており岩相の変化に乏しいため、地形分類図では五十里川付近を境界とした。自然堤防上にも細流などの働きによってできた浅い帯状の凹





図4 地形分類図(遺跡周辺)

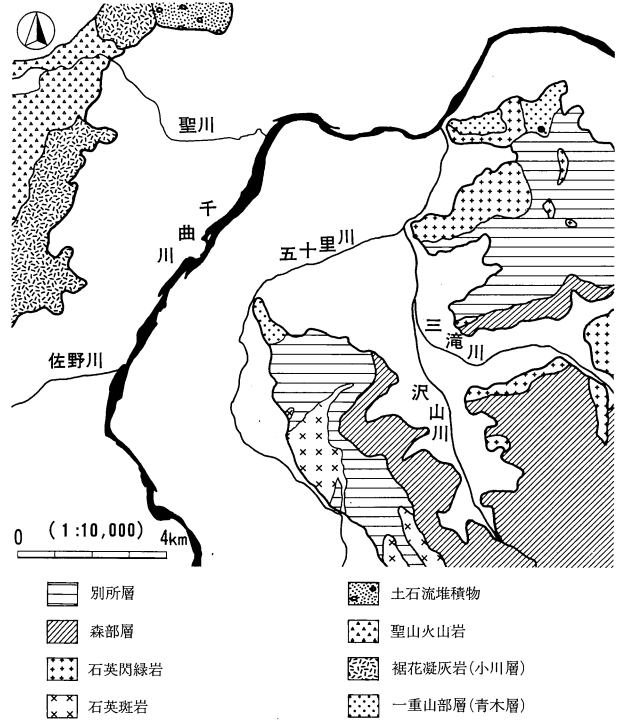


図5 遺跡周辺の地質(加藤・赤羽1986に加筆)

地が見られる。後背湿地は全体的に北西部から南東部へ傾斜しており、標高は最も高いところで一重山の東側の358m、最も低いところで森・中河原の西側で356.6mである。後背湿地の中にも微高地や帯状の凹地が認められる部分もある。更埴条里遺跡新幹線地点の調査では凹地部分での旧河道は検出されていない。埋没微高地の検討は今後の課題である。

五十里川は戸倉町徳間地籍で屋代堰として千曲川から取水され、戸倉町内川の東方で戸倉用水と合わせて五十里川となる。中州状の微高地の間をぬうように旧河道の微低地の中を流れ、屋代の市街地を通り一重山で東西方向に流れを変えて雨宮の自然堤防と後背湿地とのほぼ境を流れる。唐崎山西方で沢山川と合流する。現在は河川改修が進み直線的であるが、かつては自然の姿で流れ小さな開析谷を形成していた。

森・倉科にはそれぞれ鏡台山・三滝山から流れ出る沢山川・三滝川による表面勾配36/1,000の急傾斜の崖錐扇状地が形成されており、集落はその斜面上に立地する。生萱・土口は崖錐性の堆積物が押し出し地形を作る。沢山川は三滝川を途中更埴東小学校あたり(かつては少し下流の生仁)で合わせ、笹崎(薬師山の先)で千曲川と合流する。沢山川は天井川となり、周囲に微高地を形成している部分もある。

**新第三系の地質** 河東山地には中新世の堆積岩と中新世貫入岩類が分布し石材として利用されている。中新世前期～中期の内村層上部に相当する横尾部層、森・豊栄部層は、緑色凝灰岩・凝灰角礫岩と黒色頁岩・砂岩からなる。森部層の模式地は更埴市森の沢山川上流である。倉科周辺一大峰山周辺一沢山川周辺に分布する。黒色頁岩層を主とし新鮮な部分はかなり硬質である。中新世中期の別所層は更埴市森將軍塚古墳付近採石場を模式地とし、主に河東山地から長野盆地へ鋸歯状に突出した尾根に分布する。黒色頁岩を主体とするが、最下部・中・上部は緑色凝灰岩が主である。森部層の黒色頁岩と肉眼では区別がつかないが、森部層の方が硬質であると感じられる。遺跡で出土する石器の石材の一部は森部層または別所層の黒色頁岩を使用していると思われる。

中新世の貫入岩類は長野盆地底には分布しない。中～後期中新世に何回かにわけて貫入した石英閃緑岩は更埴条里遺跡・屋代遺跡群の東方約2～3kmの更埴市生萱・土口・倉科に分布する。生萱には大正時代に設置された採石場があり、石英閃緑岩は生萱石と呼ばれ主に間知石や割栗石として利用されていた。竪穴住居のカマド石、礎石建物の礎石などはこの石英閃緑岩を使用している。調査地南方の有明山南東方には石英斑岩が分布し、白色～灰白色で少量の大型石英の斑晶がみられる。

千曲川を挟んで対岸の西部山地に分布する中新世後期の小川層に相当する裾花凝灰岩部層も、カマド石の一部としてまれに使用されている。炭化物の付着や赤褐色の変色がみられ風化が著しいが、黒雲母・石英の斑晶が目立つ粗粒のこの凝灰岩は、岩相からみて下部層にあたり、長野市四野宮、長谷付近に分布するものと考えられる。

## 2 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の層序

更埴条里遺跡・屋代遺跡群に分布する堆積層を発掘調査・道路公団ボーリングの資料を基に七ツ石層・反町層・屋代層の3つに大区分し、さらに屋代層を細分した(図6)。屋代層は地層命名規約(日本地質学会1952 地質雑誌58巻p.112-113)に基づいているが、七ツ石層・反町層はボーリング調査位置の小字名であるため今後変更の必要があるかもしれない。ボーリング資料は既にサンプリングから時間が経過しており、保存状態も悪く肉眼観察に耐えられないため、全て道路公団のボーリング調査報告書の結果を使用している。下位より順に説明する。

### (1) 七ツ石層

**模式地** 更埴条里遺跡 A・B 地区 ボーリング資料

**分布** 更埴条里遺跡 A・B・C・D・E 地区

有機質の粘性土を主体とし砂質土、砂礫土との互層である。地表面下22.2～25.2m以深から50.5m(標高332～304m付近)までは確認されている。層厚 約27mである。下限は不明である。上位の反町層との間には不整合があると考えられる。

粘性土は Dc1、Dc2、Dc3、Dc4に区分されている。Dc1は茶褐色の有機質粘土～腐植土で若干炭化した木片が点在する。Dc2は帯黒褐色～茶褐色の有機質粘土～シルトである。Dc3は茶褐色～灰色の有機質粘土～粘土である。Dc4は帯緑灰色の径1～2cmの角礫を混入する粘土である。Dc1～Dc3は腐植物を多量に混入する。粘土は部分的に含水大でやわらかい層準もあるが、全体的に含水少なく硬い。

砂質土は青灰色～黒灰色の中～粗粒砂、礫混じり中～粗粒砂である。礫は径5mm～2cm大の軽石を主とする。スコリアを多量に含み、まれに凝灰岩礫も含む。上位の反町層と比較すると相対的に高いN値が測定された。

砂礫土は帯灰青色の径5～10mmの亜円～円礫を主とし、マトリックスは粘土である。含水は少ない。

ボーリング調査結果に地質時代は更新世、地層区分は古期氾濫原堆積層と記載があることから、七ツ石層の堆積時期は20,000年以前と推定した。年代測定を行っていないので詳しいデータはない。

### (2) 反町層

**模式地** 更埴条里遺跡 F・G 地区 ボーリング資料

**分布** 更埴条里遺跡・屋代遺跡群全体に確認される。

層相は変化し更埴条里遺跡 A・B 地区は砂を主体とし砂礫層を挟み、他の地区は礫を主体とする砂礫層である。地表面下5.8～11mから22m(標高348～332m付近)に分布し、層厚約9～16m程度である。下位の

七ツ石層を不整合で覆い、上位の屋代層に不整合で覆われると考えられる。

公団資料では更埴条里遺跡 F～G 地区付近を主な分布としており、記載は以下の通りである。帯緑灰色、帯黒灰色、茶褐色の礫径 2～5 cm の亜円～円礫を主とした砂礫層である。径 7～10 cm の礫を点在し、砂をブロック状・縞状に取り込むこともある。マトリックスは中～粗粒砂で粘土分も多く認められる。更埴条里遺跡 A・B 地区～E 地区にかけては層相変化し砂質土に漸移していると考えられる。

屋代遺跡群③、④区となると、帯青黒灰色、帯緑黒灰色、帯茶褐色の径 2～5 cm の亜角～円礫を主体とする。径 6～10 cm の礫を点在する。マトリックスはシルト～粗粒砂である。

年代測定は行われていないが、約 10,000 年前から 20,000 年前までと推定される。その理由として上位の下部屋代層の下部の層準である XVI が縄文時代前期後葉の諸磯式土器を包含するため約 6,000 年前の年代が与えられること、ボーリング資料と調査での所見を合わせると反町層の最上部と下部屋代層の XVI とのレベル差が 2 m 程度であることから、堆積物の砂礫からシルトへの急激な変化を不整合面としてとらえるなら更新世一完新世の境?とするのが適当と思われる。

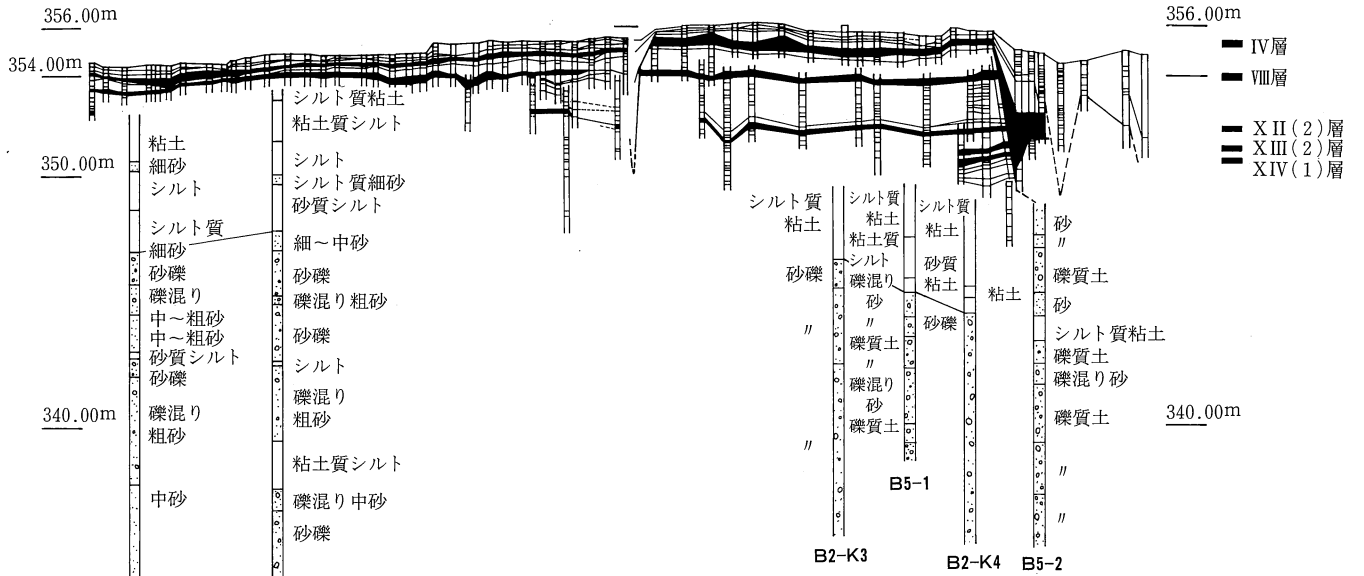
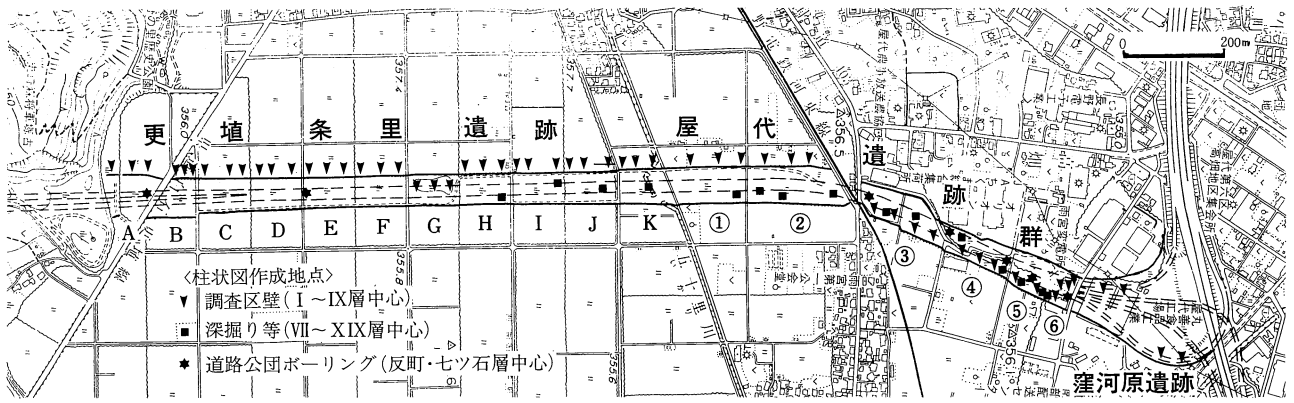
### (3) 屋代層

**模式地・分布** 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡全域

調査地全域に分布する完新世の堆積物である。発掘調査により上部・中部・下部の 3 つに分け、さらに色調・粒度、遺物の包含の有無などによって I 層から XIX 層に細分した。屋代層上部層は I 層から III 層、屋代層中部層は IV 層から VI 層、屋代層下部層は VII 層から XIX 層である。窪河原遺跡での屋代層中部層が砂礫層であることを除けば屋代層はほとんどシルト～粘土質で、細粒の堆積物から構成されていることが大きな特徴である。更埴条里遺跡 A 地区と屋代遺跡群⑥区とは同一の層準でも層相の変化はあるが、自然堤防の堆積物・後背湿地の堆積物といった明確な区分はできない（更埴条里遺跡 A・B 地区に分布する V 層のみ IV 層と同時異相の関係にある）。一般的に自然堤防と背後の後背湿地との境は不明瞭なことが多いが、本遺跡では堆積物からの区分もできないのでより不明瞭になっている。

### 引用文献

- 更級・埴科地方誌刊行会 1986 『更級・埴科地方誌 自然編』  
建設省北陸地方建設局千曲川工事事務所 1993 『信濃の巨流 千曲川』  
加藤 一・赤羽貞幸 1986 『長野地域の地質』地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）地質調査所  
大矢雅彦編 1983 『地形分類の手法と展開』古今書院  
赤羽貞幸 1995 「最終氷期以降における長野盆地の古環境」『第四紀研究』27, 37～44  
井関弘太郎 1983 『沖積平野』東京大学出版会  
日本道路公団関東第二建設局上田工事事務所 1989 『上信越自動車道 更埴地区第二次土質調査報告書』日本物理探査株式会社  
日本の地質『中部地方 I』編集委員会 1988 『中部地方 I』共立出版  
更埴市史編纂委員会 1994 『更埴市史 第 1 巻 古代・中世編』  
(財)長野県埋蔵文化財センター 1992 『長野県埋蔵文化財センター 年報』8  
(財)長野県埋蔵文化財センター 1993 『長野県埋蔵文化財センター 年報』9  
(財)長野県埋蔵文化財センター 1994 『長野県埋蔵文化財センター 年報』10  
(財)長野県埋蔵文化財センター 1996 『長野県屋代遺跡群出土木簡』  
(財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群一弥生・古墳編一』  
(財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『新幹線 更埴条里遺跡・屋代遺跡群』  
(財)長野県埋蔵文化財センター長野県教育委員会 1968 『地下に発見された更埴条里遺構の研究』



地質時代	層序	模式柱状図	層厚 (m)	岩相	考古時代	遺構・遺物
第四紀	上層	I	0.1~0.4 0~0.3 (~3.1)	灰褐色、砂質シルト層 灰褐色、粘土質シルト層	現代 中・近世	木田・島・集落
	中層	II	0.1~0.5 (~1.6)	1は黒褐色、2はにぶい黄褐〜 灰黄褐〜灰褐色、細粒砂層	平安〜中世	木田・島・集落
	下部	III	0.05~0.6 (~2.7)	IVは黒褐〜暗褐〜褐色、粘土 質シルト、Vは灰黄褐〜オリ ブ黒色、シルト混じり粘土層	飛鳥〜平安	木田・島・集落
	下部	IV	0.04~0.3	黒褐色、粘土質シルト層	弥生〜古墳	木田・集落
	下部	V	0.1~1.2	にぶい黄褐〜褐色、砂質シルト 層	縄文晩期後葉	焼土跡・土器・石器 集落
	下部	VI	0.1~0.3	黒褐〜暗褐色シルト層	縄文晩期中葉	焼土跡・土器・石器 集落
	下部	VII	0.8~1.1	にぶい黄褐〜黄褐色、シルト層 、砂層を挟む	縄文後期後半	焼土跡・土器・石器
	下部	VIII	0.2~0.5	にぶい黄褐〜暗褐色、シルト層	縄文後期前半	焼土跡・土器・石器
	下部	IX	0.2~0.5	にぶい黄褐〜暗褐色、シルト〜 細粒砂層	縄文後期前半	焼土跡・土器・石器
	下部	X	0.3~0.6	黒褐色、シルト層	縄文後期前半	焼土跡・土器・石器 集落
	下部	XI	0.3~0.6	にぶい黄褐色、シルト層	縄文中期後葉	焼土跡・土器・石器 集落
	下部	XII	0.5~0.8	暗褐色、シルト層	縄文中期中葉	焼土跡・土器・石器 集落
	下部	XIII	0.5~0.8	灰褐〜にぶい黄褐色、シルト層 灰黄褐〜暗オリブ褐色、シル ト層	縄文中期前葉	焼土跡・土器・石器 集落
	下部	XIV	0.7~0.9	暗灰黄褐色、シルト層	縄文中期前葉	焼土跡・土器・石器 集落
	下部	XV	0.7~0.9	オリブ黒色、シルト層、砂層を挟む	縄文中期前葉	焼土跡・土器・石器 集落
	下部	XVI	0.2~0.5	にぶい黄褐〜暗灰褐色、シルト層	縄文中期前葉	焼土跡・土器・石器 集落
	下部	XVII	0.2~0.5	暗オリブ褐〜灰色、シルト層	縄文中期前葉	焼土跡・土器・石器 集落
	下部	XVIII	0.6	黒〜灰色、シルト層	縄文前期後葉	焼土跡・土器・石器 集落
	下部	XIX	0.6	黒〜灰色、シルト層、しまりよ い	縄文前期後葉	焼土跡・土器・石器 集落
下部	XX	0.9	オリブ黒〜灰色シルト層、しま りよい	?	大形礫1点	
下部	XXI	0.4以上	オリブ黒色、シルト層、しま りよい			
更新世	返町層		砂礫層 砂主体 (BK S) 礫主体 (BY S)			
更新世	七ツ石層		28.3以上 有機質粘土層			

図6 総合柱状図

### 3 調査対象となった層序

#### (1) 層名

**屋代層（I～XIX層）** 屋代層のうち、発掘調査の手が届いた層までをI～XIX層に区分した。XVII・XIX層を除く各層からは、遺物や遺構が確認されており、人々の営みの痕跡が刻まれている。

**層名の統一** 更埴条里遺跡から屋代遺跡群・窪河原遺跡を同一テーブル上で論じるため、層名の統一を行った。全遺跡を通じて統一名称としたのは、ローマ数字で表示したI～XIXである。主に洪水砂層などの層理面を基準とした。例えばIV層について述べると、屋代遺跡群⑥区の旧河道内堆積層と自然堤防上の層では層相が大きく異なっている。しかし、調査範囲のほぼ全域を覆うVI層（黒褐色粘土質シルト層）の上層にあり、同様に全域に広がるIII層（黄褐色細粒砂層）に被覆されていることからIV層に統一してある。

各遺跡、各地点で特有の層については、それぞれの地区名と層番号を統一層名の後に記した。例えば、IV層の内、屋代遺跡群②区（Y2）で特有の分層ができた場合は、IV-Y2-1層とした。この細別番号はあくまで当該地区内での分層であって、他地区の1層とは異なる場合がある。

#### (2) IV・V層の特徴(図版2)

**層名** 前述の通り、性質の違う層もまとめてIV層として一括した。ただし、更埴条里遺跡南端に存在する泥炭層は、調査当初、時代が古くさかのぼると考えV層とした。出土遺物から古代と判明した時点でIV層に含めるべきであったが、図面類や遺物注記などの変更に伴う混乱の恐れがあること、泥炭層はこの地区にしかなく、他のIV層と層相が大きく異なること、からそのままV層としている。

**地形の違いと層相の変化** 調査が広範囲にわたったため、大きく次の4地区に分けて考える必要がある。

1. 後背湿地に形成された泥炭層（更埴条里遺跡A～C地区）
2. 水田域に見られる溶脱・集積層（更埴条里遺跡D地区～屋代遺跡群④区南半部）
3. 自然堤防最高所の集落内でやや黒色化した層（屋代遺跡群④c北半部～⑥区南半部）
4. 千曲川旧河道内の堆積層（屋代遺跡群⑥区北半部）である。

なお、窪河原遺跡ではIV層は千曲川の流れによって削平されている。

**IV・V層の形成と遺構** 上記1～4地区では層の形成が異なり、検出された遺構にも違いが見られる。

1では古墳時代に対応するVI層が明確でない。この地区のV層には弥生時代から古代の遺物が混在しており、堆積速度が比較的緩やかな泥炭層形成の時期が続いていたと考えられる。A地区のV層下面とD地区南端のVI層上面との比高差は約1.3mを測る。この低地に水田跡が認められるのは9世紀代に入ってからである。北側の地区ではすでに水田の再開発が始まっており、北側からの粘土～シルト流入が徐々に進んでいったと考えられる。一方、南側山地の崩落は少なく、小礫の混入が山際で認められる程度である。堆積が進み比高差が少なくなったIV層の段階で、畦畔は地形傾斜に左右されない条里型に変化する。

2では古墳水田に伴う幹線水路の管理が継続できず、屋代遺跡群で流路の蛇行、小規模な洪水がおこる。そのため、幹線水路のあった①区や②区で堆積が進み、周囲との比高差が増す。古代5～6期にはこうした尾根状の微高地に集落が形成される。また、古代8期前半の条里型耕地の開発期には畠として利用されている。IV層は更埴条里遺跡の南部へ行くに従って漸移的に黒色化し、粘性が強まる傾向を示す。一方、自然堤防側では溶脱・集積のパターンが明瞭になる傾向が認められる。

3では弥生時代以来集落が継続する。古代の竪穴建物跡の埋土は、古墳時代よりも粘性が弱く粒子が粗い傾向が認められる。SB5092（古代1期）埋土中に砂の堆積が認められるが、他には確認されていない。そのため、この時期に新たな堆積が自然堤防の高所で進行したか否かは判然としない。

4では古代0期から急速に河道の埋没がはじまる。古代1期には幅約15～20mの流路が残るのみとなり、大半が水田に造成される。その後、古代8期前半まで湿地化した時期と洪水による堆積などを繰り返していく。自然堤防I群境の崖には湧水がみられ、祭祀施設が作られる。

**IV・V層の細分** 各地区毎で、上記のような堆積状況の違いと水田化の違いによって細分を行った。IV層が水田化され、また上層に水田が存在する地区では、いわゆる溶脱層と集積層のパターンを主な目安として細分を行った。屋代遺跡群①区以南の比較的長期間水田であった地区に比べ、水田・畠など土地利用が変化した屋代遺跡群②・③区の方が、IV層中の溶脱・集積のパターンを細分化できる傾向が認められた。水田域内において、IV層中に地表面が存在するとの指摘も受けた<sup>(註1)</sup>が、全てを平面的に確認し得る調査期間がなかったため、断面図の作成にとどめた。

4では旧河道内全体を覆う洪水砂によって大区分を行い、各々の砂で埋没した水田を基準に第1～第5水田対応層の呼称を細別層名とともに用いている。

註1 高橋 学氏のご教示による。

## 4 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の環境変遷

### (1) 検討会の設置

**環境復元検討会** 本報告書では、自然環境を含めた景観の復元を重視することとした。ただし、発掘調査時点では各地区の担当者の視点によって分析項目が設定され、委託先も複数に分散していた。今回、長大な調査地区を一冊にまとめる編集方針を受け、改めて全域を通した課題の設定と各種分析内容の総合化が必要となった。そのため、環境復元に関する指導をいただいていた辻誠一郎先生、各々の分析を担当していただいた方々、それに発掘調査担当者に加え「環境復元のための検討会」を設置した。

ただし、『古代1編』については、日程の調整がつかず全員が同一テーブル上で議論する機会を持つことができなかった。そのため、総合的な検討結果は『総論編』にゆだねたい。

**分析の進行状況** 各種の分析は、①「検討会」発足以前にデータが寄せられたもの、②現在も分析を継続中のもの、③「検討会」によって新たに追加されるもの、が存在する。

現状では、分析途上の項目も多い。そのため、本編では、平成10年度前半期までに結果が得られたデータに基づいて、更埴条里遺跡・屋代遺跡群の自然環境の変遷を描くこととする。今後のデータの蓄積によって若干の修正が加わると予想されるが、長期の環境変遷の中に「古代」を位置づけるため、あえて概観を示すこととする。最終的な結論は、平成11年度刊行予定の『総論編』にゆだねたい。

### (2) 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の環境変遷

パリノ・サーヴェイ株式会社

田中義文・辻本崇夫

**古代の古環境** 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の古環境変遷に関しては、環境復元検討会を中心に協議を重ねてきた。現段階では、基本土層に基づいた各地点間の層序対比を行い、自然科学分析の成果をまとめつつある。これまで行った分析成果は膨大であるため、全ての結果を提示することは難しい。そこで、ここでは図7に示すような総括図を提示し、古代を中心とした古環境変遷の概略を述べる。なお、これまで行った分析成果の詳細に関しては、後日報告する予定である。

**縄文時代の古環境** 縄文時代は河川作用の影響が活発で、自然堤防Ⅰ群が徐々に形成された時代である。自然堤防構成層は、後代になって好気的環境にさらされたため、花粉化石を中心に化石の保存状態が悪い。したがって、縄文時代の情報は後背湿地にあたる更埴条里遺跡B地区の情報が中心となる。縄文時代の古植生は、クルミ属、ニレーケヤキ属、シデ類、ナラ類等の河畔林やヨシ属などの水生植物からなる湿地が発達していたと考えられる。おそらく、自然堤防上ではタケ類やウシクサ属などからなる草地や河畔林が、低地ではヨシ属など水生植物主体の草地（湿地）が存在したと推測される。

**弥生時代～古墳時代の古環境** 弥生～古墳時代は、自然堤防Ⅰ群の形成がほぼ終了して安定化し、主に後背湿地を中心に水田が営まれていた時期である。屋代遺跡群では自然堤防上に生育していた立木（カツラ、ケヤキ）を伐採して、水田開発が行われた証拠が検出されている。このほか、木本花粉では、クルミ属、ニレーケヤキ属、シデ類、ナラ類等が検出されており、これらが、自然堤防上などに河畔林を形成していたと考えられる。また、イネ科を中心に草本花粉の割合が急増することから、草地の拡大が示唆される。

これは、低地上の河畔林や林縁部の森林が水田開発のために縮小したこと起因すると考えられる。

**古代の古環境** この時期には、水田開発が自然堤防にまで及び、更埴条里遺跡K地区など高い場所に集落が作られるようになる。この時期の古植生は、弥生時代から引き続いて大きな変化はなく、遺跡周辺は開発により草本主体の植生であったと思われる。花粉分析や植物珪酸体分析の結果からすると、自然堤防上ではタケ類やウシクサ属などからなる草地やクルミ、ナラ類などの河畔林があったと考えられる。また、水田域ではヨシ属などの水生植物がいわゆる「水田雑草」として生育していたと考えられる。一方、花粉化石群集の変化として、モミ属・ツガ属など温帯針葉樹の増加が見られる。これは、後背山地に温帯針葉樹林が増加したためとみられ、弥生時代以降増加する傾向にあるが、古代には特に高くなる。このような植生変化は全国各地の花粉分析成果に現れる。たとえば、関東平野では、スギ、モミ属、ツガ属、アカガシ亜属の増加として現れることが多く、大阪平野ではモミ属、ツガ属の増加として現れることが多い。こ

表4 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の土地利用変遷と古環境 □は本編の範囲

層位	時代性	土地利用状況			地形・土地利用変遷の総括	古植生	
		後背湿地（更埴条里）	自然堤防Ⅰ群（屋代遺跡群）	自然堤防Ⅱ群（屋代遺跡群）		渡来種の出現時期	周辺植生
I	現代	水田、富栄養化	水田、畠、集落	畠	自然堤防上では集落域、後背湿地は水田域として利用される。窪河原遺跡が自然堤防Ⅱ群が安定化する。水田域での富栄養化	ワタ ゴマ	人間の植生干渉によるマツの増加
II	中世後半～近世	水田？富栄養化	畑、高い場所に集落	畠（高まり）、水田（旧河道）			
III-1	平安後期～中世前半	水田？、富栄養化、K・J地区集落	畠・集落	畠（高まり）、水田（旧河道）			
III-2	平安（9世紀末）	洪水層	洪水層	洪水	洪水（888年）により、遺跡全体が砂に覆われる。		
IV・V	飛鳥～平安時代	水田（A・B地区は泥炭地）、K地区集落	水田、集落	旧河道	自然堤防上まで条里水田が広がる。自然堤防のなかでも高い部分に集落が存在、窪河原遺跡は河川の影響を強く受ける。やや大規模な洪水が起きた形跡もあるが、耕作等の影響で堆積層では不明瞭。	マメ類 オオムギ ソバ	イネ科を中心とした草地の拡大 渡来種の出現 モミ属・ツガ属などの分布拡大
VI	古墳～弥生時代	水田K地区集落？	水田、高い場所に集落	不明	自然堤防上の森林を伐採した痕跡が認められ、水田の拡大が示唆される。弥生時代中期以降、自然堤防上などで新たな水路がつけられる。自然堤防上は集落、後背湿地は水田として利用され、現在みられる自然堤防Ⅰ群と後背湿地が安定化する。	モモ イネ	
VII	縄文晩期中葉	生活痕跡あり	生活痕跡あり		前半にやや安定するが、後半は河川作用が活発になり、大規模な洪水がたびたび起こる。洪水の間に生活の痕跡が認められる。		
VIII	縄文晩期中葉	集落？焼土跡、建物	生活痕跡あり				
IX	縄文晩期中葉以降	生活痕跡あり	生活痕跡あり		河川の作用が活発になり、微高地上の集落は不安定、大規模な洪水もたびたび起こる。		
X	縄文時代後期前葉	生活痕跡あり	生活痕跡あり				
X I	縄文時代後期前葉	生活痕跡あり	生活痕跡あり		流路が安定し、自然堤防が固定化される。		
X II-1	縄文時代後期前葉	生活痕跡あり	生活痕跡あり				
X II-2	縄文時代後期後葉	生活痕跡あり	高い地点に、集落、他地点にも遺物		流路が安定し、自然堤防が固定化される。		
X III	縄文時代中期中葉	—	高い地点に集落				
X IV	縄文時代中期前葉	—	高い地点に集落		氾濫原上の微高地として徐々に安定化してくる。		
X V	縄文時代中期前葉	—	生活痕跡あり				
X VI	縄文時代前期後葉	不明	生活痕跡あり		氾濫原上の微高地として徐々に安定化してくる。		
X VII	縄文時代前期						
X	不明						
X VII	不明						

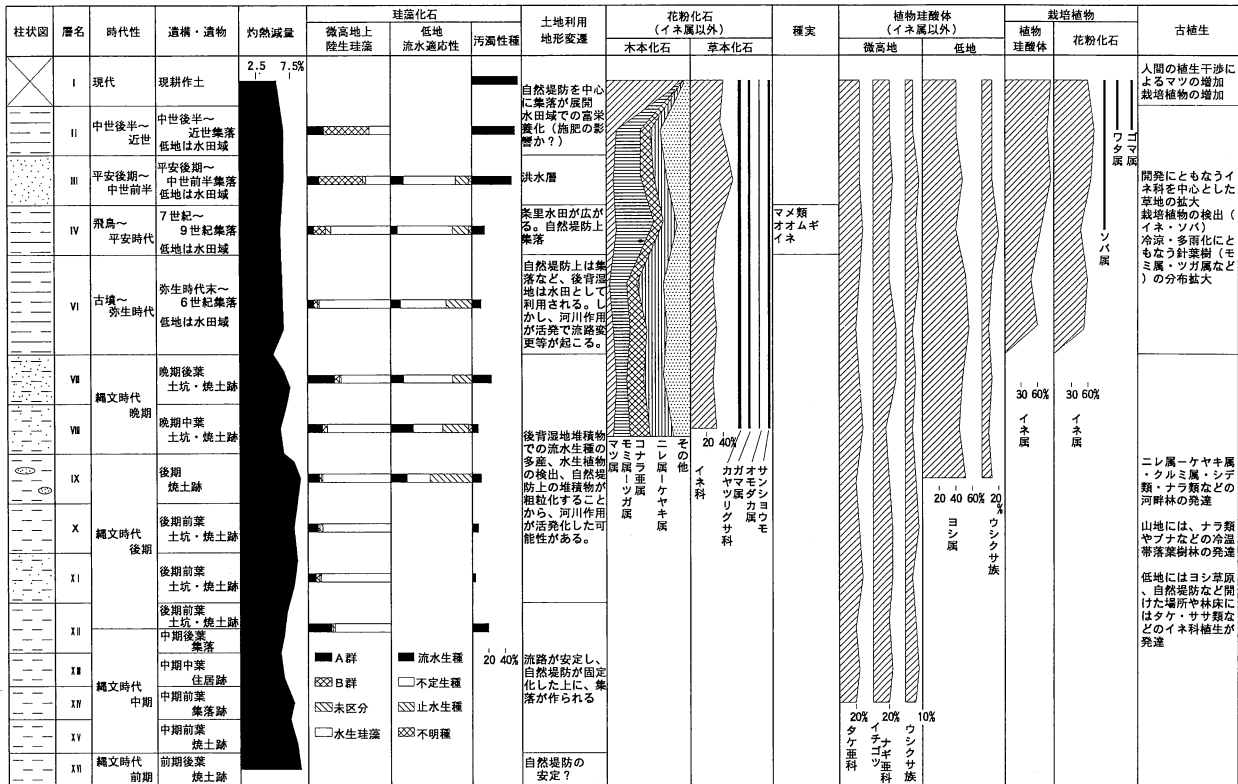


図7 総合柱状図に基づく更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の古環境変遷

これは、「弥生の小海退」と呼ばれる環境変化で、これまで海水準の低下や冷涼・多雨な気候などが推測されている。北信地方では、最終氷期以降の連続した花粉化石群集が得られている野尻湖でも、Fagus-Cryptomeia 亜帯として、この傾向が現れている(那須、野尻湖花粉グループ1992)。この多雨気候は、自然堤防II群の形成と連動しており、モミ属・ツガ属の出現率の高い古代には、屋代遺跡群で千曲川の旧流路が確認されている。また、イネ、ソバ、オオムギ、マメ類などの栽培植物も検出されており、これらの栽培が示唆される。

**中・近世の古環境** 平安時代末には、遺跡全体を覆うような大洪水にみまわれたが、中世に入ると流路の変更は少なくなり、自然堤防I群の外側に作られた自然堤防II群(窪河原遺跡)が安定化する。植生では、ワタ、ゴマなどの栽培植物の出現や、マツの二次林・植林の分布拡大などが顕著である。一方、水域環境の悪化(富栄養化)が指摘されており、水田の容態の変化(施肥など)が示唆される。

引用文献

那須孝悌・野尻湖花粉グループ 1992 「野尻湖周辺における最終氷期の古植物の古気候変遷」『月刊地球 野尻湖周辺の自然史 一最終氷期以降の古環境』 p.50~55 海洋出版株式会社



## 第4節 調査・整理の経過

### 1 調査の概要

#### (1) 調査の実施にあたって

**調査期間と調査範囲** 上信越自動車道の供用開始時期と工事期間との兼ね合いから、更埴条里遺跡、屋代遺跡群、窪河原遺跡の発掘調査期間は平成3年度から平成6年度の4年間に限定された。その後、バスストップ設置のための調査が平成7年5月に追加された。また、これに先だって、平成2年度には中央自動車道長野線に関わる更埴ジャンクション用地（窪河原遺跡 H2地点）の調査が実施された。

上信越自動車道・中央自動車道用地の約2.3km区間はほぼ全域が調査対象である上、沖積地のために遺構が地下深く重層的に存在することが考えられた。そのため、当初より遺跡の内容に見合った調査の遂行には困難が予想された。よりよい記録保存を実施するため、選択的な調査と調査体制の強化が図られた。

**選択的な調査** 遺構の残存状況の違いなどによって選択的な調査を行っている。古代に関する調査では、IV層の細別が可能であった。しかし、広大な調査範囲の全域で面的な調査を行うには各細別層の層厚が薄すぎ、重機の活用が困難であった点、上層水田の影響による土壌化の違いによって旧地表面を把握しにくい点などを考慮し、細分層毎の面調査は一部地区だけで実施するにとどめた。また、屋代遺跡群⑥区（ボックス工事による深い掘削が実施される地点とその周辺）では、縄文集落の調査期間を確保するため、縄文時代の包含層を切る旧河道斜面の古代遺構を先行して調査した。その後、旧河道内では古代の調査を継続しな

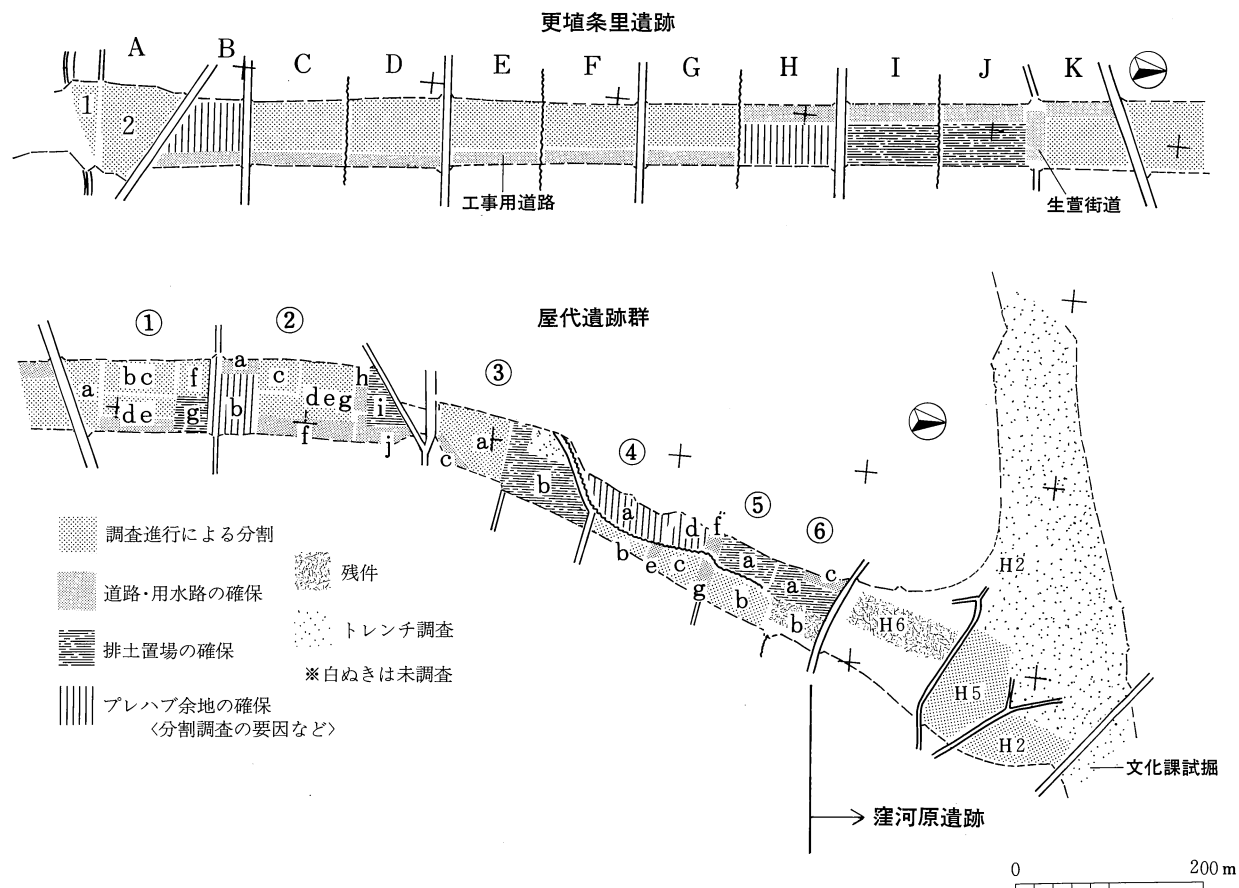


図8 仮地区名と分割調査

がら、それと並行して斜面（古代面の一部）を切り崩し、縄文面の調査を行った。そのため、古代の地形や遺構（祭祀関連溝）の全貌は図で照合できるとどまっている。逆に、縄文面の調査においても、包含層や竪穴住居周堤の調査を省かざるを得ない状況であった。

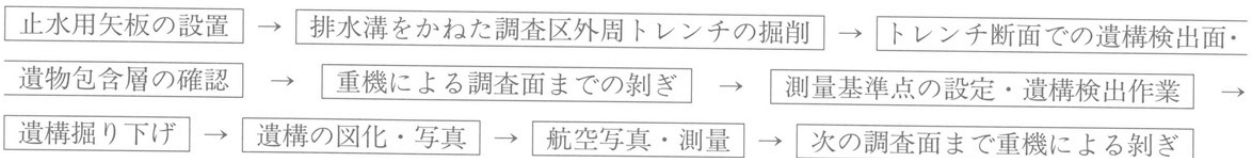
**調査体制** 広範囲の遺跡を短期間で調査し終えるため、調査班を複数作り、大量動員を図り、数カ所で同時に調査を実施した。大量動員体制は記録類の不統一を生み、担当者の異動などにより所見の不明確な部分が残ったままとなってしまった。そのため、報告書作成段階で、記録類をそろえるだけで多くの時間を費やす結果となった。

調査の概要についての詳細は『総論編』を参照していただきたい。

## (2) 調査の手順

**調査の手引き** 調査の手順、地区設定、遺跡・遺構記号などは、長野県埋蔵文化財センター『発掘調査の手引き』に則って進めた。地区設定は図版1に、分割調査のために設定した仮地区は図8に示した。

**基本的な調査進行** 基本的な調査の進め方は、次の通りである（写真P19・20）。



さらに、時間短縮のため、重機等の機械力や航空測量・航空撮影、8mmビデオカメラを多用した。

**遺構対象別の調査** 古代面（IV層）では、調査対象が水田域、集落域、旧河道内など多岐にわたったため、各地区の特殊な事情によって調査法を多少変えている。

水田域では、水田面を覆う砂層（III-2層）がしっかりと残存していたため、砂を丁寧に除去して洪水直前の状況を捉えることを主眼とした。田面の鋤跡や耕作痕、足跡、作物痕の作図については、調査期間との兼ね合いで選択的に行っている。ただし、全地区において航空測量を実施しており、作図のための測量用写真は保管してある。

集落域においては重複が激しく、新旧関係の把握に時間を費やした。調査期間短縮のため、大量動員の対象地区となったため、記録類の統一性に欠けた観がある。

旧河道内では、木製祭祀具や木簡などがまとまって出土したため、その現位置と層位の記録化に神経を注いだ。詳細については、『総論編』を参照していただきたい。



屋代遺跡群②区 広大な条里水田面での散水作業



屋代遺跡群①区 集落域の調査



屋代遺跡群④g区分割調査状況  
(左：⑤b区、右：④c区は調査済)



現地説明会の実施

## 2 整理の概要

**整理経過** 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の本格的な整理作業は、平成7年度から上田調査事務所において実施している。『古代1編』に関しては、平成7～9年度は主に遺物の洗浄と保存処理、注記に費やした。

屋代遺跡群⑥区の古代に関連する流路・溝中からは、多量の植物遺体が検出できた。そのため、土壌サンプルを洗浄し、植物種実などを選別する作業に5名前後の人員を専従させた。また、これまであまり手がつけられていなかった木屑類の整理にも時間を割いた。この期間に金属製品の錆落としや保存処理、ウレタンで取り上げた脆弱遺物（骨や炭化材）の処理を行った。

8年度から10年度にかけて遺物の実測・写真撮影を行った。

調査中や終了直後に図面類や所見の基礎的なまとめを行う期間がなかったため、遺構図の検討と確定は本編入稿直前まで続いた。そのため、若干の齟齬が生じている。この点は『総論編』で関係がつかみ易いよう配慮するつもりである。整理体制などについては、平成11年度刊行予定の『総論編』を参照していただきたい。



ウレタン取り上げ人骨などの解体・保存処理・再実測



遺物の注記と図面整理作業

## 第2章 飛鳥時代から平安時代（IV・V層検出）の遺構と遺物出土状況

### 第1節 概 観

**遺構検出層位** 本章に掲載した遺構は、IV-1層上面で検出した礎石建物跡から、IV・V層下面検出の遺構までを含めた。

III-2層の砂を取り去った段階（IV層上面）で検出した遺構については、洪水直前の状況を示す資料として一括し第3章に掲載した。ただし、洪水砂除去中に検出できた礎石に関しては、畝状遺構との新旧関係からIV層上面に残存したものと捉え、本章で扱う。

VI層との分離が困難であった屋代遺跡群⑤区などの遺構は伴出遺物の時期で判断した。また、古代以降水田として利用されていた地区では、VI層上部が水田の影響を受け、古墳時代後期の溝との分離が難しかった。ここでは、埋土や遺物から古墳時代と判断できる溝（SD）については『弥生・古墳時代編』に掲載し、それ以外の遺構を本章で扱った。

**遺構検出地区** 調査区南端の更埴条里遺跡A地区から屋代遺跡群⑥区北部にかけて遺構が確認された。屋代遺跡群⑥区と窪河原遺跡の境では、III-2層を切り込んだ河川跡が見つかっており（『古代2、中・近世編』）、窪河原遺跡に古代の遺構は残っていない。

**検出遺構数** 上記の層位と地区で検出された遺構は、水田跡約19,026㎡、5面。集落6カ所、竪穴建物（含む住居）跡485軒、掘立柱・礎石建物跡90棟、井戸跡14基、土坑377基、溝跡695条、祭祀域1カ所、祭祀具集中50カ所である。

**土地利用の違い** 調査範囲が広範囲にわたったため、土地利用の違いが認められる。

1. 更埴条里遺跡A～C地区には泥炭層が認められ、水田化されている。
2. 更埴条里遺跡D～J地区は、水田面こそ確認されていないが、水路の存在などから水田として利用されていたと考えられる。
3. 更埴条里遺跡K地区から屋代遺跡群（自然堤防I群）内の微高地上では、9世紀以降に集落が展開する。
4. 自然堤防高所にあたる屋代遺跡群④～⑥区では、弥生時代以来の集落が継続している。
5. 屋代遺跡群⑥区、集落北側の旧河道内では祭祀施設や水田が見つまっている。

**記載順** 遺構と遺物出土状況の説明は、この土地利用の違いを基準に南側から節を分けて説明を加えていく。第2節では1. 2. とした後背湿地I群中の水田・水路を扱う。第3節は3. 4. の集落を個別に概観する。集落域に集中する各種個別遺構については、各遺構ごとの変遷や特徴を把握する関係上、集落ごとではなく遺構別に第4節で概観し、表5～12にデータを掲載した。第5節では5. とした旧河道域で検出された水辺の祭祀施設と祭祀具集中、水田などを扱う。水田や集落の変遷・特徴などについては、各遺構ごとの変遷や特徴を把握した後、遺物の成果も踏まえ、第8章で検討を加える。

## 第2節 後背湿地 I 群内の遺構と遺物出土状況

### 1 概 観

後背湿地 I 群の範囲は五十里川以南の更埴条里遺跡にあたる。しかし、自然堤防との境は漸移的である（第1章第3節）。そのため、ここでは比較的標高が高く、集落跡が存在する更埴条里遺跡 K 地区を除くこととした。

この地域は泥炭層の見られる A～C 地区とそれ以外の低地に区分できる。A～C 地区では古墳時代の包含層である VI 層が確認できず、V 層には弥生時代後期～古代 7 期（9 世紀代）までの遺物が含まれている。そのため、弥生・古墳時代以降の土地利用の変化を捉えることが難しくなっている。V-KA-5 層上面と V-KA-1 層上面で水田跡が確認された。また、IV 層上面の水田跡は条里型地割に合致し、古代 8 期前半（9 世紀後半）に比定される（第 3 章）。

D～J 地区では古墳時代の水路や畦畔状遺構が見つまっている（『弥生・古墳編』）。しかし、古代にかけての水路の継続性は明確ではない。古代に入ってから、H 地区で水路と杭列が見つまっている。また、唯一溝が継続していた可能性のある J 地区で、古代 5・6 期以降（9 世紀代）に水路、畦畔、道路が再整備される。古代 8 期前半には条里水田が全域に広がる。

### 2 更埴条里遺跡 A～C 地区

南側山地直下の低地であるこの地区には泥炭層が見られ、水田跡が重層的に検出された。

#### (1) V-KA-5 層上面検出水田跡（V-KA-5 層水田）

**位 置** 遺跡の南端、A 地区で確認された水田跡である。

**遺構の検出状況** V 層下部に堆積する黒色粘土層を V-KA-5 層とした。調査区北西隅のトレンチ断面でこの層の高まりを確認し、畦畔（SC5）の可能性を考えた。平面では水田層上部に砂層などの被覆がなかったため、色調の差で畦畔を検出した。田面は検出されていない。畦畔（SC4ほか）は V-KA-5 層上面で、黒色化した帯として確認できた。

**畦畔の走行と水田区画** 2 条の大畦しか検出されなかったため、区画を明確にすることはできない。SC4 は N60°W、SC5 は N21°E を示し、座標北から 20°ほど東に振れる。等高線に平行もしくは直交する形で配置されている。この主軸は V-KA-1 層水田の畦畔と一致し、SC4 は V-KA-1 層水田 SC3 の直下に位置するため、ほぼ同一の水田区画であった可能性が高い。

**水田域の傾斜** 調査区南西付近が最も高く、北東に向かい傾斜する。この傾斜は基本的に V-KA-1 層上面と同様である。また、水田面には約 40cm の比高差がある。

**取排水の方法** 水路は検出されていないが、SC4 の水口を起点に考えると、調査区南端から北側にかけての畦越し灌漑が想定され、水源は V-KA-1 層水田同様、山際の湧水を利用した可能性が高い。

**水田土壌** 本層は V 層（V-KA-1～4 層）に比べ黒色化した粘質土で、かなり粘性が強い。層全体に白色の斑紋（5～10%）と暗褐色の斑鉄が認められ、植物遺体の混入（5～10%）がある。

**出土遺物** 特になし。

**水田面のプラント・オパール分析** 畦畔の検出は 2 か所だったが、A 地区のほぼ全域から多量のプラント・オパールが検出されており、全域の水田化が想定される（第 6 章第 2 節）。

**V-KA-1層水田との関係** SC3 (V-KA-1層) と SC4 (V-KA-5層) はほぼ同一地点に位置し、SC5 (V-KA-5層) はV層水田の大畦と規模・主軸方向が酷似する。この状況から両水田は基本的に同じ水田区画を示しており、V-KA-1層水田はV-KA-5層水田の区画を踏襲した可能性が考えられる。

## (2) V-KA-1層上面検出水田跡 (V層水田)

**位置** 水田跡は更埴条里遺跡の南端、有明山山麓に位置する。

**被覆層と水田面の状況** 水田層は山麓からC地区にかけて確認され、黒色の泥炭層で埋没する状況であった。泥炭層はSC3付近を南限とし、北方はB地区中央部にかけて堆積が認められた (IV-KA層ほか)。最も顕著な堆積を示すA地区中央部では15cm程度の厚さがある。A地区では泥炭に覆われた面に不整形の無数の凹みが分布しており、凹みが存在しない箇所が帯状をなす状況が認められた。明確な高まりはないが、これを畦畔と認定した。一方、明確な泥炭の堆積がないC地区のSC203にはわずかな盛り上がり確認された。B地区では水田面より若干白色をなす帯状箇所を畦畔 (SC101~109) とした。

**畦畔の走行と水田区画** 北東—南西方向10条、北西—南東方向4条が検出された。畦畔の方向はSC2がN36°E、SC6がN29°E、SC7がN30°E、SC8がN27°E、SC3がN110°E、SC101がN38°E、SC203がN24°Wである。畦畔が良好に検出されたA地区では、6条の畦畔が等高線に平行もしくは直交する形で構築されている。さらに、座標北から30°ほど東に振れた北東—南西畦畔が12~15mの間隔で平行し、南北に細長い水田区画を形成している。SC2と直交するSC3が大畦に相当する規模を有し、基軸畦畔として区画の基本となっていたと推定される。B・C地区の畦畔はほぼ同様な様相を示すが、中央に水路を伴うSC203は主軸が若干異なっており、傾斜に起因した区画と考えられる。

**水田域の傾斜** V層水田はA地区北東およびB地区南東付近が最も低い。有明山の山裾とC地区北西付近が高く低地に向かい緩やかに傾斜する。水田面の比高差は40cmにおよぶ。

**取排水の方法** 水田面の傾斜から、有明山の山裾とC地区北西付近から北東方向に向かい畦越し灌漑がなされていた可能性が高い。2系統の水利が想定される。水源については、A地区では山裾の湧水、B・C地区ではSC203から取水した可能性が考えられる。

**田面の状況** 残存状況が良好なA地区では、田面に無数の凹みがある。凹みは泥炭が明瞭に堆積する調査区中央部以北で顕著に認められ、凹みの底部まで泥炭が埋没している。形状・規模とも規格性はない。足跡の可能性が考えられるが形状からは判断できない。プラント・オパール分析の結果ではヨシ属が卓越しており、かなり湿地性の強い水田であったと言える。水田面に残された凹みとの関連があろう。

**水田土壌** 本層は粘性が強い黒色粘土層で、A地区からC地区にかけて堆積する。水田土壌は30~40cmを測る。A地区西壁および北壁が最も厚く、B地区南壁からC地区にかけて薄くなる。層上部から中ほどにかけて黄褐色を示す植物遺体が顕著にある。A地区では泥炭の影響で上面が薄く黒色化し (V-KA-1層)、下層が色調と酸化鉄の含有量などから複数に分層された (V-KA-2~4層)。V-KA-1~4層は土質がかなり酷似し、土壌化作用による可能性が高い。

**出土遺物** A地区の水田面から古墳時代の甕、古代7期に比定される須恵器杯が出土した。また、A地区V層より弥生後期の甕の破片と5世紀代の甕、C地区では5世紀代の高杯の脚部と古代7期に属すると思われる須恵器杯が出土した。

**水田面のプラント・オパール分析** 水田域の利用状況を考える目的で畦畔と水田面の土壌を分析した結果、凹みの分布範囲でプラント・オパールが多量に検出され、凹みが希薄となるSC3付近以南は検出量が減る傾向が認められた。SC5付近を境として埋没直前の農作業の形態が異なっていた可能性がある。

### 3 更埴条里遺跡 D～J 地区

#### (1) 溝と道路状遺構（SD・SC・SX）

ここでは検出された遺構の概略を述べ、各々の計測値や特徴は p.95～108の表12に示した。

**E・F 地区**（図版8・9） SD401、SD508は方向や位置から『弥生・古墳編』で報告した水田に伴う可能性が高い。遺構は不明確だが、この地区では1期（7世紀代）以降の土器が出土しており、何らかの形で古代に土地が利用されていた可能性がある。

**H 地区**（図版11） 東西方向の水路 SD716ほか掘削され、改修が繰り返される（SD714）。水路に沿うピット群があり、柵列の可能性（SA701）がある。また、北東方向に分水する SD740～745が存在する。いずれの埋土にも砂が含まれているが、IV層中の検出でありIII層とは異なっている。遺物がないため時期は不明である。IV層からは8～9世紀代に比定される土器が出土している。

**J 地区**（図版13） 調査区南側で水路と思われる SD1033が検出されている。時期は不明である。

また、弥生時代以降、自然流路を水路化していった J 地区北部では、ほぼ同位置に SD1036～1039が存在し、6～7期に比定される土器が出土している。

SD1032は SD1036などが埋没した（図版224）後、SC1002の北側に沿って掘削される。途中橋状に途切れており、SC1002下層畦畔の側溝の可能性もある。橋状の掘り残し部分は K 地区へつながる。

SC1002は幅が広く、道として利用された可能性を持つ。その場合、N87°E、ほぼ東西方向の直線道路で、道路幅は上端で約2.5～4 mを測る。延長線上の西側には郷津遺跡、東側には生仁遺跡が存在する。

SD1032からは、6期（9世紀前半）の土器が出土している。ただし、この溝が掘削される以前に埋没した SD1036～SD1039で6・7期の土器が出土しており、それより若干新しい時期が考えられる。

SC1002に直交して南北方向に連なる SX1002は、溝状の凹地が並行して連なる遺構である。検出された位置から、低地へ向かう道路の下部施設の可能性がある。ただし、上層の条里水田の大畦畔に重なる部分もあり、畦畔の下部施設の可能性も残されている。

#### (2) 土坑（SK）

ここでは概略を述べ、各々の計測値や特徴は p.86・87の表8に掲載する。

**G・I 地区**（図版10・12） 両地区で比較的多く検出されている。配置に規則性はなく、畦畔や水路などに関連する可能性も認められない。遺物がなく、VI層上面検出の古墳時代の土坑との分離も不可能である。

## 第3節 自然堤防 I 群内の集落跡の概要

### 1 概 観

古代の集落は、屋代遺跡群から更埴条里遺跡 K 地区にかけて点在している。ここでは、まず点在する集落の位置関係や立地、時期をおさえるため、各集落の概観を行う。個別の遺構については次節にまとめ、総合的な変遷や特徴については第8章で述べる。

検出された集落跡は、その成立の過程で大きく2つに区分される。1つは弥生時代以来継続的な居住域となっていた自然堤防 I 群高所の屋代遺跡群⑤区周辺である。これに対し、5～6期（8世紀末～9世紀前半）には更埴条里遺跡 K 地区から屋代遺跡群④区の地域にかけて、新たな集落が成立する。

### 2 更埴条里遺跡 J・K 地区集落跡（図版13・14、25～38）

**立 地** 自然堤防 I 群から後背湿地 I 群へ移行する地点。西から東へ張り出した尾根状の微高地に位置する。IV層上面での水田（K 地区南部）との比高差は約0.2m 以上である。古墳時代に掘立柱建物1棟、井戸1基が存在した時期があり、西側隣接地に古代集落に対し時期的に先行する集落が存在した可能性がある。

**範 囲** 東西は調査区外に遺構が広がるため不明である。南は低地へ移行する K 地区南部で建物がなくなる。しかし、いわゆる焼土坑数基が J 地区に存在するため、J 地区北部までが集落域に含まれていたと考えられる。条里水田の造成（6～7期?）に伴い、南側の境は K 地区内へ移動する。北は、後の五十里川近くで遺構が途切れている。

**遺 構** 竪穴建物跡52軒、掘立柱・礎石建物跡15棟。井戸跡6基、いわゆる焼土坑7基、柵列10条、溝52条ほか

**存続時期** 5期～8期前半（ただし洪水後も存続）

**成立とその要因** 5期の土器を出土した竪穴住居1軒が調査区北西部に存在する。調査区隅での確認のため、西側に古い集落が続く可能性もある。よって、新しい集落が成立したのか、旧集落が東へ拡大したのかは不明である。この住居の主軸は隣接する SD906 に類似している。これよりやや遅れて、条里の坪境畦畔に先行し、同方向で後の畦畔の延長線上に乗る溝 SD974 が掘削される（5～6期）。それと同時に集落が拡大・定着する。

**継続と特徴** 6期には、東～西に3つの建物群が並存する構成を示していた。条里型地割に沿った規格性が認められ、倉庫や井戸の数も多い。条里型地割の施行は、この地区周辺からはじまっており、低地の開発を主導した有力集落であったと考えられる。ただし、集落の中心は西側調査区外であったと考えられる。7期にはこうした構成に変化が起り、1棟の掘立柱建物の周囲に竪穴住居が散在するようになる。8期には集落は縮小傾向に入る。一方、この時期に礎石を持つ建物が出現する。

**消滅とその要因** 洪水の時期を挟んで、8期後半まで遺構が認められる。ただし、III-2層の洪水砂を埋土に持つ住居跡の全てでカマドの破壊が認められた。このことは、洪水時には竪穴住居が使われていなかったことを示している。

**特記遺構** 鍛冶施設を持つ礎石建物跡（ST918）、木枠が残る井戸跡（SK9930ほか）

**特記遺物** 畿内系土師器、緑釉、朱墨硯、小刀、青銅製品



### 3 屋代遺跡群①区集落跡 (図版15・16、39～58)

**立地** 自然堤防I群中、西から東へ延びる尾根状の微高地上に位置する。古墳時代には自然堤防上の水田に水を供給する基幹水路が設置された場所にあたる。IV層上面における水田面(①b～e区)との比高差は約0.2～0.5mを測る。

**範囲** 東西方向は、調査区外まで遺構が続いており不明である。南は、6期の集落成立当初にはSA1・2を境としていた。その後、条里の東西大畦が造成された6期の新しい段階には、条里の坪境となるSC11が南限となる。北は、集落成立当初、集落北部(②b区)に遺構がないことからSD126付近であったと推定される。条里の大畦造成後は、北側のSD2433へ移動する。このように、条里の大畦の造成により、集落全体が北へ動いたと考えられる。

**遺構** 竪穴建物跡49軒、掘立柱・礎石建物跡16棟。井戸跡0基、いわゆる焼土坑8基、柵列27条、溝272条ほか

**存続時期** 6期～8期前半

**成立とその要因** 5期以前には古墳時代の基幹水路が埋没しており、小規模な溝が流路を絶えず変えながら蛇行する状況が見られる。周辺への土砂の堆積も見られる。こうした水路の状況は、古墳時代以降に水田が放棄された可能性を示唆している。

6期以前には、後の条里の坪境畦畔と同位置に溝(SD32)と材木列?(SA4)が設置される。SA4は溝内に平面長方形の大形ピットが並び、区画された範囲も一辺80mを超える大がかりな施設が想定される。SAの西側が調査区外であるため、施設の本体は不明である。更埴条里遺跡K地区集落にかかわる可能性が高く、少なくともこの時期には水田が消滅していたと言えよう。

6期には、東西方向に溝(SD45)と柵列(SA1・2)が設置され、この境界以北に集落が成立する。

**継続と特徴** 6期には調査区中央に集中していた遺構が、その後東西方向に拡大していく。7期以降、条里畦畔の造成(第2波)に関連して集落は全体に北へズレる。この時期、集落は溝と柵列に囲まれ、その内部は竪穴住居区域と倉庫を含む掘立柱建物区域、工房区域に分かれる。8期前半には礎石建物跡や連房式鍛冶遺構の存在が明確となっている。こうした点から7～8期前半に有力な集落に発展していったと考えられる。

**消滅とその要因** 条里水田の造成が及んでまもなく(8期前半)、集落は廃絶され、畠と考えられる畝状遺構のみが残る。III-2層の洪水砂を埋土に持つ住居の全てにおいて、床面上には遺物の廃棄と第一次堆積層が認められ、完存したカマドも存在していない。そのため、洪水時にはすでに集落は廃絶されていたと考えられる。

**特記遺構** 連房式鍛冶施設を持つ掘立柱・礎石建物(ST7、ST9、ST15)、周堤の一部が残存していた竪穴住居跡(SB8、SB54)、溝を伴う大規模な材木列?(SA4)、畝状遺構と下部の溝群(SD115～118、SD146～156ほか)

**特記遺物** 畿内系土師器、緑釉、朱墨硯、墨書土器「石丁」、青銅製飾板、石帯

### 4 屋代遺跡群②区集落跡 (図版17・18、59～66)

**立地** 自然堤防I群内、東西方向に延びる尾根状の微高地上。条里水田が造成された時期には完全に耕地化しており、竪穴住居の凹地も認められなかった。このことから、元来①区や③a区の集落よりも低い土地であった可能性がある。古墳時代以来の幹線水路近くに位置する。

**範囲** 西側は水路、東側は無遺構地帯によって境が確認できる。南北も無遺構地帯になるため、集落範

囲をほぼ全掘した。東西約62m、南北約36m。南北方向のSA1008を境に大きく東西の2グループに分かれる。

**遺構** 竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡9棟。井戸跡1基、いわゆる焼土坑2基、柵列13条、溝78条ほか  
**存続時期** 6期～8期前半

**成立とその要因** 古墳時代中期には水田域であったが、①区同様、幹線水路が蛇行、埋積、周囲への土砂堆積を繰り返す不安定な状態になり、水田が廃絶された時期が続いたと考えられる。6期に他の集落と同様、再開発のため新規に集落が成立したと考えられる。東側グループは掘立柱建物の3×2間(母屋?)、2×2間(倉庫?)と竪穴住居1棟の建物群で屋敷地を形成していたと見られる。これに対し、西側グループは掘立柱建物1棟とそれを囲む竪穴住居からなっており、この地点での開発の主体者は東側グループであった可能性が高い。

**展開と特徴** 集落成立時の関係を維持したまま、両グループの敷地内で建物の変遷する。中央の2軒は、東側グループに従属する竪穴住居の可能性はある。しかし、7期には、主体的な地位にあったと思われる東側グループが消滅し、西側グループの建物規模が大きくなる。

**消滅とその要因** 条里水田の開発に伴い移転を余儀なくされたと考えられる。8期前半に、西側グループで竪穴住居が1軒取り残された形になる。しかし、同時期には、新たな水路や畦畔、田面の造成によって集落域全体が整地され耕地化する。

**特記遺構** 掘立柱建物を伴い、溝で区画された用途不明の施設(SD2299からSD2302、ST1002)、用途不明の不整形土坑群(SK1067～SK1070)

**特記遺物** なし

## 5 屋代遺跡群③a区集落跡 (図版18・19、67～74)

**立地** 自然堤防I群内の微高地上。古墳時代中期の水田跡が確認された場所であり、その時期から一部残存してきたと考えられる幹線水路(集落成立時には管理の行き届かない流路?)の分岐点脇に位置する。IV層上面における水田(③a区西・北)との比高差は約0.2mほどである。

**範囲** 西と北は幹線水路SD3045～SD3057ほかによって生産域と区分されている。東側と南側の境については調査区外となり不明である。

**遺構** 竪穴建物跡16軒、掘立柱・礎石建物跡17棟。井戸跡、いわゆる焼土坑0基、柵列4条、溝81条ほか

**存続時期** 6期～8期前半

**成立とその要因** 6期に低地域へ進出した集落の一つである。掘立柱建物跡の時期がはっきりしないが、3×2間(母屋?)、2×1間や2×2間(倉庫群?)、竪穴住居が規則的に配置されていたと考えられる。水路の再整備に伴い、その分岐点をおさえる位置に進出した可能性が高い。

**継続と特徴** 7～8期前半にかけて4×3間以上(母屋?)、3×2間(側屋?)、2×1間や2×2間(倉庫?)の掘立柱建物、竪穴住居が規則的に配置されている。多くの建物はほぼ同じ位置で、8期前半に掘立柱建物から盛土を持つ礎石建物へ変化する。集落が最も発展する時期にあたる。

**消滅とその要因** 8期前半の内に集落は廃絶する。切り合い関係から、廃絶直前には礎石建物群はみられず、竪穴住居2～3軒と畠跡の可能性を持つ畝状遺構だけであったと考えられる。その竪穴住居跡もIII-2層の洪水砂が襲う時期以前にすでに廃絶している。

**特記遺構** 8期前半の礎石建物群(ST3001～ST3005)

**特記遺物** 墨書土器「侍」

## 6 屋代遺跡群③b区集落跡（図版19・20、75～78）

**立地** 自然堤防I群内。微高地と言えるほどの高所ではなかったと考えられ、8期前半には条里型の耕地に整地される。古墳時代以来の幹線水路に隣接して存在する。

**範囲** 水路を境に東・西の2グループに分離できる。西側は試掘トレンチによって確認を行ったが、攪乱によって不明であった。東側は調査区外へ続く。②区集落と同様のパターンを想定すると、東側グループは竪穴住居が掘立柱建物（ここでは調査区外か？）の周囲に展開するパターンに類似しており、東側グループのさらに東側に屋敷地を持つ遺構群が存在する可能性がある。同じパターンを想定すると、西側グループの西には、竪穴住居主体のグループが存在する可能性があり、東西のグループは別集落と考えた方がよいかも知れない。南側は、西側グループはSB3036が南限となる。東側グループはSD3307付近が南限と考えられる。北側は④区に遺構が続かないため、③区と④区の境付近が北限であろう。

**遺構** 竪穴建物跡7軒、掘立柱建物跡2棟。井戸跡1基、いわゆる焼土坑4？基、柵列6条、溝30条ほか

**存続時期** 6期～8期前半

**成立とその要因** 6期に他の集落と同様、再開発のため水路近くに進出したものと考えられる。切り合い関係から最も古いと考えられる東側グループSB3035は、条里型地割の方位ではなく水路に並行した形で建てられている。西側グループは掘立柱建物1（ST3201）、竪穴住居（SB3031）1、井戸（SK3262）1、その他を単位とした屋敷地として成立。方位が同時期の他集落とも近似して整っており、東側グループより若干遅れて成立した可能性がある。

**継続と特徴** 東側グループは、②区西側グループに類似し、竪穴住居数棟が弧状の範囲で建て替えられていく。西側グループでは7期の遺構が見つからないが、8期前半には再び掘立柱建物1（ST3202）、竪穴住居1（SB3030）の組み合わせが見られる。調査区外で集落は継続していたのであろう。6期のSB3036は長方形の大型竪穴建物と思われるが、鍛冶関係の遺構・遺物は伴わず、床面は安定せず凹凸状態である。床面を整える前段階で建築が止められた可能性がある。

**消滅とその要因** 東側グループは集落本体が調査区外にあると見られ、廃絶時期ははっきりとしない。西側グループでは8期前半まで存続する。最終的には条里水田の第3波の開発に伴うSD3262再掘削と、水田面造成によって移転をよぎなくされたと考えられる。

**特記遺構** 長大な竪穴建物（SB3036）

**特記遺物** 緑釉、墨書土器「八代」

## 7 屋代遺跡群④～⑥区集落跡（④b区南グループ）（図版21、79～81）

屋代遺跡群④～⑥区集落は、土坑などの小規模な遺構の分布も含めると、区分することができない。ただし、弥生時代以降、集落として成り立ってきた自然堤防の最も高い地帯と、古墳時代には水路や水田が存在し、古代6期前後になって住居などの建物が進出する④b区を同一に捉えることはできない。そのため、ここでは、④b区に新たに進出した建物グループを別に扱った。

**立地** 自然堤防I群内の低地、自然堤防の最も高い地帯の南に位置する。この地区のIV層上面で見ると、⑤区集落（IV層上面が削平されている）から0.4m以上低くなる。

**範囲** 西側と北側は旧水路の低地によって画される。南側と東側は調査区外になり不明である。

**遺構** 竪穴建物跡5軒、掘立柱建物跡1棟、柵列7条

**存続時期** 5期？～6期？

**成立とその要因** 古墳時代から続いていた水路が埋没した後、5期?に集落が進出する。出土土器からは5期にさかのぼる可能性もあるが、③b区からつながる水路の方向の変更にかかわるとすると、集落の成立は6期であろう。

**継続と特徴** 集落本体と考えられる東側が調査区外であるため、集落の特徴については不明である。

**消滅とその要因** 8期前半には条里水田となるため、それ以前には移転したと考えられる。

**特記遺構** なし

**特記遺物** なし

#### 8 屋代遺跡群④～⑥区集落 (④b区北グループ) (図版21、82～85)

**立地** 自然堤防I群の最高所の南端にあたる。

**範囲** 南側と西側は、古墳時代以来の流路や溝があり、低地へ変化する地点(SD4058)付近で遺構が終わる。北側は、伝統的な集落との境に住居空白地帯が存在する。東側は調査区外のため不明である。

**遺構** 竪穴建物跡15軒。掘立柱建物跡1棟

**存続時期** 6期～8期前半

**成立とその要因** 6期前後にはじまった集落再編によって、小グループを形成し低地際に進出した可能性がある。

**継続と特徴** 調査区外に多くの遺構が広がると考えられ、不明な点が多い。6～8期前半の間、竪穴住居は継続して建て替えられていく。

**消滅とその要因** 水田域からは若干離れるが、条里型地割の施工に伴う一連の動きに伴って移転した可能性がある。

**特記遺構** なし

**特記遺物** 朱墨硯、緑釉、瓦塔片

#### 9 屋代遺跡群④～⑥区集落 (中枢部) (図版21～23、86～121)

**立地** IV層上部が削平されており明確ではないが、自然堤防I群中、最も高い地帯に属すると考えられる。弥生時代以来、居住地として継承されている。北側は千曲川の旧河道によって形成された崖が迫っている。ただし、古代には本流は北へ移動し、小さな流路が残存していたにすぎない。IV層上面(本来の上面は削平)での比高差は、南側の④区水田面とは約0.3m、北側の旧河道内第1水田面(8期前半)とは約3m、第5水田面(1期)では約4.2mとなる。

**範囲** 南側は、若干標高が低くなり、古墳時代には水路や水田域であった④c～d区南寄りが境となる。ただし、5～6期以降南側に集落が拡大し、④b区(調査区東側)で2グループの集落が成立する。④d区側(調査区西側)では、当初SD4522～4525の低地が集落域の南限であった。その後、7～8期前半のいずれかの時期に大規模な水路SD4514が掘削され、南限はやや北にズレることとなる。この水路は条里型の地割に規制されている。また、この水路は④区で屈曲し⑤区中央を北流する。そのため、7～8期前半以降は集落が東西に分断されることとなる。

北側は、千曲川の旧河道へ落ちる崖が境となる。この崖斜面には古墳時代以降、継続的に湧水を利用した祭祀施設が設けられている。西・東は調査区外へ遺構が広がり境界は不明である。

**遺構** 竪穴建物跡262軒、掘立柱建物跡26棟、井戸数基?(8期後半以降との区別不可)、いわゆる焼土坑6基、柵列11条、溝43条、その他

**存続時期** 0期～8期前半

**成立とその要因** 古墳時代からの集落が継続する。

**継続と特徴** 1期後半に④c区～⑤b区南部を中心に掘立柱建物群が作られる。南と北に庇を持つ5×5間の掘立柱建物（ST4201）を中心に、3×2間、2×1などの建物が主軸方向を揃えて存在しており、一般集落とは様相を異にする。周囲には小鍛冶施設を有する住居SB5061（2期の可能性有）やガラス玉鑄型が出土した住居SB5134などの竪穴建物・住居が点在する。また、⑥区には祭祀関連施設が存在し、木簡が廃棄されはじめる時期でもある。こうした集落の構成は2期まで存続するが、大型の掘立柱建物は調査範囲では確認されていない。

3～4期には遺構数が急速に減少する。有力者層によって建てられた建物群は移転し、小規模な竪穴住居が点在する一般的な集落に変化する。

5～6期には竪穴住居を中心とした遺構が再び増加に転じ、集落域も南へ拡大する。

**消滅とその要因** 条里水田に関連する水路SD4514が掘削された後、遺構数は少なくなり、8期前半に廃絶する。III-2層の洪水砂を被った竪穴住居では、カマドが破壊されていたり、第一次埋没土が形成されていることから、洪水前にすでに住居が放棄された状況を示している。

**特記遺構** 1期後半の掘立柱建物群（ST4201ほか）、鍛冶炉を伴う竪穴建物（SD5061）、低地域最大の水路（SD4514）

**特記遺物** 畿内系土師器、刻画土器、緑釉、温硯、円面硯、朱墨硯、ガラス玉鑄型、布目瓦片、青銅製環、青銅刀吊手、卜骨

## 第4節 集落跡検出の遺構と遺物出土状況

ここでは、いったん各集落の枠を取り除き、各遺構を竪穴建物、掘立柱建物といった種類別にデータを示し、その表示方法と視点、各種別の特徴と傾向について記述を行う。遺構数が膨大であったため、個別データの表示は全て p.62~108 の表 6~12 に一括して掲載した。

### 1 掲載方法

**報告の手順** ここでは、特に集落域で検出された個別遺構について報告を行う。水田関連遺構 (SC・SL) や水辺の祭祀関連遺構については、各々の節にゆだねる。

掲載順は、集落を構成する遺構のうち主要な位置を占めるものを優先し、居住域以外にも認められる遺構を後出とした。よって、SB→ST→SK→SF→鍛冶関連遺構→SQ→SX→SA→SD 順になっている。また、図の掲載と記述 (表 6~12) は調査地区の南 (更埴条里遺跡 A 地区) から北 (屋代遺跡群⑥区) に向かって機械的に行った。遺物の掲載順 (遺構記号、番号順) と異なる点があるので注意していただきたい。

遺構の時期については、各遺構出土の土器様相で示し (第 8 章第 1 節)、遺構間の切り合い関係や層位などを加味した。

**図の選択と記述の表化** 紙数の関係上、個別図の掲載と詳細な記述は極一部の遺構に限っている。検出された全遺構は、1/500 地区別全体図、集落と祭祀域を中心とした 1/120 割付図に平面形を掲載した。また、断面図は 1/80 を地区別全体図の後か、あるいは割付図とともに掲載した。また、小規模な溝や土坑、柱痕、杭痕などについては、割付図に掲載した遺構平面図に、遺構底部の標高を読み値 (標高 356.00 m - ○○ cm の ○○ cm の部分) で表示するにとどまっている。地区別全体図と割付図は、遺跡の南から北へ向かって作成した。断面図は割付図に沿って掲載したため遺構記号・番号順にはなっていない。

個別図 (1/40~1/80、1/120) を作成した遺構は、各遺構の分類基準となる例。各地区を代表すると考えられる遺構。遺物の出土状況や堆積状況、あるいは廃絶の過程に特徴が認められた遺構。さらに、その中で記録類が充実している遺構を選択した。個別図の掲載順は、番号順になっている。

### 2 竪穴建物跡 (SB、SK の一部)

#### (1) 概要

**SB 表示の遺構** 長野県埋蔵文化財センターで SB と表示した遺構は、主に竪穴建物跡 (含む竪穴住居跡) を示している。掘立柱建物跡は ST となっているので注意していただきたい。ここでは、カマドや炉の設置された「いわゆる竪穴住居跡」を竪穴住居跡と呼称し、それ以外を含めた総称は竪穴建物跡とした。

更埴条里遺跡 K 地区から屋代遺跡群⑥区までの大きく 6 カ所で集落が発見され、485 軒の竪穴建物跡が検出された。6 カ所の集落はさらにいくつかの建物群に分離が可能である。

古代に属する竪穴建物跡は、大きく以下の 4 つに分類が可能である。

(I) カマドを持つ、一般的な「いわゆる竪穴住居」跡

(II) カマドを持たない小規模な竪穴建物跡 例>更埴条里遺跡 K 地区 SK9283

(III) カマドを持たない竪穴状の遺構で工房などの可能性を持つもの

例>屋代遺跡群③ b 区 SB3036 のような長大な例。屋代遺跡群①区 SB74・76 などのように、二段掘り込みの可能性を持つ例が存在している。

(IV) 掘立柱建物に伴う可能性のある竪穴状遺構

例> 屋代遺跡群①区 ST8に伴うと考えられる SB78・79。これらにはカマドに類似した施設が設置されている。

**掲載の方法** 基本的には、第4節1の掲載方法に則っている。特にSBに関しては、遺物出土状況図(1/80)やカマド図(1/40)、掘方平面図などの個別図を掲載した。

各竪穴建物・住居のデータは表6に、記号化して掲載した。これは、紙数の関係とともに、現地での記載方法や記録類の質・量が担当者ごとに大きく異なっていたためである。それらのデータを、下記の視点に沿って整理し直す上で、記号化せざるを得ない状況が生じた。以下、竪穴建物・住居の特徴を表への表示方法と併せて述べてゆく。また、表6の読みとりのために付図2を作成した。併用していただきたい。

(2) 竪穴建物の構築・使用に関して

A. 竪穴建物の構造

① 竪穴の平面プラン

平面形、主軸方位、規模、カマドの位置などを示した。

平面形は竪穴部分の形のみを示した(図9)。後世の攪乱によって、竪穴上部の形状や棚状施設、あるいは竪穴外の施設、周堤などに不明な点が多いためである。また、データにバラツキが生じるのを避ける意味もある。よって、カマド燃焼部が大きく竪穴プラン外に突出した例(屋代遺跡群④区 SB4210など)も方形とした。こうした例は、カマドの位置2の欄でその平面形の特徴を示した。

**竪穴外施設** 竪穴周囲の状況を示唆する例としては、周堤の一部が残存していた屋代遺跡群①区 SB8・SB54(8期前半)(図版125・128)が存在する。両竪穴住居跡では竪穴壁上部から緩やかに周堤へ移行しており、竪穴外施設の空間は見つかっていない。また、前述のカマド燃焼部が竪穴プラン外へ突出する例や、主柱穴の一方のみが竪穴壁に接する例(屋代遺跡群⑤区 SB6035)(図139)などは、竪穴プラン外に施設の存在していたことを示唆している。しかし、今回の調査では一部で棚状施設が確認されたのみにとどまっている。

**平面形の特徴** 平面形は、方形を基本とし長方形が加わる。この時期には不整形を呈する例は少ない。ただし、5期以降、台形などの不整形を呈する例が少数現れるようになる(図9グラフ)。

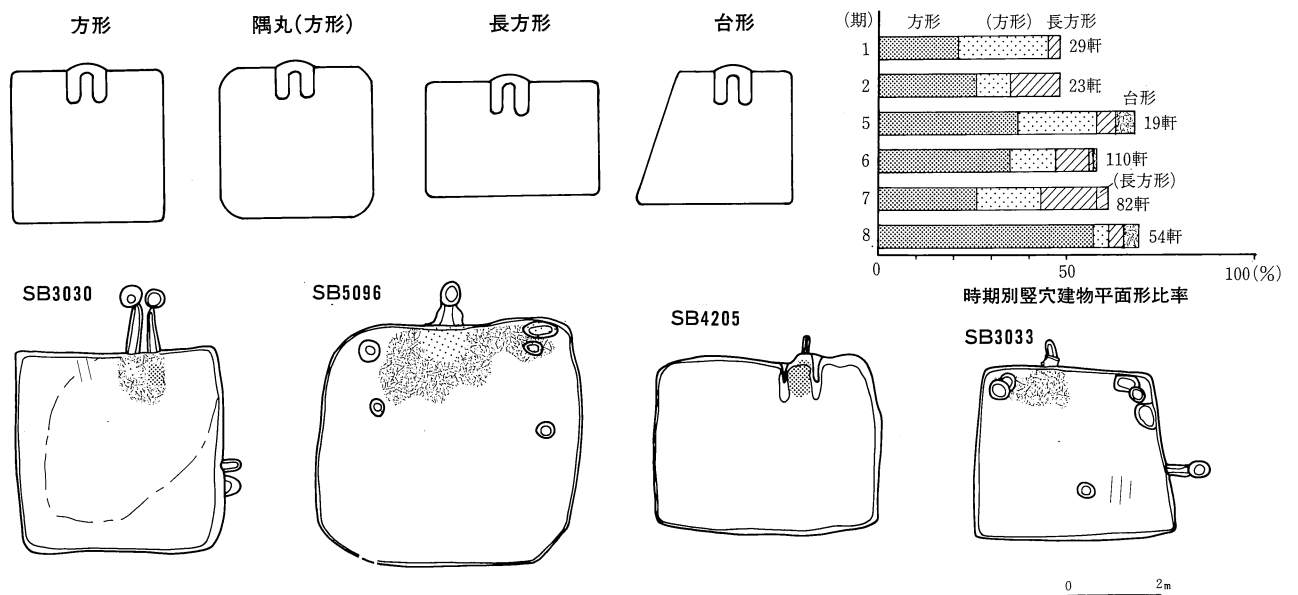


図9 竪穴建物の平面形分類とその消長

## ② 主軸方位

主軸方位は、カマドの設置された壁と対面する壁を結んだ線を主軸として計測した。カマドが不明な例については、長軸方向で計測している（図10）。

**カマドの位置** 主軸方向でまず気づくのは、南側にカマドを持つ例が極めて少ない点である。南寄りにカマドを配置した例は、伝統的な集落に存在する傾向が強く、屋代遺跡群④～⑥区にだけ散見される。西側にカマドを持つ例も④～⑥区のほか、屋代遺跡群①区で見られる程度で、大半の例は、北かあるいは東にカマドを設置している。

**集落別・時期別の特徴** 竪穴建物の主軸方位には、集落や時期の差によってある程度の傾向が認められる。

まず、伝統的な集落である屋代遺跡群④～⑥区とそれ以外の新設集落では違いが見られる。④～⑥区では、1・2期の主軸方位である北からやや東に振れた方位とそれに直交する方位が主体であり、8期前半までその傾向は続くこととなる。同じ6期を比較してもこの集落だけが他と方位を異にしていることがわかる。また、この地区では、部分的ではあるが、1期後半～2期に掘立柱建物群とともに整然とした方位に竪穴建物が規制されている。

5・6期に自然堤防Ⅰ群内の微高地へ進出して行く集落では、いずれも北からやや西に振れた主軸方位を主にしており、新設集落間での共通性が見られる。しかし、初期の段階では、更埴条里K地区SB9011（5期）（図版14）や屋代遺跡群③b区SB3035（図版20）のように、大きく方位を異にする例が見られる。両者は、竪穴住居1軒が単独で他にさきかけて新開地に進出したためと考えられる。後者は先行して存在した溝に規制されたと考えられる。

7・8期には、条里型地割がしっかりと施工された自然堤防南部の地区で、条里型地割に則した主軸方位を示す場合が多い。更埴条里遺跡K地区から屋代遺跡群②区までである。②区から北の③a区、③b区の集落付近では、自然堤防内の起伏によって条里型地割に水路方向が合致しなくなっており、これらの集落の主軸方位は主に隣接する水路の流路方向に左右される傾向を示している。

以上、竪穴建物の主軸方位についてその特徴を集落と時期別に概観した。主軸方位は、各集落の変遷を見る上で大きな要素となるため、第8章で再度、詳細に検討する。

## ③ 規模

規模は竪穴の遺構検出面での長軸と単軸の長さで示した、平面プラン同様竪穴外の範囲は計測から除いてある。面積は平面図の下端線をプランメーターによって計測した。この時、カマドの張り出し範囲は除外した（図11）。

**床面積の縮小化傾向** 床面積の計測可能だった全資料のデータを載せたものが図11-Aである。ここでは、平均的な床面積が時期を追って縮小化傾向にあることがわかる。更埴条里遺跡、屋代遺跡群の集落は、(Ⅰ)古墳時代から継続する屋代遺跡群④～⑥区で1・2期に最初のピークを迎える。(Ⅱ)3・4期には遺構数が減少する時期となり、(Ⅲ)5～8期前半に再び遺構数が増加し、集落も広範囲に分散する。この大きく3時期で見ると、(Ⅰ)の時期では44㎡を誇るSB6025を筆頭に、最小床面積のSB5030（6.7㎡）まで、全体的に床面積が広がっている。これに対し、(Ⅲ)の時期には、一部の大型の住居を除いて約17㎡以下に集中するようになる。

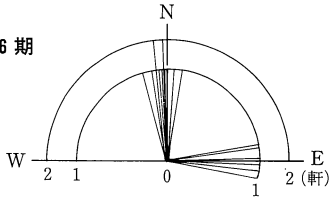
**床面積によるグルーピング** 全体的な縮小化傾向の中で、各集落、各時期ごとではいくつかのグルーピングが可能である（図11-B～H）。グルーピングの目安として、方形と仮定した場合の床一辺の長さを尺（1尺=29.5cm前後と仮定）で示した線を表示した。

屋代遺跡群④～⑥区集落で見ると、1・2期では、13㎡（12尺×12尺）以下の1軒、15～20㎡（約15尺×15尺以下）のグループ、25～30㎡（約18尺×18尺以下）のグループ、それ以上のグループに分けることが可能で

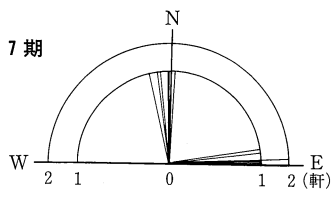


更埴条里遺跡 K地区

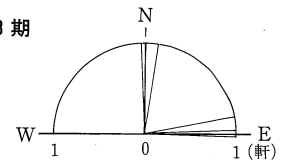
5・6期



7期

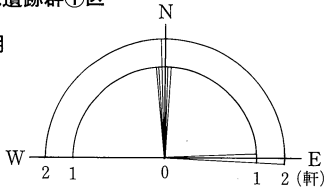


8期

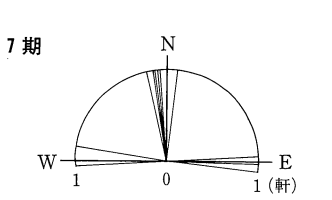


屋代遺跡群①区

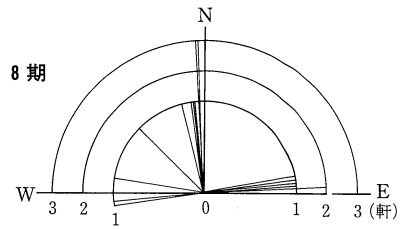
6期



7期

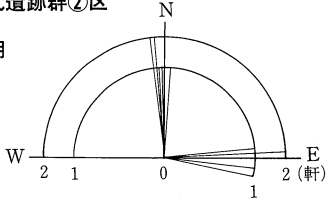


8期

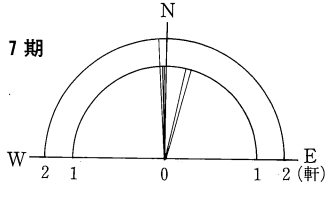


屋代遺跡群②区

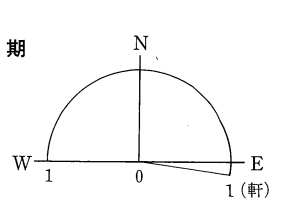
6期



7期

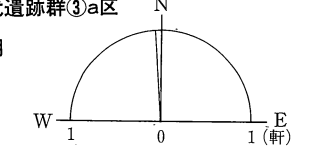


8期

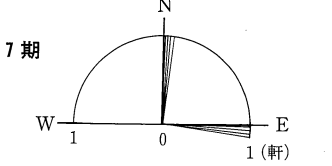


屋代遺跡群③a区

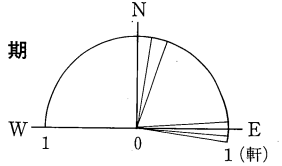
6期



7期

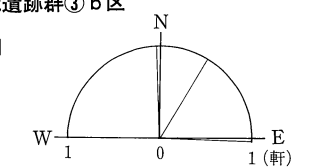


8期

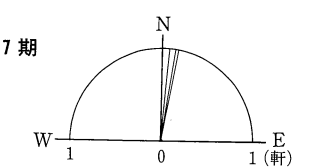


屋代遺跡群③b区

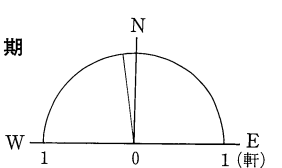
6期



7期

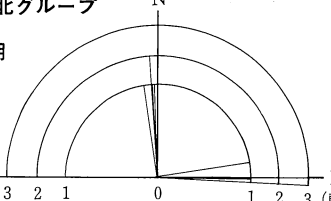


8期

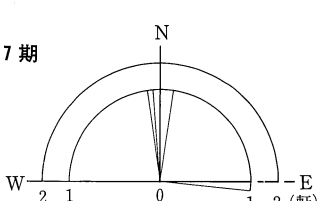


屋代遺跡群④b区  
南・北グループ

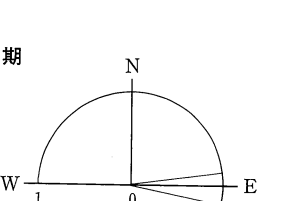
6期



7期

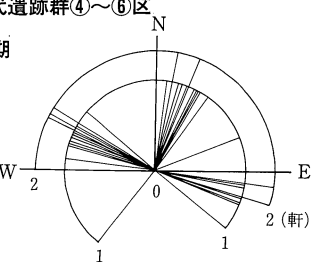


8期

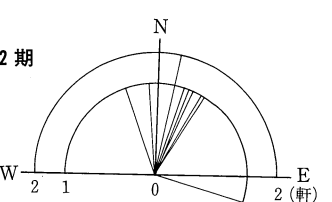


屋代遺跡群④～⑥区

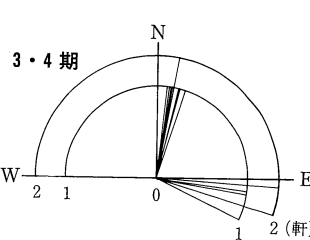
1期



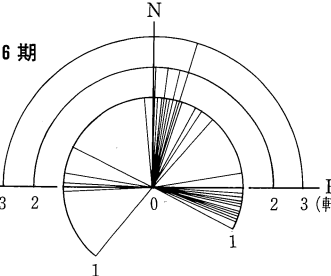
2期



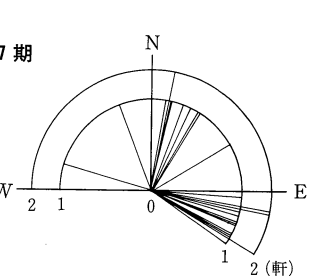
3・4期



5・6期



7期



8期

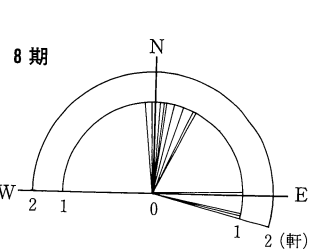


図10 時期別竪穴建物の主軸方位

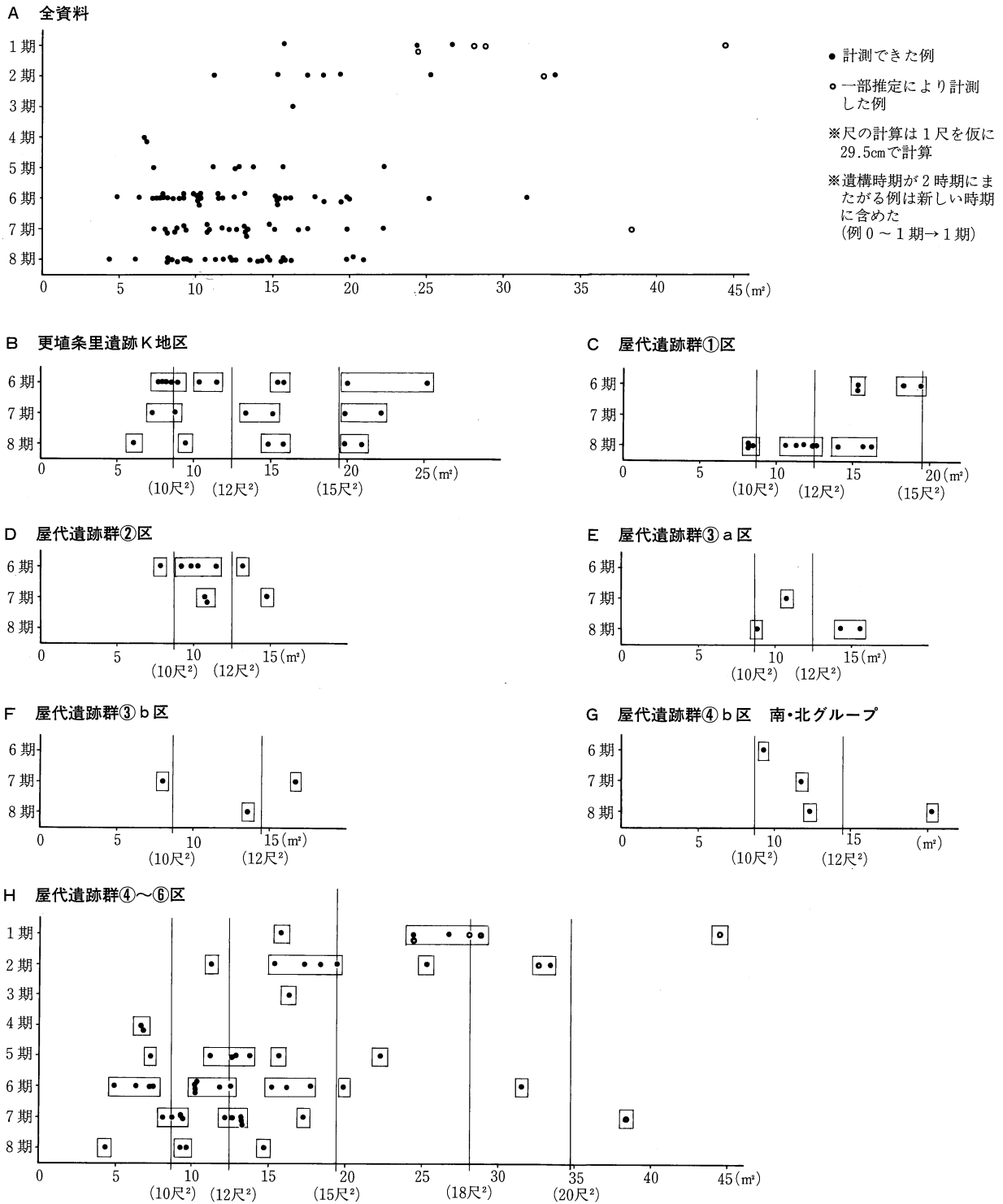


図11 竪穴建物の床面積

ある。また、他の時期においても集落毎にグルーピングの境が異なるものの、超小型、小型、中型、大型、超大型の住居群に分類が可能である。こうした規模の異なる竪穴建物が各集落を構成していたことが理解できる。

#### ④ 竪穴の掘削・床面

次に、竪穴建物の構築に伴う施設などについて見ていく。

竪穴建物のほとんどには掘方が認められ、貼床も存在していた。

床下の調査は調査期間の制約から、断面図と床下遺構の平面図のみを作成し、掘方そのものの平面図は

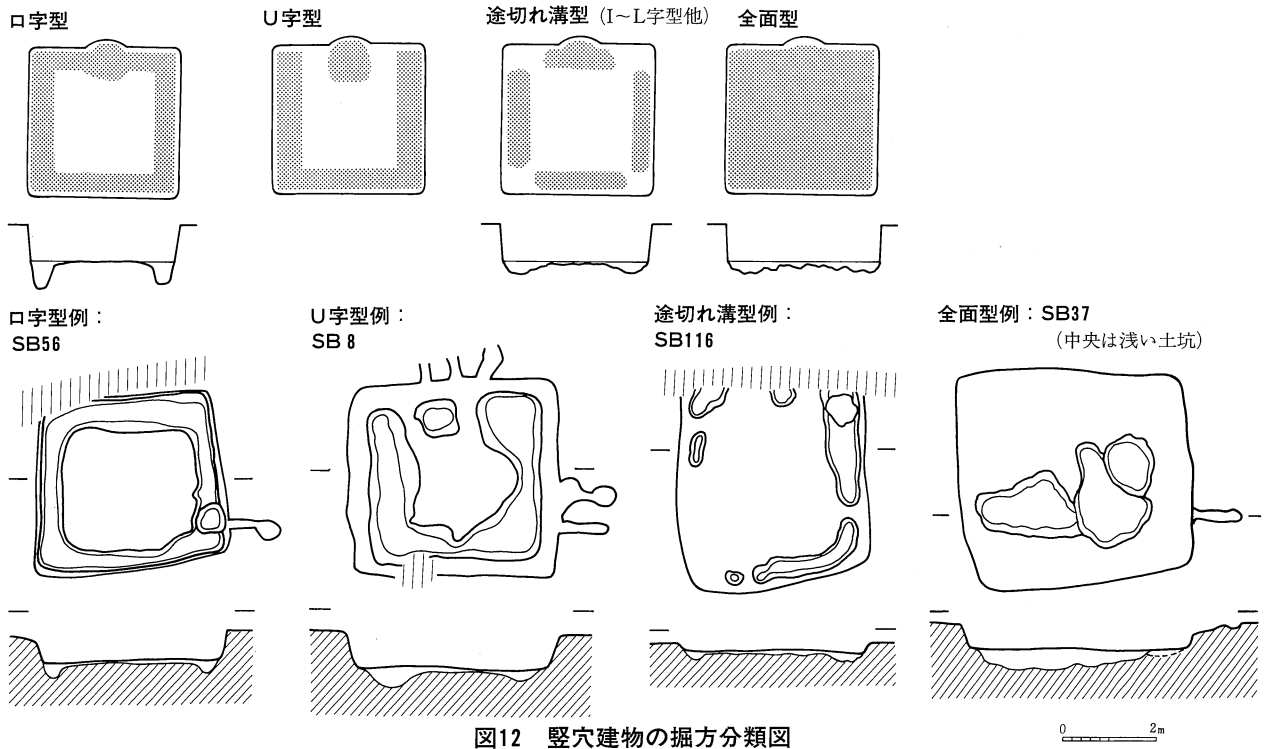


図12 竪穴建物の掘方分類図

アランダムに選択した一部の竪穴についてのみ作成した。代表的な掘方の形態は次の4類型に分類が可能である(図12)。

- I. 「口」字型 カマド部を含む、竪穴部全周の壁際を溝状に深く掘り込む例
- II. 「U」字型 カマド部を別に掘削し、他の壁際を溝状に深く掘り込む例
- III. 「I」「L」字型ほか 壁際の一部のみを溝状に深く掘り込む例
- IV. 全面型 竪穴部全体を緩やかに掘り込む例

このほか、I～III型のうち掘り込みが非常に浅い場合が存在している。

「U」字型を示す例などは、竪穴住居構築に際しカマドの位置があらかじめ設定されていたことを示している。

#### ⑤ 壁・周堤・周溝・壁溝・棚状施設

**竪穴建物の断面形** 表における周堤、棚状施設、周堤の外側を巡る周溝の有無は、主に断面形で示した。断面形は、周堤と掘方を含めない状態(平面形と同様)でIからVIIに区分した(図13)。

- I. 床面から垂直に立ち上がった壁が、全周の上部で緩やかに傾斜を持つ例
- II. 壁上部での緩やかな傾斜が一部でのみ見られる例
- III. 棚状の施設が全周で認められる例
- IV. 棚状の施設が一部で認められる例
- V. 壁が垂直に立ち上がる例
- VI. 壁が緩やかに立ち上がる例
- VII. 壁・床の明確な区別がつかず、凹凸の激しい例

**周堤・周溝** さらに、周堤の有無、周溝(周堤外側の溝)の有無を0～9の数字で示した。数字の示す内容は、0=ない、1=一部残存、2=ほぼ完存、8=記録なし、9=切られて不明、である。

表では、例えば棚状遺構が一部にあり(IV)、周堤がほぼ全周にあり(2)、周溝が一部ある(1)例は、IV-21と表示した。壁溝についてはその他の欄に有無を明記した。また、壁柱穴については、柱の項で記した。

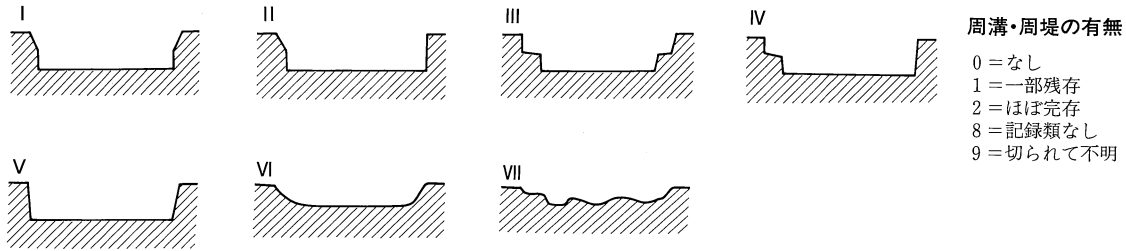


図13 竪穴建物の断面形分類図

**断面形の特徴** 多くの竪穴建物では、検出段階で周堤、周溝部分が消失している。そのため、V-99とした例が大半を占める。比較的残存状況が良好であった屋代遺跡群①区では、周堤が確認された例（SB8、SB54）が見られる。これらの住居では、壁の上部が外側に開く I-19となっている。竪穴外施設も存在しておらず、この部分が垂木尻であった可能性がある。故意に解体したのか、自然に崩落したかは明確にし得なかった。

また、周溝は古代0～8期前半には見つからなかった。

**柱の設置** 竪穴建物（・住居）の上部構造を支える施設については、柱を中心に表示した。柱の欄には柱穴残存数を記した。（ ）内は主柱穴の数である。次に、礎盤石の残存している柱穴の数、壁柱穴の数、あるいは礎石（東床石含む）の数を示した。また、主柱穴数の前に「台」と表示した例は、4本主柱穴の配置が台形（不整形）に配置されていたもので、表示のないものは方形、あるいは長方形配置をとっている（図14）。

集落密集地での柱穴数の把握は困難であったが、全体的な傾向としては、掘方を持つ4本主柱穴から柱穴の欠如への変化が見られる。時期的には6期前後で4本主柱穴の竪穴建物が激減する。そして、一部で礎石（東床石）の竪穴建物が出現する。8期前半には4本主柱穴を持つ竪穴建物は見られなくなる。また、不規則な4本主柱穴の配置をとる例は、各時期に若干数見られるが、増加するのは6期以降であり、4本主柱穴の消滅と期を一にしている。

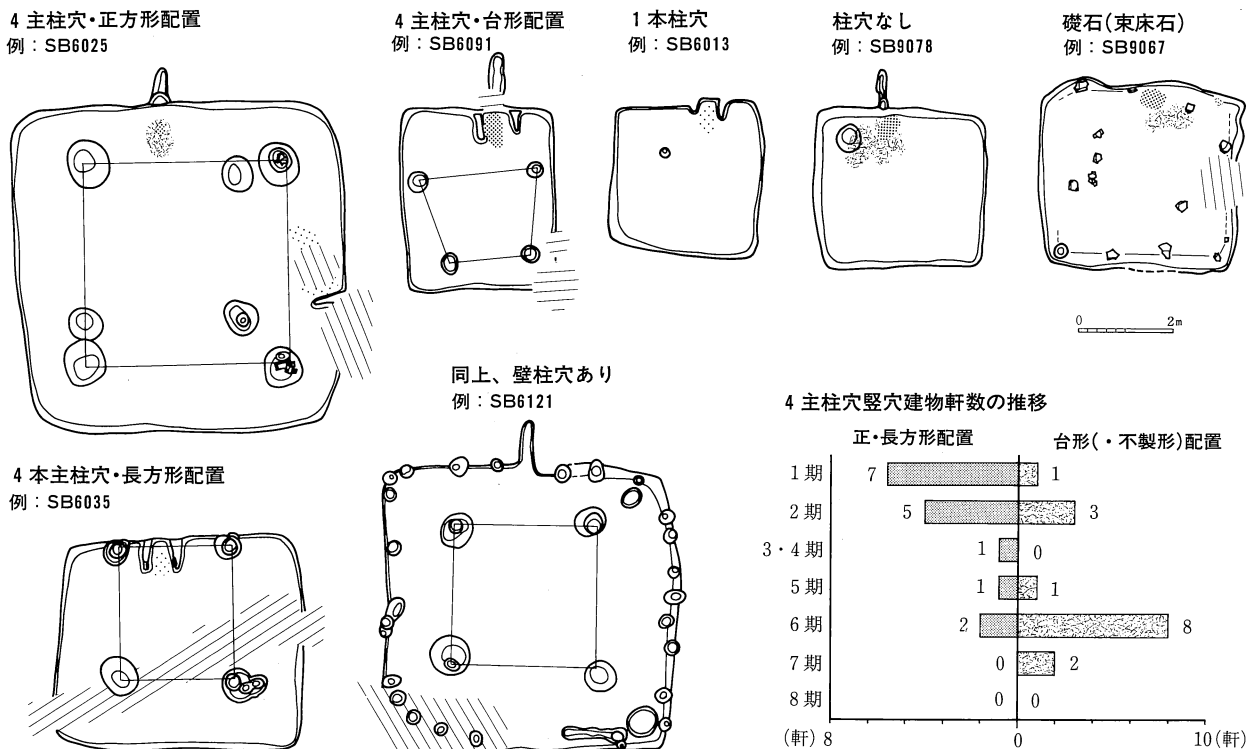


図14 竪穴建物の柱配置と4主柱穴竪穴建物軒数の推移

**柱材・屋根材** この時期の焼失・焼却住居はわずかであり、柱材については不明である。炭化材と多量の焼土が検出された屋代遺跡群⑤b区SB5004（1期後半）（図版139）では、壁・屋根材？が検出されている。検出状況は、直径数cmの丸木炭化材の上にカヤ？状の炭化物が縦横に重ねられ、その上に焼土ブロックが数cm重なった状況を示していた。炭化材についてはケンポナシ属、カヤ状の炭化物はススキ属であった（第6章第4節）。

## B. 竪穴住居・建物の付属施設

### ① カマドの設置

**カマドの位置** カマドの位置は、カマドの部分を避けた掘方の例や地山利用の袖の存在から、竪穴掘削時には決められていたと考えられる。また、竪穴住居の改築に際し、カマドも作り直したと見られる例が多い（屋代遺跡群①区SB8ほか）。これらには、カマド番号を別に付した。最も新しいカマドをK1とした。また、K2以下は新旧関係が不明の場合が大半であり、任意に番号を付した。

カマドの位置は、設置壁の方位（北壁→N）、設置壁での位置を竪穴コーナーからの比率（カマド位置1欄）（図14-A）で示した。例えば、北壁ほぼ中央やや東よりに火床が存在した場合は、N、45：55などと表示した。また、燃烧部の位置を竪穴部壁との関係で示した（カマド位置2）。Iは壁より内側にある例、IIはほぼ壁ライン上にある例、IIIは燃烧部が竪穴壁よりも外へでる例（図15-C）である。III類に関しては、棚状遺構や竪穴外施設との関係で平面プランとも関わってくる。また、平面プランとの関係上、竪穴壁から煙出口までの距離も表示した。

**カマド位置の偏り** 図15-Bではカマドが壁中央から右・左へどの程度偏って設置されたかを示した。50：50を中心にし、35：65までを便宜的な目安としてある。全体的な傾向としては、中央よりやや右にズレる場合が多く見られる。また、大半のカマドは35：65の範囲内に収まっており、古代（0）1～8期前半では、壁中央付近にカマドが設置されていたことがわかる。その中でも、6期以降偏在するカマドがやや増加傾向を見せ、8期後半以降の流れを先取りしている。

▲印は、1軒の竪穴住居に複数のカマドが存在していた例である。屋代遺跡群③区SB3006（図版132）を除いて同時存在の可能性は少なく、建て替えに伴ってカマドの位置も移動したと考えられる。こうした例には、古いカマドとの重複を避ける場合が多く、住居中央よりもコーナー寄りに偏在する傾向が認められる。

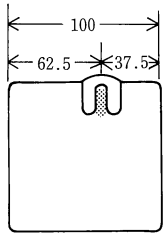
**竪穴壁外に突出するカマド** 図15-Dはカマド位置2のI～IIIの割合を時期別に示したものである。カマド燃烧部は基本的には、壁の内側に存在（I類）し、それにやや壁ライン上にかかるII類が少数加わる。II類はI類の変形としての理解が可能である。しかし、III類とした壁外に突出する例は6期に少数出現し7期には続かない点、竪穴外を大きく掘り込み、煙道がない例が多く、棚状施設が付く点など、構築方法も他の竪穴住居と大きく異なっている。建築方法そのものが系統を異にする可能性がある。

**カマド構築材** カマドは完存する例がなかったため、構造については袖の芯材についてのみ掲載し、他の構造に関する項目は残存の有無とした。

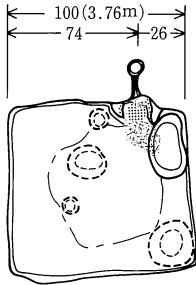
カマドの構築材は、時期とともに石を使う例が増加する。特に袖の一部分のみに礫を利用していたものから、袖の芯を石組みにする例へ変化する傾向が窺える。石材は主に、遺跡東方の生萱で産出する閃緑岩を用いている。これに、わずかながら千曲川の対岸の山地で産出する凝灰岩を使用した例がある。後者の場合、全て直方体に整形されている。

屋代遺跡群⑤区SB5022（図版141）のように土器を利用した例もわずかに見られる。また、⑤区SB6002（図版147）などのように袖表面に土器片を被せた例も存在する。

A. カマド位置1  
模式図



例: SB5053

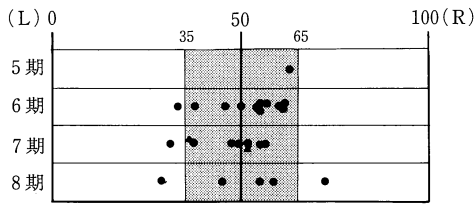


0 2m

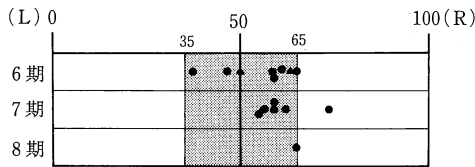
- は1軒に1カマドの例
- ▲は複数のカマドがある例
- は壁中央設置カマドの便宜的な目安とした35:65の範囲
- ※遺構時期が2時期に含まれた(例6~7期は7期)

B. カマド位置1 集落・時期別傾向

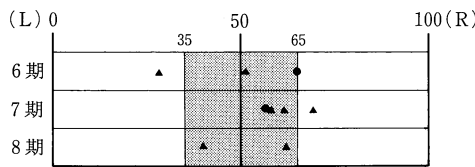
更埴条里遺跡K地区



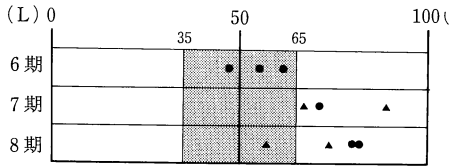
屋代遺跡群②区



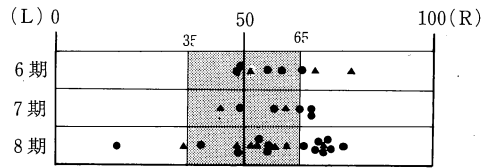
屋代遺跡群③b区



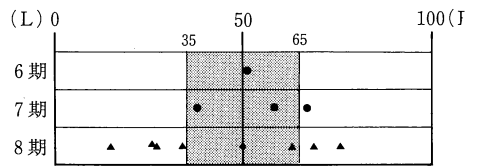
屋代遺跡群④b 南・北グループ



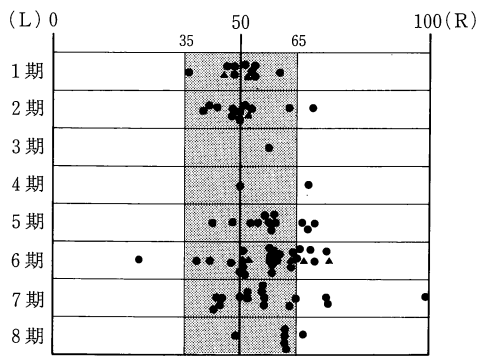
屋代遺跡群①区



屋代遺跡群③a区



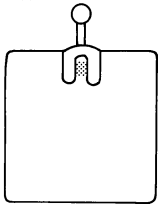
屋代遺跡群④~⑥区



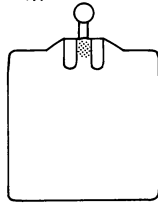
C. カマド位置2

模式図

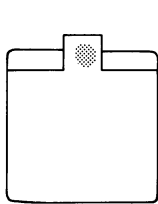
I類



II類

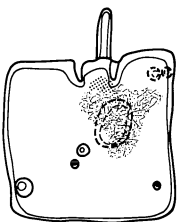


III類

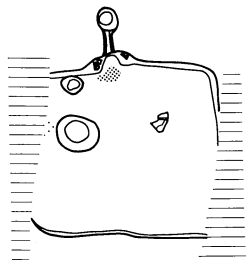


例

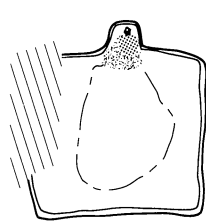
SB50



SB4030

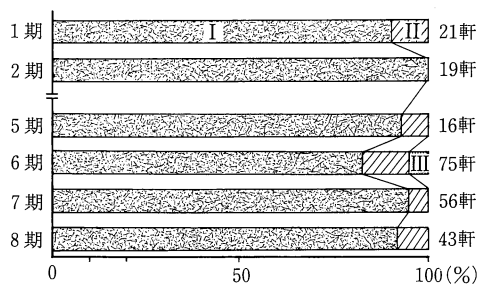


SB4210



0 2m

D. カマド位置2 時期別傾向(全集落)



- ※3・4期は類別可能な住居が少ないため除外した
- ※遺構時期が2時期にまたがる例は新しい時期に含めた(例 0~1期は1期)

図15 竪穴建物(住居)のカマド位置と時期別傾向

**カマドの作り替え** 一軒の竪穴住居にあって、カマドはたびたび作り直される。位置をずらす場合のほか、同一位置において作り替えた場合が存在する。火床下の火床、あるいは、火床下や袖下に焼土・炭化物集中層が存在する場合がある。後者は、カマドの湿気抜きとの見解もあるが、ここでは、カマドの作り替えの場合も視野に入れておきたい。残念ながら記録類の不備から全竪穴住居跡に関して統計処理することはできなかった。

また、一軒の竪穴住居で数カ所の煙道跡が見つかる場合が認められる。このことは、カマドが頻繁に作り替えられていたことを示している。

## ② 貯蔵穴

カマドの脇から竪穴コーナーにかけて存在するピットや凹地を、貯蔵穴あるいは貯蔵施設の可能性を持つものとして捉えた。分類は以下の通りである（図16）。I. 長方形あるいは方形である程度の深さを有するもの。II. 円形あるいは不整形の深い穴、III. 甕などを据える程度の凹地、IV. 浅い掘り込み内に円形の深い穴が存在する例。

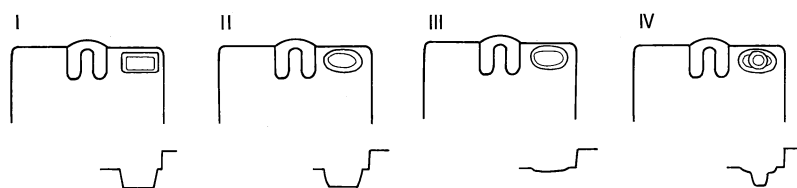


図16 カマド脇ピット（貯蔵穴？）分類図

るもの。II. 円形あるいは不整形の深い穴、III. 甕などを据える程度の凹地、IV. 浅い掘り込み内に円形の深い穴が存在する例。

屋代遺跡群①区 SB47（図版127）

では、III類の凹地から北壁に密着し

て薄い炭化材が残存していた。

貯蔵穴には住居廃絶に際し、多くの遺物が廃棄される場合が多い。

## ③ その他の付属施設

床面、あるいは床下で検出される例には、焼土・灰・炭化物などが充填されたピット、鍛冶炉などが存在する。表では検出数のみを表示した。鍛冶炉については、第4節6項の鍛冶関連遺構で扱う。

### (3) 竪穴建物の廃絶と遺物の出土状況

#### A. カマドの廃絶と遺物出土状況

##### ① カマドの解体から廃棄

**記載事項** カマドは竪穴住居にとって重要な情報源である。しかし、記録類にバラツキが多いため、カマドを構成する要素である煙出口、煙道、燃烧部天井、左袖、右袖、支脚、火床面の残存状況を0～9の数字に簡略化して表示した。

次に上記のいずれかが欠損していた例（全資料）について、人為的な廃棄行為の有無を検証するため、I. 燃烧部に焼土ブロックなどが混在した（自然埋没とは考えにくい）土や土器片・礫片が多量に見られるか、II. 火床上や燃烧部、カマド埋め戻し土上面に完形の杯類や特殊な遺物の出土状況が認められるか、III. カマド周辺に再利用可能なカマド構築材（特に天井・袖石）が放置してあるか、の3項目について0～9の分類数字で表示した。煙出口にもI.と同様な状況が見られるが、残存率が低いため別記した。

**カマド廃棄のパターン** カマド各部位の残存率を図17に示した。天井部は全てのカマドで破壊されていた。

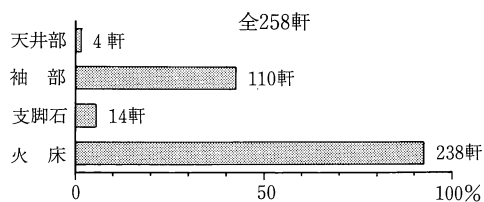


図17 カマド各部位の残存率（一部でも残っていた例）

残存していた4例中3例は燃烧部から煙道部にかかる位置の天井石が1枚残っていたにすぎない。袖部も完存していた例はない。これに対し、火床はほとんどのカマドで残存しており、支脚の抜き取りに伴う攪乱だけが認められる例が多い。支脚石が残存していた例は14軒（5.4%）にとどまっている。

残存率から推定されるカマド解体の手順は、天井部破壊→袖（一部）破壊→支脚抜取りを基本としていたと考えられる。支脚石の抜取りに至らなかったカマドについても、天井と袖の破壊は行われている。これらの部材は、転用のために持ち去られた場合も想定されるが、カマド内や周辺に散乱したままの例も多く、再利用よりも破壊行為に意味があったと推定される。

**遺物出土状況** 次に、支脚抜き取り後のカマド廃棄の手順を復元するため、遺物の出土状況や、焼土ブロックなどを混在した埋め戻し土のあり方を見ておく。ここでは、統計的な処理に手がつけられなかったため、代表的な事例の紹介にとどめる。

カマドを中心とした遺物の出土状況を見ると、I. カマド火床上に土器片などが出土する例、II. 燃焼部の埋め戻し土中に土器片や礫が見られる例、III. 焚口部やカマド周辺に土器や礫がまとまって出土する例、などが認められる。

I では特に火床面に敷き詰められたような例は認められなかった。屋代遺跡群②区 SB120（図版131）などのように、少量の土器片が出土するケースが多い。

また、完形品はごくまれで、甕や杯の小破片が主体となっている。

II では屋代遺跡群③a区 SB3006（図版132）などのように多量の土器や礫が廃棄された例が認められる。煮沸具以外の土器片も多数認められ、意図的にカマドおよびカマド周辺に廃棄された状況を示している。また、完形品をほとんど含まないケースが多い。礫は、焼成を受けたものが多く、破壊したカマド構築材の一部をそのまま廃棄したと思われる。

IIIにはIIの延長線上でとらえることが可能な屋代遺跡群⑤b区 SB5064（図版143）のように、カマド燃焼部からカマド脇にかけて多量の遺物が廃棄される例が認められる。一方、カマド燃焼部内にはほとんど遺物がなく、焚き口部やカマド脇に遺物が散在する①区 SB53例（図版127）なども認められる。

今回の調査では、火床面に土器片を敷き詰めたり、燃焼部内から完形の杯が出土するといった、明らかに特定の意図を連想させるような出土状況はなかった。しかし、支脚抜き取り後のカマド廃棄の手順にはいくつかのパターンが認められた。1つには多量の土器片や礫でカマドを埋め尽くす事例。もう1つは、遺物やブロック土などの明確な埋め戻しを示す指標の見あたらない例である。後者では、カマド周辺に、カマド構築材と思われる焼礫や土器などが集中するケースがあり、カマド廃棄行為の中心が破壊（支脚の抜き取り）にあり、埋め戻し（封鎖）は二次的な問題であったことを示している。

煙出口部からは、屋代遺跡群①区 SB41例（図版126）のように完形の杯類が伏せた状態で出土した事例が認められ注目される。また、①区 SB8（図版125）などでは、煙出口や煙道の破壊に伴い、礫や土器片の廃棄が認められた。

## ② 貯蔵穴の廃棄

カマドのような廃棄のための特別な行為（支脚抜き取り）を示す状況は認められない。ただし、カマド構築材、あるいは多量の土器を貯蔵穴内、あるいはその上部に廃棄する例は圧倒的に多い。さらに、カマド燃焼部内への廃棄物に比べ、完形、あるいは完形に近い土器が出土する例が多く認められる。例えば、屋代遺跡群①区 SB49（図版127）、SB72（図版130）、⑤区 SB5053（図版142）などである。

## B. 竪穴建物の廃絶と遺物出土状況

### ① 埋土の特徴

**埋土の類型化** 多くの資料に対する説明を簡略化するため、埋土の類型化を行った（図18）。その際の視点は、以下の2つに絞った。1つは、埋め戻しの可能性を持つブロック土混在層の有無とその層位（図18-A）。もう1つは、建物の片づけに伴って生じたり、あるいは凹地化した時点で他の場所から廃棄された炭化物・焼土・灰集中の有無とその層位（図18-B）についてである。



A. ブロック土堆積の有無と分類



B. 床面直上～埋土中の炭化物・焼土・灰層の分類

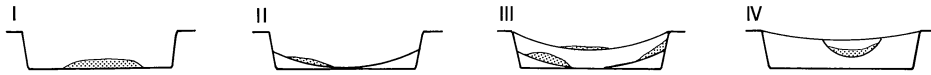


図18 竪穴建物跡の埋土分類図

② 埋め戻しの可能性

ブロック土の混入については、記述のないものも多く全資料を統計的に処理することはできなかった。また、ブロック土の全てを埋め戻しとすることもできない。全体的な傾向としては、II類型とした壁際に少量のブロック土が認められる例、III類型とした埋土下層までブロック土が認められる例が多い。前者については故意であるか、あるいは壁の崩落などの原因によるかは明確ではない。

**遺構密集地区の状況** III・IV類型については、遺構の密集する地区では、埋め戻しの可能性が高かったといえよう。

屋代遺跡群③ a区では、竪穴住居と掘立柱・礎石建物が重複しており、埋め戻しの可能性が高い。ST3016直下のSB3017（図版71）、あるいはST3002溝下のSB3014（図版134）などは埋土の上層まで酸化鉄分の沈着したブロック土が混入している。

**竪穴住居の埋め戻しと条里畦畔** 屋代遺跡群①区 SB19（図版225）は、ブロック土（III?類型）が認められ、直上層には条里水田の東西大畦畔（SC11）が乗っている。住居の埋め戻しが畦畔構築のためであったかについては、厳密な確証は得られない。ただし、6期のSB19の埋め戻し以後、7期以降の建物がSC11以南に建てられることはなくなっている。このことは、住居廃絶と畦畔の造成が近接した時期であったことを示していよう。

**その他の事例** ⑤ b区 SB5072（図版100、101）は、IV類型の例である。埋土上層まで2つのブロック土混入層が交互に見られ、埋め戻された状況を示している。切り合った竪穴住居 SB5021とは時期差があり、SB5021構築のために埋め戻されたとは考えられない。上層に重複する遺構はなく、互層にまでして埋め戻した理由は不明である。

③ 洪水砂の堆積と竪穴建物跡

8期前半の竪穴建物跡の多くには、埋土に洪水砂（III-2層）の堆積が認められる。埋め戻し層の厚さにも左右されるが、一般的には古い段階の竪穴ほど洪水砂の堆積が薄く、新しいものほど厚い傾向が窺える。

**屋代遺跡群①区事例** 屋代遺跡群①区では、8期前半の土器様相を示す竪穴住居で切り合い関係が認められ、しかも埋土中の洪水砂の状況が把握できる例としてSB52→SB56→SB8の3段階区分が認められる。ただし、SB8は基部の完存しない煙道が多く、同一位置での建て替えの可能性はある（第8章5節）。

SB8に切られるSB52（図版128）は、竪穴の大半が埋まり凹みがほとんどなくなった時点でIII-2層を被っている。SB56はSB52との重複関係はないが、SB8の周堤の一部が埋土上層に被る住居である（図版125）。この場合、埋め戻し後からIII-2層の被覆までには若干時間があり、その凹地は炭化物などの廃棄場（SX1）に利用されていた。III-2層の層厚は約20cmほどを測りSB52に比べ厚くなっている。

SB8は最も新しい住居で、住居廃絶直後にIII-2層の堆積を受けており、床面直上層を除く埋土の大半がIII-2層である。III-2層の層厚は約80cmに達する。

また、SB50は上記の遺構との重複関係がなく、埋め戻し層の層厚も明確でないため問題はあるが、III-2層の堆積量はSB52とSB56の中間にあたっている。

このように、8期前半においては、埋土中におけるIII-2層の層厚によって遺構の新旧関係を知る手がかりとすることが可能となっている（第8章第5節）。

④ 炭化物・焼土・灰などの集中

炭化物などがある程度のまとまりを持って廃棄された層位は、図18-Bに示したパターンが認められる。

I. 床面直上に見られる例では、カマド付近から離れた住居中央付近に見られる例が多い。SB5150（図版100・102）は、この典型的な例である。住居中央の床面上に焼土や炭化物、炭化材が集中している。切られた部分が多く不明な点もあるが、壁付近に垂木や壁材の炭化材がないことから焼失住居とは考えられない。竪穴住居の廃絶に際し、廃材などを焼却した可能性が考えられよう。

II. ブロック土の直上に分布する場合も多く認められる。この場合は、住居廃絶に伴う埋め戻し完了直後に廃材などを焼却した可能性と、竪穴建物廃絶後の凹地に他から廃棄された可能性が考えられる。

III. 埋土中に層状に認められる場合。これらの多くは、竪穴建物廃絶後の凹地を廃棄場として利用した例である。屋代遺跡群①区では、SB56上層などに見られる炭化物層と遺物集中をSX（図版125）で表示してある。①区SB74例は（図版164）は、隣接する鍛冶施設からの廃棄が考えられる。また、③b区SB3030（図版136）や⑤a区SB6085（図版150）では、何層にもわたって薄い炭化物層が形成されている。

IV. 廃絶した竪穴建物の凹地をさらに掘り窪めて廃棄する例。この場合、廃棄物などによって埋まってきた凹地を若干掘り窪め、そこへ廃棄した可能性がある。土坑状の明確な掘り込みになる場合はほとんどなく、若干窪む程度である。屋代遺跡群①区SB55（図版47・48）2・7層の形成などが典型例となる。

⑤ 埋土中の遺物出土状況

竪穴建物内で遺物が廃棄された位置を平面的にI～Vに分類した（図19）。また層位的な位置関係を、各々の場所での底面直上出土から埋土中（a～d）に区分した。

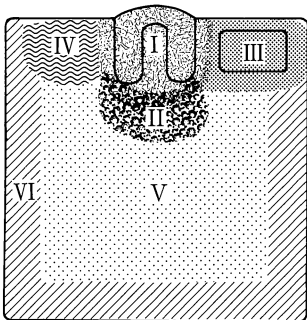
カマドの廃絶に関する遺物出土状況についてはすでに触れてあるので、ここでは、それ以外の位置での遺物出土状況について触れる。

**住居中央床直遺物** Vとした中央付近について見ると、前項で指摘した床面上の炭化物・焼土層に伴って住居中央付近に遺物が集中する例が存在する。その他は、細片が散乱する程度である。

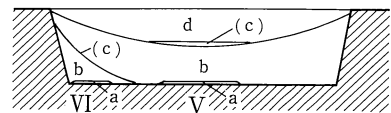
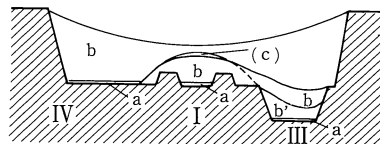
**第一次埋没土と壁際の遺物** IV地区（壁際）ではまれに、屋代遺跡群①区SB51（図版127）、③b区SB3029（図版136）のように、完形品が複数重なって出土する例が存在する。前者は、内黒土器器杯が壁際の第一次埋没土上を滑り落ち、一部が床面に達した状況を示している。また、後者は床面上に須恵器杯などが散乱した状況を示している。

また、④区SB4220（図版138）や⑤区SB5031（図版141）では、薦編石と考えられる楕円礫の集中が床面上に見られる。このほかは、床面上に細片が散乱する例。壁際の第一次埋没土（ブロック土のII類型など）

A 平面分類



B 垂直・層位分類



- I. カマド燃焼部～袖部
- II. カマド焚口部
- III. カマド脇土坑内・および周辺
- IV. カマド脇（土坑なし）
- V. 竪穴中央部
- VI. 壁際
- VII. その他（棚・周境上...）

- a. 床面直上
- b. 初期埋土中（主として埋め戻し土）
- c. bが埋め戻し土だった場合の層直上
- d. 後期埋土中（自然埋没、凹地への廃棄物層）

図19 竪穴建物跡の遺物出土位置分類図

の斜面に廃棄された例が大半を占める。

**埋め戻し土と凹地の遺物** ブロック土中からは細片が少量出土するにとどまっている。ブロック土のⅢ類型上に炭化物や焼土とともに遺物が出土する例が認められる。また、多くの竪穴建物跡の凹地は廃棄場として利用されており、埋土上層に多くの遺物を含む例が認められる。

#### ⑥ 時期設定標準資料の出土状況

ここでは、本報告書の土器編年の基準となった資料（付図8～11参照）の内、竪穴住居跡の土器出土状況について取り上げておく。その中でも出土量が多く各期の代表的な資料である5期（SB6116、SB6104）、6期（SB9073、SB3016）、7期（SB9084、SB72、SB51）、8期前半（SB8、SB9043）を取り上げて記述を行う。

**5期 屋代遺跡群⑤a区 SB6116**（図版150）の土器は、すべてカマド燃焼部内とカマド脇の床面上から出土したもので、カマド廃絶時の一括廃棄と考えられる。

SB6104は遺物出土状況図・写真を掲載していないが、カマドの両脇床面上に焼礫とともに集中出土している。これも、カマド廃絶時の一括廃棄と見られる。

**6期 更埴条里遺跡 K 地区 SB9073**（図版123）では、大きく3群に分離できる。Ⅰ、カマド廃絶時に伴う12・20・23・24・26、Ⅱ、竪穴の埋め戻しが行われ、その最終段階かそれ以降に形成された炭化物堆積層前後から出土した2・3・5・5・9・14～17・22、Ⅲ、凹地に廃棄された焼土ブロックなどの堆積層の最上層から出土した19である。Ⅱが竪穴廃絶の一連の作業における最終段階であれば、ⅠとⅡの廃棄時はひじょうに近接する可能性がある。

屋代遺跡群③a区 SB3016（図版135）の土器は、大きく4群に分かれる。Ⅰ、カマド右脇の床面に散乱していた3・5・6・11・19・22・23、Ⅱ、カマド燃焼部内の埋土中から出土した12ほか、Ⅲ、竪穴の埋め戻し土（ブロック土）の上面前後で出土した14、Ⅳ、カマド左脇の張り出し施設から出土した9・16・18である。Ⅰ～Ⅲの一部までは、竪穴廃絶に関わる一連の作業に伴う可能性があり、廃棄時は近接する。Ⅳについては、SB3016と重複関係にある古い遺構の可能性もある。

**7期 更埴条里遺跡 K 地区 SB9084**（図版124）では、埋土下層に散在した状況を示している。

屋代遺跡群①区 SB72（図版130）では、カマドの廃絶時にカマド石とともに貯蔵穴に廃棄された一群1～3・5・6と床面に密着して出土した1点（4）があり、いずれも住居廃絶時の資料と考えられる。

屋代遺跡群①区 SB51（図版127）では、カマドの破壊・廃絶時に燃焼部から周辺部にかけて廃棄された2・4・12・14、竪穴埋没（埋め戻し）前の東壁際から出土した3・5・8がある。いずれも、住居廃絶時から直後の短期間に廃棄された可能性が高い。

**8期 屋代遺跡群①区 SB8**（図版125・126）では、埋土の大半が洪水砂（Ⅲ-2層）であり、遺物は床面から床面直上層に限定される。

### 3 掘立柱建物跡、礎石建物跡（ST）

#### (1) 概要

**ST表示の遺構** 掘立柱建物跡、礎石建物跡と認定できた柱穴列、石列をSTで表示している。本来建物に伴ったと推定される柱穴であっても、単独、あるいは2列以上の並行関係が認められない場合は、SK・SA・Pで表示している。また、各建物に伴う柱穴はP、礎石はSとして番号を付した。例えばST4201-P1、ST5-S1のように記した。

**概観** 各集落の各々の時期には、掘立柱建物、あるいは礎石建物のいずれかが、母屋、倉庫、作業施設などとして存在していたと考えられる。ただし、時期を限定できる例は少ない。各建物の時期絞り込みについては、諸属性の分析を踏まえた後、第8章第5節で試みることにする。以下、概略を示す。

1期後半、屋代遺跡群④c～⑤b区では、南北2面に庇が付く5×5間の建物(ST4201)を中心に、掘立柱建物群が主軸を揃えて集中的に建設されており、官衙との関連が注目される。

5～6期、自然堤防上の各地に集落が進出するのに伴い、掘立柱建物も各集落に建てられる。これらの掘立柱建物は、各集落間で棟数、規模、配置などに格差があり、各集落の経済力などを知る手がかりとなる。また、更埴条里遺跡K地区や屋代遺跡群①区、③a区では8期前半に至って掘立柱建物が礎石建物に変化する。

**掲載方法** 基本的にSBに準じる。記録類の不十分な柱穴については、底部のレベル読み値のみを割付図内に表示した。個別図1/80は後述する分類から代表的な例を選択した。屋代遺跡群③a区集落の礎石建物群は他地区に比べ残存状況が良好であったことを考慮して、全て個別図を掲載した。また、鍛冶に関係する建物は鍛冶関係遺構として一部を別掲載した。個別の建物に関する記載は表7にまとめた。以下、掘立柱建物跡と礎石建物跡の特徴を表の記載方法とともに述べていく。

## (2) 掘立柱建物、礎石建物の構築・使用に関して

### A. 掘立柱建物、礎石建物の構造

① **長軸方位** 方位は、桁行(長軸)方向で表示した(図20)。

**集落・時期ごとの特徴** 時期的には、0～2期の掘立柱建物が存在する伝統的な集落(屋代遺跡群④～⑥区)と6期以降に掘立柱・礎石建物が建てられる新開集落に分けられる。

屋代遺跡群④～⑥区集落では、1期後半にN23°Eの方位を示すST4201を中心に、ほぼ同一の方位を示す建物が建てられる。この他の、6期以降に掘立柱建物が建ちはじめる集落では、竪穴建物の場合と同様、北からやや西に振れた方位を示している。

8期前半には、これも竪穴建物と同様、条里型地割がきちりとしている更埴条里遺跡K地区や、屋代遺跡群①区では、地割に則った方位を示す建物が多い。これに対し、礎石建物が5棟検出された③a区集落では、水路の方向に規制されて北からやや東へ振れる方位を示す。

### ② 建物の平面プラン

**柱間数と面積** これらは建物の用途や経済的、階層的な要因で違いが生じると推定される。建物の用途の推定と規模などについては、柱間数と面積、庇の有無を目安とした(図21)。柱の配置は、I. 側柱とII. 総柱に大きく分かれる。ただし、総柱建物の数は少ない。

建物の面積と平面形を加味して、I～III群に3分類が可能となる。

**I群** 1×1間、2×2間の方形を呈し、比較的小規模な建物、それに2×1間の小規模な建物を加えた。

2×2間の建物には総柱となる例があり、倉庫の可能性が高い(図版151)。また、2×1間の建物は屋代遺跡群③a区集落で見られるように、2×2間の建物とともに配置されている(図版20)。II群と比べ焼土跡(炉?)や鍛冶炉などの施設もないため、これらの建物も倉庫と見ることができよう。

**II群** 3×2間の建物を中心とする。

今回検出された建物は全て側柱であった。

床面に設置された鍛冶施設(更埴条里遺跡K地区ST918)(図版162)や炉の可能性を持つ焼土跡(屋代遺跡群③a区ST3001ほか)(図版154～156)の存在、遺物の残存状況から居住や作業場として利用されていたと考えられる。鍛冶関係の作業場としては、梁間は不明であるが、桁行4～5間となる建物が①区に存在する(ST7、ST9、ST15)(図版163)。

**III群** 規模が突出して大きい建物をIII群とした。

1期後半の屋代遺跡群④c区ST4201は南北2面の庇を含めて5×5間(74.6㎡)の規模を有する(図版

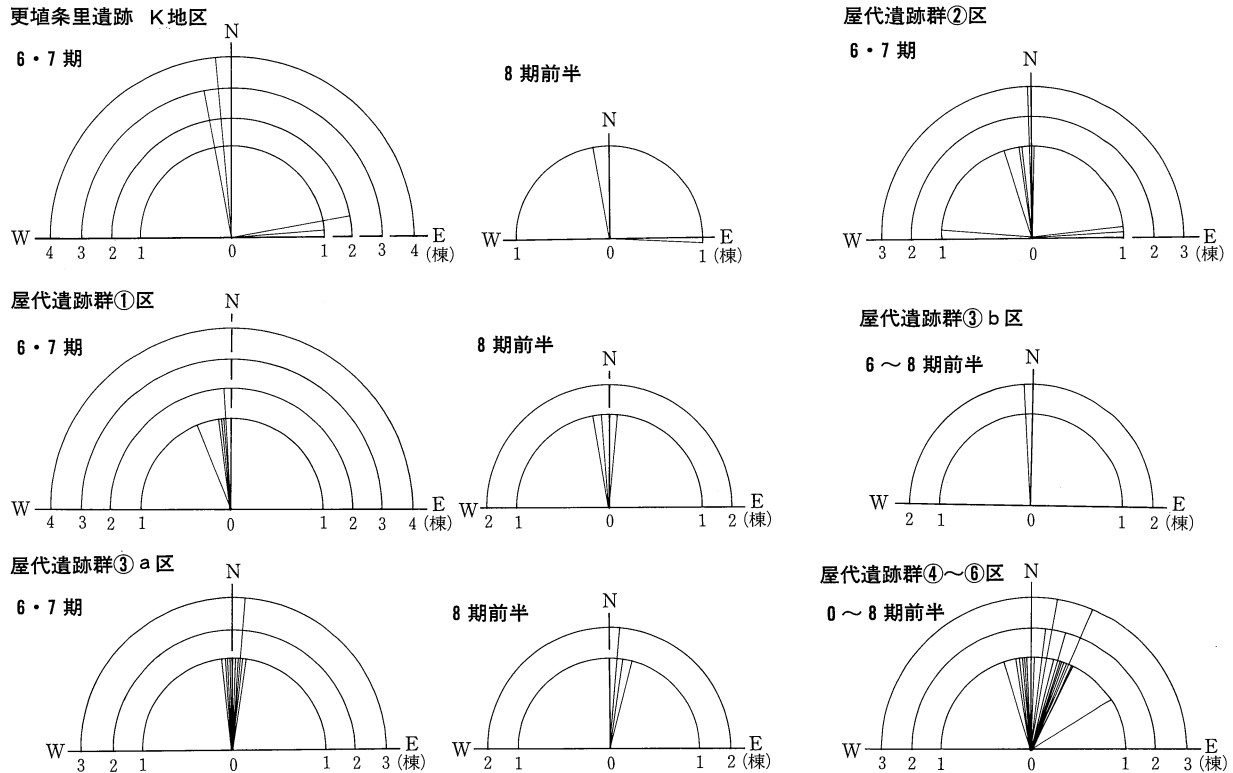


図20 掘立柱建物・礎石建物の主軸方位

159)。また、8期前半の③a区 ST3002は礎石の残存が悪く、推定の域を出ないが、少なくとも4×4間(59.5m<sup>2</sup>)以上の規模となる(図版155)。いずれも、周囲の建物を含めた建物群の中心的な存在と考えられる。

### ③ 溝と柵の設置

建物の外周りについてみて行く。遺構としては柵と溝が確認されている。

**柵** 柵とした例は、径30cmほどの小ピットが建物の周囲を巡るもので、屋代遺跡群②区 ST1001(図版63)など、検出例はわずかである。

**溝** 建物を巡る溝は、屋代遺跡群①区、②区、③a区、③b区の集落で多く見られる。

溝の数は、建物の1面のみから4面を巡る例まで認められる。

通常、溝は4面に見られる。1面の例としては屋代遺跡群③b区 ST3201(図版77)があげられる。この場合、標高が低く、水路に近い一面にのみ溝が掘削されている。

溝の位置は軒先に近く、雨落ち溝と見られる例が大半を占める。③a区 ST3001では、南側の溝のみが建物から距離を置き、前庭部を含めた区画溝の様相を持つ(図版154)。

**地下水位と溝** 屋代遺跡群①区、②区、③a区では、通路の位置を除く4面に溝が巡る例が多い。特に8期前半の盛土を有する建物(③a区)には必ず付属しており、水田開発に伴う地下水位上昇との関係が考えられる。標高の低い②区では、比較的早い段階から溝を巡らす例が存在する(ST1004ほか)。

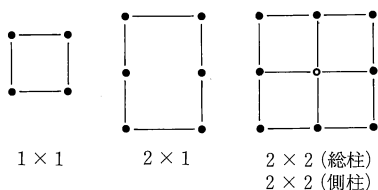
②区に比べて水田面との比高差が認められる更埴条里遺跡K地区や屋代遺跡群④c～⑤区では一貫して溝は掘削されていない。また、屋代遺跡群①区では、いったん溝の巡る建物が出現するが、8期前半には溝のあるものとなないものが混在するようになる。

### ④ 盛土

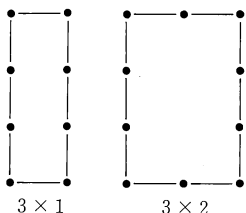
建物の基礎工事関係では、盛土を持つ例が認められる。

A. 掘立柱・礎石建物柱間模式図

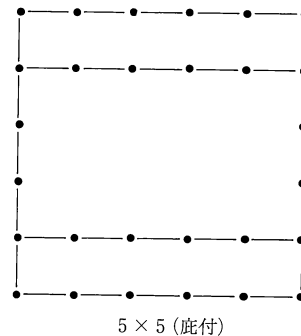
I 群



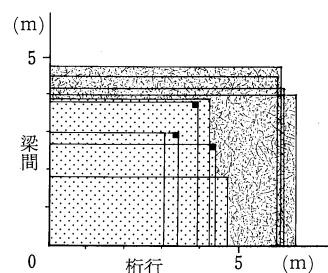
II 群



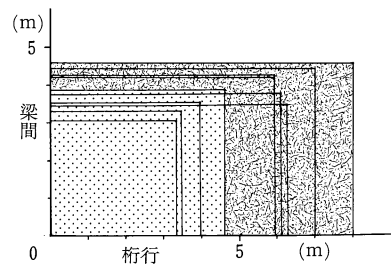
III 群



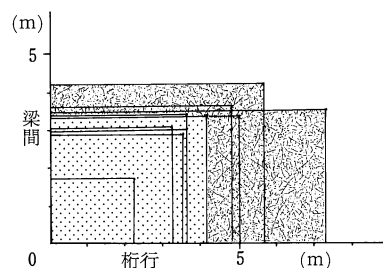
B. 掘立柱・礎石建物の面積(集落別)  
更埴条里遺跡K地区



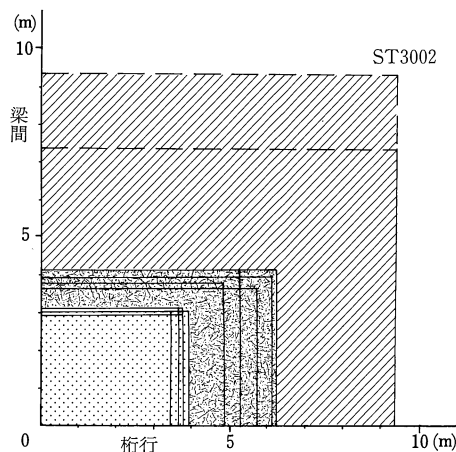
屋代遺跡群①区



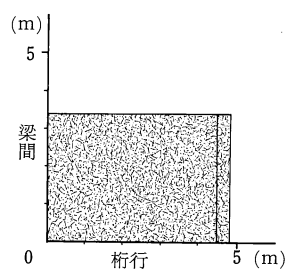
屋代遺跡群②



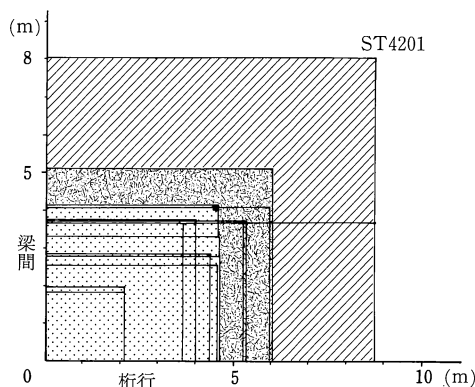
屋代遺跡群③ a 区



屋代遺跡群③ b 区



屋代遺跡群④～⑥区



- I 群
- II 群
- ▨ III 群
- 総柱

図21 掘立柱建物・礎石建物の柱間数と面積

**盛土の有無と目的** 明確に盛土層が認められた例は、③ a 区の礎石建物群のみである。同じ礎石建物であっても更埴条里遺跡 K 地区 ST918 や屋代遺跡群①区の礎石建物跡には認められなかった。このことは、礎石建物の必須条件としては盛土、あるいは基盤の整備が含まれていなかったと考えられる。③ a 区の盛土についても、版築などの工法は認められず、軟弱地盤の改良と言うよりは、単に建物設置面と水田面・水路溝底との比高差を確保するためであった可能性が高い。建物周囲の溝と同一目的であったと考えられる。

また、掘立柱建物については、上面が礎石建物や畝状遺構によって壊されていた場合がほとんどで、ST3019を除き盛土の有無は確認できなかった。

**盛土の掘削坑** ③ a 区 ST3004 と ST3005 の北側には、盛土用の土を掘り上げたためと思われる落ち込み (図版69・158) が見つまっている。これらの凹地はその堆積状況から、建物がつくられた後も窪んだ状態で

放置されていたと考えられる。

#### ⑤ 柱の設置方法

**掘立・礎石** 今回の調査では、掘立柱建物跡と礎石建物跡の両者が見つかった。この違いは、建物規模が同じであっても、技術的には大きな革新であったと推定される。

柱の設置方法は、I. 掘方を持たない掘立柱、II. 掘方を持つ掘立柱、III. 掘方を持ち礎盤を持つ例、IV. 礎石立ち、に分類される。

量的にはII類が圧倒的に多く、礎盤を持つIII類は1期後半の屋代遺跡群④区 ST4201など、比較的古い段階の大型建物に見られる。この方法は、前後の時期の大型竪穴住居（SB4217など）にも見られ、古墳時代の伝統（SB5190など）を引くと考えられる。

礎石立ちのIV類は、8期前半に一斉に出現する。屋代遺跡群③a区では、先行する掘立柱建物と同位置に、ほぼ同規模の礎石建物が建て替えられている（図156・157）。建築技術に一大革新が訪れた段階といえよう。

**礎石の製作** 上屋の残存していない礎石建物の建築技術革新を知る手がかりは、礎石製作の技法に見ることが出来る（図版151）。

使用している石材は、屋代遺跡群①区 ST5-S1を除いて、全て閃緑岩である（第1章第3節参照）。縄文時代の敷石住居を含め、古墳時代の竪穴住居の礎板石やカマド石まで、ほとんどが閃緑岩であり、石材供給地に大きな変化はなかったと考えられる。ただし、加工技術は大きな変化を見せている。

古墳時代や古代0～2期の竪穴住居、あるいはST4201（1期後半）に設置されていた礎盤石は、閃緑岩を粗割しただけの状態（PL25-左下）で、比較的平たく、掘方に入る大きさであれば多少の凹凸は問題にしないといった技術で良しとしていた。これに対し、礎石建物に設置された石は、石の切り出し時点で、面取りがなされている。特に地面に据える側の面は、平らに仕上げられている。側面は個々に差があるものの、面取りがなされており、同一の建物内では大きさを整えるようにしている。柱の設置される側は凸部を残し、柱と石がきっちりと噛み合うように加工が加えられている。また、ST4-S4では、柱との接触面に摩耗痕が残されていた。

「石丁」 こうした加工技術は、それ以前の石材調達とは大きく異なっている。屋代遺跡群①区では、土器に「石丁」と記された例があり、石材加工にたずさわる専門職人がいた可能性を示しており、注目される。

#### ⑥ 上屋構造

**ST3001の壁・屋根材** 焼失した可能性を持つ屋代遺跡群③a区 ST3001から、多少の推定が可能である（図版155）。この建物跡では、礎石を結ぶ壁部分に大量の焼土ブロックと炭化物片が残存していた。また、建物外、主に北から東にかけては大量の焼土、炭化物片が広がっていた。この分布範囲内では建物北側でカヤ状の炭化物が見つかった（PL14）。いずれも資料が脆弱なため樹種同定などは行えなかった。

これらの状況から木材と土を利用した壁、カヤ状の植物と土を利用した屋根が推定される。柱材と思われる炭化材は見つかっていない。また、建物内には炭化物や焼土が少なくなっている。要因は不明である。

**サワラ材の木屑** 屋代遺跡群⑥区の流路中からは、多量のサワラ材を加工した木屑が見つかっており、分析の結果、建築材の屑と推定されている（第8章第4節2）。時期的には、1期～2期に多い。この時期は、④区に掘立柱建物群が集中的に建設される時期に重なっている。1期後半に属する一般の竪穴住居（SB5004）ではケンポナシ属を使用しており、これらのサワラ材は、掘立柱建物に使用されていた可能性が高い。

#### ⑦ 盛土内、床（下）面検出遺構と遺物

盛土内を含む床面下からは、建物の建築に伴う祭祀遺物や施設などの存在が考えられた。

**盛土内出土遺物** 屋代遺跡群③a区 ST3003 (図版157) の盛土内からは、勾玉が1点出土している。また、ST3002からも位置は不明であるが、勾玉が出土している。

**盛土下遺構** 屋代遺跡群③a区 ST3001、ST3003では、盛土の下面から焼土、炭化物が集中した場所が見つかった。下層の掘立柱建物跡に伴う可能性も含め、用途は不明である。

**床(下)面検出土坑** 屋代遺跡群④区 ST4201 (1期後半) の範囲内で検出された SK4848からは、須恵器大甕の破片が集中して出土した。

いずれの遺物や施設も、建物に直接伴うものであるのか、単に下層の遺構・遺物であるのかは判然としない。

## B. 掘立柱建物・礎石建物の使用状況

### ① 床面の状況と遺物

掘立柱建物のほとんどは新しい遺構の攪乱によって床面を捉えることができていない。礎石建物も、その多くが畠跡と思われる畝状遺構によって、床面を壊されている。しかし、III-2層に覆われる時期に比較的近いこともあって、床面の施設が一部残存しており、使用状況を窺い知ることができる。

**居住スペースとしての礎石建物跡** ST3002では、北東隅に床面が硬化した範囲が確認され焼土跡が隣接して見つかっている (図版156)。また、3×2間の礎石建物でも、同様な焼土跡が床面で検出されている。ST3001とST3003では床面ほぼ中央で検出されている (図版155・157)。これらの焼土跡は建物内に置かれたカマド下焼土の可能性が考えられる。

**建物の用途による遺物出土状況** これらの床面には、土器片などの遺物も多く分布する傾向が見られた。このことから、こうした建物は、居住用に利用されていたと考えられる。

これに対し、倉庫の可能性を指摘した ST3004、ST3005 (図版158・159) には、床面上に焼土跡などが見つかっておらず、遺物も少ない傾向が認められる。

居住施設と倉庫との間に見られる遺物出土状況の違いは、屋代遺跡群①区でも認められた。ST4は( )×2間の側柱建物であり、この建物跡の範囲内には多量の遺物は散乱していた。これに対し、2×( )間の総柱建物である ST5の範囲にはほとんど遺物が出土していない。

**鍛冶関連施設を伴う建物跡** 使用状況が明確な例に鍛冶関連施設を伴う建物が存在する。これらについては本節6項で詳述する。

### (3) 掘立柱建物、礎石建物の建て替えと廃絶

#### A. 掘立柱建物、礎石建物の廃絶

掘立柱・礎石建物跡では、その構造上遺物が残存しにくく、廃絶後の状況がわかりにくくなっている。そのため、竪穴住居に見られるような廃絶に伴う行為を表すような遺物出土状況は把握できない。ここでは、解体、建て替えについてのみ記す。

##### ① 建て替えなど

**建物の解体** 柱穴に見られる柱の抜き取り痕については、STごとに確認の有無や図化にバラツキがあるため、正確な傾向をつかむことができなかった。ただし、各地区ともに頻繁に建て替えや土地利用の変更が認められるため、柱が残ったままの状況は考えづらい。ここでは、屋代遺跡群③a区を例にあげておく。

**屋代遺跡群③a区 ST3011の変遷** ST3011が検出された地点は、③a区の集落内にあつては2×1間の倉庫が設置された場所である (図版68・69・157)。最も古い建物は掘立柱建物 ST3011で、時期は判然としないうが、古く遡っても6期である。次に、若干位置を移動し、ほぼ同規格の掘立柱建物 ST3013が重複する。



その後は、ほとんど位置を固定し、盛土を有する掘立柱建物 ST3019、そして8期前半には礎石建物 ST3004へ変遷する。8期前半内には、建物は廃絶し、畠と思われる畝状遺構にかわる。

こうした変遷は6期～8期前半までの数十年間?に集約される。建物の規格にほとんど変化が見られず、場所も継承している。そのため、倉庫機能に支障が生じない程度の期間内に解体と新築が繰り返されていたと推定される。洪水砂（III-2層）を被る直前には畠として利用されており、建物の廃絶後、解体されたものと推定される。

#### 4 井戸・土坑ほか（SK）

##### (1) 概要

**SK表示の遺構** 一辺が約2m以下の落ち込みについては、ほとんどがSK表示で調査を行っている。そのため、井戸跡、盛土のための掘削坑、いわゆる焼土坑、建物や柵列にならなかったピットなど、多様な坑が含まれている。

**概要** 今回の調査では、墓坑と断定できる例は見つかっていない。ほとんどの集落跡で確認できたものは、井戸跡といわゆる焼土坑（香川1996）である。また、本来の用途であったかどうか断定しがたいが、多量の土器や礫が廃棄された土坑が見つかっている。

一部の集落跡でのみ見つけたものでは、屋代遺跡群②区で検出された用途不明の土坑群（SK1067～1070）、③a区の盛土のための掘削坑があげられる。

このほか、調査時にSK表示をした多数のピットが存在している。

また、集落外では更埴条里遺跡H地区などの水田層下で検出された土坑群、屋代遺跡群⑥区の祭祀施設に近接して見つかった炭化物を多量に混入した土坑などがある。前者は第2節で、後者は第5節で扱う。

**掲載の方法** 分類を代表する遺構のみ個別図（1/40～1/80）を作成した（図版160・161）。組み合わせの不明確であった柵列や掘立柱建物の柱跡、性格不明の落ち込みについては、調査段階でSK番号が付されていた場合でも番号は表示していない。これらは、個別図のない土坑とともに、1/500と1/120平面図のみに掲載し、1/120図に坑底のレベル読み値（356.00m-〇〇cmの〇〇cm）を表示した。記載事項は、表8に示した。

##### (2) 分類

大分類は『弥生・古墳編』を踏襲している。認定のための詳細な部分は『弥生・古墳編』、あるいは個別の項を参照していただきたい。大分類は以下の通りである。

- I群…人為的な掘り込みの可能性が高いもの
- II群…植物痕などの自然物に人手が加わったと考えられるもの
- III群…自然の営力で落ち込みとなり、直接的な人手の介入が認められないもの
- IV群…上記以外、あるいはデータが少なく判断できないもの

『古代1編』では、大半のSKがI群に属している。また、III群にはIV-1層上面の水田畦畔上で検出された落ち込みがある。

I群内を以下の通りに細分した。

1～4類は、いずれの集落にも存在していたか、その可能性が高いものをあげた。5・6類は特定の集落にのみ認められたものである。

1類…井戸跡 円形、方形を呈し、水が湧く深さを有する。溜まり水の影響を受けた土壌が底部に堆積している。

2類…いわゆる焼土坑 1×0.7m、深さ30cm程度の大きさ。主に長方形を呈する。底部に炭化物が堆積、

壁が焼成を受けて酸化（赤化）したもの。

3類…廃棄土坑 当初の用途は不明であるが、多量の土器片や礫などが廃棄された状況で見つかった土坑、規模、形態はさまざまである。

4類…2基セットで検出された掘方を持つ柱穴

5類…盛土のための掘削坑

6類…用途不明の掘削坑

その他

(3) Ⅰ群1類 井戸跡 (図版160)

**概要** 各集落内に1～数基存在していたと考えられる。調査範囲の関係で検出されなかった集落もある。長期にわたって使用されていたと考えられ、建物の改築に比べ数が非常に少ない。集落の中では、更埴条里遺跡K地区で井戸数が多く、大きな掘方を有する構造のしっかりした例が多く認められる。屋代遺跡群④～⑥区では中世を含め井戸が多数確認されていたが、時期を古代に特定できる例がなく、『古代2、中世・近世編』に一括して掲載した。

**構築方法による分類** A. 井戸上半部に大きな掘方を有する例と、B. 大きな掘方を有しない例に分けられる。

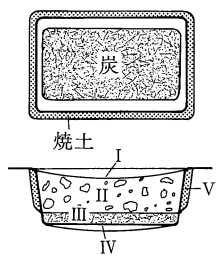
A. は掘削する人が動きやすいように、いったん井戸上部を広く掘削し、スペースを確保する。次に坑底まで掘削し、井戸枠を設置。最後に広く掘削した範囲を埋め戻して完成する。更埴条里遺跡K地区、SK9930など、6期～8期前半に見られる。

B. は狭いスペースのまま坑底まで掘り進んで行くものである。

更埴条里遺跡K地区SK9265などで見られ、Aに比べ後出する例が多い。『古代2、中世・近世』に含まれる8期以降の井戸では、B形態が多くなる。

**井戸枠** 更埴条里遺跡K地区SK9432、SK9930で、良好な保存状況を示す例が見ついている。

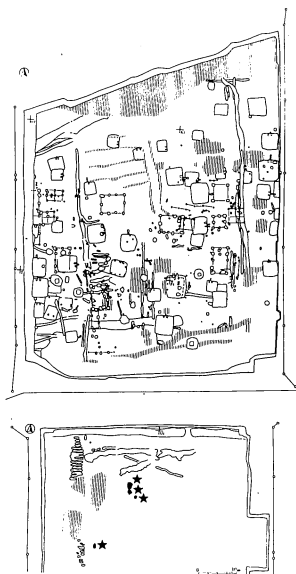
A. 焼土坑模式図



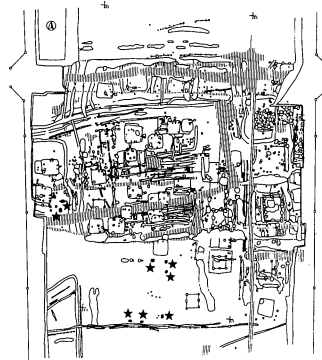
- I. 埋没土
- II. 埋め戻し(ブロック)土の場合あり
- III. 炭化物層
- IV. 掘方を持つ例あり
- V. 焼成を受け酸化(赤色化)した壁

B. 焼土坑の分布

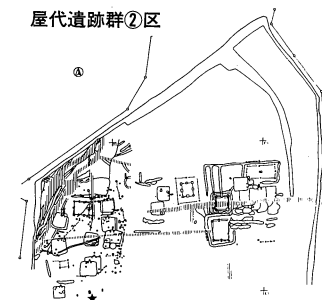
更埴条里遺跡J・K地区



屋代遺跡群①区



屋代遺跡群②区



屋代遺跡群④～⑥区



★ 焼土坑

図22 いわゆる焼土坑模式図と分布状況

**遺物出土状況** 坑底付近から曲物や土器が出土する例が多い。安全管理との関係上、坑底付近を精査できた例が少なく統計的な処理はできない。

**廃絶** 埋土にはブロック土を含む層があり、廃棄にあたって埋め戻されたと考えられる。

**(4) I群2類 いわゆる焼土坑**（図22、図版160・161）

**概要** 約1×0.7mの長方形、方形を呈し、深さは30cm程度の例が多い。壁が焼成を受けて酸化（赤色化）し、底部に炭化物が敷き詰められたように集中する土坑。埋土はブロック状の土塊が多く埋め戻した可能性を示す。また、土器などの遺物、骨片などはまったく含まれていない。炭焼き坑説、火葬場説などがあるが、いずれも断定できるまでには至っておらず用途は不明である。

**分布の特徴** 今回の調査では、各集落に必ず数基は伴っており、配置に特徴が見られる。この土坑の存在する場所は、各集落の南側に限定され、しかも集落から一定の距離離れた地点である場合が大半である。分布のあり方が、用途を推定する鍵になりそうである。

**(5) I群3類 廃棄用土坑**（図版160・161）

本来の掘削目的が、廃棄のためであったか否かは不明である。今回の調査では、多量の土器や礫が出土した例（SK1065、SK3073、SK6204）。あるいは、炭化物が出土した土坑の内、形態が不定形な例（SK370）を3類とした。

**(6) I群4類 2基セットで掘方を持つ柱穴**

多数のピットが存在する集落内では、単独で存在していると断定することは難しい。そのため、ここでは最低2基でセットとなる可能性を持つ柱跡について述べる。

**屋代遺跡群③b区 SA3202、3203** 柵列の中央に掘方を有する大型のピットが2基存在する（図版77）。両側に柵列がつながることから、柵で区画された敷地へ入る簡単な入り口施設と考えられる。同様な例は、②区 SA1008のSB129東側付近（図版62）にも見られる。

**(7) I群5類 盛土用の土砂供給用掘削坑**

屋代遺跡群③a区 ST3004とST3005の北側に隣接するSK3062（図版69・72）と凹地（図版158）は、定型化した土坑ではなく、埋土中に遺物や炭化物の廃棄がほとんど見られない。また、埋め戻した形跡も認められない。いずれも建物盛土の北側に隣接しており、礎石建物の項で説明を加えたように、盛土へ土砂を供給したためにできた凹地と考えられる。

**(8) I群6類 用途不明の掘削坑**

**屋代遺跡群②区 SK1166～1170**（図版65）

集落の東グループ内に存在する。竪穴住居に隣接し、時期的にも並行する。形状は不整形で、掘り込みには凹凸が多く安定しない。これらの土坑が重複して存在している。埋土はしまりがなく、多くのブロック土を含んでいる。遺物はわずかであり、多少炭化物が混入する例がある。集中して見つかったため、この集落において必要不可欠であったと見られるが、定型化した土坑ではなく遺物も微量であり、用途については不明である。

**屋代遺跡群①区 SK521ほか**（図版50）

竪穴建物が途切れ、掘立柱建物が多くなる地点に、不整形で浅い掘り込みの土坑が集中して見られる。

いずれも用途は不明である。

## 5 炉、焼土跡 (SF)

鍛冶に関係する例は6項で個別図と説明を掲載し、礎石・掘立柱建物に関係する例は、STの項に個別図を掲載した。

鍛冶関連以外の単独の炉・焼土跡はわずかであり、用途も明確になっていない(表9)。

## 6 鍛冶関連遺構 (図版162~165)

鍛冶関連遺構は、施設の設置された竪穴建物跡(SB)、掘立柱建物跡、礎石建物跡(ST)。鍛冶炉跡(SF)、鉄滓等を廃棄した土坑(SK)、鍛冶関連遺物を出土した不整形な落ち込み(SX)などを含んでいる。これまでの記載上の区分からすれば、これらは分離して掲載すべきであるが、小規模な鍛冶工程を示す遺構に加え、鍛冶工房として構築された大型建物内に、複数の鍛冶炉や土坑が設置された例も見つかっている。個々のSFやSKは一連の鍛冶工程を示す施設の一部であり、一括すべきであると判断した。以下、地区別に鍛冶関連遺構の記載を行う。

### (1) 更埴条里遺跡 K 地区

#### ST918と付属施設 (図版162)

**ST918** 位置：集落の西寄り南端、IX区T-3地区。時期：IV-1層上面で検出され、SB9082(8期後半~9期)などとの切り合い、出土土器より8期前半。構造：南側をSB9082に壊されているが4.4×7.2m程の礎石建物跡。根太構造の可能性もある。付属施設：建物跡東北寄りのほぼ1/4に、鍛冶炉(SF901)とそれに付属する土坑が設置されている。南東1/4部分は上層遺構の攪乱を受けている。建物の西側部分は鍛冶の作業場として機能していたものと推定する。カマド等は見られない。遺物：土器(図版339-1)、青銅板状品(359-16)。

**SF901(鍛冶炉跡)** 位置：ST918北東部床面、東側の南北柱列より1m程内側。構造：中世のピットに東西両側の壁が破壊されているが、径24×22cmのほぼ円形、深さは12cm前後の掘り鉢状。構築材は粘質土。側壁は熱を受け赤く焼け、底面はほとんど焼けていない。この酸化壁面の内側に、熱を受けて固く締まる粘土床の一部と思われる塊が見られる(8層)。遺物：羽口(366-6)は7層の上面縁部に乗るようにして、南側SK9931方向より炉心に向かって斜めに入り込んでいる。羽口より下部面は被熱して、固く締まりブロック化していることから、当時の位置を示す可能性もある。鍛冶関連遺物(366-1~8、鍛造剥片、粒状滓)。

**SK9932** 炉の北側20~30cm。浅い掘り込み(10cm前後)を持つ焼土の広がり。焼土は粒、または塊。地山が熱を受けて焼けたものではない。

**SK9464** 炉の北東50cm弱。径60~70cmの不整隅丸四角形。深さ30cm弱で底面は平坦。中世遺構の可能性も残る(暗褐色砂質土で、中世遺構の埋土に似ている)。しかし、出土土器の様相や、距離的に炉本体やSK9931に近く、SK9932に接していることから、鍛冶関連施設として機能していた可能性が強い。遺物：8期前半に比定される土器(332-1~3)が出土している。

**SK9931** 炉の南東25cm程度。炭、鉄滓等を含む浅い掘り込み。焼けている部分はほとんどない。炉本体上面部より土坑南端部上面は6°下に向かって傾斜し、約30cm弱下がる。炉近くの掘り込みが一部分深く(20cm弱)、鉄滓を多量に含む。遺物：鉄塊系遺物、椀形鍛冶滓、鍛造剥片、粒状滓等。大石を含む礫多数。以上、炉を中心にして、性質の異なる土坑が20~60cmの間隔で設置されている。

(2) 屋代遺跡群①区

この地区では集落東端のSTに伴う鍛冶遺構群と、その南側に隣接する特異な形状の竪穴建物跡、西端に近いSX 9の記載を行う。

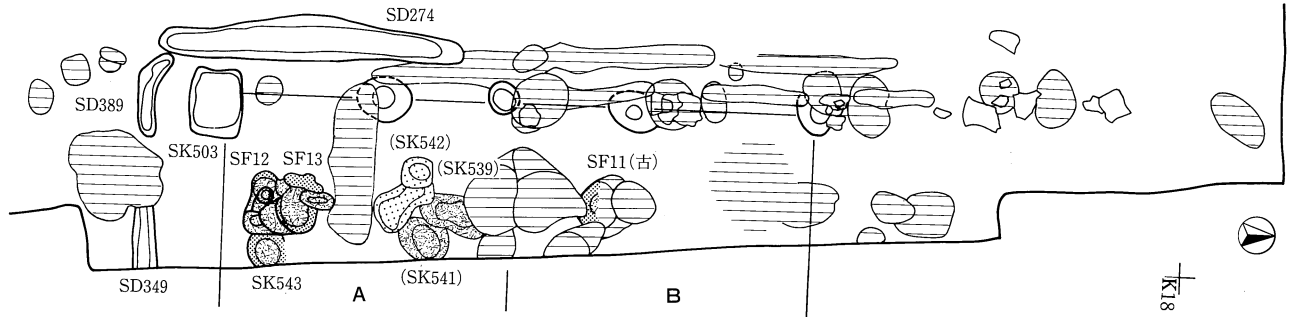
ST7・9・15と附属施設（図版163）

IV-1層上面で礎石建物跡ST7と鍛冶関連遺構が検出され、下層からも同様の遺構群が見つかった。

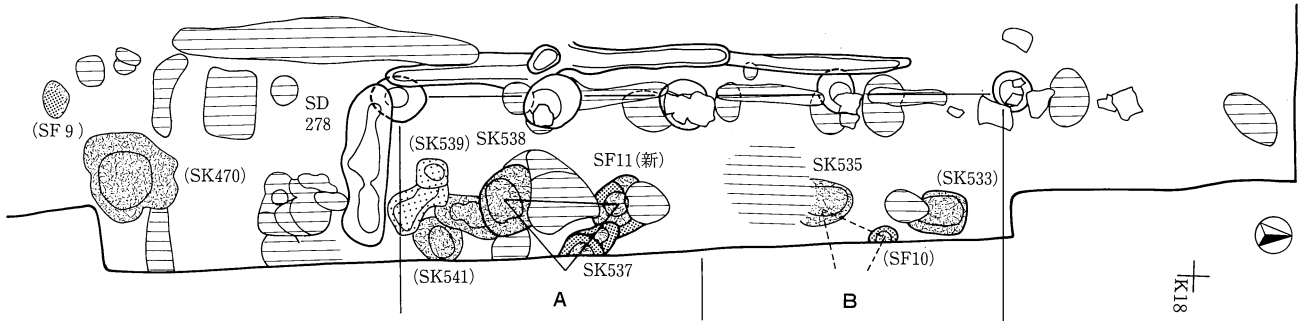
**建物跡の3段階区分**（図23） 柱穴と礎石の重複関係から最低3時期に区分されることが判明した。各々の建物跡の復元にあたっては、柱穴と礎石の切り合い関係と、検出面の違いによって新旧関係を確定した。さらに、柱に沿って存在する溝との重複関係と配置を参考とした。これにより、ST15→ST9→ST7の3段階を設定した。各建物跡の属性については表7に記した。

**鍛冶関連遺構の3段階区分** 次に、各々の建物跡に伴う鍛冶関連施設の推定を行う。IV-1層上面で検出され、洪水砂（III-2層）を被る段階でまだ凹地が残っていた遺構を、最も新しいST7に付属する施設と考えた。それらは、SF8、SK536、SK538上部の炭化物層、SK540、建物外のSK470である。また、SF10は決め手はないが、配置からST7かST9のいずれかに伴う可能性がある。

ST15段階（7期?）



ST9段階



ST7段階（8期前半）

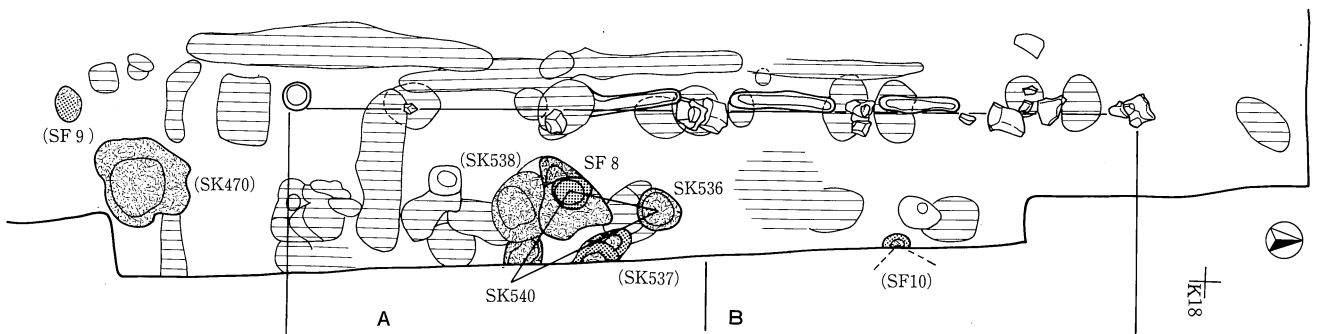


図23 ST7・9・15および附属鍛冶関連遺構群の変遷

0 2m

表5 屋代遺跡群①g区鍛冶関連遺構群SF・SK一覧表

遺構名	所属ST	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	平面形	断面類型	出土遺物	図版	構成図
SF8	ST7	44	40	20	楕円	B	鍛冶・羽溶・炉壁・剥片・粒状	366-23~28	43~50
SF10	ST7・9?	35	32	15	楕円	B	滓片・炉壁・剥片・粒状		
SK536	ST7	58	56	48	楕円	C	羽口・炉壁・剥片・粒状・鉄製品		38
SK538上部炭化物層	ST7	45	52	8	楕円	A	鍛冶・羽溶・炉壁・剥片・粒状	366-21	39~40
SK540	ST7	(60)	(30)	8	楕円	A	剥片・粒状		
SK470	ST7・9?	135	115	40	不整形	C	製錬・鉄塊・鍛冶・羽口・羽溶・炉壁・剥片・粒状	366-9~15	18~27
SF9	ST9?	26	20	—	楕円	B			
SF11(新)	ST9	35	32	(22)	楕円	B	剥片・粒状		
SK537	ST9	(95)	(45)	(6)	楕円	A	鍛冶・剥片・粒状		
SK538	ST9	96	76	30	楕円	C	鍛冶・羽溶・炉壁・剥片・粒状	366-21	39~40
SK533	ST9	78	58	16	楕円	A	鍛冶・剥片・粒状		
SK535	ST9	(80)	58	48	楕円	C	鍛冶・羽口・羽溶・炉壁・金石・剥片・粒状・釘	366-16~20	28~37
SK539	ST9・15?	100	50	15	楕円	A	滓片・剥片・粒状		
SK541	ST9・15?	(70)	65	5	不整形楕円	A	剥片・粒状		
SK542	ST9・15?	48/90	42/50	15~25	不整形	不整形	鍛冶・羽溶・炉壁・剥片・粒状		
SF11(古)	ST15	—	—	(20)	楕円	B	剥片・粒状		
SF12	ST15	30	24	20	楕円	B	鉄塊・鍛冶・羽口・炉壁・金石・剥片・粒状・鉄製品	366-29~32	53~58
SF13	ST15	(45)	(20)	—	楕円	A			
SK543	ST15	52	(60)	5	楕円	A	鍛冶・炉壁・剥片・粒状	366-22	41~42

(註1) 断面類型 A:浅い皿状 B:深い皿状(掃鉢状) C:深く、落ち込み直、底面平ら

(註2) 出土遺物 製錬:製錬滓 鉄塊:鉄塊系遺物 鍛冶:椀形鍛冶滓等 羽溶:羽口溶解物 剥片:鍛造剥片 粒状:粒状滓 金石:金床石破片

次に各遺構の重複関係、ST7に伴いSF11やSK537を覆う貼床の存在といった新旧関係によってST9、ST15段階の可能性を持つ遺構をピックアップした。さらに建物の位置と鍛冶炉・土坑の位置関係から、各々の建物の外に出る遺構や重複する遺構を除外していった。最後に、鍛冶関連遺構の配置の特性、すなわち鍛冶炉と深い土坑、浅い土坑の3施設の位置関係を考慮に入れ、ST9とST15に伴う施設を推定した。

ST9には、SF11、SK537、SK538、SK533が伴う可能性が高い。SF10、SK535、SK539、SK541、SK542。建物外のSF9、SK470にも可能性がある。

ST15に伴う施設は、SF12、SF13、SK543とSF11下層焼土跡の可能性が高い。また、SK539、SK541、SK542にも可能性がある。

**構造・遺物:**上記各遺構について表5に一括した。

#### 竪穴建物跡 SB74・SB76-77・SB80-81・SB82 (図版164)

これらの竪穴建物は西側に段状の張り出しを有した特異な形を呈している。竪穴住居の分布が希薄な場所にあり、鍛冶関連施設群に隣接し、鍛冶関連遺物が集中するなど、一般的な竪穴住居とは異なっている。ここでは、鍛冶関連施設の設置されたST7、ST9、ST15との関係を推定し、あえて鍛冶関連遺構として扱う。

**ST7ほかとの並行関係推定** SB74ほかの新旧関係を見ると(SB82)→SB80-81→SB74→SB76-77の可能性が高い。SB74とSB76に関しては直接的な証拠は存在していない。埋土の質の違い、遺物の出土状況から推定した。SB74の埋土には鍛造剥片を含む炭化物層が形成されており、鍛冶が操業していたある段階には、すでに埋没していたことがわかる。またその埋土上層に礫や土器が廃棄されている。一方、SB76には炭化物層は形成されておらず、遺物は床面から出土した羽口など少量である。埋め戻し土の可能性のある埋土下層が堆積した後は、炭化物や遺物などの廃棄が行われることなく、洪水砂(III-2層)に被覆される時期を迎えている。こうした状況から、SB74→SB76-77の新旧関係を推定した。

また、SB82はSB76の段状部分の可能性もあるがはっきりとはしない。

この新旧関係をST7ほかの鍛冶関連施設と並行させると、ST7とSB76-77、ST9とSB74、ST15とSB80-81の関連性が浮かび上がってくる。しかし、これには竪穴建物と掘立柱・礎石建物の建て替え時期がほぼ一致すること、これらの竪穴建物が通常の住居ではなく、鍛冶に関連したものであることなど前提条件は多い。

しかし、この相関関係が承認を得るならば、古段階のSB80-81出土の土器様相が7期を示しており、

大型掘立柱建物に伴う鍛冶関連施設の成立を古代7期頃と推定することができる。SB74からSB76は同様に、8期前半の時期を与えることができる。

**遺物**：SB74：土器（253-2～4）、緑釉陶器（同5）、鍛冶遺物（鍛冶滓、羽口溶解物、鍛造剥片）、台石。

SB76：土器（254-4）、灰釉陶器（K90-2同5）、椀形鍛冶滓、羽口。

SX9（図版164）

**位置**：Ⅶ区S地区、①f区西端。**時期**：切り合い関係から8期前半。**構造**：埋土上面に数カ所の炭化物層が認められ、鍛冶関連遺物が多量に含まれている。遺構の性格は不明。**遺物**：鍛冶滓、羽口、羽口溶解物。

### （3）屋代遺跡群④～⑥区（図版165）

SB4823

**位置**：Ⅰ区R-22地区。**時期**：古代1～2期のSB4519に切られ、古墳6期の住居を切る。隣接する掘立柱建物群との関連から1期後半に属する可能性がある。**構造**：床面北東隅に鍛冶関連遺物の集中するピット1（60×40、深さ25cm）、南に隣接してピット2（26×24、深さ20cm）、30cmほど離れてピット3（径40、深さ16cm）。何れも性格不明。床面にさらに焼土ブロック、炭化物が多量に含まれる部分が認められる。**遺物**：ピット1より椀形鍛冶滓、羽口、羽口溶解物、鍛造剥片。

SK4847

**位置**：SB4823の上層。**時期**：6～7期（7期の住居SB4809に南側を切られる状態で検出）。**構造**：径70～80cm、深さ40cmの土坑。壁面は焼けておらず、1層に鍛冶関連遺物を多く含むことから「排滓置き場」と考えられる。土坑内、周囲の採取土より多量の鍛造剥片、粒状滓が検出された点、羽口の形状等から考えて、周辺に存在した鍛冶炉を含む鍛冶施設が、本遺構を残して上層の遺構群に壊されたものと推定される。**遺物**：青銅飾金具（359-15）、鉄製品、鍛冶関連遺物（367-34～38）。

SB5056

**位置**：集落北端に近いⅠ区、O-11、N-15地区。**時期**：切り合い（SB5083、5005）、遺物より7期前半。**構造**：多くの部分を上層の遺構に壊されているが、床面東南隅近くに25×20cm程の楕円形の炉状遺構が遺存する。炉脇に大型炭化物、炉内を含む周辺部に羽口溶解物が散在し、また、本遺構周囲に鍛冶関連遺物が集中する。**遺物**：土器（277-1～6）。

SB5061

**位置**：Ⅰ区S-18地区、⑤b区南端近く。**時期**：SB5018、5027、5028との切り合い、遺物より2期と考えられる。1期後半の可能性もある。**構造**：北側壁面中央部にカマドがあり、その周囲と南西隅の柱穴横に炭化物が広がる。床面中央部付近に鍛冶炉と付属ピットが存在する。**鍛冶炉**：床面の中央部やや南寄りに設置。西に隣接しピットが付随する。平面形は東西の長軸38cm、南北の短軸22cm。南側半分は楕円形状、北半分は三角形を呈し、深さ約16cm。粘性の強い土で固め構築し、壁面は焼けしまり、一部はガラス質化して窯壁状になっている。**付属ピット**：炉の西側に20cmを隔てて設けられ、平面42×38cmの不整形、深さ10cm、鍛造剥片等が埋土全体に混入し、特にピットの南西隅に固く集積している。性格は不明。**遺物**：土器（277-1～3）。付属ピットより鍛造剥片、粒状滓。埋土より羽口、椀形鍛冶滓、鍛造剥片、粒状滓等鍛冶関連遺物、製錬滓。竪穴住居埋土中には製錬関係の遺物が含まれており、鍛冶炉に付属するピットから出土した遺物（小鍛冶関係）とは様相を異にしている。

## 7 遺物集中 (SQ)

土器集中、祭祀具集中など、特に施設を設けずに遺物が集中した地点を SQ で表示した。この内、木製祭祀具集中については、第5節で詳述している。

## 8 性格不明の遺構 (SX)

**概要** 土坑以外で、性格不明な遺構を全て含めているため、多種多様である。

竪穴住居跡上層の凹地を利用した廃棄場所(屋代遺跡群①区)(表10)。湧水点の祭祀施設。溝に投棄された土塊(屋代遺跡群⑥区)などを SX で扱っている。

屋代遺跡群①区 SX9は鍛冶関連遺構として別掲載した。また、「水辺の祭祀」関連遺構については、第5節で、溝内に投棄された土塊群については、IV層上面の時期におそった洪水に関連する災害関連として第4章第1節で扱った。

**廃棄場としての竪穴建物跡** 屋代遺跡群①区で SX として扱った例の多くは、竪穴住居の凹地に廃棄された遺物、炭化物、焼土、灰集中である。SB8周辺の遺物出土状況と断面図(図版125)を見ると、SB56が廃絶し、ある程度の埋め戻しが終了した後は、炭化物や土器などの廃棄場所として利用されていたことがわかる。また、この状況は SB の凹地に限らず、溝の凹地なども例外ではない(SD22)。

## 9 柵列ほか (SA)

### (1) 概要

木杭や径10~50cmのピットが列状(溝内を含む)に検出され、建物にならないと判断された遺構を SA として表示した。掲載方法は、個別図の作成は行わず、個別記載は表11のみである。ここでは表のデータを基に SA の特徴をまとめおきたい。

### (2) SA の分類

**ピットの形態による分類** ほとんどの SA では杭・柱材が残存していなかったため、ピットの形態から分類を行う。

#### I 群 掘方を有するもの

個々の杭・柱を設置するにあたって掘方を有する例。大型の材を固定することを目的に掘方を有しており、塀や材木列など、比較的大きな施設を構成していたと考えられる。

1 類 溝状の掘方の中にピット列が存在する例。

- a. ピットの平面形が長方形を呈する例。屋代遺跡群①区 SA4 (図版15・16)
- b. ピットの平面形が円形を呈する例。屋代遺跡群④区 SA4505 (図版96)

2 類 溝中に掘方を有するピットが並ぶ例。屋代遺跡群④区 SA4202 (図版89)

3 類 個々の柱に掘方が存在する例。屋代遺跡群⑤区 SA6001 (図版115・117)

#### II 群 掘方の明確でないもの

個々の杭・柱を直接地面に打ち込んだか、その可能性を持つ例。簡易な柵列であったと考えられる。

1 類 先端の尖った木材が残存し、掘方が確認できない例。屋代遺跡群⑥区 SA7003 (図版23)

2 類 径10~20cmの小型円形のピットで、断面形が先細りになっている例。

屋代遺跡群② b 区 SA2003 (図版16)

#### III 群 土手状施設の芯材として使用された可能性を持つもの



SA と言いが難いが、芯材とする根拠も明確でないため、一応 SA として報告する

屋代遺跡群⑥区 SA8001 (図版23)

以上、SA で表示した遺構は、I 群=大規模な塀や材木列、II 群=簡易な柵列、III 群=土手状施設の芯材の大きく 3 タイプに分類が可能である。

### (3) 設置場所の特徴

次に、I～III 群の SA が、どのような場所で用いられていたかを見て行く。

#### A. 個別集落より広範囲を区画する例

I 群 1 類は、屋代遺跡群①区から更埴条里遺跡 K 地区? (K 地区では溝のみ検出) に続く SA4 のように、個別の集落よりも広い区域を区画する場合に使用されている。

この SA4 では、各ピットの平面形が長方形を呈しており、大規模な材木列であった可能性がある。また、列は屋代遺跡群①区内で西へ鋭角に屈曲する。このことは、囲うべき施設の本体が西側調査区外にあったことを示している。同時存在と考えられる並行溝 (SD32) から 6 期に属する土器が出土している。

#### B. 集落で用いられる例

集落内の区画では II 群が多用され、I 群 2・3 類が加わる。

以下、①～⑤の 5 種類が主な使われ方である。

##### ① 集落境を区画する例 屋代遺跡群②b 区 (①区集落) SA2001-2002 (図版16) など

①区集落では、溝と並行して用いられ集落を囲っていたと考えられる。

##### ② 集落内で建物群を区画する例 屋代遺跡群②区 SA1008 (図版18)、④区 SA4201-4202 (図版22) など

②区集落では西側グループの東に南北方向の SA1008 が存在し、東側グループとの境をなしていたと考えられる。無数のピットが不規則に並んでおり、簡易な柵列が幾度となく作り直されたものと考えられる。

これに対し、④～⑥区集落では I 群 2 類に属する SA6001、6002 や、「L」字状に配置されている I 群 3 類の SA4201-4202 が見られる。これらは集落内部の特定の場所を区画していた可能性が高い。掘方を有する柱で方形に区画する方法は、一般集落内の建物群の境であった②区 SA1008 とは大きく意味が異なっていたと考えられる。

##### ③ 個々の建物を囲う例 屋代遺跡群①区 SA7 (図版16)、②区 SA1002 (図版18) など

掘立柱建物に付属する例が多い。母屋 (ST2) の柱穴に比べ小規模なピットがややずれて配置されていたり (SA7)、区画 (雨落ち?) 溝の外にある (SA1002) ため、底とは考えられない。建物を囲う施設であったと思われる。

④ 用途が明確でない例 屋代遺跡群①区 SA8 (図版45) は、小規模なピットが半円弧状に配列されている。残存状況が悪く判然としないが、本来円形に巡っていたとすると、サイロ状の建物、あるいは何らかの囲いになる可能性もある。

また、①区集落内には、小ピットが 3 基程度並ぶ例が散見できる。これらについても、本来の形状がどうであったのか、用途が何であったのか不明である。

##### ⑤ 低地での護岸などに利用される例

SA7003 (図版23) は溝 SD7025 の壁面が崩れないために打ち込まれた可能性がある。

## 10 溝・自然流路 (SD)

### (1) 概要

SD 表示の遺構と概観 SD で表示した溝や流路は、人工・自然を問わず掲載している。

この時期、自然流路と考えられるSDは屋代遺跡群⑥区の東西流路に限定される。この流路も、水田や祭祀施設との関係でかなり手が加わっていたと考えられる。また、屋代遺跡群①区などで、古墳時代に直線的に掘削された水路が蛇行する時期が6期以前に見られ、多数の流路が残されている。

水田の給排水に関わる水路では、更埴条里遺跡H地区SD740などのように、地区毎に整備されていた段階と、条里型地割の施工によって低地全域に計画的な水路網が作られる時期（?～8期前半）がある。

集落内には、集落の区画、建物群の区画、建物の区画、水処理（雨水など）などで溝が多用される。また、屋代遺跡群①区集落内のように、畝に関連した溝が密集する地区が見られる。

**掲載方法** SDの掲載は、祭祀施設や木製祭祀具が集中して見られた屋代遺跡群⑥区についてのみ、第5節に別立てで詳細に提示した。IV層上面の水田に伴う溝は第3章を参照していただきたい。その他のSDについては、平面図は1/500地区別全体図と1/120割付図のみとし、1/80断面図を添えている。建物跡に伴う溝の一部については、建物の個別図に掲載している。記載事項は、すべて表12にまとめた。

## (2) 溝・自然流路の分類

### A. 大分類

大分類については、『弥生・古墳編』を踏襲する。古墳時代以前と比較すると、古代には、溝が多方面に活用されるようになり、数も増大する。しかし、それは人工的に掘削された溝の細分化として記述する。

分類は以下の通りである。

- |               |                       |
|---------------|-----------------------|
| I群 人工的に開削された溝 | 1類 流水の認められるもの≒水路      |
|               | 2類 流水の認められないもの≒水路以外の溝 |
|               | 3類 湧水が関係する祭祀関連の溝      |

II群 自然流路を改修した溝

III群 自然流路

IV群 上記以外、判断できない溝状遺構

古代においてはI群2類が多種多様となるため、細別は『弥生・古墳編』と異にする。

### B. 水田関連水路

I群1類は人工的に掘削された水路を対象とし、細別は『弥生・古墳編』に従う。詳細はそちらを参照していただきたい。分類基準の大枠は、以下の通りである。

- 基幹水路・・・溝幅3m以上、b溝を分岐する。
- 幹線水路・・・溝幅1～2mと比較的広く、分岐する小溝を伴う。
- 支水路・・・bよりも溝幅が狭く、bに接続する。
- 補助的水路・・・溝幅数十cm以下、b・cに並行あるいは独立して存在する。
- 水口部の溝など・・・溝幅30cm前後、長さや深さも小規模である。

**基幹水路** 屋代遺跡群①区で古墳時代中期までは確実に存在していた基幹水路SD258-SD235（図版46）は、その後埋没してゆき、小さく浅い溝が蛇行し、ひんぱんに流路を変更するようになる（図版16・45～58）。この状況は、基幹水路としての管理がなされていなかったことを示していよう。

7～8期前半?には、まったく異なる位置（屋代遺跡群④区）に基幹水路SD4514が掘削される。幅8.4m（段状の平地を含む）、深さ1mを誇る大規模な溝で、④区で大きく北へ屈曲し、その後、⑥区で3方向に分流する。

分流の内、西線と中央線は⑥区東西流路へそそぎ込む。本線は規模を若干小さくしながらさらに自然堤防上を東流する。古墳時代と古代、2つの基幹水路の位置変更は千曲川旧河道の流路変更などとも絡む。

また、条里水田の根幹に関わる水路であるため、『総論編』で詳述することとする。

**幹線水路** 上記の基幹水路（SD4514）完成以前では、更埴条里遺跡 H 地区 SD714～716、屋代遺跡群③区 SD3056ほか溝群などが存在している。前者は、他地区の数少ない水路との関連が不明であり、古墳時代から続く耕地維持のため部分的に掘削された可能性が高い。また、後者の水路も古墳時代の幹線水路を改修して使用できるようにしたものと考えられる。低地全域を含めた水路網の大改造は古代6期以降に行われた条里型開発を待たなくてはならない。

**その他** cは更埴条里遺跡 H 地区 SD740などが該当しよう。dはこの時期の例は不明である。

### C. 畠作に伴う溝群

次に、新たな細別を設定した I 群 2 類について述べておく。2 類は流水の認められない溝を一括したため、多様なものを含んでいる。まず、畠作に関連すると考えられる例について取り上げる。これらを、I 群 2 類 a とする。

**畠の畝間と考えられる例** a-1類は、数条以上の溝が並行して存在し、各々の溝は浅く窪む程度で、断面がなだらかである。分布は、屋代遺跡群②、③ b～④ a 区のような自然堤防上の無遺構地帯（図版211・212・214・215）か、更埴条里遺跡 K 地区、屋代遺跡群①、③ a 区のような集落内の比較的乾燥した地点（図版208・210・213）に多い。

IV-1層上面で多く検出されている。IV層中では、屋代遺跡群③ b 区北西壁断面で、IV-1層上面の畝状遺構直下で見ついている（図版227）。また、③ a 区集落南よりの地点で見ついている SD3107～3117溝群（図版69）も、この可能性が高い。

**畠に伴う深耕の痕跡と考えられる例** a-2類は、数条以上の溝が並行して存在し、溝断面が垂直に近く、深さも数十cmと比較的深いもの。分布は、集落内や集落周辺である。

屋代遺跡群①区 SD146～156溝群（図版225）を典型例とする。埋土にはブロック状の土が入っており、掘り起こしてすぐに埋めた可能性がある。この地点は、IV-1層上面に畠跡と思われる畝状遺構があるため、天地返しに関連した溝（佐藤1998）とも考えた。しかし、礎石建物跡 ST5との新旧関係を見ると、SD146～156溝群→ST5→畝状遺構であり、畝状遺構とは別と考えざるを得ない。検出された畝状遺構よりも古い段階の天地返しの痕跡であるのか、あるいは深い耕作を必要とした作物のためのものであったのか、今後の研究にゆだねたい。

屋代遺跡群④ c 区 SB4230の北側に並ぶ SD 群は、a-1類か a-2類の可能性もある。

**その他** このほか、a-3類は、耕作痕の連続が溝状を呈する場合とした。III-2層堆積以後の時期で見ついているが、古代では検出されなかった。a-4類としたのは、畠を他の区域と分ける区画溝である。屋代遺跡群①区 SD148ほかそれがそれにあたる（図版225）。

### D. 特定の範囲を区画する溝

次に、特定の範囲を区画する溝を I 群 2 類 b としてまとめる。

**集落を越えて広域につながる溝（b-1）** 個別の集落を越えて、より広い地域を区画する溝を b-1類とする。これには、屋代遺跡群①区 SD32、SD44が該当し、柵列を伴っている。詳細は SA の項で触れた通りである。

**集落境あるいは囲う区画溝（b-2）** 各集落と生産域などの境となる溝を b-2類とする。屋代遺跡群①区集落の北溝の一部（SD2484）は8期前半には灌漑用水路と兼用となっている。また、屋代遺跡群③ a 区集落や③ b 区集落の境界は、当初から幹線水路を利用したと考えられる。これらの溝は I 群 1 類に分類した。

水路ではなく、境を画するために掘削された例では、屋代遺跡群①区集落に明確な例が存在する。

①区、6期の集落境を示す南側の SD45? は東西方向が調査区外まで延びるため、b-1の可能性もある。

8期（初源は7期まで遡る可能性もある）の区画溝は、南側では条里の坪境畦畔とセットとなる SD22・

SD28 (図版16・210) である。畦畔を盛り上げるために掘削されたと考えられ、凹凸が激しい。畦畔が主体となっており、溝は付属施設にすぎない。これに対し、北側の区画 (調査区は②b区に属する) は、出入口と考えられる無遺構部 (SA2001と2002の間) を挟んで溝と柵列が配されており、しっかりとした構えが作られている (図版16)。

**集落内の建物群を区画する溝 (b-3)** 遺構が連続する集落内で、建物群を区分する溝をb-3類とする。

更埴条里遺跡 K 地区集落の SD936・SD974 (図版14) は時期を異にするが、両者とも集落を東西に大きく分割している。

屋代遺跡群④～⑥区集落の SD6003 (図版22) は、その配置から SA6001・6002とセットになると想定すると、⑤a 区内に方形に囲われた敷地が生まれることとなる。

屋代遺跡群③b 区集落の SD3276 (図版20) は、西グループ中の ST3202・SB3033を1単位とした敷地を画するように存在している。更埴条里遺跡 K 地区 SD936などよりは、小規模な範囲の区画溝である。

屋代遺跡群①区や③a 区でも、建物群を画する溝が認められる。

こうした区画溝は、屋代遺跡群②区集落のように、柵列で代用する場合がある。また、④～⑥区集落のように一部が溝で一部が柵列の場合も想定される。

**個別の建物を区画する溝 (b-4)** 個々の建物を囲う溝をb-4類とする。

掘立柱、礎石建物に付属する場合が多い。屋根に降った雨水が建物内に流れ込まないための機能が主と思われる。しかし、屋代遺跡群③a 区集落 ST3001の南側溝のように、建物から2.8mほど離れて巡る場合もあり、区画の意味もあったと考えられる。

#### E. 個別の施設に関連する溝

竪穴建物・住居に関連する壁溝、掘方。掘立柱建物関連では柱穴を布掘状にする例。道路状遺構の下部施設としての溝群など、施設を構築するための工程で掘削される溝が多数見つかっている。しかし、これ以外にも、溝は見つかっているものの、施設の実態が不明な例が存在している。ここでは、問題提起の意味も含めて、こうした溝をI群2類cとして取り上げておく。

**屋代遺跡群②区集落 SD2594** 幅54cm、深さ7cmの溝が円形に巡る。円の直径は3.3mほどになる。深さはやや深めであるが、集落内の竪穴住居群からやや離れた位置にある。サイロ状建物の下部施設である可能性もあろう。

**屋代遺跡群②区集落 SD2299～2302** SD2299とSD2300、SD2300とSD2301に囲まれた範囲 (図版64・65) は非常に狭く長くなっており、用途は不明である。また、隣接するSD2301とSD2302などに囲まれた範囲 (図版65) は4.4×(4.8?)mを測り、その中央にピットが1基存在している。ここにも、何らかの施設が存在していたと考えられる。

#### 参考文献

- 宇野隆夫 1991 『律令社会の考古学的研究』  
 大塚昌彦 1996 「火山灰下の家屋」『考古学による日本歴史15 家族と住まい』  
 香川慎一 1996 「焼土坑に関する再検証」『論集しのぶ考古』  
 佐藤甲二 1998 「畑跡の畝間と耕作痕について—仙台市域の考古学的事例から—」『人類誌集報1998』  
 寺内隆夫 1989 「第5章第3節1 竪穴住居址」『吉田川西遺跡』  
 寺内隆夫 1998 「第2章第2節 遺構と遺物出土状況」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—弥生・古墳時代編—』  
 山梨県考古学協会 1996 『すまいの考古学—住居の廃絶をめぐる—』資料集  
 米沢容一ほか 1997 『土壁』創刊号



第4節 集落跡検出の遺構と遺物出土状況

カマドの残存状況(0~9分類)										絶対状況(0~9分類)			遺物		住居廃絶か		遺物			新旧関係		備考
煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼含ロック	土器・礫	周辺礫	廃絶状況、煙出口遺物	ブロック土	焼土・炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	図番号	切り合い関係(本住居より古)	切り合い関係(本住居より新)					
0	1	0	1?	1?	0	1	1	1	0	—	III	—	床面~埋戻し土に散在	畿内系土器、小刀	230.360	SB9010、9012、9014、SK9170	ST902					
0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	火床上と脇に杯類	III	?	南壁際床面に須臾器杯	畿内系土器	230.360	—	ST902、SK9129、9130					
0	1	0	1	0	0	1	1	1	0	破片微量	III?	—	埋戻し土に北西壁際に少	鉄鏃、軸付石製紡錘車	231.353.359	—	—					
0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	右袖部に礫集中	I	—	北西床面、東壁際に少	—	231	—	ST9003、SK9056					
0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	燃焼部に杯片、西側に礫集中	I	—	埋戻し後に散在	—	231.359	SB9012、SB9013、SB9014	—					
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	東壁際に炭化物集中有	I	—	東埋土上層に集中	畿内系土器	231.232	—	ST901					
0	1	0	9	1	0	1	1	1	0	燃焼部内に土器片、袖脇に杯	I	—	上層に土器片散在	—	232	—	SB9008					
9	9	9	9	9	9	1	9	9	9	—	I	—	微量	—	—	SB9007	—					
0	1	0	1	1	0	1	1	1	0	火床上に土器片	I	—	南東壁付近でやや多	—	232	SB9011	—					
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	—	I	—	微量	—	—	—	SB9001					
0	1	0	1	1	0	1	1	1	0	焚口床面に土器片多	?	—	微量	—	232	—	SB9009					
9	9	0	0	0	0	1	1	1	1	火床周辺やや浮いて礫と土器片散乱	III?	—	—	—	233	SB9014	SB9001、SB9005、SK9170					
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	—	III?	—	微量	畿内系土器	233	—	—					
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	—	III?	—	微量	畿内系土器	233	—	—					
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	—	—	—	微量	—	233	—	—					
0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	礫散乱	I	—	掘方中に多埋土中微	—	233	—	—					
0	0	0	0	0	0	1	8	1	1	燃焼部に土器片散在	III?	—	北壁際床に腐網石集中	—	234	—	—					
0	0	0	1	1	0	1	0	1	1	燃焼部と周辺に礫・杯破片	I?	—	カマド脇ピット内	緑釉・鏃	234.360	—	—					
1	1	0	0	0	0	1	1	1	1	燃焼部に土器片と礫、煙出口に礫。火床2面?	III	埋土中凹地に焼土、炭化物	南東床上に集中。埋土壁際等に少	鉄鏃	234.360	—	—					
9	1	0	0	0	0	0	9	9	9	—	—	—	—	—	—	—	—					
9	1	0	0	0	0	1	1	1	1	火床上に礫と土器片	III	—	貯蔵穴?に礫多散	—	236	—	—					
1	1	0	0	0	0	1	1	1	1	火床上に土器片、周辺に礫と土器片	II	II直後と埋土中に多数	貯蔵穴内多埋土に散在	—	236.353	SB9055	—					
1	1	0	0	0	0	1	1	1	1	礫が火床から床面に散在	III	ブロック土中に焼土層	微量	—	237	—	—					
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	III	—	微量	—	237	—	SB9062					
1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	火床と周辺に土器片	III	—	微量	—	237	—	—					
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	III?	—	少量	—	237	—	—					
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	I?	—	微量	—	237	—	—					
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	礫散在	—	237	—	—					
9	9	0	0	0	0	1	8	8	8	記録不明	III	—	少量	—	238.239	—	—					
9	9	9	9	9	9	9	—	—	—	—	—	—	—	—	238.239	—	—					
0	1	0	0	1	0	1	1	1	1	燃焼部に礫片	III?	—	南西隅床面に大形礫	—	239	—	—					
1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	不明	III	—	南西隅床上に砥石多	—	239.353.360	—	—					
1	1	0	1	1	0	1	1	1	0	火床上などに土器片	III	—	微量	—	239	—	—					
0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	右袖付近に杯類集中	IV	—	埋土下層中に比較的多	青銅製品	239.353.359	SB9071b	—					
0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	火床上に土器片多	IV	—	—	—	239	—	SB9071a					
0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	燃焼部内土器片多	?	—	床に礫散在	—	240	—	カマド脇に深い掘方					
0	1	0	0	0	1	1	1	1	1	燃焼部に礫・土器片	III	III中に炭化物層有	埋め戻し土上に礫散在	鉄鏃	240.360	—	—					
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	畿内系土器	241	—	SB9072、SB9073					
0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	火床上と左袖外に土器片	—	—	—	—	241	—	—					
0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	火床上に土器片	II	II上に炭化物	—	—	241	—	—					
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	II・IV	II上に炭化物	炭化物層周辺に散在	—	241	—	再度埋め戻し?					
0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	脇に土器片	III	—	貯蔵穴下部に杯類集中	—	242	—	—					
1	1	0	0	0	1	1	1	1	1	周辺床上に集中	III	—	カマド周辺床面に集中	—	242	—	—					
0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	火床上付近に土器片	—	—	壁際に微量	朱墨硯	242.360	—	—					
1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	袖上から燃焼部上にかけて礫片集中	III	III上に炭化物層	壁際に礫散在	畿内系土器	242	—	—					
1	1	0	0	0	0	1	9	9	9	—	—	—	—	—	243	—	—					
9	1	0	0	1	0	1	1	1	0	火床上に土器片	III?	—	壁際床~埋戻し土に多	—	243	—	カマド脇床下ピット					
1	1	9	9	9	9	9	9	9	9	—	—	—	—	—	243.360	—	—					
0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	—	III	—	微量	—	243.360	—	—					
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	—	—	—	旧:SK9456					
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	I?	—	微量	—	332	—	—					



第4節 集落跡検出の遺構と遺物出土状況

カマドの廃絶と遺物										住居廃絶か		遺物			新旧関係		備考	
残存状況(0~9分類)										廃絶状況(0~9分類)		出土状況	遺物	掲載図版	切り合い関係 (本住居より古)	切り合い関係 (本住居より新)		
煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼含ブツ	土器・礫	周辺に焼礫	廃絶状況、煙出口遺物	プロック土	焼土・炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	図番号			
9	1	1	1	1	1	1	0	1	1		II	-	II前後に土器片多	青銅製飾板	244.359	条里畦畔	SK52	掘方はK1を基準
9	1	0	0	0	0	0	9	9	9	煙道に礫など	-	-						
1	1	0	0	0	0	0	9	9	9	煙道に礫など	-	-						
0	1	0	0	0	0	0	9	9	9	煙出口に礫など	-	-						
0	1	0	0	0	0	0	9	9	9	煙道に礫など	-	-						
9	9	0	0	0	0	1	1	1	0	小片のみ	IV	-	微量		244		SC11.SD22	
1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	焼土上とカマド周辺に杯など	IV	-	微量		244	SX5	SD22	
1	1	0	0	0	0	1	5	1	1	微量	II	II上に炭化物層	壁際床の上に土器片、II上に大型礫	石帯	245.353	SB38.SK293		北壁西側に焼土跡、古カマド?、床下中央に浅土坑
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		245	SD145	SB37	
1	1	0	1	1	0	1	1	1	1	上層に土器片、カマド脇に杯1	II	IIより上層に炭化物	IIより上層に散在	朱墨硯	245	SB59	SX08	
1	1	0	1	0	0	0	1	1	1	煙出口に杯1、燃焼部に少	III	床直、III上に焼土・炭化物	微量	緑釉	245.246.360	SB42.?	?	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	II	II	微量		?		SB41.?	
1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	カマド上部に杯と煙出口に破片	III	III上に焼土・炭化物	微量		246	?	?	
													微量		246			
0	1	0	0	0	0	2	1	1	1		?	-	壁際、床直上に集中		246.247	?	?	カマド脇ピットに炭化物多
1	0	0	0	0	0	0	8	8	8		?	-	-		-	SD?	?	
1	1	0	0	0	0	1	9	9	9		III	-	貯蔵穴内に多、南東上層に破片	緑釉	247	?	?	
1	9	0	0	0	0	1	9	9	9		-	-	-		247			
0	1	0	1	1	0	1	0	1	1	燃焼部内少量	III?		上層のSX8に多量		247	SB51.SB59.	SX8	床下土坑1
1	1	0	1	1	1	2	1	1	1	燃焼部~カマド脇に杯類散在	?		西壁際杯4点集中		247.248.353		SB50	
1	2	0	0	0	0	2	1	1	1	燃焼部には微量、煙出口破片	III?	各層理面に焼土・炭化物	中央付近埋土に少		248		SD?カクツSB08	
0	1	0	0	0	0	2	1	1	0	土器集中	IV	-	-		248.360	SB72	SX09	
0	1	9	9	9	9	2	9	9	9		-	-	-		248			
1	1	0	1	0	0	2	1	1	1	燃焼部付近から杯類出土/煙道出口	II	-	壁際などに少		248.249.353			
0	2	0	1	1	0	2	1	1	0	微量混入	?	埋土中掘り込みが多	微量		249	SB58.SD151~155.SD180.181.	SD115	
1	1	0	0	0	0	2	1	1	1	微量混入/煙道出口	III	III上~SX1に層状堆積	床面に微、SX1内に多		249		SX-01	
1	1	0	0	0	0	0	9	9	9		-	-	-		249.250			
1	1	0	1	1	0	0	1	1	1	火床上に礫、土器片少量	I?	-	P1.2内に破片		249.250	SB71	SB70	
9	9	0	0	0	0	1	1	1	0	火床に小破片。煙出口に礫	III	-	埋土中位と床面に少量	織内系土器	250	SB61	SB55.SD155.SD156	床下土坑
9	9	9	9	9	9	1	1	0	1	なし	?	-	-		250		SB39.SB155.SX08	
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	不明	III	III上面に炭化物層状	微量		250	SB68		
0	0	0	0	0	0	1	9	1	9	火床上に小破片	-	-	-		250		SB58(床貼り替え)	床面のみ、入口施設?
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9		-	-	-		250			
1	1	9	9	9	9	9	9	9	9	煙出口土器片	IV	-	上層に散在		250.251	?	?	
1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	煙出口礫	-	-	-					
1	1	0	0	0	0	0	9	9	0	煙出口土器片	-	-	-					
1	2	0	0	0	0	2	8	1	1	火床~上層に破片、脇に完形杯	III?	-	床土と上層に散在		250	SB65	?	床下中央に土坑
1	1	0	0	0	0	2	1	1	1	火床直上と両袖上に土器片集中	III?	-	破片散在		252			入口施設と床下ピット有り
1	1	0	0	0	0	1	1	0	1	なし	III?	埋土を掘り、炭化物層	床面とIII?上面に有、炭層には微量		252	SB73		
1	1	0	0	0	0	0	9	9	9		-	-	-		252			
0	1	0	0	0	0	2	1	1	0	なし	III	-	微量		252		SB60	
0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	土器小破片少量	III	-	床面中央、III上に微量	鉄鏝	360	?	?	
1	1	0	0	0	0	0	9	9	9		-	-	-					
1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	煙道出口	-	-	-			SB57.SB72		煙道のみ
9	9	9	9	9	9	1	9	1	0	なし	II	-	南側壁際床上に集中		253	SB57	SB70	
1	9	9	0	0	0	0	0	0	9		-	-	-		253			
9	9	9	9	9	9	0	9	9	9	なし	III	-	貯蔵穴に杯と礫		253	SD235.SD236	SB53	
0	1	0	0	0	0	2	8	1	0	火床周辺に小破片	III	-	微量		253		SD67.SD124	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		III?	III上で層状	床上に扁平礫と杯集中、炭層付近に土器片少	緑釉	253	SB80		旧:SB74a.b





第4節 集落跡検出の遺構と遺物出土状況

カマドの廃絶状況 (0~9分類)										廃絶と遺物状況 (0~9分類)			住居廃絶か		遺物			新旧関係		備考
煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	煙口	土器	周辺に焼	廃絶状況、煙出口遺物	埋戻	炭化物集中	出土状況	遺物	掲載図版	切り合い関係 (本住居より古)	切り合い関係 (本住居より新)			
0	0	0	0	0	0	1	8	1	0	なし	III	IIIの上層で炭化物多量混入	壁際床面などに杯類		253	SD291		旧: 75 a, b		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	III	III上層に炭化物、灰多量混入	埋め戻し土中に少量	緑釉、羽口	254	SB77, SB80, SB81, SB82		旧: SB76, SB77		
0	0	1	1	1	0	0	1	0	0	なし	I?	-	微量		-			掘立柱建物内の施設?		
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	IV	-	微量		-		SB78	掘立柱建物内の施設?		
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	?	-	微量		-		SB74-1, SB74-2, SB76, SB77, SB81	SB80, 81で2段掘り込みか?		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	?	-	微量		254	SB80	SB74-2, SB76			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	?	-	-		-					
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	?	-	-		-	?	?			
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	III?	-	-		-	?	?			
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	-	-	-		-	?	?	床面に凹凸有り		
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	III	III上層で炭化物			254		SD277, SD313			
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	-	-	-		254			旧: SX5の一部、掘方のみ		
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	II	-	微量		255, 361	ST107-5				

1	1	0	1	1	0	1	1	1	1	左脇床面に土器・炭	IV	-	微量		254, 361			
1?	0	9	9	9	9	1?	9	9	9	-	-	-	-		254			
0	1	0	0	0	0	2	1	1	0	燃焼部に平石火床上小破片、東側床面に焼燼集中	IV	-	下層に微量		254, 361	SB112		
1	1	0	0	0	0	2	1	1	1	破片が少量	III?	-	微量		254, 361	Pita	SB111	
1	1	0	0	0	0	2	0	1	0	-	IV?	-	微量		254	SB114, SB129, Pit21, SK1040, SK1041		
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	IV?	-	微量		254, 361	SK1040, SK1041	SB113, Pit7	SK1041, 床下土坑
0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	微量		254	SB115-2	SD257	旧: 115 b
9	9	0	1	1	0	1	1	1	1	なし	IV	-	微量		254		SB115-1, SD257	旧: 115 a
1	1?	0	0	0	0	1	1	1	0	なし	III?	-	微量		-	SD262, SD263	SD257, Pit2	
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	III?	-	微量		254			
1	1	0	0	0	0	2	1	1	0	火床上に土器片集中	III?	-	微量		254			
1	1	1	1	1	0	2	0?	0?	1	周辺に土器片・炭散在/煙出口火床上に土器片集中/煙出口	IV	-	微量		254, 361	SB120		
9	9	0	0	0	0	1	1	1	1	火床上に土器片集中/煙出口	-	-	微量		255, 361		SB119	
1	1	0	0	0	0	1	1	1	1	火床上に土器片や炭	?	-	北東隅床一下層に土器片や炭、東床面に煎網石集中		255	SB122	SB362	
1	1	0	0	0	0	1	1	1	1	火床付近に炭	-	-	-		-		SB121, SD362	
1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	燃焼部内、煙出口に土器片	III?	-	III上に土器片が散在		255	SB125, SB126		
0	1	0	0	1	0	1	0	1	1	カマド付近床面に炭や土器片散在	IV?	壁際床上に炭化物	中央や西壁際床上土器		255	SB126, SB127, SK1065		
1	1	0	0	0	0	2	1	1	0	なし	IV	-	微量		-		SB123, SB126	
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	IV?	床上に炭化物	微量		255		SB123, SB124, SK1065	
1	1	0	1	1	0	2	1	1	0	燃焼部内に土器片	IV	-	微量		255		SB124	
1	1	0	0	0	0	2	0	1	1	燃焼部に土器片や炭/煙道出口	I?	-	微量		255, 361			床下中央に浅土坑
9	1	0	0	0	0	2	1	1	0	火床・上層に土器片や炭	?	-	微量		255, 361		SB113	
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	-	-	-		255			

1	1	0	1	1	0	0	1	1	1	火床から前方部床に土器片・炭	?	-	ピット内、南壁際に集中	椀形鍛冶滓	256, 366	SD3107~SD3111, ST3004		
1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	カマド全体~煙道まで遺物集中	-	-	-	-	256			
1	1	0	0	0	0	1	1	1	1	煙道出口	-	-	-	-	256			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	下層に微量		256	SD3100		住居ではない可能性有り
0	1	0	1	1	0	1	0	1	1	燃焼部内およびカマド東脇に炭や土器片	II?	洪水砂堆積前に炭土・灰等	床から埋め戻し土中に多		256	SD3019, SK3073		床下中央に土坑
1	1	0	0	0	0	1	9	9	9	煙道内に炭や土器片	-	-	-	-	256			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	III	-	微量	槍砲状金具	256, 361			入れ子状の2軒か?
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	III	-	微量		257			
9	1	0	0	0	0	1	1	1	1	火床上に炭	III?	-	壁際床上、掘方等微量		257		ST3003	
9	1	0	0	0	0	1	1	1	1	燃焼部内に瓦形杯、西脇に炭?、袖掘方内に壁片等	IV	IV上に炭化物層		257, 353, 361		SB3014, SB3019	平成4年度SB3013	
9	1	0	0	1	0	1	1	1	1	ほとんどなし	IV?	-	微量		257, 361		SB3019, SK3079, SK3237	平成5年度SB3013
1	1	0	0	1	0	1	1	1	1	火床上に土器片	III	III上に炭化物層	微量		257, 258		SK3295, SK3303	カマド脇テラスか掘りすぎか?



第4節 集落跡検出の遺構と遺物出土状況

カマドの廃絶と遺物										住居廃絶か		遺物			新旧関係		備考	
残存状況(0~9分類)										埋戻		出土状況	遺物	掲載図版	切り合い関係 (本住居より古)	切り合い関係 (本住居より新)		
煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼含ブロック	土器・礫	周辺焼礫	廃絶状況、煙出口遺物	III	IV	カマド周辺以外	重要遺物	図番号			
1	1	9	9	9	9	0	9	9	9		III	—	微量		258.361		ST3002	
1	1	9	9	9	0	1	1	1	9		—	—			258			
1	1	0	0	0	1	0	1	1	1		—	—			258			
1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	燃焼部内に土器片	III?	床中央炭化物	棚状施設?に多		259.353		SB3014、ST3002	棚状施設は土坑の切り合いの可能性有
9	1	0	0	0	0	1	1	1	0	火床上に土器片	IV	—	微量		259	SD3211	ST3009.3012ほか	
1	1	0	0	0	0	1	1	1	0		III	Ⅲ上に炭化物			259	SB3018-b、SD3127	SD3126	入れ子状、1軒として調査
1	1	0	0	0	0	1	9	9	9		—	—	—		259		SB3018-a	入れ子状、1軒として調査
0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	袖内に土器片	III	Ⅲ上に炭化物、灰	微量		259.360.361	SB3013	SB3019-b	92年度調査区+SK3315
9	9	0	0	0	0	0	9	9	9		—	—	埋土上層に少量		259.360	SB3013、SB3019-a		93年度調査区

9	1	0	0	0	0	1	1	1	1	火床上と左袖残存部に土器	IV?	—	P内、西壁際に集中	緑釉	260.361	Pit8		入口施設1?
1	1	0	0	0	0	1	0	1	1	土器少量	II	Ⅱ上~上層に集中	壁際にやや多		260.361			
1	1	0	0	0	0	1	9	9	9	土器少量	—	—	—		260			
1	1	0	0	0	0	1	1	0	—	—	—	—	—		260			
1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	燃焼部に土器片	III?	Ⅲ上に炭化物	微量	「八代」墨書土器	260.261		主柱穴1ヶ図なし	
1	1	0	0	0	0	0	9	9	9	—	—	—	—		260.261			
0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	火床上土器片、袖石拔痕、礫	IV	—	微量		261.361		SD3250	
0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	ほとんどなし	III?	上層に炭化物	微量		261			
1	1	0	0	0	0	1	9	9	9	—	—	—	—		261			
1	1	0	0	0	0	1	1	1	1	火床上に多/煙出口微、袖石拔痕有	III	Ⅲ上に炭化物層	微量	緑釉	261	SB3035		
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	—	—	—	微量		261.361		SB3034	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量		262	SK3340.3341	掘方のみ、用途不明	

—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	—	—	—	SB4015	
1	1	0	0	1	1	1	1	1	1	燃焼部~周辺に散在、袖石が南に集中/煙出口	—	—	床~下層に多		263	SB4014.SB4015	カクラン
9	9	9	9	9	9	9	—	—	—	—	—	南東隅床近くに集中、カマド近く?		—	SB4015	SB4010.SB4011	
9	9	9	9	9	9	9	—	—	—	—	—	—	微量	—	—	SB4010.SB4011.SB4014	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	—	—	—	住居か否か不明

1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	火床上土器片	III	床上とⅢ上に炭化物	床上に土器片や礫、北東上層に土器片集中	朱墨硯、錐状金具	262.353.361	SB4017.SB4019.SB4020.SB4024.SB4025.SB4026.	SK4004	
1	1	9	9	9	9	9	9	9	9	煙出口に礫	—	—	—	—	262.361			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	西壁際床上と上層に炭化物	床面~埋戻し土中壁際、上層に多	262.263		Pit?	1基あるが矢板外(引下)	
9	9	0	0	0	0	1	1	1	1	袖破壊土上と周辺に土器片、礫は南に集中	III	—	埋戻し土中に少	鉄鏝	263.361	SB4016.SK4042	SK4142	
9	1	0	0	0	1	1	1	1	9	燃焼部に土器片や礫	?	—	微量	緑釉	263		SK井戸等	
9	9	9	9	9	9	9	—	—	—	—	—	—	微量	—	SB4018	SB4012		
9	9	9	9	9	9	9	—	—	—	—	—	—	微量	—	SB4021	SB4008		
9	9	9	0	0	0	1	9	9	0	—	—	—	微量	—	—	SB4012.SB4016		
9	9	0	0	0	0	1	1	1	0	燃焼部に土器や礫	III?	床上に炭化物	微量		264	SB4021.SB4022	SB4008.SB4012	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	264	SB4033.SB4035	SB4034と同一か?		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	359		SB4008.SB4017.SB4019		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	—	—	SB4012.SB4019	SKにしてよいか	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	上層に少	—	—	SD4021.SK4154.他中世SK		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	東壁際に少	264	—	SB4008.SB4017.SB4020.		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	—	—	SB4020.SD4020.SK4004.		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	鉄鏝	361	—	SB4008.SB4020.SB4024.SB4025.SK4004		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	264	—	SK4134		
1	1	0	1	1	0	1	1	1	0	燃焼部に土器片微量	IV	IVの間層に炭化物、焼土層	床と1層に少		264.361		SK4259.SK4180	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	264				



第4節 集落跡検出の遺構と遺物出土状況

残存状況	カマドの廃絶状況 (0~9分類)							遺物			新旧関係		備考					
	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼含ブロック	土器・礫	周辺に焼	廃絶状況 (0~9分類)	住居廃絶か埋戻し廃棄物層	出土状況		遺物	掲載図版	新旧関係	備考	
煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼含ブロック	土器・礫	周辺に焼	廃絶状況 (0~9分類)	住居廃絶か埋戻し廃棄物層	出土状況	遺物	掲載図版	新旧関係	備考		
1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	煙出口と燃焼部に微	—	—	床付近に少	瓦塔片	264. 265. 361	SD4211	SB4032	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	上層に礫や土器片微量	265	SB4031		カクランが激しい	
1	1	0	0	0	0	1	1	1	—	火床前に礫破片	Ⅲ?	—	—	—	265	SB4035	SB4034	
0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	—	?	—	—	—	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	?	—	微量	265		SB4033. SB4034		
9	1	0	0	0	0	1	1	1	1	燃焼部付近の土器片微量	—	—	床下に多	—	SD4211?	?		
9	1	9	9	9	9	9	9	9	9	—	—	—	—	266				
9	9	0	0	0	0	1	1	1	0	燃焼部などに土器片	—	—	—	267		SB4206		

9	9	0	0	0	0	1	—	1	—	火床上に土器片	Ⅲ	—	—	鎌	265. 361			
1	1	0	0	0	0	1	9	9	9	煙出口に土器片と礫	—	—	—	—	265	SB4212. SB4226. ST4201	SB4209	
9	1	0	1	1	0	1	1	1	0	燃焼部に土器片	Ⅲ	—	—	—	265. 266	SB4219. SB4220. SB4225. SB4268		床下に溝状土坑
9	1	0	0	0	0	1	1	1	1	燃焼部に土器片や礫	Ⅲ	—	北西隅床の上に鷹網石、南壁際に礫集中	転用硯	266			
1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	煙道・燃焼部に土器片少量	Ⅱ	—	微量	266	SB4217. SB4221. SB4225			
9	1	0	0	0	0	1	1	1	0	カマド前方に礫破片	Ⅲ	—	微量	267	SB4219	SB4204. SB4223		
9	1	0	0	0	0	1	8	8	0	—	—	—	—	267				
1	1	0	0	0	0	1	9	9	9	—	Ⅴ	—	微量	267	SB4203. SB4212. SB4226. ST4201		上層にブロック土	
1	1	0	0	0	0	1	9	9	9	—	—	—	—	267				
0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	燃焼部に礫・土器片少量	Ⅳ	—	微量	361	ST4203			
9	9	9	9	9	9	1	9	9	9	—	—	—	—	267				
1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	火床部に土器片	Ⅲ	Ⅲ上に焼土ブロック	微量	267	SB4228			
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	—	Ⅲ	—	微量	—	SD4210. ST4201	SB4203. SB4209. SB4226		
1	1	0	1	1	0	1	1	1	0	カマド前方に土器片	—	—	微量	267	SB4214. SB4227			
1	1	0	1	1	0	1	1	1	0	カマド前方に土器片	Ⅳ	床面に炭化物層	微量	—			SB4213. SK4260. SK4262	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
9	1	0	1	1	0	1	1	1	0	火床上に土器片	Ⅲ	Ⅲ上に面を作り、炭化物等多	微量	267	SK4342	SB4207. SB4221. SK4283. SK4217	上層遺構SX4201	
1	1	0	1	1	0	1	1	1	0	火床上に礫破片／煙出口に礫	Ⅲ	Ⅲ上に炭化物	中央床下に多	布目瓦	267	SD4210		
9	1	9	9	9	9	9	9	9	9	—	—	—	—	267				
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	I?	—	微量	—	SB4220	SB4204. SB4208. SB4223		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	Ⅲ	—	—	—		SB4204. SB4208. SB4214. SB4223. SB4229. SB4219		
1	1	0	1	0	0	1	1	1	0	煙道内・火床上に土器片	Ⅲ?	—	微量	朱墨硯	268. 361	SB4225. SB4207. 7. SK4401	SB4207. SK4344	
9	9	0	0	0	0	1	1	1	0	燃焼部および周辺に土器片	Ⅲ	—	カマド以外は微量	268				
0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	微量	Ⅲ	—	上層に比較的多い	鑿状金具	268. 361	SB4224. SB4208. SB4219. SB4220. SB4229		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	268	SB4229	SB4223		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	—	SB4204. SB4207. SB4221			
9	1	0	1	1	0	1	1	1	9	火床上に土器片	Ⅲ?	—	—	268	SB4212. ST4201	SB4203. SB4209	カマドのみ切られ残り	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	—	SB4209. SB4213. SB4221. SK4316. SK4351	SB4209. SB4213. SB4221	入口施設	
1	0	0	1	1	0	1	1	1	0	煙出口と燃焼部に礫と土器片	Ⅲ	Ⅲ上に炭化物	微量	268			SB4211	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		SB4223. SB4224		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		?	?	
9	9	0	0	0	0	1	1	1	0	火床前や周辺に土器集中	—	—	下層にやや多	268				
1	1	9	9	9	9	9	9	9	9	—	Ⅲ?	床上中央とⅢ上に炭化物層	—	269. 353	SB4505-2. SB4505-3. SB4511. SB4512. SB4513. SB4522	SB4518	SB4505第1床	
9	1	9	9	9	9	9	9	9	9	—	—	—	床面に礫	269	SB4505-3. SB4511. SB4512. SB4513. SB4522	SB4505-1	SB4505	
9	9	0	0	1	0	1	1	1	1	燃焼部に礫と土器片	—	—	—	269	SB4510	SK4549		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	I	—	—	—	SD4519	SK4664	住居ではない可能性有り	
9	1	0	1	1	0	1	1	0	0	—	I	—	—	269	SB4509. ST4503	SB4517. SD4518		
9	1	0	1	0	0	1	1	0	0	—	—	床上中央に炭化物	微量	269	SB4521	SB4508. SB4517. SB4518. SD4518. SK4628		
9	1	0	1	1	0	1	1	1	0	燃焼部に土器散在	—	—	—	269		SB4506.		



第4節 集落跡検出の遺構と遺物出土状況

カマドの廃絶状況 (0~9分類)										遺物			住居廃絶か			遺物			新旧関係		備考
煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼含ブロック	土器・礫	周辺に焼礫	廃絶状況、煙出口遺物	プロック土	焼土・炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	掲載図版	切り合い関係 (本住居より古)	切り合い関係 (本住居より新)				
1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	破壊袖上やカマド前方に少量	-	-	-	双孔円板	269.357	SB4512. SB4522. SD4520	SB4505	旧: SB4512ほか			
0	1	0	0	0	0	1	9	9	9	-	-	-	-	-	269	-	-	-			
1	1	9	9	9	9	1	9	9	9	-	-	-	-	-	269	SD4520	SB4511. SB4505	掘方とカマドのみ 旧: SB4511			
1	1	9	9	9	9	9	9	9	9	-	-	-	-	-	269	-	SB4512. SB4505	-			
9	1	0	1	1	1	1	1	1	9	火床上に土器片と礫多	I?	-	-	-	269	SD4519	-	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	III	-	北東隅床面近くに少	-	-	-	-	SD4515			
1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	火床上に土器片	III	中央床土炭化物	床上炭藪囲に土器多、上層落ち込み内に少	-	270	SB4518	-	埋土上層に緩やかな落ち込み			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	II	II上に焼土・炭化物	-	-	-	SB4508. SB4509	SD4518	-			
9	1	0	1	1	0	1	1	1	0	燃焼部内に土器片	IV	-	南壁凹地炭化物に土器	-	270	SB4505. SK4661	SB4516	-			
9	9	0	0	0	0	1	1	0	0	-	III	III上?に焼土プロック	-	畿内系土器	270	-	-	SB4813と同一			
9	9	0	1	9	0	1	1	1	0	火床面上に破片	III	-	貯蔵穴に多	-	270	-	-	SB4509. ST4503			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	III?	-	-	-	-	-	-	SB4505. SB4511			
9	9	0	1	1	1	1	1	1	0	火床上に土器片や礫	IV?	-	床上に少	青銅環	270.359	-	-	-			
9	1	0	0	0	0	0	1	1	9	-	-	-	-	-	270	-	-	-			
9	9	0	0	0	0	1	1	1	9	-	-	-	微量	-	270	-	-	SB4825. SK4812. SK4813			
9	1	0	0	0	0	1	1	0	0	-	III	III上に炭化物層	-	-	270.361	SB4812	ST4801	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	III	III上に炭化物層	炭化物層付近に土器片	芋引金具	271.361	SB4807. SB4811	-	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	微量	-	SB4811	SB4806	-				
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	微量	朱墨硯	271	SB4825	SB4809	-			
9	1	0	0	0	0	1	0	1	0	火床上に礫	-	-	床面直上に散在	-	271.361	SB4808. SB4813. SB4821. SB4824	-	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	III?	-	微量	-	-	SK4845	SB4805	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	双孔円板	271.357	-	-	-	→SB5035へ		
9	1	0	0	0	0	1	1	1	9	-	-	-	-	-	271	SB4810	SB4805. ST4801	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SB4814. SB4823	SB4808. SB4809. SB4820. SB4825	-	→SB4519へ		
9	9	9	0	0	0	1	1	1	0	火床周辺に土器片	-	-	-	-	271.353	SB4829	SB4817(-6131). SK4830	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明	-	-	北西壁際床面に多	-	271	SB4815. SB4820?	SB4818. SB6105	旧: SB4817. SB6131			
9	1	0	0	0	0	1	1	1	0	火床上に石	-	-	-	-	271	SB4808. SB4813. SB4815. SB4820. SB4821. SB4823	SF4801	-			
1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	燃焼部に土器片	IV	-	カマド南床面に完形杯	-	271.361	SB4807	SB6085	-			
1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	-	III	-	微量	-	271	SB4824. SB4825. SB4827	SB4809	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	III	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶施設1?		
9	1	0	0	0	0	1	1	1	0	燃焼部内に礫	-	-	微量	-	271	SB4826	SB4821. SB4825. SB4827	-			
9	1	0	0	0	0	0	0	0	0	-	?	-	微量	-	271	SB4813. SB4826	SB4808. SB4809. SB4821. SB4824	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	III	-	微量	-	271	-	SB4824	-			
9	9	0	0	0	0	1	1	0	0	-	III?	-	微量	-	271	SB4826	SB4819. SB4821	-			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	刻画土器	271	-	-	-			

1	1	0	9	1	0	1	9	9	0	焚口に土器片微	-	-	-	-	271	SB5063. SB5065. SB5102	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明	I	火災?	転用硯、ガラス玉、炭化米	272.357	SB5047. SB5050	-	-	
1	2	0	1	1	0	1	1	1	1	燃焼部や周辺に土器片や礫/煙出口に礫	?	-	-	272.353.362	SB5056. SB5068. SB5073. SB5083	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	不明	-	-	内黒杯集中有	272	SB5062. SB5094	-	-	
9	9	0	0	0	0	1	0	1	0	火床上に土器片	I	-	床近くの壁際でやや多	272.353	SB5009	-	中央にピット	
0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	燃焼部～前方に土器片や礫	III	床上に炭化物	朱墨硯	272	SB5036	-	-	
0	2	0	1	1	0	1	1	1	0	火床2面	III	中央と南東隅床上に炭化物	緑釉	273.361	SB5147. SB5159	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	下の火床?	-	-	-	273	-	-	西壁や外煙道のみ	
9	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	微量	273	SB5146	SK5033	-	
0	1	0	0	0	0	0	1	1	1	焼土内に土器片や礫	III?	下層に焼土混入多	-	273	SB5024	SK5097	-	
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	II?	II上西壁際で焼土粒多	-	273	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	273	-	-	床らしき硬化面のみ	
9	1	0	1	1	0	1	1	1	0	燃焼部内に遺物微量	III?	床上とIII中に炭層数枚	カマド西上層に集中	鎌	273.362	SB5085. SB5072	-	床下土坑
9	1	9	9	9	9	1	9	9	9	-	-	-	-	273	-	-	-	





第4節 集落跡検出の遺構と遺物出土状況

カマドの廃絶と遺物状況 (0~9分類)										住居廃絶か埋戻し廃棄物層		遺物			新旧関係		備考		
煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼含ブロック	土器・土礫	周辺に焼	廃絶状況、煙出口遺物	ブロック土	焼土・炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	図番号	切り合い関係 (本住居より古)		切り合い関係 (本住居より新)	
0	0	0	1	1	0	1	1	1	0	燃焼部内に土器片	?	—	微量		274.362	SB5151, SK5246	SD5002		
9	9	0	0	0	0	1	1	1	0	火床上~周辺に土器片微量	Ⅲ	床上中央に炭化物?	微量	転用硯	274	SB5029, SB5035	SK5017		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—			—				
9	1	9	9	9	9	9	—	—	—		—	—			—	SB5018, SB5122			
0	1	0	0	0	0	0	0	0	0		—	—			274	?	?		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—			274			床らしき硬化面のみ	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—			274	?	?		
9	0	0	0	0	0	1	1	0	0		Ⅲ	—	微量		274		SB5023, SB5027		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	床上に焼土、炭化物		水晶	274.357	SB5189, SB5031	SK5052	床らしき硬化面と焼土	
0	1	0	1	1	0	1	1	1	0	燃焼部内からカマド周辺に土器片散在	—	床上中央に多量の灰、炭化物		東壁際へ薦編石集中	275.353, 359.362	SB5060, SB5189		床貼り替え	
9	9	0	0	0	0	1	1	1	0		Ⅳ	—		骨剥片	PL100				
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		Ⅳ	—							
9	0	0	0	0	0	1	8	8	0		I?	—		鉄鏃、鎌	275.362	SB5058, SB5059, SB5060			
0	1	0	1	1	0	1	1	1	0	火床~焚口に少	Ⅲ	—	ピット内		—		SB4806, SB4807, SK4801	旧: SB4811, SB5035	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—			276.353	?			
0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	火床上に土器	Ⅲ	南側床の上に炭化物	白玉多、下層住居混入?	白玉、羽口	276.357, 362.367	SB5036, SB5163			
9	1	0	1	1	0	1	1	1	0	燃焼部中に土器片	Ⅲ	—			276		SB5040	SB4805との関係不明	
0	0	0	1	1	0	1	1	1	0	燃焼部内に土器片	Ⅲ	—			276.362	SB5038, SB5048			
0	0	0	0	0	0	1	—	—	—		—	—			—	SB5039	SD5007	火床のみ残存	
1	0	0	0	0	0	1	1	1	1	燃焼部に土器多量、カマド脇に礫や土器	—	—	床上中央に土器		276	SF5005	SB5136		
0	0	0	0	0	0	1	9	9	0	不明	Ⅲ	—	微量		—	SB5047, SB5050	SB5040		
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	不明	Ⅲ	—	西壁際床上に土器、中央に土器、骨片		276	ST5001	SB5008		
9	9	9	9	9	9	1	9	9	9		—	—			276		SB5040	床一部のみ	
9	1	0	0	0	0	1	1	1	9		—	—			—	SB5042	SB5075	煙道のみ	
1	1	9	9	9	9	9	9	9	9		—	—			—		SB5198?, SD5001		
1	1	9	9	9	9	9	9	9	9	煙道出口	—	—			—		SD5001	煙道のみ	
1	2	0	1	1	0	1	1	1	1	燃焼部に微、脇に土器や礫	Ⅲ	—	P1に土器、礫多	骨剥片	276.277, PL100	SB5108	?	P4位置不明、床下ピット2	
1	1	0	0	1	0	1	1	0	0		—	—	微量	骨剥片	277, PL100	SB5054			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	鍛冶炉かカマド火床か不明	—	—		転用硯	277	SB5068, SB5073, SB5074	SB5005	旧: SB5056, SB5083, 鍛冶炉1?	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—			277		SB5056	SB5073等との関係不明	
9	9	9	9	9	9	1	9	9	9	不明	—	—			—	SB5059, SB5060, SB6060	SB5033	掘方のみ	
9	9	0	0	0	0	0	0	0	0		—	—			277		SB5033, SB5058		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—		穿孔骨	277, PL100		SB5031, SB5033, SB5058		
0	1	0	1	1	0	1	1	1	0	燃焼部内に少量	Ⅳ	カマド脇に炭化物多	微量	鍛冶関連遺物、骨剥片	277.367, PL100		SB5027, SB5028, SB5025, 5057		小鍛冶関係遺物と製錬関連遺物は層位的に分離
1	1	0	1	1	0	1	1	1	9	火床上と煙出口に土器片など	—	—			277				
1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	燃焼部内と南脇に土器や礫多	Ⅲ	—	カマド脇凹みに四耳壺	鎌	278.353, 361	SB5063, SB5103, SB5190			
1	9	0	0	0	0	1	0	0	0	微量	—	—	微量		—		SB5003, SB5063		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—			278	SK5094	SB5056		
0	1	9	9	9	0	1	9	9	9	カクランのため不明	Ⅳ	—	微量		278	SB5095, SB5129, SB5165	SB5021	VII層土を間層とした埋め戻し	
1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	煙出口に礫	—	—	理土下層の壁際に比較的多		278	SB5074	SB5005, SB5056, SB5083		
1	1	9	9	9	9	9	9	9	9	煙出口に礫	—	—			—	SB5097	SB5005, SB5056, SB5073, SB5083	旧: SB5074, SB5100	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		Ⅲ	—			—				
0	0	0	0	1	2	1	1	1	0	燃焼部に土器	—	—			278.279	SB5080, SB5088, SB5096, SB5145			
0	0	0	0	0	0	1	9	9	9	なし	—	—	床下ピットに土器片多		279		SB5079, SD5005		
1	1	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—			—			煙道のみ、SB5056.5057と関連?	
1	1	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—			—			煙道のみ、SB5056.5057と関連?	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—			—			SB5056へ	



第4節 集落跡検出の遺構と遺物出土状況

カマドの残存状況(0~9分類)										廃絶状況(0~9分類)			遺物		住居廃絶か		遺物		新旧関係		備考
煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼土含ブロック	土器・礫	周辺に焼礫	廃絶状況	煙出口遺物	焼土・炭化物集中	出土状況	重要遺物	掲載図版	切り合い関係(本住居より古)	切り合い関係(本住居より新)				
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	焚口の炭化物?	-	-	-	-	-	SK5189, Pit2				
9	9	9	9	9	9	1	9	9	1	-	カマド北脇に礫と土器	III	-	-	279	-	SB5020, SB5021				
1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	煙道のみ			
1	2	0	9	1	9	1	9	1	0	-	煙出口に土器片	III	-	散在	双孔円板、ト青、線刻入り石製紡錘車	279, 281, 357, 353, 362, 428, PL100	SB5089, SD5001				
0	1	0	1	1	1	1	1	1	1	III?	III上に炭化物層	III?	III上に炭化物層	炭化物層に少	279, 280, 354	SB5094, SB5181, SB5183	SD5011	床下1			
0	2	0	1	1	0	2	1	1	0	III	不明確	III	-	-	280	SB5170, SB5181	-				
0	0	0	9	1	0	2	9	9	0	-	不明確	-	床上に灰層、埋土上面にSF5003	壁際と比較的多い	280	SB5129	SB5072	重複激しく伴うピット不明確、SK5184, 5185は伴う?			
1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	III	-	III	-	-	280	-	-				
-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	煙道のみ			
1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	煙道のみ			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SB5073へ			
1	1	0	0	1	0	2	8	0	9	III?	-	III?	-	-	280	SB5054, SB5182, SB5183	SB5055				
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	壁際に集中	-	-	-				
1	1	0	1	1	2	1	1	1	0	III	微量	III	-	微量	280	-	-				
9	9	9	9	9	9	1	9	9	9	-	-	-	-	-	280	SB5111	-	床のみ			
1	2	0	1	1	1?	1	1	1	1	III	火床上に焼礫	III	-	壁際下層と柱穴上層	鎌	281	SB5090, SB5111, SB5182, SB5183	SB5101			
0	0	0	0	1	0	1	8	0	0	-	カマド脇に土器片	-	-	-	-	281	SB5164	SB5106			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SB5074へ			
9	9	0	0	0	0	1	9	1	0	III	微量	III	-	南壁際にやや多	骨刺片	281, PL100	SB5194, SB5199, SB5102				
9	9	9	0	0	0	1	9	9	0	-	-	-	-	-	281	-	-	床一部分のみ			
9	1	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	281	SB5150, SB5124	SB5061, SK5109				
-	-	-	-	-	-	1?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SB5125	-				
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SB5025, SB5124	-				
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SB5125	-				
9	9	0	9	1	0	1	1	0	0	-	不明	-	-	南壁際床面に礫集中	転用硯	281	-				
0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	II	焚口に礫	II	-	-	緑釉、青銅刀吊手	282, 354, 359	SB5134, SB5189				
0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	III	火床上とカマド脇に微量	III	III上層に焼土、炭化物	床上~壁際下層に多	ガラス玉鍔型	282, 362	SB5062, SB5134, SB5189	SB5133, SK5263			
9	9	9	9	9	9	1?	9	9	9	-	-	-	-	-	282	-	-				
9	9	9	9	9	9	1	9	9	9	-	-	-	-	微量	282	SB5184, SB5185, SB5200	SB5004, SK5252				
9	1	9	0	0	0	1	9	9	9	-	-	-	-	-	282	SB5143	-				
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	270	-	-	SB4803へ			
9	2	0	1	1	0	1	1	8	0	III	-	-	-	-	-	-	-	SB5017, SK5490			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SB5123			
9	0	0	0	0	0	1	1	0	0	-	-	-	-	-	282	SB5009, SB5152	SB5022, SD5002	床下土坑			
9	9	9	0	1	0	1	8	8	0	-	-	-	-	-	-	SB5152	SD5016, SY5202				
9	1	0	0	1	0	0	1	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-				
9	9	9	0	0	0	1	9	9	9	-	-	-	-	床上に炭化物	-	-	-				
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	-	-	-	-	282	SB5118, SB5132	SB5203, SB5171				
9	9	0	1	1	0	1	1	8	0	-	不明	-	-	-	-	-	-	SB5072, SB5129			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	III	不明	III	南東隅に炭化物層	鎌	282, 362	-	-	SB5203			
1	1	0	1	0	0	1	1	1	1	III?	燃焼部内に土器片や礫、焚口に礫	III?	-	刀子2	282, 362	SB5179, SB5191	-	大きくカクランにより切られる。煙道のみ(カマド)			
9	9	0	1	1	0	1	1	1	9	-	-	-	-	-	283	-	-	SB5120			
0	0	0	0	0	0	1	8	8	8	II?	-	II?	-	微量	283	SB5179	SB5079, SB5096, SB5175				
1	1	0	1	1	0	1	1	1	0	?	燃焼部に土器片/煙道出口	?	-	-	283	SB5190, SB5178	SB5017, SD5021, SK5490				
0	0	0	0	0	0	1	9	9	9	-	-	-	-	-	283	-	-				
1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	-	ほとんどなし	-	-	微量	-	SB5211, SB5190	SD5001				
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SB5102へ			
1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	283	-	-	煙道のみ			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	不明	-	-	微量	283	-	-	SB5198			



第4節 集落跡検出の遺構と遺物出土状況

残存状況	カマドの廃絶状況 (0~9分類)									遺物 廃絶状況 (0~9分類)	住居廃絶か 埋戻し 土器・炭化物集中	遺物			新旧関係		備考			
	煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼高	土器・炭			周辺に焼	焼絶状況 煙出口遺物	出土状況 カマド周辺以外	重要遺物	掲載図版 図番号		切り合い関係 (本住居より古)	切り合い関係 (本住居より新)	
9	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	燃焼部・右袖前方に土器片	?	—	壁際の床の上にやや多	飾り釘	283.362	SB6005.SB6007 SB6121			
9	9	9	1	1	0	1	1	1	0	0	燃焼部に土器片	—	—			283	SB6007.SB6121	SB6002		
1	1	0	1	1	0	1	1	0	0	0		—	—			—				
9	1	0	1	1	0	1	1	0	0	0	燃焼部内に土器片微量	—	—	南壁上層で礫と土器片		283	SB6012.SB6121 SB6122	SB6002.SB6005 SB6006		
9	0	0	1	1	0	1	1	1	1	1	周辺に土器片礫散在	—	—	カマド左床で杯重なる		284	SB6014			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	床上に炭化材や炭化物	朱墨硯	284	SK6528	SB6013		焼失住居か?
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	上層に少量						
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	全般に散在		—				
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	壁際に微量		—	SB6016.SB6076 SB6077	SB6018		カクランにより大半を削平
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	II?	II上に炭化物	全般に散在	284	SB6017.SB6075 SB6077			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量		284	SB6020	SK6001		
9	1	0	1	1	0	1	1	0	0	0		II	中央床土とII上に焼土・炭	微量	畿内系土器	284	SB6024.SB6027 SB6029.SB6030 SB6096	SK6045.SK6046		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	III	微量		—	SB6029.SB6031	SK6049.SK6050		
9	9	9	9	1	9	1	9	9	9	9		II	中央床土とII上に焼土・炭	全般に散在	畿内系土器 小型土製品	284	SB6032.SB6034 SB6050	SB6067.SB6105 SB6109		
9	1	9	9	9	9	1	9	9	9	9		—	—			284				
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量		284	SB6028.SB6076 SB6098.SB6099	中世のSK多数		
9	9	0	1	1	0	1	1	1	0	0	燃焼部土器片少量、焚口に礫と完形杯	III?	—	全般に少量		284.285	SB6028.SB6037	SB6022.ST6005		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量		—	SB6027.SB6099 SB6120	SB6026		
9	9	9	0	0	0	1	0	0	0	0	カマド前方床面に土器片	—	—	微量		285	SB6030	SB6022.SB6023		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量		—		SB6022.SB6029	掘方のみ	
9	9	9	0	0	0	1	0	1	0	0	火床上に土器片	—	—	南壁際下層に少		285	SB6024.SB6032	SK6024		
9	9	0	1	1	0	1	1	1	0	0	燃焼部内に礫片	II	—	東壁近くにやや多	布目瓦、白玉	285.357	SB6047.SB6067 SB6102.SB6135	SD6003.SK6209 SK6211		
9	1	0	0	0	0	1	1	1	1	1	右脇に多	—	—	カマド東脇埋土中に土器と礫		285	SB6058.SB6078 SB6083.SB6134 SD6015	SD6001		
9	9	9	1	1	0	1	1	1	0	0	燃焼部からカマド前方に礫や土器片が集中	—	—	北西隅埋土中に完形杯		285.286	SB6065.SB6039			
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9		—	—	南東際に薦編石	畿内系土器	286	SB6065.SB6079	SB6038		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		白玉	286.357.362	SB6041.SB6119	SB6081.SB6082 SD6001		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—							
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—							
0	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0		—	—	微量		286	SB6048.SB6049 SB6068.SB6069			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			287				
9	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	火床上に土器少	III?	—	微量		287	SB6049.SB6070 SB6129			
9	9	0	9	1	0	1	1	1	0	0	燃焼部内に土器片	—	—			287	SB6048	SB6043.SB6046 SB6069		
9	9	9	9	9	0	1	9	9	9	9	燃焼部内に土器片	—	—	西壁際床上で土器集中		287	SB6051.SB6068			
9	1	0	0	0	0	1	1	1	9	9	火床前に土器片	—	—		円面硯、白玉、胴鎌	287.357				
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			287				
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			354				
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			357				
9	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0		—	—	微量		—	SB6058.SB6060 SB6080			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一面に焼土粒	南東部に多量	287.288				
9	9	0	0	1	0	1	1	1	0	0	燃焼部に微、東脇に礫片と礫	III?	—	微量		288	SB6057.SB6058 SB6080	SB6056		
9	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	燃焼部前方に土器片や礫散乱	—	下層に有	微量	布目瓦	288.362	SB6053.SB6054 SB6074.SB6101 SB6128.SB6130	SK多数		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	壁際に堆積		288				
9	1	9	0	0	0	1	1	0	1	1	焚口に土器や礫が散乱	—	—	微量		288	SB6065	SB6018.SB6059 SB6077		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—							
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	床近くに礫散乱		288	SB6025.SB6032	SB6035.SB6102		
9	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	焚き口と脇に礫や土器片	—	—	北東床上に紡錘車や薦編石		288.289	SB6048.SB6049	SB6043.SD6003		
0	0	0	1	1	0	1	1	0	0	0		III?	—			289	SB6024.SB6096			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—							
9	0	0	1	1	0	1	1	1	1	1	両脇～燃焼部に土器片や礫多	—	—			289	SB6054.SB6073 SB6084	SB6062.SD6004 SD6010		



第4節 集落跡検出の遺構と遺物出土状況

カマドの廃絶と遺物										住居廃絶か		遺物			新旧関係		備考
残存状況(0~9分類)										理廃棄物層		出土状況	遺物	掲載図版	切り合い関係 (本住居より古)	切り合い関係 (本住居より新)	
煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼土ブロック	土器・礫	周辺に焼礫	廃絶状況、煙出口遺物	ブロック土	焼土・炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	図番号		
0	0	0	1	0	0	1	1	1	1	火床上、脇埋土中土器集中	—	—	南側上層に杯類	—	289	SB6098	SB6017. SB6026 SB6077
1	1	0	0	0	0	1	8	0	1	カマド脇P内に焼礫	II?	—	掘方中にやや多	鹿角製紡錘重	290.428	SB6040	SB6017. SB6018
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	354	—	—	—
1	1	0	0	0	0	1	8	0	0	煙出口に礫	III	炭・焼土層が互層に入る	炭化物・焼土層中に多い。	緑釉、転用硯	290.362	SB6093. SB6094 SB6095	—
0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	燃焼部に微、南脇に集中	III?	—	下層に少量	—	290	SB6087. SB6090 SB6124	—
0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	燃焼部から煙道にかけて散在	III?	—	—	—	290	SB6090. SB6111 SB6124. SB6125	SB6086
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	291	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	III	—	微量	—	—	SB6090	SB6088. SB6097
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
0	1	0	1	1	0	1	1	0	0	—	—	—	カマド上位に少量	—	291	SB6090. SB6092 SB6094. SB6117	—
0	0	0	1	1	0	1	1	0	0	燃焼部に微量	—	—	全般に少量	—	291	SB6090. SB6117	SB6091
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	不明	—	—	全般に微量	—	291	—	SB6085. SB6091 SB6092. SB6095 SB6117
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	不明	—	—	北東壁付近上層に多	—	291	SB6094. SB6117	SB6085
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	291.362	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	III?	III?上、東側に焼土層	全般に少量	—	291.362	SB6027	SB6026. SB6028
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	全般に微量	—	291	—	SB6036
9	0	0	0	0	0	1	1	0	1	燃焼部周辺に土器片・礫	—	—	微量	—	291	SB6053. SB6054 SB6126. SB6128 SB6130	SB6062
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	不明	—	—	微量	布目瓦	292	SB6032. SB6067	SB6035
9	9	9	1	1	0	1	9	0	1	微量	—	中層に炭化物	微量	—	—	SB6012	—
9	0	0	0	1	0	1	1	0	1	カマド南脇に礫と土器片集中	III	—	東壁際床上に散在	—	292	SB6105. SB6111 SB6132	—
9	1	0	1	1	0	1	0	1	0	火床上面に土器片集中	—	—	微量	—	292	SB6111.	SB6104
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	温硯	—	SB6109. SB6110 SB6115	SB6088. SB6125
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	III	焼土ブロック層有	微量	—	292	SB6108. SB6110 SB6132	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	全般に微量	—	—	SB6110. SB6111 SB6132	SB6107
9	1	9	0	9	9	1	9	9	9	—	—	—	—	—	—	SB6110. SB6115	SB6088. SB6106
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	III	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	292	—	—
9	0	0	1	1	0	1	0	1	0	燃焼部内に少量	—	—	—	—	293	SB6115	SB6113
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	—	—	—	—	—	—	SB6073	SB6061. SB6109 SB6110. SB6112 SB6113
9	9	0	1	1	0	1	1	1	1	燃焼部内に土器片や礫、焼土南脇に土器や礫	—	—	カマド周辺に集中	—	293	SB6070. SB6129 SB6133	—
9	1	0	0	0	0	1	8	0	0	—	—	—	一部に礫集中	—	293	SB65094. SB6130	SB6085. SB6091 SB6092. SB6095
9	0	0	1	1	0	0	1	1	9	燃焼部、脇に土器・礫集中	—	—	ピット内に土器多	緑釉	293	SK6283	—
9	1	0	0	1	0	1	1	0	0	燃焼部内にはわずか	—	—	床面やや上に礫散在	—	294	SB6042. SB6072 SB6129	SB6040. SB6044 SB6116
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	緑釉	294.354	SK6541	SB6028
9	1	9	9	9	9	9	9	9	9	—	—	—	—	—	—	SB6022. SB6122	SB6002. SB6005 SB6006. SB6007 SB6086. SB6087 SB6090
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	—	—	—	SB6087. SB6088 SB6089
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	—	—	—	SB6106. SB6090 SB6110. SB6111
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	—	—	—	SB6054. SB6053. SB6062
9	1	0	1	1	0	1	0	1	0	燃焼部上層に微量	—	—	微量	—	294	SB6053. SB6128 ST6002. ST6003	SK6153
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	—	—	—	掘方に微量	—	294	—	SB6053
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	微量	—	—	—	SB6104. SB6107 SB6108
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	不明	—	—	微量	—	—	SB6119. SB6129	SB6070
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—



第2章 飛鳥時代から平安時代(IV・V層検出)の遺構と遺物出土状況

表7-(1) 掘立柱建物・礎石建物跡(ST)一覧

更埴条里遺跡 K地区集落

遺構番号	枝番号	旧遺構名	時期		位置				検出面	方位	規模				
					仮	大地区	中地区	図番号			層位など	棟方向	柱間数 (含む庇)	桁	梁
			古代	根拠							○×○	(m)	(m)	面数	(㎡)
ST 904			7期?	方位	K	IX	O11.12	32.151	IV	E-W	2×2	4.36	2.8	-	11.56
ST 916			8期前半	検出面	K	X	K12	35~37	IV-1上	N93°E	(2)×(2)	3.9	3.8	-	14.82
ST 917			8期前半	検出面	K	IX	K11.16	35	IV-1上	E~W		(3.2)	(3.8)	-	(12.16)
ST 918			8期前半	検出面	K	IX	T3.8	162	IV-1上	N10°W	(3)×(2)	(6.0)	(4.5)	-	(27)
ST 919	SK9438		8期以前	切	K	IX	T3.8	25.27.162	IV	N10°W	3×2	6.2	4	-	24.8
ST 920			-	-	K	IX	T8	25.27.28	IV	N10°W	3×1	4.7	1.8	-	8.46
ST 921	SK9329		7期?	方位	K	IX	O15 K11.16	33.35.36	IV	E-W	3×2	6.2	4.2	-	26.04
ST 922			6期?	方位	K	X	K12.17	33.35.151	IV	N80°E	2×2	3.1	3	-	8.55
ST 923			7期?	方位	K	IX	O13.14	33	IV	N86°E	3×2	6.1	4.7	-	28.67
ST 924			6期?	方位	K	X	K7.12	35.36	IV	N10°W	1×1	4.2	3.9	-	16.38
ST 925	SK9362.9363.9364.9365. 9366.9367.9370		6期?	方位	K	X	K22	25.27~29	IV	N5°W	4(3)×2	6.5	4	-	26
ST 927	SK9050.9051.9052.9122		6期?	切.方位	K	IX	O22.T2	25.26.32	IV	N5°W	4×2	6.2	4	-	24.8
ST 928	SK9054.9057.9113.9115. 9117		6期?	方位	K	IX	O11.12.16. 17	31.32	IV	N80°E	2×2	3.4	3	-	10.2
ST 929	SK9102.9119.9255		6期?	切.方位	K	IX	O16.21	31.32	IV	N5°W	2×( )	5.5		-	
ST 930	SK9116.9118.9175.9181. 9182		6期?	切.方位	K	IX	O11.16	32	IV	N5°W	4×( )	6.6		-	

屋代遺跡群 ①区集落

ST 1			6期?	配置	1c	VII	T24	40.42	VI上	N5°W	2×1	3.45	3.32	-	11.45
ST 2			6期?	配置	1c	VII	T15.20	40.42	VI上	N7°W	2×1	3.3	3.06	-	10.1
ST 3			8期前半	検出面	1f	VII	T10.15	49.50	IV-1上	N86°E	3×2	5.94	4.18	-	24.83
ST 4			8期前半	検出面	1f	VII	T6	47.151	IV-1上	N5°W	( )×2	( )	3.03	-	( )
ST 5			8期前半	検出面	1f	VII	T8	50.151	IV-1上	N10°W	( )×1	( )	4.34	-	( )
ST 7			8期前半	検出面	1f	VIII	K17.22	58.163	IV-1上	N-S	(6)×( )	(11.15)	( )	-	( )
ST 8	1		7~8期	溝内土器	1g	VIII	P1.2.6.7	51.152	IV-1	N9°W	3×2	7.02	4.42	-	31.03
ST 8	2		7~8期	溝内土器	1g	VIII	P1.2.6.7	51.152	IV-1	N9°W	3×2	5.96	4.24	-	25.27
ST 9	SK505		7~8期	切	1g	VIII	K17.22	58.163	IV-1	N-S	4×( )	8.14	( )	-	( )
ST 10			-	-	1g	VIII	K21.22	58	IV-1	N4°W	3×2	6.3	3.48	-	21.92
ST 11	SK451.464.467		8期以前	切	1f	VII	T4.5.9.10	49.50	IV-1	N-S	3×2	8.02	4.52	-	36.25
ST 12	SK363.378.431.448		8期以前	切	1f	VII	S5.T1	45	IV	N12°W	3×2	(6.10)	3.74	-	22.81
ST 13	SK342.380		-	-	1e	VIII	P17	44.51	IV-2	N4°W	2×1	4.62	3.86	-	17.83
ST 14	SK465.496		7~8期	溝内土器	1g	VIII	K16	57.58	IV-1	N-S	2×2	3.98	3.52	-	14.01
ST 15	SK503.504		7~8期	切	1g	VIII	K17.22	58.163	IV-1	N-S	4×( )	7.96	( )	-	( )
ST 2006			8期前半	検出面	2b	VII	O11.12	53.54	IV-1上	N-S	( )	( )	( )	-	( )
ST 2007			-	-	2b	VIII	K6.7	58	IV	N6°W	( )×2	( )	3.5	-	( )

屋代遺跡群 ②区集落

ST 1001			6~7期	方位、配置	2i	V	T8.13	63.64	IV-2上	N7°W	2×2	3.5	2.86	-	10.01
ST 1002			6~7期	溝内土器	2i	V	T5.10 P1.6	65.153	IV-2上	N87°E	2×2	7.3	3.5	-	26.29
ST 1003	1		6期?	方位	2i	V	S9.10.14. 15	60~62	IV-2上	N85°W	3×2	4.2	3.36	-	14.11
ST 1003	2		6~7期?	方位	2i	V	S9.10.14. 15	60~62	IV-2上	N90°E	3×2	4.8	3.6	-	17.28
ST 1004	1		6~7期?	方位	2i	V	T9.14	65.153	IV-2上	N1°E	( )×1	3.6	3	-	10.8
ST 1004	2		6期?	方位	2i	V	T9.14	65.153	IV-2上	N1°W	( )×1	3.6	3.4	-	12.24
ST 1004	3		6期?	方位	2i	V	T9.14	65.153	IV-2上	N1°W	( )×1	3.2	3.15	-	10.08
ST 1005	1		6~7期?	方位、配置	2i	V	T9.14	63.65.66	IV-2上	N6°W	( )×2	5	3.36	-	19.3
ST 1005	2		6期?	方位、配置	2i	V	T9.14	63.65.66	IV-2上	N1°W	( )×2	(5.65)	4.2	-	(23.73)
ST 1006		柵列の可能性有り	8期以前	切	2i	V	S10	62.64	IV-2上	N17°W				-	
ST 1007			6~7期?	方位	2i	V	S19.24	60.61	IV-2上	N84°E	1×1	2.24	1.7	-	3.81

屋代遺跡群 ③a区集落

ST 3001			8期前半	切	3a	VI	A14.15.20. 19	67.73.154	IV-1上	N-S	3×2	5.7	3.65	-	20.8
ST 3002			8期前半	切	3a	VI	A12.13.17. 18.19.22. 23	72.73.155	IV-1上	N8°E	(4)×(3)	(9.35)	-	?	-
ST 3003			8期前半	切、検出面	3a	VI	F.F2.F3	69.156	IV-1上	N4°W	(4)×3	4.84	(3.8)	-	(18.4)

第4節 集落跡検出の遺構と遺物出土状況

外周溝・柵	構 造								付属施設	遺 物
	溝・柵番号	溝・柵内面積	盛土・基礎寸法	柱配列	柱類型	掘方平面形	柱痕径	柱間距離		
面数	SD/SA	m <sup>2</sup>	桁方向×梁方向×高さ				最小~最大(m)	最小~最大(m)		
0	-	-	-	総	掘方	不整円	0.2	1.1~2.3		
0	-	-	-	総	礎石	-	-	1.8~2.0		
0	-	-	-	側	掘方+礎板	-	-	-		
0	-	-	-	側	礎石	-	-	-		青銅板状品、鍛冶関連遺物
0	-	-	-	側	掘方	方	0.3	1.9~2.2		
0	-	-	-	側	掘方	方	0.12	1.4~1.9		
0	-	-	-	側	掘方	不整方	0.25	1.3~2.2		
0	-	-	-	側	掘方+礎板	不整	0.3	1~1.6		
0	-	-	-	側	掘方	不整方	0.3	1.7~2.6		
0	-	-	-	側	掘方	方	0.3	3.9~4.2		
1	SD981	-	-	側	掘方	不整方	0.25	1.2~2.0		
0	-	-	-	側	掘方	方	-	1.3~2.0	SK9007との関係不明	
0	-	-	-	総	掘方	方	-	1.3~1.4		
0	-	-	-	側	掘方	不整方	-	2.5~3.0		
0	-	-	-	側	掘方	方	0.2	1.2~2.3		

-	-	-	-	側	掘方	不整方	-	1.60~3.44		
4	SA7	30.12	-	側	掘方	方	-	1.62~3.04	SA7	
-	-	-	-	側	掘方	不整方	-	1.90~2.58		
2	SD197.254	( )	-	側	礎石	-	-	1.48~( )		
-	-	-	-	総	礎石	-	-	2.08~( )		
1	SD276	-	-	側	礎石	-	-	1.26~( )	鍛冶関連施設	鍛冶関連遺物
2	SD280.290	( )	-	側	掘方	不整方~円	0.24	1.92~2.86	竪穴状遺構 SB78	緑釉陶器
2	SD280.290	( )	-	側	掘方	不整方~円	-	1.50~2.68	竪穴状遺構 SB79	
2	SD275.278.317	( )	-	側	掘方	不整円	-	1.84~( )	鍛冶関連施設	鍛冶関連遺物
1	SD272a	( )	-	側	掘方	不整円	-	1.46~2.18		
-	-	-	-	側	掘方	不整方	-	2.25~2.88		
2	SD83.204	( )	-	側	掘方	不整方	-	1.56~2.18		
1	SD97	( )	-	側	掘方	不整	-	1.80~4.82		
-	-	-	-	側	掘方	不整方	-	1.22~2.14		
3	SD274.389.349	( )	-	側	掘方	不整円	-	1.64~( )	鍛冶関連施設	鍛冶関連遺物
-	-	-	-	側	礎石	-	-	( )		
-	-	-	-	側	掘方	方	-	( )		

柵3	SA1004	(37.87)	-	側	掘方	不整方	0.26	1.26~1.8		
4	SD2298.2302.2303.2304	(56.4)	-	総?	掘方	円	0.14	1.56~4.24		
			-	側	掘方	不整方	1.08	1.28~1.92		
			-	側	掘方	不整方	1.08	1~2.14		
4	SD2306	(36.8)	-	側	掘方	円	0.24	3~3.55		
4	SD2306	(36.8)	-	側	掘方	円	0.24	3.4~3.6		
4	SD2306	(36.8)	-	側	掘方	円	0.24	3.1~3.26		
溝4.柵1	SD2339.2387 SA1002	(65.27)	-	側	掘方	円	-	1.8~2		
溝4.柵1	SD2239.2387 SA1002	(65.27)	-	側	掘方	円	-	2~2.2		
			-	側	掘方	不整円	(0.12)	(0.75)~(2.2)		
2	SD2260.2259		-	側	掘方	円		1.56~2.36		

1	SD3138	(65.85)	-	側	礎石	-	-	-	焼土跡、盛土下焼土	灯明具、刻書土器、鋤鋌先、炭化材
4	SD3139.3140.3141.3142	(144.68)	10.56×10.2×0.2	側	礎石	-	-	-	焼土跡、堅固な土間状の面	ガラス玉(盛土中)、灯明具、刻書土器、鐵、鍛冶関連遺物
4	SD3143.3144	(55.47)	5.7×5.1×0.2	側	礎石	-	-	-	焼土跡	勾玉(盛土中)、朱墨硯

第2章 飛鳥時代から平安時代（IV・V層検出）の遺構と遺物出土状況

表7-2) 掘立柱建物・礎石建物跡（ST）一覧

遺構番号	枝番号	旧遺構名	時期		位置				検出面	方位	規模				
					仮	大地区	中地区	図番号			層位など	棟方向	柱間数 (含む庇)	桁 (m)	梁 (m)
			古代	根拠											
ST 3004			8期前半	検出面	3a	V.VI	J5.F1.A21	69.157	IV-1上	N7°W	(2)×2	3.7	2.9	-	14.43
ST 3005			8期前半	検出面	3a	VI	A12.16.17. 21.22	72.157	IV-1上	N7°W	2×1	3.4	3	-	10.2
ST 3008		VI A23-P9.A22-P2	6～7期?	検出面	3a	VI	A22.23	69.72.73	IV-2	N8°E	( )×2	-	3.95	-	-
ST 3009		SB3017P1.SK3309. 3308.3316.3291.3153. 3164	7期?	切、方位	3a	VI	F3.4	70	IV-2	N3°E	(3)×(2)	(6.18)	3.9	-	(24.1)
ST 3010		SK3106.3108.3169.3179. 3171.3127 SB3006床下P	6～7期?	切、方位	3a	VI	F1.6	69.157	IV-2	N1°W	2×2	4.8	4.2	-	(20.16)
ST 3011		SK3178.3107.3105.3173. 3168	6～7期?	切、方位	3a	V.VI	J5.10 F1.6	69.157	IV-2	N4°W	2×1	3.6	3.1	-	(11.16)
ST 3012		SK3138.3182.3154.3155. 3183.SB3018.掘方P16 SK3134.3136.3136.3135	7～8期?	切、方位	3a	V.VI	A21.F1. J5	69.156	IV	(N5°E)	3×2	5.25	4.18	-	21.95
ST 3013		SK3102.3103.3104 ○P37.SK3101.3111	7～8期?	切、方位	3a	VI	F2.3.7	69.157	IV	N5°E	2×2	3.9	3	-	11.7
ST 3014		SK3089.3081.3084	6～7期?	切、方位	3a	VI	F2.6	68.69	IV-2	N-S	2×( )	4.2	-	-	-
ST 3015		SK3096.3093.3167.3122	6～7期?	切、方位	3a	VI	A21.F1	68.69	IV-2	N6°W	2×1	3.7	3.1	-	(11.47)
ST 3016		SB3017P1.SK3285. 3307.3316.3291.3180. 3181	6～7期?	切、方位	3a	VI	F3.4	70	IV-2	N2°E	(3)×(2)	(6.20)	4.2	-	26.04
ST 3017		VI A14- P7.P5.P4.P2. P1	7～8期?	切、方位	3a	VI	A14	73.154	IV	N3°W	(2)×(2)	(4.52)	(3.85)	-	(17.4)
ST 3018		VI A23- P17.P6.P5.P2. SK3286	6～7期?	切、方位	3a	VI	A23.F3	72.73	IV-2	N6°E	(3)×2	6.2	3.9	-	(24.18)
ST 3019			7～8期?	切、方位	3a	VI	F2.3.7	69.157	IV-1	N5°E	(1)×(1)	(3.95)	(2.9)	-	(11.45)

屋代遺跡群 ③ b区集落

ST 3201	3019	6期?	配置	3b	IV	P14.19	75-77	IV-2上	N4°W	3×2	3.46	3.42	-	11.83
ST 3202	3202	8期?	配置	3b	IV	K24.P4	76.77	IV-2上	N4°W	3×2	4.8	3.42	-	16.42

屋代遺跡群 ④～⑥区集落 (④ b区南・北グループ)

ST 4002	SK4149.4188.SB4142P6. SB4019P.SB4026P	7期以前	切	4b	IV	C4.5.9.10	82.83	IV-2	N4°W	2×1	4.59	4.11	-	18.86
ST 4003	SK4163.4164	-	-	4b	IV	(H17)	80	IV-2	N3°W	( )×( )	-	-	-	-

屋代遺跡群 ④～⑥区集落 (中枢部)

ST 4201	ST4801.SK4401.4415. 4414.4412.4329.4324. 4340.4341.4342.4343.	1期?	切、方位	4c	I	X1.2.6.7	89.159	IV-2	N23°E	5×5	8.76	8.52	2	74.64
ST 4202	SK4273.7274.4275.4276. 4277	1期?	切、方位	4c	I	W9.10	86.87	IV-2	N10°E	2×1	2.08	1.84	-	3.83
ST 4203		2期?	切、方位	4c	I	W9	86.87	IV-2	N24°E	( )×1	-	-	-	-
ST 4204	SK4278.4322.4284.4280	6期以前	切	4c	I	W10	86	IV-2	N18°E	( )×2	-	3.39	-	-
ST 4205	SK4366.4368.4370.4291	1期?	切、方位	4c	I	W14	86.87	IV-2	N14°E	1×1	2.05	1.87	-	3.83
ST 4206	SK4294.4289.4286.4373	1期?	切、方位	4c	I	W10.15 X6.11	86.87	IV-2	N26°E	( )×1	(6.09)	3.72	-	(22.65)
ST 4207	SK4409.4362.4356.4404. 4397.4396.4357.4358	1期?	切、方位	4c	I	X11.16	86.87.89	IV-2	N58°E	3×1	4.53	2.75	-	12.46
ST 4208	SK4817.4266.4271.4276. 4263.4261.4253	1期?	切、方位	4c	I	W5	86.87	IV-2	N19°E	2×2	2.82	2.78	-	12
ST 4209	SK4334.4337.4338.4339	1期?	切、方位	4c	I	X8.13	89.90	IV-2	N2.5°E	( )×( )	(4.18)	(1.98)	-	(8.07)
ST 4502		6期?	方位	4d		W1	94	IV-2	N5°W	(2)×2	(4.5)	2.5	-	(11.25)
ST 4503		8期以前	切	4d		W2.7	95.96	IV-2	N10°E	3×(1)	4.2	(1.6)	-	(6.72)
ST 4504	SK4843	-	-	4d		R21	94	IV-2	N17°W	(2)×(1)	(3.8)	(1.5)	-	(5.7)
ST 5001	SK5065.SK5066	1期?	切、方位	5b	I	R20.25 S16.21	98.99	IV-2	N7°E	2×2	3.65	3.6	-	13.14
ST 5002		2期?	切、方位	5b	I	S16.17.21	98.99	IV-2	N20°E	3×( )	5.95	5.05	-	30.05
ST 5003		2期?	方位	5b	I	R20.25	98.99	IV-2	N23°E	3×( )	6.15	-	-	-
ST 5004		1期?	切、方位	5b	I	S22.23	98.99	IV-2	N17°E	3×( )	4.55	-	-	-
ST 5015		1期?	切、方位	5b	I	R25	98.99	IV-2	N22°E	( )×( )	4.65	-	-	-
ST 5016	ST4801.SB5035(P)	1期?	切、方位	5b	I	S23.X3	89.102	IV-2	N14°E	( )×( )	4.31	-	-	-
ST 5017		1～6期	切	5b	I	S3.4	105.106	IV-2	N7°W	2×( )	4.55	3.35	-	(15.24)
ST 6002		1期?	切、方位	5a	I	R14.19	113	VI上	N25°E	32	8.7	3.65	-	31.76
ST 6003		1期?	切、方位	5a	I	R14.19	113	VI上	N9°W	3×2	5.88	4.1	-	24.1
ST 6004		7期以前	切	5a	I	M14.15.19. 20	117.118	VI上	N15°E	2×2	4.2	3.6	-	15.12
ST 6005		-	-	5a	I	M14.19.20	117.118	VI上	N23°E	3×2	5.3	3.7	-	19.61
ST 6006		6期以前	切	5a	I	N6.11	117.118.121	VI上	N16°E	(3)×( )	6.95	-	-	-
ST 6007		6期以前	切	5a	I	N11	117.118	VI上	N10°E	( )×2	-	4.4	-	-
ST 6008		6期以前	切	5a	I	N11	117	VI上	N7°E	( )×( )	-	3.5	-	-

第4節 集落跡検出の遺構と遺物出土状況

構 造									付属施設	遺 物
外周溝・柵	溝・柵番号	溝・柵内面積	盛土・基壇寸法	柱配列	柱類型	掘方平面形	柱径	柱間距離		
面数	SD/SA	m <sup>2</sup>	桁方向×梁方向×高さ				最小~最大(m)	最小~最大(m)		
4	SD3145~3149	(52.33)	5.35×5.1×0.16	側	礎石	—	—	—		墨書土器
3	SD3142, 3150, 3151	(96.59)	7.5×6.3×0.2	側	礎石	—	—	—		暗文土器
0	—	—	—	側	掘方	不整方	—	1.5~2.0		
0	—	—	—	側	掘方	不整	—	1.98~2.16		
0	—	—	—	側	掘方	不整方	—	2.0~2.5		
0	—	—	—	側	掘方	不整方	—	1.6~3.1		
0	—	—	—	側	掘方	不整方	—	1.65~2.25		
0	—	37.8	—	側	掘方	不整	—	1.5~2.1	SA3001	
0	—	—	—	側	掘方	方	—	1.8~2.3		
0	—	—	—	側	掘方	方	—	1.5~3.1		
0	—	—	—	側	掘方	不整方	—	1.86~2.1		
0	—	—	—	側	掘方	円	—	1.9~2.35		
0	—	—	—	側	掘方	不整方	—	1.85~2.1		
0	—	—	—	側	掘方	不整	—	2.9~3.95		

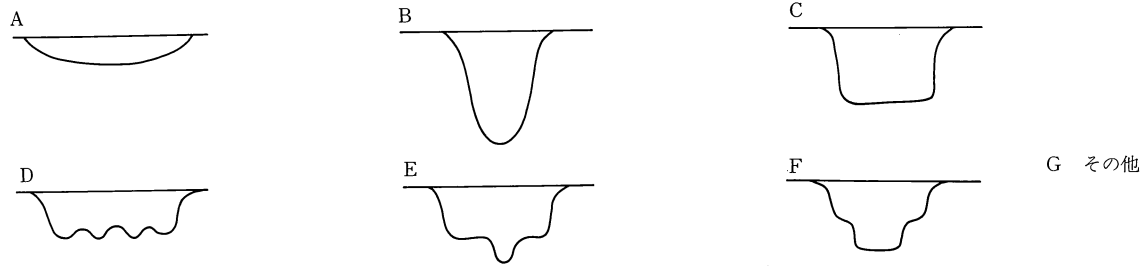
1	SD3278	—	—	側	掘方	不整方	—	1.34~1.90		
0	—	—	—	側	掘方	不整方~円	2.8	1.64~1.92		

0	—	—	—	総	掘方	方	—	1.97~3.94		
0	—	—	—	側	掘方	不整方	(0.21)	(1.08)~(1.45)		

0	—	—	—	側	掘方+礎板	不整方	0.18~0.24	1.57~3.45	SK4848	SK4848内に須恵器大甍片
0	—	—	—	側	掘方	方	—	0.90~1.84		
0	—	—	—	側	掘方	不整方	—	—		
0	—	—	—	側	掘方	不整方~円	—	(1.45)~(1.98)		
0	—	—	—	側	掘方	不整	—	1.87~2.05		
0	—	—	—	側	掘方	不整方	—	1.88~3.72		
0	—	—	—	側	掘方	不整	—	1.4~2.75		
0	—	—	—	側	掘方	不整	—	1.28~1.57		
0	—	—	—	側	掘方	不整	—	(1.6)~(1.98)		
0	—	—	—	側	掘方	不整	0.15	1.1~2.0		
0	SD2298, 2302, 2303	—	—	側	掘方	方	0.3	1.4~1.5		
0	—	—	—	側	掘方	不整	—	1.5~2.0		
0	—	—	—	側	掘方	方	—	1.70~2.00		
0	—	—	—	側	掘方	方	—	1.30~2.10		
0	—	—	—	側	掘方	不整方	—	1.85~2.15		
0	—	—	—	側	掘方	不整	—	1.50~1.55		
0	—	—	—	側	掘方	不整方	—	1.25~1.65		
0	—	—	—	側	掘方	不整	—	0.65~0.69		
0	—	—	—	側	掘方	方	—	2.20~3.45		
0	—	—	—	側	掘方	不整方	—	1.80~2.96		
0	—	—	—	側	掘方	不整	—	1.82~2.52		
0	—	—	—	側	掘方	方~不整方	—	1.70~2.30		
0	—	—	—	側	掘方	円	0.1	1.55~2.30		
0	—	—	—	側	掘方	方	—	1.07~1.40		
0	—	—	—	側	掘方	不整方	—	2.00~2.35		
0	—	—	—	側	掘方	不整円	—	2.50~3.00		

表8 - (1) 井戸跡・土坑（SK）一覧

断面分類記号



更埴条里遺跡 水田域

遺構記号	遺構番号	旧遺構名・番号	仮地区	大地区	中地区	時期	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色横記号	土性	堆積状況ほか	遺物
SK 3041			D	XVI	B6	古代	7	円	C	0.6	0.6	0.4	不明	黒	10YR3/1	シルト	IV-1層に類似	
SK 5131			F	XV	A20	古代	9	円	-	0.25	0.25	-	柱状	-	-	-	-	-
SK 5132			F	XV	A20	古代	9	円	-	0.4	0.4	-	柱状	-	-	-	-	-
SK 5133			F	XV	A20	古代	9	円	-	0.3	0.3	-	柱状	-	-	-	-	-
SK 6035			G	XIV	P25	古代	10	楕円	C	1	0.8	0.45	土坑	褐灰	10YR4/1	シルト	IV層より細粒、砂微量混入	
SK 6037			G	XIV	P20	古代	10.24	楕円	C	1.4	0.96	0.5	土坑	褐灰	10YR4/1	シルト	砂ブロック混入	
SK 6038			G	XIV	P20	古代	10	円	C	1	1	0.2	土坑	褐灰	10YR4/1	シルト	砂微量混入	
SK 6394			G	XIV	Q17	古代	10.24	円	F	1.2	1.1	0.68	土坑	褐灰	10YR4/1	シルト	IV-1層に類似	
SK 8386			I	XII	K7	古代	12	円	A	0.1	0.1	0.05	柱状	灰色	-	砂質		
SK 8387			I	XII	F24	古代	12	楕円	A	0.3	0.2	0.05	柱状	灰色	-	シルト		
SK 8390			I	XII	K2	古代	12	円	B	0.3	0.3	0.15	柱状	褐灰	5YR4/1	シルト		
SK 8391			I	XII	K2	古代	12	円	B	0.25	0.25	0.2	柱状	褐灰	5YR4/1	シルト		
SK 8392			I	XII	K2	古代	12	円	B	0.2	0.2	0.15	柱状	褐灰	5YR4/1	シルト		
SK 8396			I	XII	K11	古代	12	円	B	0.3	0.3	0.55	柱状	褐灰	5YR4/1	シルト	1層に砂、2層にVI層粒子混入	
SK 8398			I	XI	O15	古代	12	円	B	0.25	0.25	0.1	柱状	褐灰	5YR5/1	シルト		

更埴条里遺跡 K (J) 地区集落

遺構記号	遺構番号	旧遺構名・番号	仮地区	大地区	中地区	時期	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色横記号	土性	堆積状況ほか	遺物
SK 10025			J	IX	Y19.24	古代	13	長方形	C	1	0.7	0.41	焼土坑	黄灰～暗褐	2.5Y4/1~10YR3/3	シルト	底部に炭化物、ブロック多量混入	
SK 10026			J	IX	Y15	古代	13	方形	C	0.6	0.56	0.27	焼土坑	褐灰～黄灰	10YR4/1~2.5Y4/1	シルト	底部に炭化物、ブロック多量混入	
SK 10027			J	IX	Y15	古代	13.160	長方形	C	0.9	0.62	0.3	焼土坑	黄灰～暗褐	2.5Y4/1~10YR3/4	シルト	底部に炭化物、ブロック多量混入	
SK 10028			J	IX	Y10	古代	13	不整形	C	1.5	1.1	0.32	焼土坑	褐灰～黒褐	10YR4/1~10YR2/3	シルト	ブロック多量混入	
SK 10029			J	IX	Y4	古代	13	長方形	C	1.2	0.8	0.2	焼土坑	褐灰～黒褐	10YR4/1~10YR3/1	シルト	底部に炭化物、ブロック多量混入	
SK 9007			K	IX	O22	古代?	25.32	円	C	1.32	1.28	0.16	浅円土	黒褐～黄褐	10YR3/2~2.5Y4/1	砂質土	黄灰ブロック混入	
SK 9010			K	IX	O21.22	8期	25.32	円	C	1.5	1.4	0.3	浅円土	黒褐	10YR3/2		褐色土ブロック混在	
SK 9058			K	IX	O17	古代	32	円	C	0.6	0.6	0.3	柱?	褐	10YR4/4	シルト		
SK 9062			K	IX	T2	古代?	25	円	F	0.38	0.38	0.4	柱状	褐	10YR4/4	砂質シルト		
SK 9121			K	IX	O21	古代?	32	円	E	0.8	0.8	0.26	柱?	暗褐	10YR3/4	砂質シルト		
SK 9129			K	IX	O21	7~8	25	不整	C	0.9	0.7	0.26	焼土	褐灰	10YR4/1		焼土・炭化物混入	
SK 9131			K	IX	O11	9c	32	円	A	0.3	0.3	0.08	焼土	暗赤褐	5YR3/4		焼土・炭化物混入	
SK 9132			K	IX	O11	9c	32	円	A	0.4	0.4	0.1	焼土	暗赤褐	5YR3/4		焼土・炭化物混入	
SK 9135			K	IX	T2	5期	25	円	C	0.5	0.5	0.14	浅円形	褐灰	7.5YR5/1			
SK 9168			K	IX	T7	古代~中世	25	長方	-	1.1	0.8	-	?	-	-	-	-	-
SK 9170			K	IX	T1	6期	25	長方	G	(0.7)	0.7	0.4	住居跡か?	にぶい黄褐	10YR5/4~5/3	-	-	-
SK 9184			K	IX	O1	?	32	不整	A	0.9	0.9	0.1	不整形	-	-	-	-	-
SK 9185			K	IX	O6	?	32	円	A	(0.46)	1.1	0.6	-	-	-	-	-	-
SK 9193			K	IX	T6	古代?	25	円	-	0.7	0.7	-	浅	暗褐	10YR3/4	シルト	褐色シルト、にぶい黄褐色砂混在	
SK 9199			K	IX	T2	古代?	25	長方	A	1.7	0.96	0.16	浅窪み	にぶい黄橙	10YR6/4			
SK 9259			K			8期	332											漆附着土器
SK 9265			K	IX	O20	古代	33.160.332	円	B	1.1	1.1	(2.0)	井戸	にぶい黄褐~青灰		砂質土	シルト混入	横櫛、墨書土器
SK 9276			K	IX	P11	古代	-	長方	C	0.65	0.6	0.2	焼土坑	-	-		壁焼土、底面に炭化物集中	
SK 9278			K	IX	K14	?	37	不整	D	1	0.9	0.45	柱?	-	-		礫(礎板?)混入	
SK 9279			K	IX	K13	?	37	円	A	0.8	0.7	-	?	灰黄褐	10YR4/2			
SK 9283			K	IX	F21.K1	8期?	38	方	A	3	2.6	0.3	竪穴状	褐	10YR4/4	砂~シルト	上に砂層、下はIV-1層とブロック	
SK 9284			K	IX	K2	?	35	方	A	0.6	0.6	0.2	柱?	-	-			
SK 9285			K	IX	F16.17	?	38	不整方	A	1.9	1.9	0.6	不整	黒褐	10YR3/2			
SK 9300			K	IX	K21.22	9c	29.31	円	F	2.5	2.5	0.7	井戸	褐灰~灰黄	10YR6/1~2.5Y6/2	シルト		横櫛
SK 9330			K	IX	K16	古代~中世	35	円	A	0.5	0.5	0.1	炭	黒褐		砂質土	炭化物多量混入	
SK 9348			K	IX	O15	古代	35	不整	D	0.8	0.3	0.16	不定形	灰白~灰褐		シルト	ブロック混入	
SK 9352			K	IX	P2	古代	29	(楕円)	A	(1.3)	0.8	0.3	浅窪み	灰褐		シルト	ブロック混入	
SK 9361			K	IX	F23	?	38	円	B	0.7	0.7	(0.3)	?	暗褐		砂		
SK 9362			K	IX	K17	古代	30	円	A	0.2	0.2	0.1	浅窪み	灰黄	2.5Y6/2	砂質シルト		
SK 9373			K	IX	K11.16	古代~中世	35	円	A	0.9	0.8	0.14	浅土坑	-	-			
SK 9379			K	IX	O23	8期	27	不整	A	1.4	0.9	0.14	浅窪み	灰黄褐	10YR4/2	-		
SK 9380			K	IX	O23	古代	25.27	楕円	A	1.2	0.8	0.2	浅窪み	灰黄褐	10YR4/2		VI層ブロック混入	
SK 9381			K	IX	O23	古代?	27	円	A	0.8	0.8	0.3	?	にぶい黄褐	10YR4/3		VI層ブロック混入	
SK 9384			K	IX	K6	?	27	不整	B	0.9	0.4	0.5		褐	-	砂質土		
SK 9391			K	IX	T3	8期前	162	方	C	2.4	2.46	0.56	鍛冶関係	黒褐	-	砂質土	炭化物、IV層ブロック混入	













表8-(7) 井戸跡・土坑（SK）一覧

屋代遺跡群 ⑥区旧河道内

遺構記号	遺構番号	旧遺構名・番号	仮地区	大地区	中地区	時期	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色 調	土色標記号	土 性	堆積状況ほか	遺 物
SK	7015		6a	I	I17		194	楕円	A	1.18	1.12	0.36		図版194	図版194	中粒砂～シルト	炭化物層あり	
SK	7016		6a	I	I16		197	円	A	0.32	0.14	0.08		—	—	—		
SK	7017		6a	I	I22		194	楕円	G	0.72	0.66	0.28		黒褐	2.5Y3/1	シルト		斎串
SK	7018		6a	I	I16		197	円	G	0.9	0.86	0.26		—	—	—		
SK	7019		6a	I	I22		194	不整形	A	(1.04)	1.22	0.1		暗褐	10YR3/3	中粒砂	底部に炭化物堆積	
SK	7020		6a	I	I22		194	楕円	G	(1.06)	0.98	0.16		暗褐	10YR3/3	シルト	埋土上に炭化物	
SK	7021		6a	I	I22		194	楕円	C	1.1	0.84	0.14		黒褐～ 灰黄褐	10YR3/2 ～5/2	シルト～ 細砂	炭化物層あり	
SK	7022		6a	I	I22		194	不整形	A	0.9	0.67	0.06		黒褐～ 灰黄褐	10YR3/2 ～5/2	シルト～ 細砂	炭化物が堆積	
SK	7027		6a	I	I21		174	不整形	B	0.35	0.3	—		黒褐・ 暗灰黄	2.5Y3/1 5/2	中粒砂 シルト		
SK	7028		6a	I	I21		174	円	—	0.25	0.15	—		—	—	砂		
SK	7029		6a	I	I22		174	楕円	C	1.4	0.9	0.51		図版174	図版174	図版174	埋め戻し	
SK	8016		6b	I	I10		338	楕円	C	0.96	0.52	0.12		図版174	図版174	砂	底部に炭化物堆積	漆書き土器
SK	8018		6b	I	I19.24		168	楕円	G	1.4	0.8	0.9		におい黄褐	10YR5/3	—	立木跡	
SK	8019		6b	I	I20		23	楕円	B	0.3	0.23	0.5		黒褐～ 灰黄褐	10YR3/1 ～4/3	—	立木跡	
SK	8020		6b	I	I20.25		23	楕円	G	0.5	0.38	0.22		—	—	—	立木跡	
														灰黄褐・ 黒褐	10YR4/2 1/2	—	立木跡	

※④～⑥区の井戸跡は時期判別が難しいため、一括して『古代2、中・近世編』に掲載する。

表9 炉・焼土跡（SF）一覧

更埴条里遺跡 K地区集落

遺構番号	仮地区	大地区	中地区	分類	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	埋 土	図番号
SF901	K			鍛冶関連遺構参照						27.162

屋代遺跡群 ①区集落

SF2	1f	VII	T1	屋外焼土跡	不整形	1.1	0.42	0.21	砂、焼土、炭化物混入	45
SF4	1f	VII	T7	屋外焼土跡	不整形	0.58	0.52	0.2	炭化物、焼土混合	47.48
SF8～13	1g			鍛冶関連遺構参照						163

屋代遺跡群 ③a区集落

SF3007	3a	VI	F2	ST3003炉?	不整形	0.42	0.26	3	砂、焼土、炭化物混入	69.156
SF3008	3a	VI	F2	ST3003炉?	不整形	0.46	0.18	0.04	砂、焼土、炭化物混入	69.156
SF3009	3a	VI	F7	—	不整形	2	0.4	0.14	砂、焼土、炭化物混入	69
SF3010	3a	VI	F7	—	不整形	1.24	62	0.1	砂、焼土、炭化物混入	69

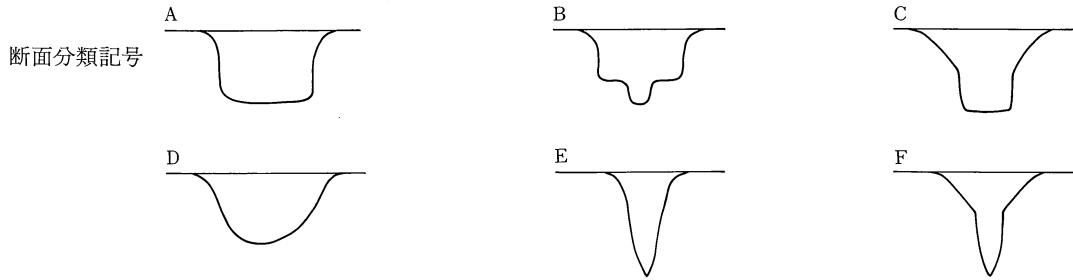
屋代遺跡群 ③b区集落

SF3020	3b	IV	P14	屋外焼土跡	不整形	0.9	0.4	0.13	焼土、炭化物混入	77
--------	----	----	-----	-------	-----	-----	-----	------	----------	----

表10 屋代遺跡群 ①区集落内SX一覽

遺構番号	分類	大	中地区	下層竪穴建物跡	時期	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	堆積状況	遺物	図版番号
SX1	遺物廃棄場	VII	T11	SB56	8期前半	6.35	4.72	0.55	炭化物、焼土、灰多混入	土器、礫など	125
SX4	遺物廃棄場	VII	O24. T4	SB69	6期	2.02	1.08	-	-	-	50
SX5	竪穴建物掘方?	VII	T14. 15	SB87脇	6期?	6.04	2.32	0.21	-	土器片	42
SX8	遺物廃棄場	VII	O18. 23	SB39. 50. 51. 59	8期前半	4.47	3.85	0.23	炭化物少混入	土器片	50
SX9	鍛冶関連遺物廃棄場	VII	S4. 5	-	8期前半	3.28	2.28	0.28	炭化物ほか	鉄滓ほか	164
SX13	遺物廃棄場	VIII	K22. P2. 7	SB74. 76. 80. 82	8期前半	9.72	3.32	0.48	炭化物、焼土、灰多混入	土器ほか	51

表11- (1) 柵・杭列・材木列など一覽 (SA)



更埴条里遺跡 K地区ほか

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	類別	列方向	規模(m)	材径・柱穴径	材・柱穴平面形	柱穴断面形	材・柱穴深さ	材間距離	並行溝	図版番号	備考
SA	701	I	XIV	A23. 24	-	N88° W	11.4	0.18~0.30	円	E	0.6	2.0~4.0	SD714	11	水路に沿う
SA	903	K	IX, X	O15, K11	集落内区画	N86° W	4.8	0.19~0.46	円	B, E	0.3	0.9~1.9	-	14.35	
SA	904	K	X	K11. 12	集落内区画	N85° W	7.35	0.2~0.5	円	B, E	0.25	2.1~2.9	-	14.35	
SA	905	K	X	K11. 12	集落内区画	N82° E	2	0.2~0.4	円	E, D	0.14	0.3~0.8	-	14.35	
SA	906	K	X	K7	集落内区画	N81° W	2	0.3~0.35	円	E	0.15	0.9~1.1	-	14.35	
SA	907	K	X	K23	集落内区画	N4° W	9.6	0.28~0.55	円, 不整円	A, C, E	0.34	0.4~3.3	SD981	14.30	
SA	908	K	X	K23	集落内区画	N5° E	5.6	0.2~0.5	円, 不整円	B, E	0.3	0.25~4	SD981	14.30	
SA	909	K	X	K8. 13	集落内区画	N3° E	(3)	0.8~1	楕円, 長方円	B	0.3	1.3	SD936	14.37	建物の可能性あり
SA	910	K	X	K8. 13	集落内区画	N10° W	7	(0.2)~(0.8)	円, (楕円)	B, C		1.2~3.0	SD936	14.37	建物の可能性あり
SA	911	K	IX	T13. 14	集落境	N85° E	4.7	0.2~5.8	円, 不整円, 長方円		0.5	1.1~2.0	-	14.27	

屋代遺跡群 ①区集落、集落周辺

SA	遺構記号	仮地区	大地区	中地区	類別	列方向	規模(m)	材径・柱穴径	材・柱穴平面形	柱穴断面形	材・柱穴深さ	材間距離	並行溝	図版番号	備考
SA	1	1b. c	VII	X4. 5	集落境かそれ以上	N78° E	5.62	0.12~0.36	円, 楕円, 長方	A, E, F	0.4	0.84~1.10	SD45	15. 16. 39	掘方溝あり、SA1・2・3は一連の遺構
SA	2	1b. d	VII, VIII	Y1~U1	集落境かそれ以上	N70° E~N97° E	38.85	0.12~0.44	円, 楕円	A, E	0.2	0.28~3.42	SD45	15. 16. 39	掘方溝あり、SA1・2・3は一連の遺構
SA	3	1d. e	VII	Y3	集落境かそれ以上	N101° E	1.98	0.22~0.62	楕円	E, D	0.38	0.34~1.05	SD45	41	SA1・2・3は一連の遺構
SA	4	1b. c	VII~IX	S25	地域、材木列	N9° W	80.02	0.24~0.34	楕円, 長方	A, E	0.12	0.64~1.02	SD32	39	掘方溝あり、K地区まで続く?
SA	5	1d. e	VII	T14. 19	集落内境	N-S	3.92	0.3~0.4	正方	A, F	0.14	0.3~0.4	SD69	42	建物の可能性あり
SA	6	1d. e	VIII	P16. 21	集落内境	N3° W	10.86	0.3~0.5	円, 不整	A, E	0.34	1.52~6.18	SD75	16. 42	
SA	7	1d. e	VII	T15. 20	建物区画	ST2周囲	(23. 44)	0.2~0.44	円, 楕円, 長方	A, E, F	0.37	2.6~3.64	-	16	STを囲む
SA	8	1f	VII	S5	不明	弧状	1.96	0.22~0.35	円, 楕円	-	0.15	0.36~0.54	-	45	弧状
SA	9	1f	VII	N24. 25	集落内区画	N23° E	4.08	0.28~0.34	円, 正方	A, D	0.24	1.04~2.82	SD165	45	
SA	10	1f	VII	T12	不明	N92° E	4.86	0.1~0.2	円, 楕円	A, E	0.16	0.52~2.86	SD158	47	
SA	11	1f	VII	T3	不明	-	1.62	0.14~0.16	円	A, F, D	0.26	0.46~0.56	SD378	47	
SA	12	1f	VII	T3	不明	N92° E	1.84	0.16~0.2	円	-	-	0.88~0.94	SD143	47. 50	
SA	13	1f	VII	T9	集落内区画	N5° W	5.04	0.2~0.38	円, 楕円	A, D	0.32	1.22~2.04	SD161	50	
SA	14	1f	VII	T9	不明	N57° E	1.62	0.2~0.38	楕円, 長方	A, D	0.32	0.54~0.58	-	50	
SA	15	1g	VII	T10	不明	N24° E	1.02	0.16~0.26	円, 楕円	A, D	0.14	0.48~0.5	-	50	
SA	16	1f	VII	T4	不明	N45° E	1.32	0.22~0.3	楕円	E, D	0.28	0.34~0.48	-	50	
SA	17	1f	VII	O23. 24	集落内区画	N75° E	2.98	0.2~0.32	楕円	D	0.1	0.82~1.22	SD226	50	
SA	18	1f	VII	O16	集落内区画	N79° E	6.98	0.22~0.54	楕円	A, E, D	0.4	0.68~1.36	SD263. 392	16. 52	
SA	19	1f	VII	S5~T1	集落内区画	N88° E	10.38	0.16~0.32	円, 楕円	D	0.25	0.62~2.9	-	45	南側に並行してピット
SA	20	1f	VIII	P1. 2	集落内区画	N70° E N88° E	4.23	0.28~0.55	円, 楕円	D	0.12	0.74~1.55	-	51	
SA	21	1f	VII	S9	不明	N94° E	4.08	0.47~0.48	正方	-	0.45	1.82~2.18	SD251	45	
SA	22	1f	VII	S4. 9	不明	N4° W	2.75	0.44~0.60	長方	-	0.38	1.38~1.45	-	45	
SA	23	1f	VII	O21	不明	N82° E	6.02	0.44~1.02	不整	A	0.43	0.90~1.45	-	45. 52	
SA	2001	2b	VII	07. 8	集落境	N83° E	5.6	0.22~0.38	円, 楕円, 正方	A, D	0.25	0.88~1.6	SD2433	16. 54	
SA	2002	2b	VII	08. 9	集落境	N85° E	9.45	0.16~0.34	円, 楕円, 長方	A, E, D	0.23	0.36~1.52	SD2433	16. 54. 56	
SA	2003	2b	VII	02. 3	集落境	N67° E	7.32	0.10~0.32	円	D	0.07	0.26~1.98	SD2465	16. 54. 75	
SA	2004	2b	VII	04	集落境	N82° E	3.68	0.08~0.24	円	D	0.06	0.14~1.36	SD2465	56	

第2章 飛鳥時代から平安時代(IV・V層検出)の遺構と遺物出土状況

表11-(2) 柵・杭列・材木列など一覧(SA)

屋代遺跡群 ②区集落

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	類別	列方向	規模(m)	材径・柱穴径	材・柱穴平面形	柱穴断面形	材・柱穴深さ	材間距離	並行溝	図版番号	備考
SA 1001	2j	V・IV	T20, P16		集落境	N86°E	4.58	0.3~0.54	円	E, F	0.12	1.02~1.38	—	17.18.65	
SA 1002	2j	V	T14, 19		建物区画?	N11°W	1.85	0.18~0.44	円	E, F	0.13	0.90~0.95	SD2339	17.63	
SA 1003	2e	V	S20, T16		集落内区画	N88°E	3.05	0.20~0.30	円, 楕円	E, F	0.12	1.12~2.04	—	59	
SA 1004	2i	V	T8, 13		建物区画	N5°W N82°E	(24.65)	0.24~0.34	円	E, F	0.16	5.70~6.85	SD2299	18.63	
SA 1005	2e	V	S25		集落内区画	N50°E	2.9	0.20~0.32	円, 楕円, 不整	E, F	0.1	0.55~1.55	—	59	
SA 1006	2e	V	S24, 25		集落内区画	N87°W	2.18	0.20~0.25	円, 楕円	E, F	0.1	0.55~0.95	—	59	
SA 1007	2e	V	S19		集落内区画	N84°E	1.3	0.18~0.24	円	E, F	0.09	1.30のみ	—	59	
SA 1008	2e ~1	V	~T21		集落内区画	北側N12° W南側N10° E	14.75	0.16~0.45	円, 楕円	E, F	0.15	0.26~2.50	—	17.18.59.62	ピット群
SA 1009	2i	V	S5		集落内区画?	N0°E	1.9	0.40~0.44	円	D	0.11	0.94~1.0	SD2318	62	
SA 1010	2i	V	S15		集落内区画	N8°E	4.52	0.18~0.46	円, 楕円	E, F	0.12	0.30~1.85	—	17.62	
SA 1011	2i	V・IV	T5, P1		建物区画	N88°E	3.4	0.22~0.30	円	E, F	—	3.40のみ	SD2298	18.65	
SA 1012	2i	V	S14, 19		集落内区画?	N44°E	5.8	0.24~0.30	円, 楕円	E, F	0.09	1.10~1.85	—	17.59	列となるか否か疑問
SA 1013	2i	V	S10		集落内区画	N84°E	4.9	0.20~0.45	円	E, F	0.14	1.05~2.35	SD	62	

屋代遺跡群 ③a区集落

SA 3001	3a	V・IV	E25, A2 I, J5, F1		建物区画	N2°E	24.41	0.2~0.3	円	E	0.17	1.45~2.4	—	67.69	ST3013
SA 3002	3a	VI	J5, 10		集落境?	N37°E	1.76	0.18~0.2	円	E	なし	0.64~1.16	—	67	
SA 3003	3a	VI	A13		建物区画	N80°W	2.2	0.20~0.28	円	E	0.2	0.88~1.3	—	73	ST3002
SA 3004	3a	VI	A13		集落境?	N70°E	2.44	0.20~0.30	円	E	0.14	0.7~1.72	SD3103	73	

屋代遺跡群 ③b区集落

SA 3201	3b	IV	L24		集落内区画	N70°W	3.58	0.26~3.60	円, 不整	A, E	0.4	1.72~1.9	—	20.78	
SA 3202	3b	III	P13		集落内区画	N14°W	3.14	0.34~0.80	円, 長方, 円	A, E, D	0.41	1.42~1.70	SD3257	20.77	
SA 3203	3b	III	P18		集落内区画	N2°W	2.59	0.14~0.58	円, 楕円	A, F	0.47	1.10~1.55	—	20	屈曲
SA 3204	3b	III	P19		集落境?	N4°E	1.7	0.22~0.40	円, 楕円	D	0.35	0.65~0.98	SD3262	75	SD沿い北側ピットを含む?
SA 3205	3b	III	P4		—	N10°W	0.86	0.26~0.28	円	B	0.29	0.34~0.5	—	77	屈曲
SA 3206	3b	III	P4		—	N5°E	0.52	0.14~0.32	円, 楕円	E	0.24	0.36	—	77	屈曲

屋代遺跡群 ④~⑥区集落

SA 4001	4b		H12, 16, 17		集落境?	N38°E	15.18	0.26~0.46	円, 楕円, 方	A, B, D, E	0.08~0.38	0.36~3.28	SD4035 ほか	21.80	
SA 4002	4b		H16, 17, 21		集落境?	N37°E	15.4	0.18~0.57	円, 楕円	A, B, D, F	0.20~0.62	0.62~1.46	SD4035 ほか	21.80	
SA 4003	4b		H16, 21		集落境?	N36°E	2.82	0.24~0.35	円, 楕円	D	0.18~0.46	0.52~1.32	SD4035 ほか	80	SA4004と対
SA 4004	4b		H17		集落境?	N46°E	2.4	0.26~0.33	円, 楕円	A, D	0.20~0.52	0.32~0.86	SD4035 ほか	80	SA4003と対
SA 4005	4b		H17		集落境?	N41°E	3.1	0.16~0.33	円, 楕円	D	0.16~0.25	0.60~0.74	SD4035 ほか	80	
SA 4006	4b		H17		集落境?	N13°W	1.22	0.18~0.44	円, 楕円, 不整	D	0.24~0.42	0.24~0.54	SD4035 ほか	80	SA4004か4005と対
SA 4007	4b		H3		集落境?	N25°E	2.86	0.22~0.43	円, 楕円, 不整	A, D, F	0.20~0.60	0.67~0.70	SD4035 ほか	80	
SA 4201	4c	I	X2, 7		集落内区画	N20°E	7.38	0.38~0.82	円, 楕円, 長方	A, B	0.42~0.81	1.56~2.02	—	20.89	掘方溝あり、
SA 4202	4c	I	W10, X6		集落内区画	N76°W	7.17	0.32~0.72	円, 楕円, 長方	A, B, D	0.20~0.53	1.28~2.50	—	20.87	掘方溝あり、
SA 4203	4c	I	X21, X16		集落境か集落内区画	N53°W	8.78	0.23~0.47	円, 楕円, 長方	A, D	0.19~0.31	1.62~6.85	SD4209	85	④b集落を別とすると集落境
SA 4204	4c	I	W20		集落境か集落内区画	N83°W	6.23	0.26~0.35	円, 楕円	D	0.10~0.21	2.68~3.58	—	21.82	④b集落を別とすると集落境
SA 4501	4a	IV	B19, 20, 24, C18, G4		耕地区画?	N26°W, N85°W	29	0.1~0.9	円, 楕円, 不整			0.3~4.5	—	21	
SA 4502	4a	IV	B19, 24, C4, 9		耕地区画?	N5°W	23	0.1~0.4	円, 楕円, 不整			0.4~4.0	—	21	
SA 4503	4d	I	V15		集落境?	N65°W	1.9	0.4~0.2	円	A, D	0.15	0.8~1.1	—	21.22.94	
SA 4504	4d	I	W11, 12		集落境?	N65°E	1.6	0.2~0.25	円	A, D	0.25	0.65~0.85	—	21.22.93.94	
SA 4505	4d	I	R22, 23		集落内区画	N70°W	4.8	0.3~0.6	円, 楕円	A	0.4	0.5~0.8	—	96	
SA 6001	5a	I	M13, 14			N73°W	6.5	0.54~0.90	円, 楕円	E, D	0.18	1.30~2.10	—	115.117	
SA 6002	5a	I	R6, 7, 8			N77°W	15.15	0.20~0.90	円, 楕円, 長方	A, B, C, E	0.33	0.70~2.30	—	22.70.113	

屋代遺跡群 ⑥区旧河道内

SA 7001	6a	I	H5, 10, 15, 11		集落から水田間の橋か?	N15°E	18	0.15~0.2	円, 楕円	E	0.4~2.4	0.2~5.0	—	168.189	
SA 7002	6a	I	H10, 16		畦畔排水口に伴う施設か	N90°E	5	0.05~0.10	半円, 角	E	0.4~0.5	0.2~0.6	—	167.186	
SA 7003	6a	I			自然流路護岸の杭か	N40°W	6	0.01~0.05	円, 楕円	E	—	0.4~1.0	—	23.195	
SA 7004	6a	I			畦畔排水口に伴う施設か	N20°E	7	0.05~0.1	円, 楕円	E	0.3~1.5	0.1~1.0	—	23.197	
SA 8001	6b	I	I13, 14		自然流路護岸の杭か	N90°E	32	0.01~0.05	円, 楕円	E	—	0.1~4.0	—	23.196	立木を伴う
SA 8002	6b	I	I13, 14, 15		自然流路護岸の杭か	N65°E	17	0.05~0.2	円, 楕円	E	—	0.1~8.0	—	168.192	立木を伴う
SA 8003	6b	I	I13, 14		自然流路護岸の杭か	N90°E	3	0.05~0.15	円, 楕円	E	—	0.4~2.1	—	168	
SA 8004	6b	I	I8, 9		自然流路護岸の杭か	N80°E	5	0.05~0.15	円, 楕円	E	—	0.1~3.1	—	168	立木を伴う

表12- (1) 溝・自然流路跡 (SD) 一覽

断面分類記号 A B C D E その他



遺構記号	旧遺構番号	時期	仮地区	中地区	区番号	仮分類	平面形状	断面形状	流路方向	全長 (m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色・層記号	土性	埋積状況・特徴	遺物・出土状況	備考	
SD 701	8		E X V	L19	水路	不明	不明	C	西南西→東北東	(47)	1.6	0.31	褐灰	10VR5/1	シルト→粘土	下部にVI層ブロック混入	土器片	上下、溝注2条あり	
SD 713	11		H X III, X IV	J5, F1	水路	直線的	A	A	西→東	(10)	0.7	0.1	灰黄褐～褐灰	10VR5/2～5/1	シルト主体	VI層・褐鉄ブロック混入		SD715→本溝	
SD 714	11, 24		H X III, X IV	E25, A21, J5, F1	水路	直線的	A	A	西→東	(14)	1.3	0.2	褐灰	10VR4/1	シルト主体	SD715より色調が暗い			
SD 715	11, 24		H X III, X IV	E25, A21	水路	直線的	D	D	西→東	(51)	1.5	0.2	灰黄褐～褐灰	10VR5/2～5/1	シルト主体	SD714より色調が明るい		古墳後期の可能性あり	
SD 716	11, 24		H X III, X IV	E25, A22	水路	やや蛇行	A	A	西→東	(20)	1	0.3	褐灰	10VR4/1	シルト主体	ブロック混入			
SD 717	11		H X III, X IV	E20, A16	水路	やや蛇行	A	A	西→東	8.8	0.25	0.1	灰黄褐	10VR5/2	シルト主体	ブロック混入			
SD 718	11		H X III, X IV	Y15, I9, 20	水路	不整形	E	E	西→東	6.0	4.5	0.25	灰黄褐	10VR5/2	シルト主体	ブロック混入			
SD 719	11		H X III, X IV	J20, F16	水路	直線的	A	A	西南西→東北東	7.0	0.8	0.25	褐灰	10VR4/1	シルト主体				
SD 740	11, 24		H X II	I15～25, V11	水路	ほぼ直線的	A	A	南西→北東	25.0	0.48	0.09						SD740～745は一連の溝	
SD 741	11, 24		H X II	U15, 20, V11	水路	ほぼ直線的	A	A	南西→北東	14.0	0.34	0.23						SD740～745は一連の溝	
SD 742	11		H X II	V11	水路	ほぼ直線的	A	A	南西→北東	4.0	0.2	0.2						SD740～745は一連の溝	
SD 743	11		H X IV	A4, 9	水路	やや蛇行	A	A	西南西→東北東	4.0	0.6	0.12						SD740～745は一連の溝	
SD 744	11		H X I, X IV	I25, A4, 5	水路	やや蛇行	A	A	西南西→東北東	10.0	0.2	0.12						SD740～745は一連の溝	
SD 745	11		H X IV	A18, 23	水路	直線的	A	A	南西→北東	(8.0)	0.3	0.11						SD740～745は一連の溝	
SD 826	12, 24		I, X I	D19	水路?	直線的	A	A	北西→南東	4.8	0.8	0.1						SD740～745は一連の溝	
SD 902	25, 26		K IX	T02, 07, 12	区画	ほぼ直線的			北北西→南南東	6.4	0.8	0.3	褐灰	10VR4/1				SD740～745は一連の溝	
SD 903	25, 26		K IX	T7	区画	直線的			西南西→東北東	2.4	0.4	0.2	褐灰	10VR4/1				SD740～745は一連の溝	
SD 904	25, 26		K IX	T6, 7	区画	やや蛇行			西南西→東北東	9.5	0.9	0.5	褐灰	10VR4/1				SD740～745は一連の溝	
SD 905	25, 26		K IX	T11, 12	水路?	直線的			西→東	5.4	0.5	0.15						SD740～745は一連の溝	
SD 906	14, 31, 32	6～7期	K IX	J22, 23, 01～6	水路	直線的			南西→東北	(24)	4	1	黄褐～黒褐	10VR5/8～2/3	砂質シルト	畿内系土器		SD740～745は一連の溝	
SD 907	25, 26		K IX	022, T2, 3	区画	直線的			北北西→南南東	(3.4)	0.3	0.12						SD740～745は一連の溝	
SD 908	25, 32		K IX	021	区画	直線的			北北西→南南東	3.9	0.7	0.14						SD740～745は一連の溝	
SD 936	30, 37, 38	8期前半	K X	F17～23, K2～23, F8	区画	直線的			南南東→北北西	52.0	1.6	0.3	にぶい黄褐～黒褐	10VR4/3～2/3				砂埋積	SD740～745は一連の溝
SD 966	SD996～		K X		区画	ほぼ直線			南→北	5.52	0.64	0.7						切層を切り込む	
SD 970			K X	F17	区画	ほぼ直線			南→北	10.4	1.0	0.3							
SD 972		6期前後	K X	K8, I3, 18	区画	ほぼ直線			南南東→北北西	31.0	1.5	0.6							
SD 974		6期	K IX	012～23	区画	ほぼ直線			南→北	3.6	0.7	0.2	にぶい黄褐～黒	10RR4/3～3/2	やや砂			墨書、刻書土器	
SD 975			K IX	P1, 2	区画	ほぼ直線			西→東	(8.8)	0.7	0.3	にぶい黄褐	10VR7/3	砂質シルト				
SD 980			K X	K16	区画?	一部で屈曲			西→東	9.8	1.0	0.3							
SD 981		9c	K X	P3, K17, I8, 2, 23	区画	直線的			南→北	(3.4)	0.28	0.1	にぶい黄褐～灰黄	10VR7/3～2, 5V6/2	シルト				
SD 982			K IX	T5, 10	区画	直線的			南→北	(9.6)	0.6	0.1	にぶい黄	2, 5V6/4	シルト				
SD 983		6期	K IX	025, T5	区画	直線的			南→北	2.5	0.8	0.1	灰褐	10VR6/2～7/3	シルト			墨書、畿内系土器	
SD 985			K IX	P8	区画	直線的			南→北	6.4	0.6	0.2	灰黄褐～褐灰	10VR8/4～5/1	シルト				
SD 986			K IX	T5, 10	区画	直線的			南→北	(6.2)	0.3	0.1	明黄褐～灰黄褐	10VR7, 5～5/2	シルト				
SD 987			K IX	T4	区画	直線的			南→北	2.2	0.3	0.1	にぶい黄褐	10VR7/3	砂質シルト				
SD 989			K IX	T4, 9	区画	直線的			北北西→南南東	3.8	0.2	0.1	にぶい黄褐	10VR7/4	シルト				
SD 990		9c	K IX	T08, 09, 10	区画	直線的			西→東	17.5	2.5	0.2	黄灰	2, 5V6/1	粘土質シルト				
SD 993			K IX	T11, 12	水路?	直線的			南西→北東	5.4	0.6	0.1							
SD 994			K IX	T11, 12	水路?	直線的			西→東	2.4	0.6	0.2							
SD 995			K IX	T8, 13	区画	直線的			南→北	6.0	0.48	0.2							
SD 996	SD966		K IX	T8, 13	区画	直線的			南→北	(12)	0.52	0.15							
SD 997			K IX	T3	区画	直線的			北北西→南南東	2.0	0.6	0.2							

表12- (2) 溝・自然流路跡 (SD) 一覧

Main table listing archaeological features (SD) with columns for site number, location, period, plan shape, direction, length, width, depth, soil type, and findings.

歴代遺跡群 ①区

Table listing historical sites (歴代遺跡群) with columns for site number, location, period, plan shape, direction, length, width, depth, soil type, findings, and remarks.

表12-(3) 溝・自然流路跡 (SD) 一覽

番号	旧遺構番号	時期	仮地区	中地区	区番号	低分類	平面形	断面形	流路方向	全長 (m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色 調	土色・層記号	土 性	堆積状況・特徴	遺物・出土状況	備 考
SD 97			VI	P12.17	51	区画	不整形	-	南→北	3.27	0.56	0.14	-	-	-	-	-	-
SD 98			VI	P16.17.22.	44.51	-	不整形	-	北西→南	9.17	1.37	0.14	-	-	-	-	-	-
SD 99		9c以降	VI	P16.17	44.51	-	不整形	-	北→南東	(7.7)	(1.2)	0.07	-	-	-	-	-	-
SD 100		9c	VI	S5	45	区画	不整形	B	南→北	(2.60)	1.35	0.32	褐	10VR4/4	-	-	-	-
SD 101			VI	S5	45	区画	不整形	E	南→北	(2.32)	0.54	0.2	褐	10VR4/4	-	-	-	-
SD 102			VI	S5	45	区画	直線的	A	南→北	(1.67)	0.49	0.07	褐	10VR4/4	-	-	-	-
SD 103			VI	S5	45	区画	不整形	A	南→北	(1.67)	0.49	0.07	褐	10VR5/4	-	-	-	-
SD 104			VI	S5.10	45	区画	直線的	C	北北西→南南東	2.85	0.35	0.37	にぶい黄褐	10VR5/4	-	-	-	-
SD 106			VI	S10	45	区画	直線的	B	南→北	(16.0)	0.5	0.37	褐	10VR4/4	-	-	-	-
SD 110		7~8期	VI	023	47.50	島?	直線的	B	南→北	4.1	0.66	0.22	-	-	-	-	-	-
SD 111		9c	VI	023	47.50	区外島	直線的	-	南→北	(3.68)	(0.64)	0.17	-	-	-	-	-	-
SD 112			VI	023.24	50	島?	不整形	-	南→北	2.84*	0.63	0.1	-	-	-	-	-	-
SD 118		9c	VI	T1.2	47	島?	直線的	A	西→東	1.98	0.53	0.12	-	-	-	-	-	-
SD 119			VI	T2	47	区画	直線的	A	西南西→東北東	5.38	0.56	0.12	褐→黒褐	10VR4/6~2/3	-	-	-	-
SD 121		9c	VI	022.T2	47	島?	直線的	A	北北西→南南東	2.1	0.46	0.06	褐	10VR4/6	-	-	-	-
SD 122		9c	VI	T2.3	47	島?	直線的	A	北北西→南南東	5.62	0.46	0.08	黒褐→褐	10VR4/6~2/3	-	-	-	-
SD 123		7~8期前半	VI	019.22.23.2	47.50.56	区画	一部屈曲	D	西南西→東北東	(2.34)	0.23	0.07	褐	10VR4/6	-	-	-	-
SD 124		7~8期	VI	T2.3.4.023.24.	47.50.56	水路	やや蛇行	E	西南西→東北東	19.3	0.7	0.22	黒褐	10VR3/2	-	-	-	-
SD 125	SD125.205.216		VI	N24.25.013~22	47.50	水路	一部屈曲	D	西→東北東	(12.8)	0.95	0.18	暗褐	10VR3/4	-	-	-	-
SD 126	SD126.219	8期前半	VI	N19~24.014	52.54.56.57		ややカーブ	E	西→東北東	(49.61)	1.3	0.37	黄褐→にぶい黄褐	10VR5/6~10VR5/3	-	-	-	-
SD 127			VI	S10	45	区画	直線的	D	南→北	3.56	0.52	0.59	灰黄褐→黒褐	10VR5/4	-	-	-	-
SD 131	41b		VI	013.18	54	区?	ややカーブ	D	南南西→北	7.9	0.65	0.44	褐	10VR4/4	-	-	-	-
SD 132			VI	021	45.52	区?	直線的	D	南→北	(5.66)	0.3	0.12	暗褐	10VR3/4	-	-	-	-
SD 133			VI	021	45.52	区?	直線的	D	北北西→南南東	(0.95)	0.34	0.21	暗褐	10VR3/4	-	-	-	-
SD 134			VI	N25	45	区?	直線的	A	南→北	1.08	0.23	0.1	暗褐	10VR3/4	-	-	-	-
SD 135			VI	N25	45	区?	直線的	A	南→北	(0.98)	0.21	0.11	暗褐	10VR3/4	-	-	-	-
SD 136			VI	N25	45	区?	直線的	A	南→北	(0.68)	0.28	0.13	暗褐	10VR3/4	-	-	-	-
SD 137			VI	T2	47	区外島	直線的	B	南→北	3.34	0.33	0.11	褐	10VR4/6	-	-	-	-
SD 138			VI	022.T2	47	区外島	直線的	A	南→北	7.38	0.46	0.1	褐	10VR4/6	-	-	-	-
SD 139			VI	T1.2	47	島?	直線的	A	南→北	2.04	0.46	0.04	褐	10VR4/6	-	-	-	-
SD 140			VI	021.22	47	島?	直線的	A	西→東	(1.04)	0.3	0.11	暗褐	10VR3/4	-	-	-	-
SD 141			VI	014	56	水路	ほぼ直線的	-	西→東	(4.48)	0.26	-	-	-	-	-	-	-
SD 142			VI	T3.4.	47.50	島?	直線的	ややカーブ	西南西→東北東	(9.55)	0.6	0.32	灰黄褐	10VR4/2	-	-	-	-
SD 143			VI	T2.3.4.	47.50	島?	直線的	D	西→東	12.1	0.5	0.21	褐灰→にぶい黄褐	10VR4/1~10VR5/4	-	-	-	-
SD 144		6~7期	VI	T3.4.	47.50	島?	やや蛇行	E	西南西→東北東	12.15	0.4	0.38	褐灰→にぶい黄褐	10VR5/4~4/1	-	-	-	-
SD 146			VI	T3.4.8.9	50	島	不整形	-	西南西→東北東	4.77	1.28	0.13	-	-	-	-	-	-
SD 147		7~8期	VI	N24.25.S5.1	39.45	水路	一部屈曲	-	西→東	(28.9)	1.85	0.4	-	-	-	-	-	-
SD 148			VI	T9.14	50	区画	不整形	A	南→北	(7.00)	1.2	0.19	オリープ褐	2.5Y4/4	-	-	-	-
SD 149			VI	T9	50	区画	ほぼ直線的	A	南→北	(2.54)	0.3	0.13	オリープ褐	2.5Y4/4	-	-	-	-
SD 150			VI	T9	50	島	直線的	D	西→東	(3.36)	0.43	0.25	オリープ褐	2.5Y4/4	-	-	-	-
SD 151		7~8期	VI	T8.9	47.50	島	直線的	B	西→東	8.35	0.55	0.39	オリープ褐	2.5Y4/3	-	-	-	-
SD 152			VI	T8.9	47.50	島	直線的	A	西南西→東	7.45(a)	0.75	0.15	初→褐	2.5Y	-	-	-	-
SD 153		7~8期	VI	T8.9	47.50	島	直線的	A	西→東	7.6(b)	0.9	0.11	-	-	-	-	-	-
SD 154			VI	T8.9	47.50	島	直線的	B	西→東	6.65	0.68	0.36	-	-	-	-	-	-
SD 155		9c	VI	T8~14	47.50	島	直線的	D	西→東	12.9	0.68	0.33	-	-	-	-	-	-
SD 156		9c	VI	T8	47.50	島	直線的	A	西南西→東北東	3.14	0.46	0.14	オリープ褐	2.5Y4/4	-	-	-	-
SD 157		7~8期	VI	T7	47	島?	ほぼ直線的	D	南→北	(2.30)	0.46	0.25	オリープ褐	2.5Y4/4	-	-	-	-
SD 158		6~7期	VI	T7.8.12.13	47	島?	直線的	B	西→東北東	6.9	0.5	0.39	褐	2.5Y4/4	-	-	-	-
SD 159			VI	T7.12	47	島?	直線的	C	南→北	(1.10)	0.22	0.14	オリープ褐	2.5Y4/4	-	-	-	-
SD 160			VI	T7.12	47	島?	直線的	A	南→北	(2.12)	0.34	0.14	オリープ褐	25.Y4/4	-	-	-	-
SD 161			VI	T9.14	50.53	区画	やや蛇行	A	南→北	(6.12)	1.04	0.18	オリープ褐	2.5Y4/4	-	-	-	-
SD 162	SD162.502.433	8期前半	VI	N10~20.06	54.56.128	区画	一部屈曲	E	南→北	(37.15)	2.95	0.99	灰黄褐→黒褐	10VR4/2~10VR2/2	-	-	-	-
SD 163	SD163.SD24.25		VI	N15.20	52		やや蛇行	-	南→北	7.3	0.8	0.35	-	-	-	-	-	-
SD 164			VI	016.17.N20.24.25	45.46.52.54	水路	やや蛇行	-	西南西→東北東	(28.1)	0.7	0.5	-	-	-	-	-	-



表12- (4) 溝・自然流路跡 (SD) 一覽

Table with 17 columns: 溝番号, 旧遺構番号, 時期, 所在地, 中地区, 区番号, 区分, 平面形, 断面形, 流路方向, 全長 (m), 最大幅 (m), 深さ (m), 色調, 土色検記号, 土性, 堆積状況・特徴, 遺物・出土状況, 備考. It lists various archaeological features like water courses and ditches across different regions and layers.



表12-(6) 溝・自然流路跡 (SD) 一覧

Table with columns: 溝番号, 旧遺構番号, 時期, 仮地区, 中地区, 図番号, 区分, 平面形状, 断面形状, 流路方向, 全長 (m), 最大幅 (m), 深さ (m), 色調, 土色層記号, 土性, 埋積状況・特徴, 遺物・出土状況, 備考





表12-(9) 溝・自然流路跡(SD)一覧

Table with columns: 溝番号, 旧遺構番号, 時期, 仮地区区, 中地区, 区番号, 区分, 平面形, 断面形, 流路方向, 全長(m), 最大幅(m), 深さ(m), 色調, 土色・土質, 堆積状況・特徴, 遺物・出土状況, 備考. The table lists various archaeological features (SD 3074 to SD 3243) with detailed characteristics and findings.







表12- (12) 溝・自然流路跡 (SD) 一覧

番号	遺構番号	時期	仮地区	中地区	図番号	仮分類	断面形状	流路方向	全長 (m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色検記号	土性	堆積状況・特徴	遺物・出土状況	備考
SD 7025	SD7025=SD8027	6期～7期	6a	H10.15.I11.1 ~20.J16.2	195	自然流路	A	西→東	58.5	8.0	0.35	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、獣骨、土器	SD7043を起点にSD7026と分れる
SD 7026	SD7026=SD8029	6期～7期	6a	H10.16.I11.1 15.J11.12	196	自然流路	A	西→東	54	2.2	0.38	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	SD7043を起点にSD7025と分れる
SD 7027	SD7028=SD8028.2層	6期	6a	I6.7.12	23	自然流路	A	西→東	14	1.5	0.3	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7028	SD7028=SD8028.2層	6期	6a	I9~20.J16.17	168.187	水路?	A	西→東	(25.5)	16.0	0.3	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7029		2期	6a	N2.7	120.121.168	水路?	A	南→北	(5.2)	1.35	0.6	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7030		2期	6a	I17~23.N2	168.187.188	湧水溝	B	南→北	20.0	4.5	2.3	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7031		2期	6a	H10.15.I16.11	168.189	湧水溝	A	南→北	15.0	10.0	0.5	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7032	SD7032=SD8028.3.4.5層	2期	6a	H5~20.J16.20.J11.21	168.190	自然流路	A	西→東	57.0	14.0	0.9	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7033	SD7033=SD7034	6期	6a	I16.21	121.197		A	南→北	6.9	3.6	0.65	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7034	SD7033=SD7034	1期末~2期初頭	6a				A										
SD 7035		1期末~2期初頭	6a	I17.18.22	167.180	湧水溝	D	南→北	12.8	4.5	1.7	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7036	SD7036=SD8038	1期末~2期初頭	6a	H10.15.I16.20.J11.16	167.181	自然流路	A	西→東	55.0	14.0	0.65	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7037		1期末~2期初頭	6a	H15.I11	167.183	湧水溝	A	南→北	4.6	(4.0)	0.4	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7038		1期末~2期初頭	6a	H20.I16.21	167.183	湧水溝	B	南→北	13.0	1.1		付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7039	SD7039=SD8040	2期初頭	6a	I6~15.J11.16	167.183	自然流路	A	西→東	(31.0)	4.0	0.7	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7040		1期末~2期初頭	6a		付図4		A	西→東									
SD 7041		1期末~2期初頭	6a	I1~5.J11	167	水路	A	東→西	42.5	1.2	0.25	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7042		1期後半	6a	I11.16	167.175.176	湧水溝	D	南→北	16.0	5.5	2.0	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7043		6期～7期	6a	H10	197	自然流路	B	西→東	4.5	4.0	0.75	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7044	SD7044=SD7047	1期後半	6a	I11.16	167.184	湧水溝	A	南→北	13.5	5.5	0.7	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7045	SD7045=SD8032	1期前半~2期	6a	I18.23.N3	166~168.177.185	湧水溝	D	南→北	17.5	6.3	3.0	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7046	SD7046=SD8044.3層	1期後半	6a	H5~15.I16.20.J11.16	166.172	自然流路	A	西→東	56.0	13.0	0.7	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7047	SD7044=SD7047	1期後半	6a		184												
SD 7048	SD7048=SD7057=SD8044.1.2層	1期後半	6a	H15.I11.16	167.178	自然流路	A	西→東	51.0	5.5	0.75	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7049		1期後半	6a	I17.21.22	166.167.174	湧水溝	A	東→西、南→北	5.2	9.0	0.75	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7051		1期後半	6a	I11.16.17	167.173.178	湧水溝	B	南→北	4.5	9.8	0.35	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7052		6期～7期	6a	C25.D16.21.H5.10.11	23	水路	A	北→南	29.0	1.1	0.25	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7053		2期	6a	D16.21.H5.1	付図4	自然流路	A	西→東									
SD 7054		2期	6a	I16.17	168	水路	A	北→南	26.5	1.6	0.2	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7056		1期後半	6a	I16.17	168	水路	A	南→北	3.0	3.5	0.75	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7057	SD7048=SD7057=SD8044.1.2層	1期後半	6a	I11.16	178		B		4.2	2.3	0.7	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7058		1期後半	6a		166.172.73												
SD 7059	(SD7057に必要)	1期後半	6a														
SD 7062	SD7062=SD7087	1期後半	6a	I11.16	166.175	湧水溝	B	南→北	11.5	5.5	2.7	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7064		1期	6a	D16.21.H.5.H.	166	水路	A	北→南	21.5	1.9	0.25	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7065	SD7065=SD7067.4.5層=SD8049	1期前半	6a	H5~15.I16.20.J11.16	166.170	自然流路	A	西→東	55	16.0	1.2	付図5	付図5	付図5	自然埋没	木製品多、土器	窪み状遺構
SD 7066			6a														

表12-(13) 溝・自然流路跡 (SD) 一覧

溝番号	旧遺構番号	時期	原地区	本地区	中地区	図番号	断面形状	平面形状	流路方向	全長 (m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色・土質	堆積状況・特徴	遺物・出土状況	備考
SD 7067	SD7065=SD7067=SD8044.4.5層=SD8049.4.5層=SD8049.4.5層=SD8049.4.5層	1期末~2期初頭	6a	I	H10.16	170		不整形	西→東	(5.0)	(3.0)		付図4	付図4	自然流路の埋没に伴う	子持勾玉、玉類	SD7046→本社
SD 7070		0期~1期	6a			付図4			西→東		3.5	0.85	付図4	付図4		木製品	西壁のみのみで確認、SD7067に切られる
SD 7073		0期~1期	6a			付図4			西→東		(4.5)	0.8	付図4	付図4			西壁のみのみで確認、SD7073に切られる
SD 7074		1期末~2期初頭	6a	I	D16.21、H5.10、H11.6	166	直線的	直線的	北→南	25.0	1.7	0.95	褐色	シルト			SD7046内水路
SD 8028.2	SD7028=SD8028.2層					187							付図5	付図5			
SD 8028.3	SD7032=SD8028.3.4.5層					190~192							付図4.5	付図4.5		木製品多、祭祀具集中、木筒	
SD 8044.3	SD7046=SD8044.3層					173							付図4.5	付図4.5		木製品多、祭祀具集中、木筒	
SD 8044.4	SD7048=SD7067=SD8044.4.5層=SD8049.4.5層					179							付図4.5	付図4.5		木製品	
SD 8044.5	SD7024=SD8020					170							付図4.5	付図4.5		木製品、祭祀具集中	
SD 8020						23											
SD 8021		4期~7期	6b	I	I25.N3.4.5.7.8.12、I21.01	121.121	水路	やや蛇行	南西→北東	39.0	1.8	0.5		シルト~砂		鉄斧、磨書土器、布目瓦、円面頭	SD8022.8023→本社
SD 8022		4期~6期	6b	I	N3.4.7.8.12	121	水路	やや蛇行	南西→北東	25.0	(0.8)	(0.5)		シルト~砂			本社→SD8021
SD 8023		4期~6期	6b	I	N3~12.01	120	水路	やや蛇行(B)	南西→北東	31.5	(1.2)	0.65		シルト~砂			本社→SD8021
SD 8024	SD7020=SD8024					121								シルト~砂			
SD 8025		6期~7期	6b	I	N3	23	水路	水路	西南西→東北東	(2.3)	(0.45)	0.11		シルト~砂			本社→SD8022
SD 8026	SD7025=SD8027					195	水路	水路	南西→北東	27.0	1.5	0.4	灰黄褐色	10YR4/2		木製品多、祭祀具集中、磨書土器	SD8031.8046→本社
SD 8029	SD7026=SD8029					196							付図5	付図5		木製品多	
SD 8031		6期~7期	6b	I		23	水路	直線的	南南西→北北東	(2.8)	1.0	0.5		付図5		木製品多、祭祀具集中、玉類、土骨	本社→SD8026
SD 8032	SD7045=SD8032					169.177.186											中央へ付図5のみで確認
SD 8033		6期~7期	6b			付図5					3.3	0.4		付図5			本社→SD8027
SD 8034		6期~7期	6b	I		196					(6.4)	0.17	灰黄褐色	10YR4/2		木製品、祭祀具集中	SD8028.9-1層と同堆積
SD 8035		2期	6b	I	I8~15、J11.12	168.192	水路	やや蛇行	西→東	32.0	5.0	0.3	黒褐色	10YR3/2	自然埋没	木製品、祭祀具集中	東壁のみのみで確認、SD8032.4-4層に対応する。
SD 8037		1期末~2期初頭	6b			181.182	水路	水路	西→東		5.4	0.45	灰黄色~黄褐色	10YR5/2~5/3		木製品多、祭祀具集中、木筒	
SD 8038	SD7036=SD8038					166.173							付図5	付図5		木製品	SD8043→本社
SD 8039		1期後半	6b	I	I8~15、J11	171	水路	やや蛇行	西→東	58.5	3.0	0.5	オリーブ黒	5Y3/1	自然埋没	木製品、祭祀具集中	
SD 8040		0~1期	6b	I	I14~20、J16	167.179							付図5	付図5		木製品、祭祀具集中	
SD 8041		1期後半	6b	I	I6~15、J6~12	167.179	水路	直線的	西→東	23.0	8.0	1.5	付図5	付図5		木製品、祭祀具集中	
SD 8043		1期末~2期初頭	6b	I	J16	167.186	水路	直線的	西→東	49.5	(5.0)	0.35	付図5	付図5		木製品、祭祀具集中	本社→SD8039
SD 8045		6期~7期	6b	I	I23、N3	120	水路	不整形	南→北	3.3	3.5	1.2	図版186	図版186	自然埋没	木製品、祭祀具集中	SD8047を切り、SD8038とつながる
SD 8046		1期後半	6b	I	J16	167.179	水路	直線的	南西→北東	(7.5)	0.9	0.2	黒褐色~にぶい黄褐色	シルト~中粒砂	自然流路の埋没に伴う		本社→SD8026
SD 8047		1期後半	6b	I	J16	167.179	水路	不整形	南西→北東	1.9	2.65	1.65	付図5	付図5	自然流路の埋没に伴う	SD8045に切られ、SD8044-1.2層とつながる	
SD 8049	SD7065=SD7067=SD8044.4.5層=SD8049.4.5層					170							付図5	付図5		木製品多、祭祀具集中、鉄骨、骨盤、土器	西壁、中央へ付図5のみで確認
SD 8050		1期末~2期初頭	6b			付図4.5			西→東		5.35	0.35	付図4.5	付図4.5	ラミナ明瞭		

表12- (14) 溝・自然流路跡 (SD) 一覽  
IV-1層上面検出SD (条里水田ほか)  
東植条里遺跡

Table with columns: 番号, 旧遺構番号, 時期, 原地区, 中地区, 図番号, 区分, 平面形, 断面形, 流路方向, 全長 (m), 最大幅 (m), 深さ (m), 色調, 土色検記号, 土性, 堆積状況・特徴, 遺物・出土状況, 備考. It lists archaeological sites SD 30 through SD 8016 with detailed stratigraphic and geographical data.

## 第5節 屋代遺跡群⑥区旧河道内遺構

### 1 概 観

**河道の形成と埋没** 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の最北端にあたる⑥区は、自然堤防から千曲川の旧河道(図1-A)へ移る転換点に位置する。河道の状況を把握するため部分的に矢板を打ち込み掘り進めたが、河床を確認するには至らなかった。しかし、地表下7m付近までの河道の傾斜と堆積の状況を捉えることができ、これに対しSD7071の遺構名をつけた(付図3・4)。この河道が形成された時期の特定はできないが、傾斜面に古墳中期の導水型祭祀遺構(SD7068・SX7038)が設営されていたため、少なくともそれ以前には遡る。また、SD7071の底部からは7世紀初頭の土器が出土したことから、この時期までは存続し、その後7世紀後半にかけて急速に埋没していったと考えられる。⑥区の遺構は千曲川の旧河道であるSD7071が埋没していく過程において形成され、造成されたものである。

**河道埋没後の遺構形成** 千曲川本流が北へ移動して、旧河道の埋没が一段落した後の自然堤防下には本流同様に西から東へ流れる支流的な自然流路が残る(付図5、SD8041)。以後この地区に開発が入り、東西自然流路北側の離水した低地に水田が造成される。自然流路南側の自然堤防斜面では湧水点を求めた掘削が行われ、そこを起点として集落側から自然流路につながる溝(湧水溝)が設営されるようになる。この溝が後述する導水型および湧水坑型祭祀の場となる(第6章第7節)。このように、古代における屋代遺跡群⑥区は北の水田域、中央の自然流路域、南の湧水溝設営域となる自然堤防斜面というように、3つの空間が千曲川の洪水の影響を受けながら変遷していく。

**水田の造成と埋没** ⑥区北壁セクションにみられる洪水砂(付図6、Ⅲ-Y6-2層)は、更埴条里遺跡・屋代遺跡群全域を覆うもので、その下の水田跡は他の地区で検出された平安水田に対応するものである。しかし⑥区ではこの下でさらに複数の水田と思われる面が確認された。この内最も下層で検出されたのが北壁セクションのSC7030、中央ベルトセクション(付図5)のSC7045といった畦畔が存在するIV-Y6-5a層であるが、ここから平安水田に対応するIV-Y6-1a層との間に北壁セクション(付図6)では3つのシルト堆積層が存在し(IV-Y6-4a、3a、2a層)、畦畔も認められることからそれぞれが水田となっていた可能性が高い。各シルト層の間には複数の砂層がみられるが、これは北へ移動した千曲川本流の洪水による溢流堆積と考えられる。このように⑥区の水田は度重なる洪水によって埋没し、その都度造成しなおされていたことがわかる。水田は埋没後も、以前の畦畔の位置をほぼ踏襲して造成し直されており、中央ベルトセクションのSC7045→7014→7047の変遷や北壁セクションのSC7030→7046→7027→7026の変遷が如実にそれを物語る。⑥区においては以上の複数の水田を下層から第5水田(図版166・167)、第4水田(図版167)、第3水田(図版168)と呼称する。なお、第3水田が洪水砂2d層に覆われた後、中央ベルトセクションにかかる一帯で部分的にみられるシルト層(2a-4層)を第3水田の上層水田と捉える(図版168)。また、2a層面では西側南北畦畔(SC7026)以外に明確な畦畔が検出できなかったが、この段階を第2水田(図版23)とし、この上に造成される平安水田を第1水田と呼ぶ。この段階で自然堤防北側はほぼ全域が水田化され、東西流路は消滅する。

**自然流路の堆積と層位区分** 東西自然流路は自らの堆積作用や千曲川の洪水によって埋没していくが、その後も新たな流路が形成されていく。西壁セクション(付図4)では南北畦畔に設けられた灌漑用水路の排水と自然堤防側の湧水溝からの流水の影響もあり複雑な堆積状況となっているが、中央ベルトセクション(付図5)では安定した堆積状況がみられ、明確に層位を追うことができる。これによると、ラミナが

確認できるような比較的流れの速い時期、洪水により溢流した砂が入る時期、シルトが沈殿して堆積する湿地状の時期などを繰り返して埋没していく様子が窺える。南端の東西畦畔が造成される際、田面から自然流路の埋没土の上にかけて盛土を行っており、これによって1面の水田が造成されてから埋没する間に相当する自然流路の堆積層を特定することができた。これに基づいて、SC7045とSC7014の間を第5水田対応層、SC7014とSC7047の間を第4水田対応層とし、SC7047とSC7051の間を第3水田対応層とする。なお、SC7051とIV-Y6-2a層の間は第3水田対応層の上層段階とし、その上の第2水田対応層と区別する。

**湧水溝** 千曲川旧河道に向かう自然堤防の傾斜面では人工的に掘り込まれた溝が数多く検出された。これらの溝の底部には水が湧き出る地点（湧水点）が確認され、中には湧水点をピット状に掘り込んでいるもの（湧水坑）もあった。この結果、これらの溝の多くは湧水を起点として東西自然流路の方向に掘られていることがわかった。この中で最古の遺構は古墳時代中期のSD7068・SX7038だが、北側に水田が造営されるのと前後して再び溝の掘削が開始されている。このように湧水をもとめて掘削された溝を総称して湧水溝と呼ぶ。湧水坑は、①坑内の堆積が他に比べ粗い砂で構成され、数cm以上の小孔（湧水点）が多くみられること。②坑壁面に酸化鉄が強く付着していること。③坑内で出土した土器片にも酸化鉄が付着し、原形をとどめないほど磨耗していることを基準として認定した。湧水溝は切り合う場合もあるが、それぞれの堆積土の上層に水田や自然流路を覆った洪水砂が及んでおり、その砂層を基準にすることによって、各水田対応層に含めることができた。なお、第5水田対応層では湧水溝と自然流路が大きく3段階の変遷をみせ、水田以外の遺構の景観が大きく異なる。そこで各段階の湧水溝とそれがつながる自然流路を合わせ、出土土器から1期前半に属する古段階と1期後半に属する新段階とに分け、新段階を上層、下層に区分してそれぞれの遺構群を示す。

**遺物の出土状況** 自然流路や湧水溝の堆積土の中で、特にシルトなどが沈殿堆積する層からは土器の他に、木質遺物、獣骨、種実類など、集落跡では残りにくい遺物が好条件のもとで保存され多量に出土した。多くは集落側から廃棄されたものと思われるが、その中で木製の祭祀具を中心とした遺物がまとめて廃棄された地点を多数確認することができた。これらについてはその地点と出土状況をおさえ、SQとして取り上げた。これらの遺物を含む層は流路の埋没土や洪水砂によってパックされた状態となり、遺物は上下に移動することなく出土した。このことは、遺物を含む層の上下関係によってその変遷を追うことを可能にし、さらに各層位で出土した木簡の紀年銘や内容、土器の編年観によってかなり具体的な時代を把握することにつながった。

**遺構番号と掲載方法** ⑥区の調査は中央ベルトを境界として開始時期が異なったため、西側（⑥a区）には7000番台、東側（⑥b区）には8000番台の遺構番号をつけた。しかし、特に自然流路は東西にのびていたため同一の流路に対しa区とb区で異なる遺構番号がつけられたものが多い。後の整理段階で両者の接合関係を確認したが、遺物の注記との関係から本報告では新たな遺構番号は設けず、同一の遺構に複数の遺構番号がつけられているものについて、遺構全体を示す場合は「SD7036=SD8038」のように大きなくりの遺構群で表す。なお、遺物出土状況などを示す場合はそれぞれの遺構番号を個別図に付すこととする。また、自然流路について層名を使用している場合は中央ベルトセクションの分層に準じている。

⑥区の遺構を各水田の対応層で区分し、第5水田から第2水田の中で、それぞれの層位に対応する主な自然流路と湧水溝の変遷を示したのが以下の表13である。⑥区旧河道内遺構配置図は、以上の層位に基づいて示し（図版23、166～168）、遺構個別図および遺物出土状況図もそれぞれ対応する層位の中で掲載した。また、SD、SKの一覧表は表12および8に掲載した。遺物図版の検索についてはこの一覧表を参照していただきたい。

表13 屋代遺跡群⑥区湧水溝、東西自然流路変遷表

		湧水溝	東西自然流路	木簡 (紀年銘、時代判定資料)	土器編年
第5水田 対応層	古段階	SD7045=SD8032 SX7035 (SX7036・P1~6)	SD8041 SD7065=SD7067=SD8044 4,5層=SD8049		7C初頭 ~1期 1期前半
	新段階	下 SD7049 SD7062・SX7037 上 SD7049 SD7042	SD7046=SD8044、3層 SD8039 SD7048=SD7057=SD8044 1,2層 SD8043		1期後半 1期後半
第4水田 対応層		SD7035 SD7038	SD7036=SD8038 SD7039=SD8040 SD8050	13号(戊戌) 15号(国符) 16号(郡里制下郡符) 44号(7年・・和銅か)	1期末~ 2期初頭 2期初頭
第3水田 対応層		SD7030	SD7032=SD8028、3~5層 SD8035 SD7031	90号、92号(養老7年) 62号(神亀3年) 46号(乙丑)(註) 114号(郡郷里制下郡符)	2期 2期
	上層		SD7028=SD8028 2層		6期
第2水田 対応層			SD7025=SD8027 SD7026=SD8029 SD8033 SD8034		6~7期

戊戌・・698年 和銅7年・・714年 養老7年・・723年 神亀3年・・726年  
郡里制・・701年~715年 郡郷里制・・715年~740年

(註) 46号の「乙丑」は表記の方法から665年と推定されるが、出土層位は第3水田対応層に含まれる。

## 2 第5水田対応層古段階

### (1) 水田跡 (図版166、PL27)

地区西側に南北畦畔(SC7030)が造営され、それに直交する形で比較的大きめの畦畔(SC7040)がみられ、この2つの畦畔に囲まれた中に小畦畔で区画された水田が展開する。水田の南端に位置するSC7045は自然流路との境界となり、その南側は流路に向かって大きく傾斜する。SC7030は畦畔構築時に板材で補強が行われ(PL27)、灌漑用水路と考えられる溝(SD7064)も設けられている。溝は南端で開放しているが、その先は自然流路に向かって傾斜するため、ここで取水されたとは考えられず、灌漑用水を自然流路に出すための排水口となっていたともと思われる。第5水田は新段階にいたるまでこのままの形で維持される。

### (2) 自然流路 (SD)

#### SD8041 (図版166、171)

**遺構の状況：**千曲川旧河道(SD7071)の埋没後に形成された自然流路であるが、後の流路によって削られて全容は不明である。図版166はSD8041埋没後に新たな流路が形成された状態を示すもので、SD8041の堆積土は中央部に中洲となって残存する。西壁セクション(付図3・4)ではSD7074・7073といった流路の堆積が確認されているが平面的に検出できず、SD8041との関係は明らかにできなかった。中洲として残存した部分にかかる中央ベルトセクション(付図5)では8層が最下層となるが、北側の立ち上がりは確認できないため第5水田造営との前後関係は不明である。

**遺物 (図版171)：**5層から斎串、4層から人形が出土した。3~4層段階に最も遺物が多く、1号・2号木簡、馬形、曲物底板などが出土し、ウマの大腿骨や中足骨などや、イヌの骨もみられる。なお、同規格の手捏土器(SD8041 No.10~17)もまとめて出土した(PL28)。

**遺物集中廃棄：SQ8001 (PL28)** 1層で確認された斎串7点(951~957)にウマの大腿骨(18352)が伴うものである。斎串は全点折り重なる状態で検出され、獣骨はその脇から出土した。やや距離をおくが土器

(SD8041 No.3) も伴うものと考えられる。木製祭祀具の集中廃棄の中で最下層に位置する。

**時期：**1～3層出土の土器は1期に属する。4層以下は、明確に時期を判断できる遺物が存在しない。SD7071の上限が7世紀初頭であることから1期以前、7世紀初頭以降（0期）の範囲に入るだろう。

**SD7065=SD7067=SD8044 4・5層=SD8049**（図版166、170）

**遺構の状況：**SD8041の堆積土を一部中洲状に残して分流する流路である。⑥a区側では主に中洲北側をSD7065、西壁から南側をSD7067として検出し、後に⑥b区側のSD8044の下層段階（4・5層）と接合することが判明した。SD8049はSD8044の4-2層に対応することが中央ベルトセクション（付図5）からわかるが、調査段階では特に多量に遺物が出土した範囲をこの遺構番号とした。

**遺物：**中洲西側の分流前の地点には礫の集中部があり、そこから白玉25点が出土した。子持勾玉（図版358-78）も出土しているが、伝世品か混入の可能性もある。中洲中央より東側では木形を中心とした木製品が多数出土した。この範囲では獣骨の出土も目立ち、特にI14、15区にはウマを主に各部分の骨が多量に廃棄されていた。なおト骨（図版429-20・21・23）、骨鏃（図版429-24）の存在も特筆される。

**遺物集中廃棄：SQ8002** SD8049とした中洲北側の地点で確認された。斎串3点（図版420-902～904）が重なって出土した。

**SQ8003** 流路北側の水田寄りの地点で確認された。馬形3点（図版420-905～907）がそれらに装着されていた串状木製品（図版420-908）とともにウマの下顎骨（22429）にほぼ乗った状態で出土した。

**SQ8004** SD8044下層（4・5層）とした流路南側の立ち上がり部分で確認された（PL28）。斎串（図版419-889～894）が蛇形（図版420-895～899）と折り重なって出土し、すぐ脇のウマの頭骨（20394）もこれらに伴うものと考えられる。

**時期：**出土土器により1期前半があたりられる。

### （3）湧水溝（SD、SX）

**SD7045=SD8032・SX7036**（図版166、169）

**遺構の状況：**自然堤防傾斜面から北側に掘られた大規模な溝である。中央ベルトがこの溝にかかっていたため、先行した⑥a区側はSD7045、⑥b区側はSD8032として調査したが、後に同一の溝であることが判明した。底部では合計7カ所の湧水点（P1～6、SX7036）が確認できた。P1～6（PL28）は素掘かあるいは自然に陥没した状態だが、最北端のSX7036は掘り込まれた湧水坑の南側脇に平石が置かれ、坑内には平石が立てられ、周囲に拳大の礫が敷かれていた（PL28）。溝は自然流路南側分流のSD8044につながっており、流れ出した湧水が合流していたものと思われる。湧水坑内の堆積土は土器片やブロックを含む土で構成され、人為的に埋め戻された状況が窺える。湧水坑が機能を停止した後、溝は徐々に埋没していき、その状況は中央ベルトセクション（付図5）で示したように45の分層で捉えることができる。シルトを主とし、木片や植物遺体が混入する湿地状の堆積もあるが、ラミナが明瞭にみられる砂層が目立ち、自然流路の堆積土や洪水による溢流砂が及んでいたことがわかる。この内17層は第4水田対応層の自然流路（SD8038）に削られており、これより下層が第5水田対応層に含まれることになる。また、40層はSD8044 3-2層と漸移的につながることから、これより上は第5水田対応層新段階に含まれる堆積と考えられる。埋め戻された湧水坑群を直接覆うのが45層で、その上に部分的に44層が堆積する。42、43～45層は自然流路とのつながりが捉えられないが、新段階に対応する39層以前の堆積層であることから、古段階から新段階下層にかけて堆積していったものと思われる。SD7045=SD8032は埋没の過程で木製祭祀具などの集中廃棄の場となっていき、それらの出土状況は各層に応じてそれぞれの水田対応層の中で示すこととする。

**遺物：**湧水坑に関わる遺物としては須恵器甕（SD7045=SD8032・SX7036 NO.1）があげられる。この破

片が分割され、P3・4・6から出土した。SX7036では白玉25点、管玉1点、土製丸玉2点、双孔円盤1点（図版357）およびト骨（図版429-14）、獸骨（14272）が出土した。P1周辺ではト骨（図版428-11）、P2でト骨（図版428-9）、P5で白玉（図版357-16）、ト骨（図版428-10）、加工獸骨片（PL100-47、48）P6で勾玉模造品（図版357-17）が出土した。祭祀的な意味合いの強い遺物が主であり、湧水坑を中心に行われた祭祀の存在が想定できる。なお、ト骨 NO.9（P2）と14（SX7036）は接合し、鑿の状況からト占終了後割られ、それぞれに入れられたものと考えられる。接合する遺物が出土した湧水坑は何らかの関連があるものと思われる。

湧水坑群直上の埋土である45層中からは白玉9点と加工痕のある獸骨片（PL100-49～55）も出土しており、またSX7036上では3号木簡が出土した。44層では多量の木質遺物が出土し、埋没過程で廃棄された状況が窺える。斎串、曲物底板などの木製品の他、獸骨やヒョウタンがまとまって出土した。

**遺物集中廃棄：SQ8006** 44層で確認された削屑の集中廃棄（PL95-1115～1126）である。

**時期：**SX7036出土の土器が1期前半にあたり、湧水坑の掘削と埋め戻しはほぼこの時期と思われる。42～45層は時期を特定する資料が乏しく、出土した遺物は第5水田対応層古段階～新段階下層にかけての埋没過程で廃棄されたものであることから、1期前半～後半の中で捉える必要がある。

**SX7035**（図版166、171、PL28）

**遺構の状況：**SD7045＝SD8032の西側の自然堤防斜面で検出された。土坑状の掘り込みがみられ、自然流路側に開放する部分に水門が設置されている。土坑中で出土した土器片が著しく磨耗していることから湧水坑と判断される。水門より北側は流路への傾斜面となり中洲に到達するが、特別な溝の掘り込みはみられない。湧水が水門に堰き止められて貯水され、2カ所の水口から流出する仕組みになっていたものと思われる。湧水坑内および傾斜面には小礫や土器片が敷き詰められた状況になっていた。この施設の真下では古墳中期の木樋をもつ導水型祭祀施設SD7068が検出されている。

**遺物：**遺物が投棄された状況はみられず、周辺は清浄に保たれていた状況がみられる。湧水坑中の礫に混じり白玉8点、管玉2点（図版358）、紡錘車片1点、水門脇からナスビの形態をもつ鋏身（図版426-993）、湧水坑外で木札状木製品（図版426-994～996）が出土した。

### 3 第5水田対応層新段階

#### (1) 下層自然流路（SD）

**SD7046＝SD8044 3層**（図版166、172・173）

**遺構の状況：**古段階の中洲を2つに分断した状態で削り込み、新たに形成された流路である。⑥a区側をSD7046として調査したが、後に⑥b区のSD8044の3層段階に接合することがわかった。西側の中洲には拳大の大きさを主とした礫の集積がみられる（PL29）。中洲南側はSD7056とした傾斜部をはさんで、湧水溝SD7049につながる。

**遺物：**中洲の集礫に混じって白玉11点、土製丸玉1点、漆塗りの紡錘車1点（図版355）が出土した。I14、15区（図版173）では、馬、牛を主とした獸骨の各部分のまとまりがみられ、その周辺で木形（斎串、蛇形）や建築部材（図版415）などが出土し、ト骨（図版429-15、16）も確認された。

**遺物集中廃棄：SQ8005**（図版173）中洲をはさんで分流した北側の流路中央部に位置する。馬形2点と串状木製品および斎串が伴う（図版414-823～829）。獸骨（19361）もこれに共伴するものと思われる。

**SQ8013**（図版172、PL29）SD7049からの湧水が流れ落ちる傾斜部（SD7056）の先端にあたり、集礫のある中洲の南側傾斜部に位置し、SD7056内の遺物として取り上げた。蛇形（871）1点と斎串（872～875）が伴う（図版418-871～875）。

**時期：**出土土器より1期後半と判断される。



**SD8039**（図版166、173）

**遺構の状況**：SD7046=SD8044 3層の北側に形成された流路で、かなり蛇行した状況がみられる。⑥a区側ではSD7046北側が第4水田段階の流路に削られ、SD8039の続きを確認することができなかった。

**遺物**（図版173）：ウマを主にイノシシ、ウシなどの骨のまとまりがみられ、その周囲から齋串が出土した。

**時期**：出土土器は1期に含まれ、SD8044 3層と同一面（SD8044 4-1層上面）を削り込むことから（付図5）、ほぼ同時期に存在したものと考えられる。

**(2) 下層湧水溝（SD、SX）**

**SD7049**（図版166、174）

**遺構の状況**：自然堤防斜面に掘削された湧水坑（SK7029）を起点とし、自然流路SD7046に向かって南北方向に掘られた溝（南北溝）と、西側から斜面を東西方向に回る溝（東西溝）が接続しており、両者は一体となって機能していたと思われる。湧水が流れ出る南北溝北側の自然流路につながる傾斜部は堆積状況から下層のSD7056（図版166）の段階と上層のSD7051（図版167）の段階に分けられ、それぞれ下層自然流路SD7046と上層自然流路SD7048に対応する。このことから南北溝は第5水田対応層新段階下層と上層の両時期に渡って機能していたものと思われる。東西溝は2カ所に板が渡されており、東側の板から南北溝の方向には礫が敷かれ、合流部分には溝幅に合わせて杭が打ち込まれている。また、2枚の板の内側にも2つの湧水点（SK7027・7028）が確認された（PL29）。南北溝にも礫が敷かれ、炭化物の集中もみられる。レベルをみると東西溝はSK7027を頂点として北東方向と西方向それぞれに傾斜していることから、SK7028の湧水は西側へ流れていたことが予想される。SK7027の湧水の流出方向を判断するのは難しいが、北東方向に流出してSK7029の湧水と合流していた可能性も考えられる。なお、東西溝は西側にのびて別な湧水溝（SD7062・7042）と合流する。下層段階のSD7062（図版175）には湧水坑が存在するが、上層段階のSD7042（図版176）には導水施設の木樋がありながら湧水坑が存在しない。このことからSD7049は当初南北溝のみで、東西溝が掘られたのはSD7042を設営した上層の段階であった可能性がある。SK7029周辺の埋没状況を見ると、ブロックを含む複雑な堆積状況を示し、溝の廃絶段階で意図的に埋め戻されたことがわかる。

**遺物**：齋串、杯などの木製品（図版417）や石製紡錘車（図版355）などが出土した。

**遺物集中廃棄**：**SQ8012**（図版174）南北溝と東西溝の合流地点で確認された。破片を含む齋串4点（図版417-858～861）がまとまって出土しており、2つの湧水が交わる場所にあたることに意味があるものと思われる。

**時期**：出土土器より、1期後半があたりられる。

**SD7062・SX7037**（図版166、175）

**遺構の状況**：SD7049の北西方向にあたる自然堤防傾斜面に掘られた溝で、底部には浅い土坑状の窪みが数カ所検出された。最も南のSX7037とした掘り込みは、埋土の最下層（図版175、セクション図5層）を中心に平石や礫、土器片自然木などが集中しており、土器片が磨耗していたことから湧水坑と判断した（PL29）。これより北側の掘り込みの内P1は1mに達する深さで、坑内には磨耗した土器片や粗い砂が堆積していた。また、P2は掘り込みは浅いが坑壁に酸化鉄が集積していた。このことからこの2つの掘り込みも湧水坑と判断される。溝は最奥部の湧水坑SX7037を起点として北へ掘られ、自然流路SD7046に達する。SX7037とP2の埋没土はシルトブロックや土器片、炭化物、礫といった混入物が多くみられることから、湧水坑廃絶時に埋め戻されたことがわかる。

**遺物**：獣骨（ウマ、ウシ、イノシシ、シカ）が多量に出土している点の特記できる。特に P1 の上部にはウマ、ウシの頸骨や上腕骨が集中している（PL29）。これらに混じり、白玉14点、管玉2点、土製丸玉2点が検出された（図版358）。SX7037からは礫に混じり、白玉26点、勾玉模造品1点、土製丸玉1点が出土した（図版358）。他に獣骨、骨製品（図版429）も出土している。玉類の出土は湧水に関わる祭祀行為の存在を示唆するが、集中する獣骨についても単純な廃棄としてではなく祭祀との関連で捉えていく必要があると思われる。

**時期**：出土土器から1期後半が当てられる。

### (3) その他 (SD)

#### SD7058 (図版166、172)

**遺構の状況**：SD7062のすぐ東側の地点で自然流路 SD7046 に向けて掘り込まれた溝である。底部付近で人頭大の角礫が出土したが、その下では特に湧水に関わる土坑状の掘り込みなどは検出されず、湧水溝とは性格が異なるものと思われる。溝中から自然流路に直交する形で長さ3mを超える板（サワラ材）が付設され、中洲手前で流路を遮るような状態で張り出している。板は溝の東側壁を支えとして立てられ、西側部分を均等に立てた4本の杭で支えている。下側中央部には板と直交して丸木材が1本敷かれており、この部分が位置的にみて溝と流路の境界となる（図版172、PL29）。湧水坑がないため、水を自然流路に流し出すための溝ではなく、逆に自然流路の水量が増した際、板によって堰き止められた水が溝へ流れ込むような構造となっていたのかもしれない。

**遺物**：角礫とともに大型の槽（図版418-881）が出土した。また、自然流路側の小礫の集中に混じって白玉10点、双孔円盤1点（図版358）が出土した。

**時期**：出土土器から1期後半が当てられる。

### (4) 上層自然流路 (SD)

#### SD7048=SD7057=SD8044 1・2層 (図版167、178・179)

**遺構の状況**：新たな流路の形成により、2つの中洲が下層段階とやや形を変えている。当初は図版178のセクション図4層の南側立ち上がり部分を検出したため、流路の切り合いと考え SD7048 と 7057 の 2 つの遺構番号を付した。しかし、SD7048 が ⑥ b 区の SD8044 の 2 層と接合することから、SD7057 はその 1 層に対応するものと理解し、上層段階の同一の自然流路の堆積と捉えることにした。湧水溝 SD7049 北側の斜面も埋没が進み、上層の SD7051 が自然流路とつながる状態となる。SD7051 の上部と中洲をはさむ北側の分流中には集礫がみられる（PL30）。

**遺物**：集礫内には土器片が多数混じり、中洲北側の集礫からは銅製の鈴（図版359-13）、土錘（図版350-93）が出土した。その他、斎串、鳥形、紡織具などの木製品（図版416~417）が出土している。また、SD7058 が埋没した窪地には大型の礫や板材が廃棄されていた。**遺物集中廃棄**：SQ8014（図版178）SD7051 下方の中洲にかかる地点で出土し、SD7051 の遺物として取り上げた。蛇形 2 点（図版417）が伴う。下層段階の SQ8013（蛇形、斎串の集中）とほぼ同一地点であり、蛇形に関わる祭祀具の廃棄場所が踏襲されていたことを示唆する。

**時期**：出土土器から1期後半が当てられる。

#### SD8043 (図版167、179)

**遺構の状況**：SC7045 下側に形成された自然流路である。中央ベルトセクション（付図5）では SD8039 を削り込んでいるが、第4水田段階の流路に削られているため南側の立ち上がりを確認することができな

った。遺物：木製品が目立ち、蛇形、馬形、人形の他に弓や木錘などが出土した（図版424）。

**遺物集中廃棄：SQ8015** 底部（3層下）で確認された、斎串6点（図版424-964~969）の集中である。965のみ接合により完形となったが、他は接合せず破片の状態であることから、割られた後に廃棄されたものなのかもしれない。

**時期：**SD8043の堆積土3層はSC7045を覆うことから、第5水田対応層の最上層にあたり、SD8044 1・2層とほぼ同時期と思われる。

#### （5）上層湧水溝（SD）

**SD7042**（図版167、176）

**遺構の状況：**下層段階の湧水溝SD7062が埋没した窪地に設営された溝で、トチノキを加工した大型の木樋が設置される（PL29）。北側は自然流路SD7048につながっており、その方向に導水するための施設と思われるが、木樋南側先端部に湧水坑は存在しない。おそらくこの段階でSD7049の東西溝（図版174）が接合され、そこから湧水が流れ込んだものと考えられる。木樋は南側の溝奥部に向かって傾斜するように設置されており、流れ込んだ水が徐々に木樋をつたって自然流路方向にある窪みへ流れ出す仕組みになっていたと思われる。木樋上の堆積土は土器片や木片などの混入物をほとんど含まないシルトが主で、埋め戻されることなく自然に埋没していった様子が窺える。

**遺物：**木樋が機能していた段階の溝底部の遺物は自然流路側の窪み付近にほぼ限られる。窪み中からは石臼、ウマやウシの頸骨、中足骨などが出土した。自然流路寄りの地点では斎串などの木製品（図版401）やウシの頭蓋骨などが出土した。また木樋脇から円形に削り抜かれた窪み石（図版354）が出土している。埋没過程では溝中から刀形や横櫛、水門に転用された槽、小型の木樋、楕円形曲物底板などの木製品（図版401~402）やヒョウタン、縄（PL30）などが出土したが、他に多量の遺物が廃棄された状況はみられず、溝が清浄に保たれていた様子が窺える。遺物は祭祀関係のものが多く、水に関わる祭祀が行われていたものと考えられる。

**時期：**出土土器から1期後半があたりられる。

#### （6）その他（SD）

**SD8047**（図版167、179、PL30）

**遺構の状況：**⑥b区側の自然堤防傾斜面をテラス状に掘り込んだ遺構で、自然流路につながられている。底部には平石が置かれているが、湧水坑が存在しないことから湧水溝とは性格が異なるものと思われる。板材などが出土している他は目立った遺物がみられない。堆積土1層を第4水田対応層の自然流路（SD8038）の堆積土が覆うことから、SD8047の堆積はSD8044の1・2層に対応すると考えられる。

#### （7）SD7045＝SD8032堆積土内遺物集中廃棄地点（SQ、図版177）

古段階で掘削された湧水溝SD7045＝SD8032（図版169）は埋没が進み、大きな窪地のような状態となっていく。新段階上層に対応する35層、26層面（付図5）からは遺物の集中廃棄地点が複数確認されており、この段階で窪地が一時地表面化していたことが窺える。なお、SQ8008～8010は当初⑥a区側でSD7045上層面として検出したが、後にSD8032の35層に対応することが判明した。

**SQ8007**（PL30）：35層面で確認された。角状および板状の斎串17点（図版407）が折り重なっており、脇に部材（図版403-638）の破片とウシの頸骨（23457）が重なって出土した。

**SQ8008**：斎串のみが40点以上折り重なって出土した地点である。用途不明の棒状木製品と部材（638）の

1片が共伴する。部材の破片はSQ8007に伴う破片と接合し、さらに44層（図版169）で出土した破片と接合してほぼ完形になったことから、使用後に分割して廃棄されたと考えられる。ただ、44層で出土した1片は位置的にはSQ8007から80cm距離をおくのみであるが、SQに伴う他の2片よりも早い時期に廃棄されていたことになる。その時期差については不明だが、廃棄の仕方からこの製品の特殊性が窺える。

**SQ8009**：齋串のみ7点がまとまる地点である。SQ8008の北側でほとんど距離差はない。形態がやや異なる齋串であることからSQを分けたが、あるいは共伴するものかもしれない。

**SQ8010**：35層のSQの中で最も自然流路よりに位置し、齋串13点到申状木製品が伴う（図版404）。

35層面のSQは齋串の集中が主で、他に馬形などの木形が伴わない点で共通している。

**SQ8011**（PL30）：26層面で確認された。馬形1点到申状木製品が装着された状態で出土し、これに齋串4点が伴うとともに、やや離れた地点で曲物の側板が1点出土した（図版408）。付近には他に遺物がないことから、これに共伴するものと思われる。26層は35層直上の堆積であり（付図5）、SQ8007～8010とはある程度の時間差があると考えられる。

#### 4 第4水田対応層

##### (1) 水田跡（図版167、PL30）

第5水田面は洪水砂と考えられるIV-Y6-4b、4c層（付図5）に覆われて廃絶するが、その上にシルト～細砂で構成される4a層が堆積し、SD8043の3層の上に新たな畦畔SC7014が設けられ、新たな水田が営まれる。この第4水田で特に注目されるのは、東西方向に幅の広い畦畔（SC7019、PL30・31）が設けられ、西側の南北畦畔（SC7046）と水路（SD7075・7041）によって結ばれている点である。また、SC7019南の自然流路側にあたる一帯の小畦畔も第5水田と比べてかなり整備されていることがわかる。

##### (2) 自然流路（SD）

**SD7036=SD8038**（図版167、181）

**遺構の状況**：西壁セクション（付図3・4）ではSD7036の底部はかなり抉られた状況で、形成当時はかなり流速があったようだが、堆積土は木片などが混じるシルトが主であることから、その後は湿地状になっていたものと思われる。⑥b区側で検出されたSD8038と接合する。

**遺物**（図版181）：下層を中心に木質遺物が多量に出土し、その中には木筒32号～41号、130号<sup>(註)</sup>の11点が含まれる。木製品は、齋串、人形、馬形といった祭祀具の他に下駄、木錘、壺鐙などがみられる（図版392・393・395～397）。

**遺物集中廃棄**：**SQ8025**（図版181）SD7036の流路幅が狭くなる部分に位置する。人形1点と馬形2点到齋串4点が伴い、馬形に装着されたとみられる申状木製品も確認された（図版391）。

**SQ8027**（図版181）SD7036中程で出土した。ほぼ形状を同じくする齋串2点到小振りの齋串が伴う（図版392）。

**SQ8028**（図版181）SD7036の南側立ち上がり部に位置する。形状を同じくする馬形が2点出土した（図版391）。なお438・439は人形の部分に似ているが全容は不明である。

**SQ8021**（図版181・182）SD8038中程で確認された。ややまばらな出土状況だが、目の表現や胸部中央に傷がつけられているなどの共通点を持つ人形が齋串を伴って出土している（図版393）。人形は足や胴部で割られており、故意に破砕された可能性が高い。

**SQ8022**（図版181・182、PL31）SD8038の南側立ち上がり部分に位置し、齋串24点到人形4点、馬形2点のほか、人形に形がよく似た木札状木製品もみられる（図版393・394）。特徴的なのは穿孔板が12点伴うこ

とで、穿孔部を中心に十の字状に重なって出土したのもあり、祭祀において何らかの役割を果たしていたものであることを示唆する。穿孔板あるいは馬形に装着されたとみられる串状木製品や部材も確認された。

**SQ8024**（図版181） SQ8022の南西約2mの地点で確認された。斎串6点が集中するが、その内495～497は側面中程から角度をつけて削る特徴的な形状をもつ（図版395）。

**SQ8023**（図版181） SD8038中央部で確認された。斎串7点が重なって出土したが、その内の2点には表裏に刀子等で鋸歯状の刻みが施されたものがある（図版395）。

**SQ8029**（図版182、PL31） SD8038の1層で確認された。破片が集中しているが、接合によって斎串6点が確認された（図版398）。この内2点（534・535）は中央部に穿孔があり、同じく出土した2点の穿孔板（537・538）と類似する。なお、穿孔板に装着したと思われる串状木製品も1点出土した。また、42号木筒もこのSQに伴う。上下端が欠損しているが、木取りも他の斎串と同様であることから斎串に墨書がなされたものと考えられる。

**SQ8030**（図版182） SD8038の1層で確認された。破片を主だが、蛇形3点に斎串6点が折り重なって出土した（図版397）。

**時期**：出土土器より1期末～2期初頭があたりられる。

**SD7037・SD7039=SD8040**（図版167、183・184）、**SD7040**（付図3・4）

**遺構の状況**：SD7036=SD8038の埋没後それを削り込む形で新たな流路が形成される。SD8040とした⑥b区では平面的に検出ができたが、⑥a区でこれに該当すると考えられるSD7039は部分的な検出にとどまった。中央ベルトセクション（付図5）ではラミナのみられる砂の堆積が主であることから、比較的流速があったことが予想される。なお、SD7039形成以前にSD7036の堆積土を削り込む流路が存在したことが西壁セクションで確認された。SD7040としたが平面的な検出はできておらず、中央ベルトセクションでもこれに対応する流路の堆積は確認できなかった。SD7037は⑥a区西側のSD7039南側で検出された窪み状の落ち込みである。西壁セクションでは堆積土2層がSD7039を覆うことから、SD7039埋没後に形成されたことがわかる。

**遺物**：SD8040は底部に1部湿地状の堆積があり（3層）、そこを中心に木質遺物が出土した。この内45号木筒は後の解説で「論語」が記されていることが判明した。他に下駄、木錘といった木製品が出土した（図版400）。なおSD7039では44号木筒が流木にはさまった状態で出土している（図版183）。

**遺物集中廃棄**：**SQ8031**（図版184） SD8040の3層段階で確認された。人形1点に斎串6点が伴う（図版400）。

**SQ8032**（図版183、PL31） SD7037で確認された、第4水田対応層では最も上層に位置す遺物集中廃棄である。人形1点、馬形1点に斎串が破片を含めて15点伴う（図版398）。内539～542は完全に重なる形で出土した。他に穿孔板とそれに伴うと考えられる串状木製品などが確認された。なお1mほど北側から槽（551）が出土している。おそらく祭祀具類に伴うものと考えられる。

**時期**：SD8040の出土土器は2期を示す資料である。なおSD7039出土の44号木筒には「七年十月十四日」と記されており、和銅7年（714年）の可能性が指摘されている（長野県埋蔵文化財センター1996）。

**SD8037・SD8050**

**遺構の状況**：第4水田対応層の自然流路は、中央ベルトセクション（付図5）にみられるラミナが明瞭な堆積土をもつ自然流路（SD8050）の作用で埋没していく。一部途切れているが、同様の堆積層は自然堤防側でも確認できる（SD8032 4-4層）。SD8037は⑥b区東壁で確認したSD8040の堆積土を覆う砂層に対して付した遺構番号である。壁際で木製品（図版422-934・935）が出土したが、平面的な検出は行えなかった。

おそらく SD8050または SD8032 4-4層に対応するものと考えられる。

### (3) 湧水溝 (SD)

#### SD7035 (図版167、180)

**遺構の状況：**SD7045=SD8032のすぐ西側で検出された溝である。南側底部の湧水坑を起点としてやや北東方向に蛇行して掘られ、東西流路 (SD7036) につながられている。最奥部の湧水坑周辺と、東西流路につながる部分に窪みがみられるが、特に礫敷きなどは行われず素掘に近い状態である。なお、湧水坑から西へのびる溝も検出され、西側の溝 SD7038につながる事が確認された。この溝は SD7049の東西溝 (図版174) の位置とほぼ一致している。湧水坑上の堆積状況をみると (PL31)、最下層にあたる39~37層はブロックを含むシルトを主とし、多量の土器片が混入していることから、湧水坑廃絶段階で埋め戻された様子が窺える。この上は植物体や木片を多く含む廃棄物によって構成される層と、シルトや砂が沈殿して堆積した層が交互にみられ、湧水坑が埋め戻された後は主として集落側からの廃棄の場となり、時折湿地化しながら埋没していったことがわかる。1~5層は SD8032の15・16層を覆う砂層 (付図5) に対応する洪水性の砂の堆積である。

**遺物：**最下層の湧水坑周辺では石製模造品の破片と思われるもの (図版357-15) が出土した。他に獣骨や石臼 (図版355)、土器などが見られる。遺物が多く出土したのは廃棄物層で、特に湧水坑上部と自然流路側の窪みの上部に集中している。注目されるのは木簡で、合計16点が出土した。この内湧水坑上部の34・35層中から10・11・12号木簡、16層中からは13号木簡が出土し、同一層の自然流路側から14号木簡が出土している。これらは刀子の柄や曲物、斎串、琴柱、横櫛、紡織具といった木製品 (図版389~391) などとともに廃棄されたと考えられる。また、土層注記にみられる「木片」の多くは刃物の痕跡をもつ微細な削屑で、当初は木簡に関わる削屑と思われたが、後の検討により木材加工過程で斧や鑿によって生じたものであることがわかった (第5章第7節、第8章第4節)。なお、15号木簡 (郡符木簡) は洪水砂直下の自然埋没土中からの出土で、SD7035出土遺物の中では最上層に位置する。**遺物集中廃棄：SQ8026** (図版180、PL31) SD7036の合流部に形成された窪みの、北東部立ち上がり部分で確認された。破片を含む蛇形4点に斎串状の木製品4点が伴う (図版389)。蛇形391と392は完全に重なった状態で出土した。

**時期：**湧水坑を埋め戻した最下層 (39~37層) の出土土器は1期後半が当てられるが、その上の堆積土中の土器はこれより新しい要素をもつ。16層から出土した13号木簡には「戊戌年 (698年)」の紀年銘がみられ、これを前後する時期が当てられる。

#### SD7038 (図版167、183)

**遺構の状況：**⑥a区西側の斜面から自然流路方向に検出された溝だが、この下で第5水田対応層のSD7042が検出されており、その埋没した後の窪みを利用して営まれたものと考えられる。溝幅が広がる部分に水門が設置されており (PL31)、水門南側に堰き止められた水が水口から一定量自然流路側に流れ出すしくみになっていたようだが湧水坑は検出されなかった。南側が東西方向の溝でSD7035とつながることから、おそらくここを通る水が貯水されたものと思われる。ただ、SD7035の湧水坑はレベルが低いので、かなり増水しない限り湧水が7038へ流れ込むのは難しいため、確認はできなかったが東西溝中に他の湧水坑が存在した可能性もある。水門をはさむ両側の堆積土はブロックや遺物を含まない砂やシルトが主であり、廃棄物層をもつSD7035とは対照的に、SD7038は自然に埋没していったものと思われる。この点は下のSD7042の埋没状況と共通する。

**遺物：**人形、舟形、弓や琴形木製品に転用された26号木簡のほか、曲物、剝物皿や瓢箪柄杓などの容器類が目立つ (図版399)。これらの遺物は水門を境にして流路側にほぼ限られることから、水門南側は清浄

にされていたと考えられ、SD7042と同様に流れる水に対する祭祀行為の存在が想定される。

**時期**：出土土器から判断して1期末～2期初頭が当てられる。

#### （4）その他（SD、SX）

##### SD7044=SD7047・SX7034（図版167、184）

**遺構の状況**：自然流路 SD7036の底部で南北方向にのびる溝状の落ち込みを検出し SD7044としたが、SD7038東の斜面で検出された SD7047の延長部であることがわかった。SD7047の起点となる土坑状の掘り込み（P1）の北側では板材を長方形に組んだ遺構（SX7034）があり、この溝に伴う施設と考えられる（PL31）。SX7034と P1との間には東西方向に杭が5本打ち込まれ、平石が置かれている。木枠内部に掘り込みの痕跡は認められなかったが、木枠から流路方向に浅い溝状の窪みがのび、SD7044とつながることから、ある程度の流水があったように思われる。P1を湧水坑と断定する要素はないが、ここから湧き出た水が一旦木枠の中に貯水され、流路へ流れ出る仕組みになっていたのかもしれない。

**遺物**：特に SX7034北側には遺物が多量に廃棄されており、廃絶段階で埋め戻された可能性が高い。ここでは、槽、紡織具、火鑽板などの木製品が確認された。また、自然流路側の SD7044では曲物などが出土した（図版402～403）。P1周辺では遺物がみられず、清浄にされていたものと思われる。

**時期**：流路境の堆積土が第5水田対応層新段階の SD7051の堆積を直接覆っていることから（図版173）、第4水田対応層でも最も下層に位置する。出土土器も1期後半が当てられる。

##### SD7070・SA7002（図版167、186）

**遺構の状況**：第4水田西側の南北畦畔（SC7046）に伴う水路（SD7075）の開放部で杭列（SA7002）が確認された。また、SC7046の解体後、SA7002にほぼ平行となる溝状の立ち上がりを一部検出し、それに伴う土坑状の掘り込みを含め SD7070とした。畦畔造営に伴う削平のためか、溝の検出が困難で全容は不明である。3基確認された土坑状の掘り込みの内、P1と P2の内壁にはほぼ長軸方向に2本の杭が打ち込まれていた。ピットの位置は SD7075が東西畦畔（SC7019）に伴う水路（SD7041）と合流する部分にあたる。ピットは畦畔造営以前に掘られたものだが、位置的にみて畦畔造営と何らかの関わりがあったものと考えられる。

**遺物**：ピット中から鍬を模したと思われる木形、横櫛、棒状木製品が出土した（図版421）。なお、SC7046東側から陽物形（図版427）が出土しており、水田に関わる祭祀行為が想定される。SD7070出土の遺物も畦畔造営にあたっての祭祀的な意味合いをもつものかもしれない。

**時期**：畦畔造営以前に掘削されたものなので、第4水田対応層の中でも下層にあたる。しかし SD7070出土の土器には2期のものがみられ、畦畔造営後も残存していた部分があったと思われる。

##### SD8045（図版167、186、PL32）

**遺構の状況**：⑥b区側の自然流路南側斜面に設営されたテラス状の遺構で、SD8038の2層をはさんだ直下では SD8047（図版179）が検出された。底部に木材や石が置かれた状況は SD8047と共通し、場所も全く同じ位置を踏襲していることから、同様の目的を持つ施設と考えられる。堆積状況はラミナがみられる砂が主で、自然流路の作用によって埋没したものと思われる。

**遺物**：槽を転用したものや、建築部材の廃材が杭として利用されている。また、小型の木樋（979）はこの施設と関わりをもつものかもしれない（図版425）。

**時期**：SD8038の2層が堆積した後の設営であり、第4水田対応層でも上層にあたる。出土土器は2期が当てられる。

**(5) SD7045=SD8032堆積土内遺物集中地点 (SQ)**

自然流路 SD8038の下層にみられる植物遺体を多く含む湿地状の堆積は、SD8032の窪地内にも及んでおり、15・16層がこれに対応すると考えられる(付図5)。この層からは多数の遺物集中廃棄地点が確認された。なお、この段階でSD8032の南最奥部には、モミガラを主体とし木片や獣骨などを含む堆積層が砂をはさんで15面確認された(図版185、PL31)。この範囲のみが中央ベルトセクションとは異なる堆積となっており、集落側からの捨て場となっていた様子が窺える。

**SQ8016** (図版185・186、PL32)：自然流路側へ開放した東側の傾斜面に位置する。斎串約60点に鳥形2点、人形4点、馬形3点が伴い、棒状木製品や部材もみられるなど、最も多量の木製祭祀具が集中して廃棄されている(図版410~412)。特に斎串は大きく4つのブロックに分かれ、ブロックごとに形状が異なる。墨書が確認された30・31号木簡は同一のブロックに属する。人形(760)を除いて、鳥形、人形、馬形はほぼ中央にまとまっている様子がわかる。

**SQ8017** (図版185、PL32)：窪地内やや北寄りの中央部に位置し、斎串24点が折り重なって出土した。ほとんどが側面に複雑な切り込みを入れたもので、他では同様の斎串はみられない。串状木製品も数点確認できる(図版410)。なお、板材から必要部分を切り出した残りの屑(PL95-1128、1129)が確認されており、祭祀具加工の過程で生じた屑と一緒に廃棄された可能性を示している。

**SQ8018** (図版185、PL32)：SQ8017の北西方向約1.5mに位置する。斎串16点に人形4点、馬形1点が伴うものである(図版409)。斎串は全点がほぼ同一の形状で、側面に切り込みがある。人形4点の内724~726も同一形状で、頭部や腰の表現が特徴的である。馬形に装着したと思われる串状木製品も確認された。

**SQ8019** (図版185、PL32)：SQ8018の東約1mに位置する。主に破片が集まるが、その内5点について斎串としての形状が把握できた(図版408)。

**SQ8020** (図版185、PL32)：SQ8017の南側約1.6mに位置する。やはり破片が多く、内6点の斎串が確認できた(図版408)。なお、29号木簡もこの集中に伴い、斎串に墨書されたものである可能性が高い。SQ8019、8020ともに斎串が故意に割られた可能性がある。

また、SQ8017の西側約1.1mの地点で土師器甕(図版320)が出土した。甕内には植物質のものが詰め込まれた状態となっており、特に木製品は伴わないが一連の祭祀行為に関わるものと考えられる。

**SQ8033** (図版185)：窪地の最北部にあたるモミガラの廃棄層で確認された、用途不明の棒状木製品の集中である(図版412~413)。モミガラなどの他の遺物とともに一括廃棄されたと考えられ、祭祀遺物の集中廃棄とはやや性格が異なるものと思われる。

## 5 第3水田対応層

### (1) 水田跡 (付図5・6、図版168)

湧水溝 SD7035の堆積土を覆う砂は80cmにも及び(図版180)、第4水田対応層は、水田、自然流路、自然堤防傾斜面ともにかなり大規模な洪水によって埋没した様子が窺われる。中央ベルトセクション(付図5)ではIV-Y6-3c層およびSD8050の堆積によって覆われた畦畔(SC7014)の上に再び新たな畦畔(SC7047)が営まれた様子がわかる。ただ、SC7047の土層はIV-Y6-3c層を基調としていることから、洪水砂を利用して造成されたものと考えられる。この第3水田も西側南北畦畔(SC7027)と東西畦畔(SC7012)は第4水田の位置を踏襲しているが、SC7012には水路が作られていない。また、この両畦畔に囲まれた水田内の小畦畔は第4水田と比べかなり数が減少している。

「1 概観」で触れたように、第3水田の田面となるIV-Y6-3a層が洪水砂である2d層に覆われた後、



自然流路側の一部分に再び水田が営まれた形跡が認められる。中央ベルトセクション（付図5）のIV-Y6-2a-4層としたシルト層がこれにあたるが、北壁セクション（付図6）ではこれに該当する層がみあたらない。この部分的に検出された水田を第3水田上層水田として図版168に示したが、プラントオパールも少なく実際に水田として機能していたかについては疑問が残る。

## （2）自然流路（SD）

**SD7032=SD8028 3・4・5層**（付図5、図版168、190～192）

**遺構の状況：**第3水田に対応する自然流路で、先行して調査した⑥a区側のSD7032は層位的に捉えられなかったが、⑥b区側のSD8028は中央ベルトセクションの土層に基づいて調査を行うことができた。流路形成段階の最下層は中央に中洲を残す幅の狭い小河川状であったようである。この段階で流路北側の立ち上がり部分に小規模な杭列（SA8003）が確認された。5層中からはタニシの遺体が多量に検出されており、流路はその後湿地状になっていったものと思われる。4層は湧水溝SD7030と接続するI13、18区にのみ見られる堆積で、木片や種子を多量に含む。北側に見られる3-3層は、この上に4層がかかるために3-2層と区別しているが、両者はほぼ同質の細砂～シルト層であることから、4層は3層に対応する堆積が進む中で、湧水溝SD7030に廃棄された木屑等の遺物が流出して部分的に形成された層であると考えられる。よって3層と4層形成の時期差はほとんどないといえる。なお、3層面においては立木を伴う杭列（SA8002）が確認された。その内I15区で検出された2本の立木はヤナギ属である。

**遺物：**各層で多量の木製品が出土した。特に齋串、馬形、人形といった祭祀具が目立つ。出土状況はSD8028を中心に各層別に図示した（図版190～192）。また、木筒の出土も多く、5層中で49～58号木筒、4層中で71～86号木筒、3層中で87～99号の計39点に及ぶ多数の木筒が確認された。

**遺物集中廃棄：SQ8034**（図版191）5層段階の流路中央部に位置し、人形に齋串が4点伴う（図版380）。

**SQ8035**（図版191、PL33）5層段階の流路北側の水田へ立ち上がる傾斜部に位置する。人形に馬形の頭部、齋串が2点伴う（図版380）。完形品がなく、散乱した様子ではあるが、周囲には他の遺物がないことから共伴するものと判断した。

**SQ8040**（図版190）⑥a区のSD7032へ下る南側斜面で確認された。馬形2点に齋串の破片、串状木製品および側部に連続的な切り込みを施した棒状木製品が集中して出土した（図版377）。

**SQ8041**（図版191、PL34）4層段階のSD7030との合流部で確認された。ほぼ同形状の馬形3点に完形の齋串が7点伴う。また、馬形に装着されたと思われる串状木製品も確認された（図版381）。

**SQ8042**（図版191、PL34）4層段階のSD7030が開放した東側地点に位置する。馬形2点と人形2点が伴い、串状木製品と齋串も確認された（図版382）。

**SQ8043**（図版192・193、PL34）3層段階の南側斜面で確認された。ほぼ同形状の人形2点に齋串、馬形が伴う（図版384）。齋串（304～309）は割られた状態で出土したが、多くは接合し完形となった。

**SQ8044**（図版192・193、PL34）3層段階の流路中央部に横たわる長さ約2.6mの割材の脇で確認された。蛇形の周囲に齋串の重なりと穿孔板の重なりがある（図版385）。齋串315と316は同形状で、3分割されて重ねられていた。齋串317～320も同形状で、完形のまま折り重なった状態で出土した。また穿孔板も4点折り重なり、周囲に装着されたと思われる串状木製品が確認された。なお、組み合わせ人形の足に類似するもの（330）が出土したが、それに関わる他の部品は不明である。

**SQ8045**（図版192・193、PL34）3層段階の流路中やや自然堤防よりの地点で確認された。蛇形の破片が集中するが（図版386）、346は接合してほぼ完形となった。他は蛇行状に加工されているが、完全には接合せず全容は不明である。

**SQ8046・8047** (図版192・193、PL34) 3層段階の北側 SC7047傾斜面でも出土した。畦畔にかかる状態で出土した上側の集中をSQ8047、流路に入る下側の集中をSQ8046とした。双方とも細かく割られた齋串の破片が集まり、部分的に接合するものもあるが完形となるものはない。また、串状木製品に含まれるものも混じる(図版385)。

**SQ8048** (図版192・193) SQ8046・8047から東側へ約3m離れた、流路に落ち込む地点で確認された。完形の齋串3点と破片および人形1点がやや散乱した状態で出土した(図版385)。

**時期**：時期を把握する上では、特に3層で出土した「養老七年十月」の記載をもつ90・92号木簡が貴重な資料となる。他の木簡も記載内容が郷里制下であることを示すものが多く、「養老七年(723年)」という年代との矛盾はみられない。よって遺構の存在時期は木簡以外の遺物も含めて8世紀前半の中で捉えることができるだろう。

**SD7031・SA7001** (図版168、189)

**遺構の状況**：⑥a区西側のSD7032の堆積土上で検出された不整形な窪み状の範囲をSD7031とした。窪みの中央部では、南北方向にほぼ2列状に打ち込まれた杭列(SA7001)が確認された(PL33)。杭は南側の自然堤防斜面末端部から、北側の南北畦畔(SC7027)をつなぐ形で打ち込まれており、柱穴状の抜き取り痕(P1~9)も確認された。やや雑然とした状態ではあるが、杭も1mを超える大型のものが多いことから、集落側と水田側をつなぐ簡易な橋の痕跡である可能性があり、SD7031はそれに伴う水たまり状の窪みであったと思われる。SD7031が形成される以前にSD7032の堆積がかなり水田側にも及んでいる(付図3・4)。南北畦畔(SC7027)は残存しているが橋脚状の杭は畦畔に伴う水路(SD7054)内にも打ち込まれていることから、橋を造営する段階で水路はすでに埋没しており、畦畔は道として機能していたのではないと思われる。

**遺物**：木簡(114~118号)が出土した。SD7031は湧水溝の窪地のように遺物の廃棄場となっていた形跡はなく、木簡はそれのみを廃棄する目的で捨てられた可能性が高い。木製品は斧柄、曲物などがみられ、橋脚として建築部材が転用されていた(図版375・376)。

**時期**：西壁セクション(付図3・4)では、第3水田の上層水田に対応する自然流路(SD7028=SD8028 2層)の堆積層が確認できず、SD7031の上は第2水田対応層に属するSD7050(IV-Y6-1k層)となる。よって西壁ではSD7031は第3水田対応層の最上層に位置する。しかし、114号木簡は郷里制下の郡符木簡であり、年代は715年~740年の中に含まれる。出土土器も2期に属する。

**SD8035** (図版168、192)

**遺構の状況**：SD8028の3-2層が堆積した後、⑥b区側に形成された中洲と畦畔の間の流路状の部分をSD8035とした。中央ベルトセクション(付図5)ではSD8028の3-3層を削り込んだ状況がみられ、新たな小河川が形成されたものと考えられる。堆積土は中洲をはさんでSD8028の3-1層と共通する。⑥a区側では平面的な検出ができなかったが、西壁セクション(付図3・4)にみられるSD7053が対応する可能性が高い。

**遺物**：長大な角棒状の齋串(929)が分割された状態で出土した。他に蛇形、馬形などの木製品や獣骨が出土した(図版421・422)。

**遺物集中廃棄**：**SQ8049** (図版192・193、PL34) SC7047の傾斜面にかかる状態で出土した。馬形の頭部~胴部(921)と胴部~尾部(920)があるが両者は接合しない。齋串の破片と思われるものが多く、917のみ完形で918と919は接合によっておおよその形が把握できた。また串状木製品も確認された(図版421)。

**SQ8050** (図版192・193) 中洲とSC7047に挟まれた、流路中央部に位置する。完形の馬形に穿孔板2点(図版421)と馬の顎骨が伴う。顎骨は残存状況が悪く歯のみの取り上げとなった。

**時期**：SD8028 3層に対応し、8世紀前半(2期)が当てられるが、中央ベルトセクションではこの段階の最上層にあたる。この上をSD8028の2層が覆う。

**SD7028=SD8028 2層** (図版168、187)

**遺構の状況**：第2水田対応の自然流路(SD7025=SD8027、SD7026=SD8029)の調査終了後、この流路に切られた堆積土を削る過程で木製品が出土した。この段階で自然流路と判断し、⑥a区側をSD7028としたが、その後⑥b区側のSD8028 2層に対応することが判明した。第3水田対応層の最上層にあたるが、この段階ですでに第3水田は埋没している。中央ベルトセクション(付図5)ではSD8028の2層が、水田を埋没させた洪水砂(IV-Y6-2d層)の上に造成された畦畔(SC7051)を一部埋没させており、第3水田の上層水田段階に対応する自然流路であったことがわかる。流路北側の立ち上がり部分では立木を伴う小規模な杭列(SA8004)を検出した。

**遺物**(図版187)：木簡(110~113号、119~121号)および斎串、馬形、蛇形などの木製品が出土したが(図版371・372)、全体的に遺物量は少ない。

**時期**：6期に属する土器が出土している。SD8028 2層を第2水田土(IV-Y6-2a層)が覆うことから、層位的には第2水田対応層の下になるが時代的には近接していることになり、むしろ第3水田期との時代差が大きい。第3水田埋没後放置された期間が長かったことを窺わせる。

(3) 湧水溝(SD)

**SD7030** (図版168、187・188)

**遺構の状況**：第4水田対応層を埋没させた洪水砂が自然堤防側において地表面化した後、そこを掘り込んで新たな溝がつくられる。溝の底部には土坑状の掘り込みが4基切り合う状態で検出された(図版187、P1~4)。坑内に酸化鉄分の付着がみられることから湧水坑と考えられ、ここを起点として自然流路(SD7032=SD8028)につながられた湧水溝と捉えることができる。湧水坑の位置は、この下で検出されたSD7035と比較するとかなり南に移り、全時期を通じて最も集落寄りの高い地点となる。なお、これらの湧水坑とは別に東側の立ち上がり部分で、内側に褐鉄が集積した湧水点と思われる3基の小坑(P5~7)が検出された。これらは底部に掘られた湧水坑とはやや性格を異にするように思われる。溝の最奥部には集礫が認められ、P3底部にも大型の礫が敷かれている(PL33)。湧水坑部(最下層)の堆積状況は図版187のセクション図が示すようにブロックや木片を含むシルトが主であり、人工的に埋め戻されたものと考えられる。この後はシルトと砂が互層となる湿地状の堆積とシルトや砂がブロック状となる層が交互にみられ、特に後者には木片などの廃棄物を多く含むものがある(図版188)。この内8層は特に多量の遺物を含む堆積土で、溝開放部から北側で部分的に確認されたSD8028の4層はこの8層を形成する遺物廃棄に伴って堆積したものと考えられる。この段階では底部湧水坑が埋没しているため、レベルが高い位置に存在するP5~7の湧水がこの遺物の流出に関わるのかもしれない。図版188で示した中層の遺物出土状況図はほぼこの層に相当し、9層以下に対応する遺物を下層、7層から上の遺物を上層としてまとめ、その出土状況を示した。このSD7030を最後として⑥区では湧水溝が姿を消す。

**遺物**(図版187・188)：底部湧水坑内およびその周辺からは礫とともに多量の土器が出土し、P1脇から銅製帯金具(図版359-10)が出土した。また、P2、P3からそれぞれ1点ずつ石臼が出土しており(図版354)、SD7035の石臼の出土状況と共通する。湧水坑が埋め戻された後の下層の段階では3点の木簡が出土した(46~48号)。その他、竖櫛、独楽、建築部材等の木製品がみられる(図版372)。中層の段階では多量の遺物が廃棄されている。製品よりも木屑類が目立つが、それらに混じって木簡8点(60~67号)が出土した。上層からも木簡が3点(68~70号)出土しているが、下層で出土した木簡よりかなり自然流路寄りの地点

で確認された。

**遺物集中廃棄：SQ8037 (PL33)** 中層の段階の自然流路に合流するやや手前の地点で確認された。割られた斎串(図版373)が折り重なる状態となり、東側脇で出土したヒョウタンもこれに伴う可能性が高い。

**SQ8036 (PL33)** 上層の段階で確認された。斎串11点と人形が折り重なって出土した(図版374)。

**SQ8038 (PL33)** 上層段階のやや流路寄りの地点で確認された。斎串6点が折り重なり、串状木製品の破片3点と馬形の胴部が混じる(図版374)。斎串は割られているが、接合し全て完形品となった。

**SQ8039 (PL33)** SQ8038西側約1.5mの地点で確認された、蛇形を主とする集中である(図版374)。接合によって135は完形の蛇形となったが、137と138は破片のみで蛇行状に加工されているが全容がわからない。136は馬形状の木製品である。

**時期：**湧水坑内および最下層中から出土した土器は2期に属する。また、8層中で出土した62号木簡には「神亀(三)」の表記がみられる。神亀三年とすると726年にあたり、この段階ですでに形成されていたSD8028の3層中で出土した「養老七年(723年)」の木簡と時代的に極めて近接する。なお、「乙丑」記載がみられる46号木簡が下層段階のブロック状となった土の中から出土した。表記の方法からみて、この干支が西暦665年を示すとすると、なんらかの理由で7世紀の木簡が溝内に混入したことになる。また、これが60年後の725年(神亀2年)を示すとすると、他の木簡の年代との矛盾はない。この点に関しては今後の検討が必要と思われる。

#### (4) その他(SD)

**SD7029 (図版168)**

**遺構の状況：**湧水溝SD7030の南東脇で検出されたが、第2水田対応層の水路(SD7024・SD8026)に削られているため、全容は不明である。人工的に掘り込まれた溝のようだがSD7030との切り合いは認められず、おそらく北東方向へ自然堤防縁辺部を沿うように造られた水路だったと思われる。底部には褐鉄分が集積し、第2水田対応層の水路底部と同様の状態であった。**遺物：**土器片が多量に出土した。

**時期：**出土土器は2期に属する。

#### (5) 土坑(SK、図版168、194)

SD7030西側に広がる、洪水砂が堆積して平坦地となった部分で土坑群が確認された。まとめからみて、SK7015・7019・7020・7017の1群と、SK7021・7022の1群に分けられる(図版194)。

**SK7015 (PL34)** 3基の土坑の切り合いの中で最も新しい。埋土最下層にあたるの6層の上が焼土化して炭化物が堆積しており、この段階で火が焚かれたものと思われる。なお、2層中に同様の炭化物層がレンズ状に入り込んでおり、土坑の窪みを利用してもう一度火が焚かれたことを示唆する。**遺物：**土坑南西脇にみがき甕(SK7015 No.1)が出土した。SK7019の埋土に載るので、SK7015に伴って置かれたものと考えられる。**時期：**みがき甕は0～2期の中で捉えられるものである。

**SK7019** SK7015に切られ、SK7020を切る。底部が焼土化し、炭化物の堆積がみられたことから土坑の底で火が焚かれた様子が窺える。遺物の出土はみられない。

**SK7020** SK7019に切られ、3基の切り合いの中で最も古い。埋土2層の上が焼土化し、炭化物が堆積している。2層は人為的に埋めた土と思われ、土坑を埋めた後そこで火が焚かれた様子が窺える。遺物の出土はみられない。

**SK7017** 前述の3基の土坑との切り合いはないが、位置的にみてこれらと関わりのあるものと思われる。この土坑のみ火が焚かれた形跡がみられない。**遺物：**底部で斎串(991)が確認された。出土状況から、

土坑内に廃棄されたものと考えられる。

**SK7021** 土坑群の中で最も自然流路寄りの地点で検出された。埋土2層の上が焼土化し、炭化物が堆積していることから、この段階で火が焚かれたものと思われる。遺物の出土はみられない。

**SK7022** SK7021南側の浅い掘り込みである。SK7021の2層と同様の埋土であり、その上が焼土化して炭化物が堆積する。2基の土坑の前後関係は不明だが、埋土の状況から、同時期の可能性もある。

**SK8016** (PL34) 第3水田の上層水田（IV-Y6-2a-4層）を掘り込む。底部に炭化物層があり、壁が焼土化していることから、土坑内で火が焚かれたものと思われる。

**遺物**：炭化物層（2層）の上で須恵器杯が出土した（図版338）。

**時期**：土坑が掘り込まれた層位はSD8028 2層（6期）に対応するが、須恵器は2器に属する資料である。

以上の土坑は火が焚かれていたり、祭祀具（斎串）が出土した点からみて祭祀に関わりのある遺構であることが考えられる。

## 6 第2水田対応層

### (1) 水田跡（図版23）

部分的に再造成された第3水田の上層水田は新たな洪水砂（IV-Y6-2a-3層）に覆われ（付図5）、再造成されなかった範囲でも順次埋没が進んでいた状況が窺える（IV-Y6-2c~2b層、付図6）。この上全面に水田土に相当すると思われるシルト（2a層）が堆積する。調査当初は水田の存在を予想していなかったため平面的な検出が不十分であるが、部分的に畦畔状の盛り上がりを確認できる。ただ、第3水田と比べると明確な区画がみられず、プラントオパールも少ないため水田として機能していたかは疑問である。しかし、西側の南北畦畔は踏襲されて存在し（SC7026）、中央部に水路（SD7052）が造られている。

### (2) 自然流路（SD）

**SD7025=SD8027、SA7003**（図版23、195）

**遺構の状況**：第1水田調査の段階で、SL8001の傾斜部下（付図5）には黒褐色化した土が東西に広がり、湿地状の遺構の存在が予想された。掘り下げていく途中、上層からは多量のモモ核等を中心とする種実や自然木片が出土した。下層にいくに従い一部粗粒砂も混じるようになり、傾斜からみて西から東へ流れる自然流路であったことが判明した。形成段階ではSD8028の4層まで削り込むが、その後は湿地状となり木片等を含む堆積が主となる（付図5）。SD7025内部から北側にかけては杭列（SA7003）が検出された。

**遺物**（図版195）：下層（4層）を中心に木製品の出土が多く、人形、馬形、斎串などの祭祀具の他に下駄、曲物、刳物皿等がみられる（図版368~370）。また、「赤」「本」の墨書がある土器が出土した。さらに、第5水田対応層の自然流路にみられたように、獣骨が多量に出土している点が注目される（PL35）。ウシ、ウマの各部がみられ、特にSD8027のI18区は集中度が高い。**遺物集中廃棄**：SQ8051（図版195）SD8027の4層段階で確認された。同形状の馬形3点がやや散在して出土した（図版368）。

**時期**：6~7期に属する土器が出土している。

**SD7026=SD8029、SA8001**（図版23、196）

**遺構の状況**：SD7025=SD8027の北側に形成された自然流路で、2本の流路に囲まれた空間は大きな中洲状となる。最下層の3層は粗粒砂が主でラミナもみられ、かなり流速があったことが窺える（付図5）。南側にはほぼ流路に沿う形で杭列（SA8001）が検出された。流速があった段階で護岸等の目的で打ち込まれたものかと思われる。北側には溝状の落ち込み（SD7027）がみられる。

**遺物**：木製品が主で、人形、馬形、斎串などの祭祀具の他に、鎌柄、曲物、建築部材などが出土した（図版370・371）。SD7025=SD8027で目立った獣骨はほとんどみられない。

**遺物集中廃棄**：SQ8052（PL35）SD7026の底部中央で確認された。形状のわかるもの12点を含め、斎串の破片が折り重なって出土した（図版370）。**時期**：検出状況から、SD7025=SD8027と同時期と考えられ、出土土器も6～7期に含まれる。

**SD7043・SD7050・SA7004**（図版23、197）

**遺構の状況**：⑥a区西側で検出された、南北両側に杭が密集して打ち込まれた流路状の遺構である（PL35）。搬出用道路の下であったため調査時期が遅れ、同時に検出できなかったが、SD7025とSD7026が分流する起点となることがわかった。自然堤防側のSC7009の先端と水田側のSC7026の先端に挟まれた地点に位置し、双方の水路を流れる水が落ち込む部分にあたる。中央部に流路状の窪みがあり、それを挟んで両畦畔側に杭が多数打ち込まれている（SA7004）。水路から流れ込む水はこの杭列を通過して自然流路に合流することになる。自然流路の上流となる杭列より西側には、水田面から自然堤防部の水路（SD7020）の埋没土まで到達する湿地状の堆積（IV-Y6-1k層、付図3）がみられるだけで、流路状の堆積は確認できなかった。この一帯は沼地のような状態だったのかもしれない、この部分を特にSD7050とし、SD7043とのつながりで捉えることとした。なお、IV-Y6-1k層はSD7020が埋没した段階での堆積であることから、畦畔内の水路が稼働していた時期とは時間的な差が存在する。杭列の果たした機能は排水の浄化などが考えられるが、ここを起点に分流する北と南の自然流路の流速調節にも関わるのかもしれない。

**遺物**：杭列部では馬形、斎串、曲物が出土した。SD7050内では舟形、馬形がみられるが（図版402）、遺物は比較的少ない。

**時期**：6～7期にあたる土器が出土している。

**SD8034**（図版23、196）

**遺構の状況**：SD8027北側で部分的に検出された自然流路で、全容は不明である。北側はSD8028の2層を削り、南側はSD8027に切られる（付図5）。西壁ではこれに対応する土層は確認できなかった。

**遺物**：検出された範囲は狭いが多量の獣骨が出土した。ウシの歯が多く、ウマの肩胛骨や中足骨などもみられる。また、剝物皿が1点出土した（図版421）。

**時期**：SD8028 2層とSD8027の中間層に位置し、6期以降7期までがあたり得られる。

### (3) その他 (SD)

**SD7033=SD7034**（図版23、197）

**遺構の状況**：SD7025の屈曲部南側に位置する。当初は溝状の掘り込みSD7033として検出し、さらにその下層をSD7034として調査した。しかし後の調査によって、湧水溝SD7038の窪地であることが判明した。すでに湧水は存在せず、遺物を廃棄しただけと考えられる。

**遺物**：銅製帯金具（図版359-11）が出土した。他に横櫛、棒状木製品、剝物皿がみられる（図版388）。剝物皿の内388の底部には「赤」の刻書がみられる。これはSD7025で出土した土器、さらに集落内のSB5064・SB6012で出土した土器の墨書と共通する。

**時期**：6～7期に該当する土器がみられる。第3水田対応層での遺物廃棄はなかったようだ。

### (4) 自然堤防側の開発と遺構

この時期、自然堤防側には大きな変化がみられる（付図5、図版23、PL35）。第4水田対応層までは遺物の集中廃棄の場となっていたSD8032の窪地を含め、傾斜面には人工的に土が盛られる（SL8003）。一時こ

れを削る形で流路（SD8033）が形成されているが、その埋没後さらに盛り土が行われる（SL8002）。さらにその南側にも畦畔状に土が盛られ一段高い面が造成される（SC7009・SC7049）。この段階で南から灌漑用水路と思われる溝が掘られ（SD4514）、自然堤防北端の縁に沿って東西方向に分流する（SD8021、SD7020＝SD8024）。また、SC7009と7049境は大きな水口状となり（SD7024）、SC北側の水路（SD8026）に水を分流する仕組みになっていたものと思われる。これらの水路が灌漑用のものとする、この段階で㊦区より南の地域に水田が造成されていた可能性がある。

これ以前の自然堤防斜面は、古墳中期に端を発する祭祀遺構である湧水溝が営まれてきた空間であるが、この段階で伝統は途絶え、開発の手が入ってきたこと様子が窺える。この後は第1水田が造成されることにより自然流路も消滅していく。

#### 註

『長野県屋代遺跡群出土木簡』においては126点の木簡についての報告を行ったがその後さらに4点の木簡が確認され、総計130点となった。これらについては『総論編』において報告する。

#### 引用・参考文献

長野県埋蔵文化財センター 1996 『長野県屋代遺跡群出土木簡』

### 第3章 平安時代、洪水砂埋没直前(IV-1層上面検出)の遺構と遺物出土状況

#### 第1節 概 観

**遺構検出層位** 本章に掲載した遺構は、IV-1層上面で検出されたものに限定した。この層理面は、調査範囲のほぼ全域を覆う洪水砂(III-2層)によって明確にとらえることができた。このことから、平安時代の極限られた一時期の地形や遺構を広範囲にわたって把握することが可能となっている。

**遺構検出地区** III-2層の被覆が認められる地区は、更埴条里遺跡A地区から屋代遺跡群⑥区のほぼ全域にわたっている。ただし、自然堤防の高所である屋代遺跡群④区北半部から⑥区南半部にかけては、後世の削平などによってIII-2層が失われていた。また、IV-1層上面も中世以降の攪乱を受けていたため、この地区での厳密な地形復元は行えなかった。

窪河原遺跡では千曲川の河道の変更によってIII-2層、IV-1層ともに残存していない。

**検出遺構数** 条里水田跡は更埴条里遺跡A~K地区南半部、屋代遺跡群①~④区の微高地を除く部分に広がる。また、屋代遺跡群⑥区の旧河道内でも水田跡が検出された。全面積は約69,222㎡に及ぶ。畝状遺構(畝跡)は集落が廃絶した微高地や、条里型地割内の微高地を中心に検出され、約6,064㎡にわたる。竪穴建物跡など居住に関連する遺構では、洪水砂で被覆される以前にカマドの破壊が確認されたり、第一次埋没土の形成が認められた。そのため、厳密な意味で、洪水直前に使用されていた遺構は見つかっていない。

**土地利用の違い** 条里型地割に則った耕地の再開発によって、前時期との間に若干の変化が認められる。

1. 後背湿地I群から自然堤防I群内の低地域では、条里水田が展開する。その範囲は、更埴条里遺跡A地区から屋代遺跡群④区中央付近までである。
2. 同じ後背湿地I群から自然堤防I群内の低地域の中でも、幹線水路が走るやや高い地区では条里型地割内に畝状遺構が認められ、畝として活用されていたと考えられる。ただし、微化石分析の結果では、イネ以外の栽培植物は皆無に等しい状態であった。屋代遺跡群②、③a、③b区の一部で、元々集落が存在していた地区が中心となる。3との違いは耕地として水平に造成されている点である。
3. 後背湿地I群から自然堤防I群内の微高地は、8期前半の一時期までは集落として利用されてきた。しかし、洪水直前の段階ではほとんどの居住施設がなくなっており、畝状遺構が広がっていた。集落廃絶後、遺構の凹凸はそのまま、畝として利用されていたと推定される。屋代遺跡群①区、③a区の範囲である。更埴条里遺跡K地区でも畝状遺構が見つかっているが、この地区は集落が継続していた可能性がわずかながらある。
4. 自然堤防I群の高所は、後世の攪乱が激しく土地利用状況を知る手がかりは少ない。ただし、居住施設が皆無であった点は確認できる。
5. 千曲川の旧河道内の低地では、古代3期以降ほとんど放棄された状態に近かった水田が再開発された。

**記載順** 遺構と遺物出土状況の説明は南(更埴条里遺跡)から北(屋代遺跡群⑥区)の順に行い、水田跡の記載を中心に、畝状遺構(畝跡)の説明を加えた。条里水田などの変遷や特徴については、第8章第8節で検討する。



## 第2節 水田域（条里遺構）

### 1 概 観

本節で記載する水田跡は、更埴条里遺跡 A 地区から屋代遺跡群⑥区までの総延長約 2 km にわたる。⑥区を除く水田跡は条里水田として周知されている。調査が広域にわたったため、ここでは後背湿地 I 群にあたる更埴条里遺跡と自然堤防 I 群に属する屋代遺跡群①～④区、千曲川旧河道内低地の⑥区に分けて記載した。事実記載に関係する平面図は 1/500（図版 198～217）である。なお、畦畔・田面の遺存状況と水田区画の様相などは調査区ごとに差異が認められるが、紙数の関係等で概略のみを記し、①田面の傾斜と水口の方向、②水田面の相違、③大畦（坪）交差点の距離、のデータのみを図示（図版 218～221、付図 7）し、条里水田全体に関する見解は第 8 章第 8 節に示した。なお、大畦の規模・構造については観察表に示し、特徴的な遺構については個別図を掲載した（図版 222～228）。

### 2 更埴条里遺跡の水田跡（図版 198～208、218・220・222・224）

**調査区内の位置** 有明山山裾の A 地区から現五十里川と接する K 地区までを範囲とし、A～K 地区南端で水田域、K 地区南端以北で集落域が確認されている。

**砂層の堆積状況** 平安時代の条里水田を埋める砂層は、調査区全域で確認された。昭和 36 年の調査で見つかった砂層と同一層である。砂層は、水田面が低まる A 地区北端から C 地区中央部で約 30 cm の厚い堆積があり、ここから南方（有明山山麓）と北方（D 地区以北）に向かい若干薄くなる。調査区内では、A 地区から屋代遺跡群まで連続する南北大畦が各調査区西側で確認されており、C 地区（SC201）・D 地区（SC301）・E 地区（SC402）・G 地区（SC605）・H 地区（SC701）・J 地区（SC1001）では大畦西側が一段高く、砂の堆積がきわめて薄い状況が見られた。大畦東側坪内とは砂の堆積状況に相違が認められている。砂層は粒子と色調によって分層される傾向が見られ、水田面と畦畔直上は白色と暗灰色のラミナ構造をなす砂層で埋没し、上部には細砂主体で酸化鉄の影響を受けた黄褐色の砂層が堆積する状況を示す。ラミナ構造は畦畔脇で顕著である。A 地区では田面に残された凹み底部に白色粘土の堆積があり、山裾は黄褐色の砂層堆積以前に白色粘土に覆われたことが認められた。なお、砂層は A 地区南側調査区外に広がるのが土層断面で確認されている。

**遺構の状況** 全体的に大畦と坪内の畦畔は良好に検出されたが、調査区西側に位置する南北大畦のなかで、B～F 地区（SC01・201・301・402・506）は圃場整備時に掘削された溝で、A 地区 SC01 は洪水砂堆積後に掘削された溝により破壊された部分がある。また砂層の堆積が薄い C 地区・D 地区・E 地区・G 地区・H 地区・J 地区の南北大畦西側は検出が困難であった。耕作土の残存状況は良好で、田面には凹凸、鋤痕などが確認された。また J 地区 SC1001 の一角で大畦に沿う不整形の凹みが見られ、VI 層が露出する状況が認められている。

**大畦（坪）の区画と坪内区画** 有明山山麓の A 地区から J 地区東西大畦（SC1002）の北方約 32 m の範囲が水田域で、そこから現五十里川にかけては集落域が展開する（K 地区）。条里水田は A 地区から屋代遺跡群に向かう南北大畦 1 条（SC1・101・201・301・402・501・605・701・801・1001）と、交差する東西大畦 8 条（SC2・202・302・401・502・602・706・1002）により区画され、これらにより坪が形成されている。ところが A 地区では東西大畦は確認されず、大畦相当位置に存在する東西畦畔（SL27・29 と接する）が大畦の役割を担ったこ

とが予想される。

大畦の方向は、南北大畦は  $N4\sim 9^{\circ}W$ 、東西大畦は  $SC52\cdot 1002$ が  $N93^{\circ}W$ 、 $SC202\cdot 302\cdot 401\cdot 502$ が  $N95^{\circ}W$ 、 $SC602$ が  $N96^{\circ}W$ 、 $SC706$ が  $N94^{\circ}W$  で、条里の基準線は  $4\sim 9^{\circ}$ 西に振れる。

大畦の規模は、南北大畦は下端幅  $1.5\sim 2.0m$  で、東西大畦は①下端幅  $4.5\sim 5.0m$  ( $SC706\cdot 1002$ )、②下端幅  $1.8\sim 2.1m$  ( $SC202\cdot 302\cdot 401\cdot 602$ )、③下端幅  $1.4m$  ( $SC02\cdot 502$ ) の3種類が存在する。本遺跡の大畦は下端幅約  $2.0m$  が一般的な規模と言えよう。

中央に水路を伴う構造の  $SC202$  と、規模的に卓越した  $SC1002$  は特徴的である。後者は、交通路の可能性がある。 $SC1002$  は古代6期頃には北側に  $SD1032$  を伴っていたが、III層被覆時には溝は埋没し田面として利用されている。

東西大畦は約  $109m$  間隔で配置され、坪内は幅  $50cm$  前後の小畦が大畦と平行もしくは直交する方向で存在する。小畦には坪内を南北二等分、東西五分する畦畔と内部の田面を細分する畦畔がある。前者は南北約  $52m$  ・東西約  $21m$  (内法) の細長い区画を示す。所謂「半折型」を呈し、坪内の基本的な区画となる。後者は水田面の南方への傾斜がきつくなる E 地区以南で南北に細分、西から東へ傾斜する F 地区では東西に細分する傾向があり、傾斜が緩やかな G 地区以北は田面を細分する畦畔が少ない。半折内部は地形の傾斜に起因して細分した可能性が高い。G 地区 ( $SL607$ )・H 地区 ( $SL705$ )・J 地区 ( $SL1007$ ) では南北半折畦畔脇で幅  $1.6\sim 2.4m$  (内法) の細長い区画がある。 $SL705\cdot 1007$  の長辺が半折の長辺と一致する状況から、半折田面単位の付随施設といえる。 $SL607\cdot 1007$  と接する  $SC603\cdot 1006\cdot 1007$  には水口が付設されており、田面の高低差から周囲の田面に排水されたことが認められる。

**水田面の状況** 水田面は一様ではなく、坪単位もしくは田面単位で異なりが認められた。特徴的な田面は4種類に大別される。

- ① 水田面の凹凸が著しく、水田面直上にブロック状の土塊(耕作土)が分布する田面である。凹凸は深さ  $5\sim 10cm$  程度を測り、水田面が不安定で砂層と水田面の境界が不明瞭である。洪水砂下部で土塊が砂層と混在する状況が認められた。基本的に水田一筆単位でのまとまりがあるが、C・F 地区では一筆内部の一角で、B 地区では畦畔脇に存在するものもある。A 地区では田面に近接する畦畔に、田面と同様無数の凹凸が見られ残存状況が悪い。
- ②  $15\sim 20cm$  間隔で幅  $10\sim 12cm$ 、深さ約  $5cm$  の平行する溝が列状に並ぶ田面である。調査区のほぼ中央部の E・F 地区で顕著に認められた痕跡である。F 地区  $SL507\cdot 508\cdot 509\cdot 512\cdot 513$  で顕著であるが、溝は約8条単位で畦畔の内側を並走し、畦畔交差点で直角に屈曲しつつ田面すべてに施されている。
- ③ 水田面はほぼ平坦化し、深さ  $5\sim 10cm$  程度の不整形の凹みが無数認められる田面である。ブロック状の土塊はなく、凹みは①より輪郭が明瞭である。
- ④ 水田面に浅い溝状の凹みが数条平行する田面で、F・G 地区で認められた。ここでは半折型内部を東西に二等分する位置に浅い溝が掘削されている。

上記の田面の違いは、一連の農作業の過程を示している可能性がある。最も農作業が進行した場所は②田面で、農作業が①から②へ進行したと推定される。

平安時代の農業も、水田耕土をすき返す荒起こしから水田土壌を安定させる代掻きへと進んだとすると、①は荒起こし田面、②は馬鋤などによる耕作痕(牛馬耕)と推定される代掻き田面と解釈される<sup>(註)</sup>。なお、本遺跡では畦畔脇で溝状の浅い凹みが認められた。凹みは田面の1辺もしくは2辺に存在し一筆内を全周するものはない。A 地区では①・③田面、B 地区以北は③田面に残る傾向がある。牛馬耕の痕跡と推定した②と④田面には残っていない。

**水田域の傾斜** 条里水田の基本的な地形は、集落域と接する K 地区から B 地区南端に傾斜し、東西方向

は西から東方に緩やかに傾斜する。南北方向の勾配は、遺跡の中央付近のF地区から北方は緩やかな傾斜であるが、F地区以南は若干傾斜を増す。調査区内の傾斜は、B地区～K地区で北西から南東への傾斜が見られ、南北大畦を境とし西側の水田面が一段高いC・D・E・G・H・J地区で顕著である。ところが山裾に位置するA地区は南西から北東方向に傾斜し、他地区と異なる勾配を示している。

**水口などの諸施設** 畦畔が途切れた水口は、東西大畦で6カ所、南北大畦で2カ所、坪内の南北畦畔と東西畦畔で数多くの水口が確認された。田面の高低差と傾斜から、基本的に東西畦畔の水口は北から南、南北畦畔の水口は西から東へ配水されたと考えられる。

水口は、東西大畦(SC2・302・502・602)では坪内畦畔との交差付近に付設され、G地区では南北大畦(SC602)と東西大畦(SC605)が交差する坪境に位置する。坪境の水口では、北側の田面(SL602)からSL605と606の2方向の田面へ配水されており、坪を越える水回しがなされている。さらに東西大畦(SC302)と南北半折畦畔の交点の水口は、SL306からSL308とSL309への2方向の田面へ配水されている。両者は、坪および半折を越える構造と分水する構造で特徴的な水口である。SC502に付設された水口は、SC502北側を並走するSD503で西方から取水し田面(SL508)に配水する施設である。屋代遺跡群②区SC103と同様な構造である。

**水田の水利形態** 前述した水田面の傾斜と水路(SC202)の位置から、3ブロックに分かれる。

- ① C地区北側(SC202以北)～K地区の田面は、集落域に近いJ・K地区側からC地区に向かい畦越し灌漑し、SC202で東方に排水している。
- ② B・C地区(南側)の田面は、SC202から取水し南東に向けて畦越し灌漑している。
- ③ A地区の田面は、山裾から北東に向けて畦越し灌漑している。

なお、水田面の傾斜からB地区東南端付近に排水が集積したと予想され、②・③の田面では、東方に配(排)水されたと考えられる。調査で確認された水路はSC203のみで、南北大畦に付設された水口はG地区で見られた1カ所に過ぎない。この状況は、A地区をのぞき東西大畦に水口を付設して北方から坪内に配水したことを示していよう。

**耕作土** 耕作土は10～30cmの厚さをもつ。地区ごとに相違があるが、B地区が最も厚い。C地区～K地区の耕作土は、暗灰色粘土層で下部を中心に酸化鉄の集積がある。かなり粘性が強い土質である。一方、A・B地区の耕作土は黒色を示しヨシ等の泥炭を多量に含む土質である。耕作土には泥炭層がブロック状に混入しており下部には著しい凹凸が認められる。A・B地区の耕作土が黒色化する要因として、V層水田を覆う泥炭層を母材としたためと考えられる。土層断面で暗灰色粘土層と黒色粘土層の堆積関係は把握されず、B・C地区間の現道路下に境界が存在すると推定される。

**出土遺物** 器種と時期が判定できる遺物は、A・B・C・E地区の耕作土中(IV層・IV-1層)より出土した。これらは須恵器坏・長頸壺、土師器坏、軟質須恵器、灰釉陶器であり、古代7・8期を中心とした様相を示している。ただし、破片が大半で、時期の特定が困難なものが多い。条里水田を埋める洪水砂からは古代8期(9世紀後半)の須恵器・土師器・黒色土器が出土した(詳細は『中・近世編』)。

**水田面のプラント・オパール分析** A・J・K地区の水田面でプラント・オパール分析を実施した。分析結果は第6章第2節を参照されたい。A地区では母材層(泥炭層)上部の水田土壌化部分(IV1層)が厚い場所で比較的多く検出され、土壌化が薄い場所で少ない傾向が見られた。また水田域(J地区)から集落域(K地区)にかけては多量なプラント・オパールが検出され、東西大畦(SC1002)と集落域に挟まれた範囲も水田として利用されていたことが判明した。

**洪水砂堆積後の状況** A地区SC1は畦畔直上に溝状の凹み、J地区SC1002・H地区SC706では両脇に溝(側溝)が掘削されている。これは大畦の復旧時の痕跡の可能性が高い。洪水砂堆積後の溝とSC1002との

主軸に7°程のズレが認められており、洪水後の条里基準線のズレと解釈できる。

### 3 屋代遺跡群①～④区の水田跡（図版209～216、219・221・225～227）

**調査区内の位置** 現五十里川北方に接する①区から④区中央付近までを範囲とする。①区・③a区の集落域では畝状遺構が展開する。

**砂層の堆積状況** 条里水田と集落（竪穴住居）を埋める砂層は、全域で確認された。砂層は黄褐色の粗砂（Ⅲ-2層）が主体で水田面を直接覆う砂層下部は白色と暗灰色の細砂がラミナ構造を示す。ラミナは畦畔脇で顕著な堆積を見せる。また軽石が水田面直上と畦畔脇で集積する状況もあり、特に①区南北大畦 SC3 東側で水田面よりやや高い位置で顕著な堆積が見られている。このような状況から、条里水田は穏やかな細砂が堆積し、畦畔・田面を覆った後厚い粗砂で完全に埋没したことがうかがえる。SC3脇の軽石分布は大畦に衝突した結果と考えられ、①区では砂層が北東方向から押し寄せた可能性が想定できる。砂層は②区から③区の範囲が40～50cm堆積し、本遺跡のなかで最も厚い。②区以南と④区以北は18～30cmとやや薄くなる傾向を示す。⑤区では竪穴住居跡埋土での確認にとどまる。②区北西部と③a・③b区で畝状遺構が確認された地点では被覆砂層が薄くなる傾向が認められた。

**遺構の状況** 南北大畦2条（内1条は更埴条里遺跡からのびる）、東西大畦4条と坪内の南北・東西小畦が検出され、畦畔は更埴条里遺跡同様良好に残存した。その一方で洪水砂堆積後に構築された遺構により大畦・田面の残存状況は悪い部分もある。耕作土の残存状況は良好で、畝状遺構と鋤痕と思われる耕作痕が確認されている。②区の畦畔では、洪水砂と耕作土に酷似する灰色シルトが混入する不整形の落ち込みが見られた。

**大畦（坪）の区画と坪内区画** 条里水田は更埴条里遺跡からのびる SC3と③a・③b区 SC3017、④b区 SC4002の3条の南北大畦と、SC3と交差する SC11・137・218、③a区東側調査区外で SC3017と交差が想定される SC3013の4条の東西大畦で区画され坪が形成される。なお④a区の南北大畦 SC4002の西方約40mを並走する SC3122は大畦規模をもつ。

大畦の方向は、南北大畦 SC03が N4°W、SC3017が N10°W、SC4002が N4°W、東西大畦 SC11が N96°W、SC103が N95°W、SC137が N95°W、SC3013が N96°W である。④区南北大畦 SC4001・4002は N4°W の方向にのびる。①～③区の南北大畦は座標北から4～6°西に振れる方向を示し、④区ではさらに振れる状況である。

大畦の規模は、①下端幅4m前後（SC11・103・3118）、②下端幅1.9～2.9m（SC101・137・3013・3122・4001・4002・7010）、③下端幅1.5m以下（SC03・3017・3129）の3種類が存在する。更埴条里遺跡同様、大畦は下端幅約2mが一般的な規模と言える。大畦には中央に水路を伴い隣接田面へ配水する SC218と、大畦水口から田面に配水するために大畦脇に並走する水路（SD2256）を設けた SC137があり、前者は更埴条里遺跡 SC203と、後者は更埴条里遺跡 F 地区 SC502と同様な構造である。

水田区画は、南北大畦と東西大畦が約106～109m間隔で配置され、坪内は幅50cm前後の小畦が大畦と平行もしくは直交する方向で存在する。⑤区以北には明確な条里区画がなく、条里坪境線が更埴条里遺跡 A 地区～屋代遺跡群④区までの範囲に施工されていたことを示している。なお、③a区集落域周囲から③b区では②区からのびる水路が分流してかなり入り組み、水路と交差する畦畔により不規則な区画が認められる。自然堤防を乗り越えるこれら水路に起因して③区では明瞭な条里区画が存在しない。

坪内区画では、更埴条里遺跡で認められた南北二等分、東西五分する半折畦畔が②・③区で顕著に見られ、南北約45～54m・東西約20m（内法）の細長い区画を示す。これは更埴条里遺跡と同様、坪内の基本的な区画である。半折田面の細分傾向は少ないが、①b・c・d・e区と②区で田面を東西、③a区北西側で

南北に細分する畦畔がある。特に①区は長方形の半折区画を示しておらず、畦畔はやや斜行し交点を越えて連続する状況が少ない。②b区で地形の傾斜に起因して、東西半折畦畔 SC201・208～211・216・217が斜行し、南北半折畦畔と不規則な交差を示している点が特徴的である。

**水田・畠面の状況** 坪及び田面単位に相違があったが、更埴条里遺跡で見られたブロック状土塊の分布は認められない。

① 畝状遺構が分布する田面である。畝が明瞭に残存する②区北西部・③a区北東部・③b区中央部の田面とやや不明瞭な①区・③a区南側に分けられる。前者は水田域でも高所に位置する畠で、後者は集落廃絶後につくられた畠と考えられる。

② 15～20cm間隔で幅10～12cmの平行する溝が列状に並ぶ田面で、耕作痕は約1m間隔の単位があり、更埴条里遺跡の②と同様な田面である。この耕作痕は基本的に田面単位に見られ②区を中心に分布する。ところが②d・e・g区では東西畦畔から約10mの範囲が比較的不明瞭になる。また、半折畦畔が不整形を示す②b区では部分的に存在し、畦畔脇が最も明瞭に残存する状況であった。なお、②c区 SC218北側田面では、畦畔脇の耕作痕が明瞭でその他大半は上部にブロック状土塊の堆積がある。

③ 水田面はほぼ平坦化し深さ5～10cm程度の不整形の凹みが無数認められる田面である。更埴条里遺跡の③と同様な田面で、①区、③a区北西部と③b区西側、④区で認められた。

①は畠、②田面は馬鍬などによる耕作痕と推定される。更埴条里遺跡で見られたブロック状土塊と畦畔脇の凹みがないことから、屋代遺跡群①・②区では代掻き時での洪水の被覆が想定される。

**水田域の傾斜** ①区から②区の範囲では、①区東西大畦 SC11と SC218に挟まれた集落域が最も高く、SC11以南と SC218以北に広がる水田域とは10～20cmの比高差がある。集落域、水田域ともに調査区西側から東側に傾斜する。②区北西隅の畠は、水田面より約20cm高まる場所に位置する。②区より北では、③区で SD3045に囲まれた調査区南東側の高まりに集落が立地する。③a区では調査区西側から東側に傾斜し、③b区以北は⑤区集落域に向かい緩やかに高まる地形である。水田面は調査区北・南・西側の3方向から中央部に向かい傾斜する。

**水口などの諸施設** 東西大畦3カ所、南北大畦で4カ所、坪内の南北畦畔と東西畦畔で数多くの水口が付設されている。①・②区では田面の高低差から調査区西側から東方へ畦越し灌漑し、水路を伴う SC218に付設された水口は西方調査区外からの水を半折田面へ配水する目的をもつ。②区北西の畝状遺構が分布する田面は大畦に付設された水口から西方へ排水する構造となっている。③区で認められた水口は水路を引き田面に配水する構造が多い。

**水田の水利形態** ①～④区は西方調査区外から取水されている。①区の集落域を囲むように水路が配置される。集落南側では西側調査区外より取水する水路 SD64により南北大畦水口まで引き坪内に配水する。一方、集落北側では SD105が②区田面へ、また中央に水路を伴う SC218は西方から水口を媒介に半折田面へ配水する。西と南西からの水路が合流する②区北西隅の SD239は、東行して SC137水口から配水するものと③区へのびるものに分かれ、後者はさらに④区で分岐して北上するものと屈曲し東に流れるものに分かれる。③区では SD3032から直接田面への配水はなく、SD3032から小規模な水路を数条分岐させて畦畔水口から水田面に給水する構造をとっている。さらに④d区以北は大畦を伴う大規模な水路 SD4514が現下条堰直下を流れ北上し、⑥区へ配水する。

屋代遺跡群は更埴条里遺跡同様、西方から水路により調査区内に取水する。水利形態は畦越し灌漑で、現森地籍方向に排水する更埴条里遺跡(後背湿地)とは大きく異なり、自然堤防上の水田域に配水するために複雑な構造となっている。

**耕作土** 屋代遺跡群では水田層が暗灰色溶脱層と暗褐色の酸化鉄集積層に分層される。畦畔は溶脱層を盛

り上げて構築している。溶脱層は10cm前後、集積層は5～10cmの厚さをもつ。③b区北壁では畝状遺構が重層的に確認されている。

**出土遺物** 水田面上面から土師器、黒色土器、須恵器、軟質須恵器が出土した。

#### 4 屋代遺跡群⑥区の水田跡（⑥区 第1水田）（図版217、228）

**調査区内の位置** ⑤区集落域北方に広がる水田跡で、屋代遺跡群と窪河原遺跡の境界で旧河道B（図1）に削平される。集落検出面よりはかなり低く最低地に当たる。④区水田面と約2mの比高差がある。

**砂層の堆積状況** 砂層（III-2層）は北壁で約2.6m、西壁で1.2m、東壁で3.6mの堆積が確認され、洪水砂の厚さは⑤区以南とかなり異なる。砂層内には細砂ラミナと粗砂の堆積が複数あり、数回にわたる洪水の形跡が認められる。

**遺構の状況** 調査区西側で中央に水路を伴う大畦SC7010とSC7007が検出された。⑥区では厚い洪水砂の被覆により畦畔の遺存状況は良好で、田面では耕作痕が明瞭に確認された。

**水田区画** 大畦は、窪河原遺跡方向からのびるSC7010と⑤区現下条堰直下から西方に屈曲し、さらに湾曲してSC7010と近接するSC7007がある。これらは正方位を示さず条里坪境線に位置しない。走行方向や形状が④区以南の大畦とかなり異なる。⑥区の大畦は下層水田の大畦を踏襲しており、更埴条里遺跡A地区から屋代遺跡群④区までの条里坪境線と同一基準では構築されていない。小畦による区画は、SC7003・8002付近を境に二分される。北側は大畦SC7070と平行または直交方向に走る小畦が配置し、長方形を基本とした田面が存在する。しかし形状は半折型を示さない。小畦は長辺畦畔でSC7003・7004の一部、短辺畦畔でSC8003・8007が弓状にやや湾曲し、SC7004は湾曲箇所にも水口が存在する。一方、SC7003・8002以南ではSC7001と7002に囲まれた不整形な田面がある。

**水田面の状況** SC7003・8002以北では約20cm間隔で幅10cm程の平行する溝が列状に並ぶ状況が確認された。耕作痕には一定間隔の単位があり、馬鋤などによる耕作痕（馬耕・牛耕）と推定される。SC7001・7002が接する不整形区画には耕作痕が確認されない。

**水田域の傾斜** ⑥区水田面は、⑤区集落域よりかなり低く、水田面最低部は④区南北大畦SC4501付近より約2.8m低い。南北方向は北からSC7003・8002へ、南側不整形田面からSC7003・8002付近へ傾斜する。最低部の調査区中央に向かい北・南側の2方向から傾斜する地形で、水田面は約80cmの比定差がある。

水口は北から南への畦越し灌漑と考えられる。

**水田の水利形態** 傾斜に沿う水回しであり、北側調査区外と南側⑤区方向からの2方向から取水されている。北方から調査区中央まで大畦SC7010に伴う水路で引水し東方へ配水される。一方、南方は⑤区現下条堰直下に推定される水路から、中央の不整形な区画、SD7015で西方、SD8004で東方、の3方向に分岐されている。⑥区の水回しは、調査区中央に集積した水を東方に配（排）水する構造となっている。

**耕作土** 耕作土（IV-1a層）は厚さ10cm前後の灰オリーブ色粘土層で下部に酸化鉄が集積する。北壁ではこれらセットが複数確認されている。

**出土遺物** 水田面より須恵器・土師器・黒色土器の坏、SD7015底部より須恵器甕、SD7014と7015分岐地点から黒色土器坏が出土した。なおSC7002内より獣骨、SC7010内より獣歯が出土した。

表14 条里水田大畦観察表

更埴条里遺跡 条里水田南北大畦

畦畔番号	地区	方向 (主軸)	規模				構造 (付帯施設)	出土遺物	備考
			長さ (m)	上端幅 (m)	下端幅 (m)	高さ (cm)			
SC-01	A	N4° W	81.9	1	1.4	-	Ⅲ層埋没後に畦直上に溝状の凹みが掘削される	大畦盛土から芯材としての木製品・石が出土	
SC-51	B	N9° W	48	0.8	1.2	11	東西大畦 (SC-52) との交点に水口	SC-52との交点(SX-01) で木製品出土	圃場整備時の攪乱有
SC-201	C	N6° W	54.2	0.8	1.3	13			SC202 交点以北は圃場整備時の攪乱有
SC-301	D	N6° W	92.8	0.9	1.3	20			SC302 交点以北は圃場整備時の攪乱有
SC-402	E	-	8.9	-	-	10			大半が圃場整備時に攪乱
SC-501	F	N7° W	23.6	-	-	11			大半が圃場整備時に攪乱
SC-605	G	N4° W	90.8	1.4	1.8	14	南北大畦(SC51)と半折畦畔(SC54)との交点付近に水口を付設		
SC-701	H	N7° W	88.3	-	1.8	13	西側が坪内より一段高まる		SC706 との交点は排水溝で破壊。
SC801	I	N5° W	10.6	1.4	1.8	14	西側が坪内より一段高まる		排水溝で破壊。位置的には調査区北側で蛇田堰と交差。
SC1001	J	N-S	79.1	1.6	1.8	20	下部に楕円形の土坑状の落ち込みあり、短軸方向に連続する		畦直上にⅢ層堆積後、溝(SD1011)が掘削。SC1002との交点はⅢ層堆積後の溝(SD1022)で破壊

更埴条里遺跡 条里水田東西大畦

SC52	B	N93° W	66.6	0.9	1.1	16	南北大畦(SC51)と半折畦畔(SC54)との交点付近に水口を付設	SC-51との交点(SX-01)で木製品出土	
SC202	C	N95° W	58.9	1.8	2.1	14	西から東方に排水する水路を中央に伴う。水口からSL208に給水		
SC302	D	N95° W	54.1	1.1	1.8	16	2カ所の半折畦畔(SC307、SC324)との交点付近に水口を付設。前者は2方向に分水する構造		
SC401	E	N95° W	66.8	1.4	2.1	15			
SC502	F	N95° W	55.4	1.1	1.4	12	半折畦畔(SC505)との交点付近に水口を付設。北側の溝(SD503)から田面(SL508)への給水を目的		
SC602	G	N96° W	54.2	1.5	2	14	南北大畦(SC605)との交点に2方向に分水する水口を付設		
SC706	H	N94° W	48.3	4.4	4.8	18			Ⅲ層堆積後に畦両側に溝が掘削
SC1002	J	N93° W	54.5	3.3	4.5	24	水田域と集落域の境界。卓越する規模をもつ大畦で、交通路の可能性あり。盛土は4層に分層される。構築時の平安時代初頭には北側に並走する。SD1032を伴う		Ⅲ層埋没後には大畦直上に平行する2条の溝が掘削され、大畦の復旧が推定される。

屋代遺跡群 条里水田南北・東西大畦

SC03	1bc	N4° W	71.7	0.8	1.5	10	南北大畦(SC51)と半折畦畔(SC54)との交点付近に水口を付設	ウマ歯	図中では水口で分割名称をSC2.3.4.5.6が付いている
SC11	1bc. de	N96° W	57.5	3.2	4	25	東西。集落西側を北上しSC23で西へ向かう道として利用されていた可能性有		
SC103	2c	N95° W	72.5	2.8	3.7	30	東西。中央に水路敷設。半折畦畔境などに水口		図中ではSC105.106.109などの細別番号有
SC101	2c.e	N6° W	55.7	0.85	2.1	15	南北。北よりの畠地区に水口		図中ではSC125などの細別番号有
SC137	2h.i. .j	N95° W	54.3	1.5	1.9	40	東西。北脇にSD2256敷設。半折畦畔境に水口		図中ではSC133.140など細別番号有
SC3013	3a	N96° W	49.5	2	2.7	20	東西。中央を幹線水路が分断する	ウマ歯	東畦畔はSC3005
SC3129	3a	N93° W	15.6	0.5	1.2	20	東西。水路で分断された西側にSC3109		
SC3122- SC4501	3b 4d	N5° W	49.5	-	2.9	20	南北		SC4501上部ほとんど削平
SC4001	4b	N4° W	18.4	-	2.4	15	南北		上部ほとんど削平されている
SC4002	4b	N4° W	24.4	-	2.3	15	南北		ほとんど痕跡のみ
SD4514脇 SC	4d	N92° W	27.2	0.7	3.2	20	東西。基幹水路に沿う		
SC7010	6c	N8° E	32.8	1.3	1.9	20	南北。中央に水路	ウマ歯	7世紀後半(⑥区水田)からの畦畔位置を踏襲

表15-(1) 条里水田田面計測表  
更埴条里跡

地区	村図・田面番号	標高 (m)	比高差 (cm)	傾斜方向	長辺 (m)	短辺 (m)	面積 (㎡)	長辺方向	備考
A	1	354.24	12	南東→北西	(7.1)	(2.7)	(24.68)	南北	
A	2	354.16	16	南西→北東	20.5	(11.2)	(216.55)	東西	
A	3	354.00	4		(4.3)	(2.2)	(9.28)	?	
A	4	354.20	12	北東→南西	14.8	4.3	(66.71)	南北	
A	5	354.20	24	西→東	20.7	28.2	585.45	南北	
A	6	354.08	8	南西→北東	15	(7.3)	(153.75)	東西	
A	7	354.12	20	北東→南西	22.2	16.5	377.50	東西	
A	8	354.04	4	南→北	30.3	10.8	(377.86)	南北	
A	9	354.00	8	南西→北東	6.1	3.4	(24.14)	?	
A	10	354.04	4	南東→北西	13.3	1.5	20.40	南北	
A	11	354.00	8	西→東 南西→北東	11	(6.1)	(62.04)	南北?	
A	12				(1.5)	(0.9)	(1.56)	?	
A	13	354.24	24	南東→北西	12.8	(5.5)	(72.59)	南北	
A	14	354.24	16	南→北	11.5	(6.2)	(73.21)	南北	
A	15	354.2	20	南西→北東	20.3	7.3	149.44	東西	
A	16	354.24	16	南西→北東	19.9	5.3	104.07	東西	
A	17	354.00	12		22.7	8	180.89	東西	
A	18	354.12	12	南西→北東	21.2	8.5	(182.40)	東西	
A	19	354.00	8	南西→北東	(23.9)	8.2	(229.44)	南北	
A	20	353.96	2		(1.5)	(1.0)	(2.21)	?	
A	21	354.26	6		(6.5)	(3.1)	(20.13)	東西	
A	22	354.24	12		(10.4)	7.1	(70.92)	南北?	
A	23	354.20	12	西→東	20.5	12.7	(171.61)	東西	
A	24	354.12	12		21.9	(5.3)	(108.41)	東西	
A	25	354.08	4	南西→北東	10.8	(7.7)	(78.28)	東西	
A	26	354.04	4		(9.8)	(8.6)	(76.22)	?	
A	27	354.20	0		(4.1)	(2.0)	(6.97)	?	
A	28	354.20	8		(12.0)	(1.5)	(10.26)	東西	
A	29	354.40	16	南→北	(11.3)	7.2	(71.87)	南北	
A	30	354.20	12	南西→北東	10.5	4.5	(37.70)	東西	
A	31	354.16	4	南→北	7.9	3.8	(29.17)	東西	
A	32	354.20	8	南→北	6.5	(4.3)	(25.72)	東西	
A	33	354.20	8	南→北	13	(6.4)	(75.86)	東西	
A	34	354.32	8	南→北	6.8	5.5	(37.19)	南北	
A	35	354.32	8	南→北	13.4	7.3	(90.76)	東西	
A	36	354.40	8	南西→北東	7	2.8	(19.83)	東西	
A	37	354.40	8	南西→北東	26.6	(5.3)	(134.38)	東西	
A	38	354.40	8	南東→北西	(6.5)	(5.3)	(18.02)	東西	
A	39	354.44	12	南→北	(5.4)	4.5	(27.30)	南北	
A	40	354.44	12	南西→北東	(10.5)	(5.0)	(41.97)	東西	
B	1	354.12	4	北→南	14.9	(6.6)	(82.36)	東西	
B	2	354.08	4		19.4	(3.1)	(81.25)	東西	
B	3	354.12	12	北西→南東	25.6	14.8	(337.71)	南北	
B	4	354.08	8	北東→南西	21.3	16.6	(350.87)	東西	
B	5	354.08	8	北東→南西	21.4	12	(252.46)	東西	
B	6	354.08	16	北西→南東	32.4	(20.0)	(645.17)	南北	
B	7	354.04	4	北→南	(14.5)	(5.0)	(90.73)	南北	
B	8	354.04	4	北西→南東	13.4	8.3	(126.75)	東西	
B	9	354.08	28	北→南	23.2	21.7	(435.15)	南北	
B	10	354.00	8	北西→南東	21.5	11.9	(248.24)	東西	
B	11	354.00	8	北西→南東	(13.7)	5.1	(69.76)	南北	
B	12	353.92	8	北西→南東	33	21.8	(457.16)	南北	
B	13	353.92	4	北→南	(17.8)	(6.0)	(107.27)	南北	
C	1	354.20	8	北東→南西	(13.8)	(6.0)	(55.37)	東西	
C	2	354.16	4	北西→南東	22.3	(4.4)	(88.29)	東西	
C	3	354.16	4	北→南	9.1	(3.5)	(31.37)	東西	
C	4	354.12	8	北西→南東	6.8	(3.1)	(18.66)	東西	
C	5	354.28	4	北→南	19.4	(13.0)	(249.44)	南北	
C	6	354.20	8		24	19.8	491.47	南北	
C	7	354.20	4	北西→南東	20.2	10.4	212.07	南北	
C	8	354.16	8	北西→南東	22.3	10.2	(224.46)	南北	
C	9	354.12	12	北西→南東	(22.4)	(3.4)	(73.86)	南北	
C	10	354.30	2		(12.4)	5.9	(65.78)	東西	
C	11	354.32	4	北西→南東	(11.9)	9.4	(111.46)	東西	
C	12	354.40	12	北西→南東	16	(10.6)	(179.53)	南北	
C	13	354.36	4	西→東	26.4	9.1	(241.43)	南北	
C	14	354.24	4	西→東	26.3	10	291.13	南北	
C	15	354.16	4	北→南	17.8	10.5	182.38	南北	
C	16	354.16	0	北→南	15.2	10	144.78	南北	
C	17	354.16	4	北→南	30.6	13.8	(317.57)	南北	
C	18	354.32	12	南東→北西	15	(11.0)	(161.60)	南北	
C	19	354.32	8	北→南	0	(18.9)	(346.38)	南北	
C	20	354.24	4	北東→南西	20.2	16	326.64	東西	
C	21	354.16	0	北東→南西	8.4	(3.3)	(26.78)	南北	
C	22	354.20	4	北→南	19.5	(2.8)	(52.81)	南北	
C	23	354.28	4		16	82.4	(39.13)	南北	
C	24	354.40	8	北東→南西	(18.3)	(9.9)	(103.62)	南北	
C	25	354.32	4	北東→南西	(21)	(8.9)	(167.41)	東西	
C	26	354.24	4	北西→南東	20.4	5.9	124.05	東西	
C	27	354.24	4	北東→南西	20.7	(5.6)	109.83	東西	
C	28	354.32	8	北→南	(9.0)	(2.2)	(21.70)	南北	
C	29	354.36	4		(2.2)	(2.0)	(4.94)	南北	
C	30	354.40	4		(8.4)	(6.5)	(43.76)	東西	
D	1				(8.3)	(2.3)	(13.54)	東西	
D	2	354.28	4	北→南	25	(3.9)	(71.49)	東西	



表15-(2) 条里水田田面計測表

地区	付図・田面番号	標高 (m)	比高差 (cm)	傾斜方向	長辺 (m)	短辺 (m)	面積 (㎡)	長辺方向	備考
D	3	354.36	4	北→南	(19.2)	(8.5)	(111.40)	東西	
D	4	354.44	8	北→南	(8.5)	13	(71.08)	東西	
D	5		4	北→南	25.2	11	168.73	東西	
D	6	354.36	4	西→東	19.9	2	(35.58)	東西	
D	7	354.36	4	西→東	20.3	2	(35.19)	東西	
D	8	354.44		北→南	14.6	(5.9)	(71.77)	南北	
D	9	354.40	4	南西→北東	20.2	15.3	315.6	東西	
D	10	354.36	4	北→南	21.3	15.5	328.6	東西	
D	11	354.52	12	北→南	10	(6.2)	(63.17)	南北	
D	12	354.44	8	北西→南東	21	20.6	431.86	南北	
D	13	354.40	4	北→南	20.7	12.7	256.83	東西	
D	14	354.56	16	北→南	(25.0)	(5.8)	(147.38)	南北	
D	15	354.48	8	北西→南東	20.5	15.1	302.05	東西	
D	16	354.40	4	北→南	23.3	20.4	486.53	南北	
D	17	354.40	8		13	1.2	(28.28)	南北	
D	18	354.40	4		9.6	(1.1)	(21.32)	南北	
D	19	354.50	2		(16.6)	(5.9)	(89.53)	南北	
D	20	354.52	8	南東→北西	(22.5)	(20.2)	(459.60)	南北	
D	21	354.48	8	南西→北東	22.1	21.3	(454.31)	南北	
D	22	354.40	0		11	(0.8)	(7.26)	南北	
D	23	354.48	4		(8.0)	(0.8)	(5.95)	南北	
D	24	354.48			(9.0)	(5.6)	(51.48)	南北	
D	25	354.52	0	西→東	21	(2.3)	(50.50)	東西	
D	26	354.48	8	西→東	(16.0)	(2.5)	(43.67)	東西	
D	27	354.28	4		(3.2)	(1.6)	(4.96)	南北	
D	28	354.28	4		1.7	(1.5)	(2.26)	南北	
D	29	354.32	8		14.4	(1.0)	(2.43)	南北	
D	30	354.40	8		11.9	(0.5)	(6.38)	南北	
E	1	354.68	8	北→南	(21.5)	6.2	(137.18)	南北	
E	2	354.72	12	西→東	(23)	19.2	(445.04)	南北	
E	3	354.60	8	北東→南西 南西→北東	22.8	10.2	(240.09)	南北	
E	4	354.56	4	南東→北西	22.1	9.8	(204.56)	南北	
E	5						(25.10)		
E	6	354.72	8		36.2	(6.0)	(204.43)	南北	
E	7	354.76	16	北西→南東	28.7	(21.2)	(613.32)	南北	
E	8	354.64	4	北→南	19.5	11.8	210.89	東西	
E	9						(19.83)		
E	10	354.64	8	北→南	21.8	20.6	(462.22)	南北	
E	11	354.56	4	西→東	19.5	12.7	255.84	東西	
E	12						(21.24)		
E	13	354.64	12	北西→南東	19	(5.4)	(76.39)	南北	
E	14	354.56	4	北→南	(17.0)	5.4	(90.23)	南北	
E	15	354.56	0	西→東	(19.4)	2.2	39.65	東西	
E	16	354.48	8	北東→南西	(19.3)	12.3	257.48	東西	
E	17	354.52	4	北西→南東	19.7	5.3	110.34	東西	
E	18	354.48	4	南→北	20.4	(10.6)	(234.56)	東西	
E	19						(11.23)		
E	20						(12.48)		
E	21	354.72	16	北西→南東	25.6	5.3	128.24	南北	
E	22	354.60	8	北→南	28	14.8	399.35	南北	
F	1	354.72	4	北東→南西	16.1	(6.1)	(83.79)	南北	
F	2	354.64	2	南西→北東	(19.1)	16.1	(327.86)	東西	
F	3	354.70	5	南→北	16.9	3.3	(60.68)	南北	
F	4	354.62	2	北西→南東 北東→南東	17.1	16.8	(290.80)	南北	
F	5	354.52	12	西→東	13	(4.8)	(60.92)	南北	
F	6	354.74	6	南→北	52	(4.7)	(249.91)	南北	
F	7	354.72	10	北西→南東 西→東	52.4	19.5	(980.50)	南北	
F	8	354.66	6	南西→北東	53	11.2	534.54	南北	
F	9	354.64	8	西→東	52.6	10	524.26	南北	
F	10	354.60	16	西→東	53.4	(4.3)	(209.59)	南北	
F	11	354.72	2		14	(3.6)	(101.26)	南北	
F	12	354.72	4	北→南	(20.0)	19.2	(390.19)	南北	
F	13	354.66	4	北西→南東	(18.7)	9.8	(187.58)	南北	
F	14	354.62	10	北西→南東	(19.5)	9.7	(186.24)	南北	
F	15	354.64	6	西→東	(20.1)	(2.6)	(45.75)	南北	
G	1	354.84	12		14	(3.8)	(83.55)	南北	
G	2	354.80	4	西→東	19.7	(15.3)	(301.33)	東西	
G	3	354.76	4	北→南	20.9	(14.7)	(307.08)	東西	
G	4	354.64	6	南→北	(11.6)	(6.0)	(79.56)	南北	
G	5	354.76	8	北→南 南東→北西	49.3	(3.3)	(283.85)	南北	
G	6	354.72	4	西→東	32.8	20.1	684.21	南北	
G	7	354.80	4	南→北	32	2.1	(65.14)	南北	
G	8	354.70	10	北→南	52.4	20.7	(999.64)	南北	
G	9	354.66	14	東→西 南東→北西	52	85.9)	(307.68)	南北	
G	10	354.72	4	北西→南東	17.9	16.2	326.23	東西	
G	11	354.64	4	北東→南西	(25.0)	20	(500.62)	南北	
G	12	354.64	4	南→北	(23.7)	3	(71.54)	南北	
G	13	354.68	4	東→西	16.4	7	114.74	東西	
G	14	354.60	4	南西→北東 南東→北西	18	(16.3)	(291.37)	東西	
G	15	354.56	4	東→西	(20.2)	(4.0)	(77.80)	南北	
G	16	354.52	4	南→北	(22.1)	(2.2)	(25.52)	南北	
G	17	354.76	8		19.1	(2.0)	(118.23)	南北	
G	18	354.68	0		5	(1.0)	(34.77)	南北	

表15-(3) 条里水田田面計測表

地区	村・田 面番号	標高 (m)	比高差 (cm)	傾斜方向	長辺 (m)	短辺 (m)	面積 (㎡)	長辺方向	備考
H	1	354.90	50		(9.3)	(8.5)	(58.43)	南北	
H	2	354.80	28		(22.1)	5.2	(123.20)	東西	
H	3	354.80	20		(19.0)	5.5	(112.71)	東西	
H	4	354.76	4		(8.5)	(5.6)	(36.38)	南北	
H	5	355.00	20	西→東	75.7	(6.5)	382.36	南北	
H	6	354.88	68	北西→南東	58.9	20.5	(1101.33)	南北	不等沈下
H	7	354.84	64	南→北	54	1.6	(100.38)	南北	不等沈下
H	8	354.80	60	西→東 北西→南東	54.8	18	(1008.47)	南北	不等沈下
H	9	354.76	12	北→南	54.9	(6.0)	(286.91)	南北	
H	10	354.92	16	北→南	(9.3)	(6.9)	(31.74)	南北	
H	11	354.80	8	北西→南東	24.3	20.2	481.91	南北	
H	12	354.76	4	北西→南東	25.5	21.5	550.9	南北	
H	13	354.72	4	北→南	(24.3)	(3.9)	(91.13)	南北	
H	14	354.76	4		18.7	(2.3)	(50.33)	東西	
H	15	354.72	4		21.2	(3.0)	(60.44)	東西	
J	1	355.07	6	西→東	(38.2)	(1.9)	(35.70)	東西	
J	2	355.01	3		(13.2)	(2.1)	(23.61)	東西	
J	3	355.04	12	西→東	41.5	18.6	(1005.39)	南北	不等沈下
J	4	354.96	32	北西→南東	53.9	22.7	(1207.51)	南北	不等沈下
J	5	355.00	60	北→南	36	21	(771.37)	南北	不等沈下
J	6	355.12	32	北→南	90.6	10.5	(814.51)	南北	
J	7	355.12	52	南→北	35.2	1.9	(66.53)	南北	不等沈下
J	8	355.00	48	西→東	36.2	17.5	(617.49)	南北	不等沈下
J	9	354.96	11	北→南 南→北	35.6	8.7	(139.47)	南北	
J	10	354.96	7	南東→北西	34.7	6.5	(204.25)	南北	
K	1	354.90	16	西→東	25.5	3.2	64.49	東西	
K	2	355.04	24	南東→北西	25.5	(12.0)	(29.63)	東西	
K	3	355.04	24	南→北	(18.7)	13.8	(240.12)	南北	
K	4	354.95	3	南→北	(12.7)	(2.9)	(28.40)	南北	
生萱	1	354.64	4		(24.7)	(4.6)		東西	
生萱	2	354.64	6		5.2	(4.0)		東西	
生萱	3	354.60	1		(4.5)	(1.4)		南北	

屋代遺跡群

1	201	355.35	25	北→南	57.4	8.2		南北	
1	202	355.45	44	南西→北東	26	-			
1	203	355.39	18	南西→北東	20.3	19.6	390.12	東西	
1	204	355.36	24	北西→南東	24.4	20.8	465.77	東西	
1	205	355.51	22	北西→南東	-	15.6			
1	206	355.40	23	南西→北東	-	12.7			
1	207	355.40	10	南西→北東	-	21.2			
1	208	355.50	7	西→東	6.5?	5.9?			
1	209	355.50	6	南→北	9.6	6.1?			
1	210	355.50	22	西→東	18.3	6.8?			
2	211	355.50	5	西→東	-	16.8			
2	212	355.50	20	南→北	34.1	19.0?			
2	213	355.50	25	西→東	22.7	12	261.57	東西	
2	214	355.50	5	西→東	36.5	13.7	780.16	南北	
2	215	355.50	10	北西→南東	16.7	12.5		南北	
2	216	355.10	5	西→東	38.9	17.9?			
2	217	355.44	13	北→南	41.5	7.8?			
2	218	355.25	5	南→北	10.4	4.1?			
2	219	355.30	23	南→北 北東→南西	54.8	19.5	1123.82	南北	
2	220	355.17	10	南→北	21.8	9.1	191.62	東西	
2	221	355.15	20	南→北	46.5	20.2	945.16	南北	
2	222	355.05	16	西→東 東→西	19	9.7?		東西	
2	223	355.11	5	東→西 北東→南東	45.7	21	868.48	南北	
2	224	355.45	15	北→南 南→北	24	20.3	472.66	南北	
2	225	355.17	15	南→北	16.5	13.2	222.34	東西	
2	226	355.15	23	南→北	35.4	20.4	726.08	南北	
2	227	355.05	16	南→北 北西→南東	36.1	19.9	715.79	南北	
2	228	-	-	南→北	20.2	12.9	239.71	東西	不等沈下
2	229	-	-	南→北	19.6	13.1	264.74	東西	不等沈下
2	230	355.06	10	南→北	43.3	7.2?			
2	231	355.00	8	南→北	11.5	10.4?			
2	232	-	-	北西→南東	26	15.1?			不等沈下
2	233	-	-	東→西	33.4?	18.2		南北	不等沈下
2	234	-	-	北→南	29.1	11.3?			不等沈下
3	235	355.15	15	南→北	25.3?	6.3?			
3	236	355.20	15	北→南	35.5	10.3	366.39	南北	
3	237	355.20	10	南→北	18.7	8.8		南北	
3	238	355.15	50	西→東	39.6	19.1		南北	
3	239	355.10	10	北→南	17.9?	11.3?			
3	240	-	-	南東→北西	34.6?	7.0?			
3	241	355.00	35	南東→北西	41.5?	10.6		南北	
3	242	-	-	北→南	-	9.7			
3	243	355.05	25	北→南	25.3	9.4?			
3	244	354.90	20	南→北	17.8	12.1?			
3	245	354.80	25	北→南	24	12.3?			
4	246	355.00	15	北東→南西	31.5	21.3			
6	247	353.20	10	南西→北東	7.5	3.4		東西	
6	248	353.35	15	西→東	29.2	14.4		東西	
6	249	352.40	15	西→東	25.5	14.3	250.48	東西	
6	250	352.45	10	西→東	24	9.8	188.54	東西	
6	251	352.50	30	西→東	21.7	17.1?			
6	252	352.40	10	北→南 南→北	23	10.9	226.52	東西	
6	253	352.75	20	北東→南西	20.3?	14.6			
6	254	352.90	5	北→南	21.2?	4.5?			
6	255	352.55	10	北→南	5.9?	4.3?			

## 第4章 自然災害痕跡

### 第1節 古代における自然災害痕跡

#### 1 洪水痕跡

##### (1) 9世紀後半の大洪水

千曲川流域では9世紀後半の洪水砂が広範囲で認められており、文献に記載されている「仁和4年」の大洪水<sup>(註1)</sup>との関係で注目されている。今回の調査でも、窪河原遺跡を除くほぼ全域で確認されており、層位区分の鍵層(Ⅲ-2層)とした。この層の形成をもって『古代2、中・近世編』としているため、層の成因や洪水被害の詳細はそちらに譲りたい。ここでは、この時の洪水被害を代表させ、屋代遺跡群②区の水路交差点の土砂堆積、③b区SD3245内出土の土塊、⑥区の土塊投棄状況の写真(PL39・40)と図(図版228)を掲載するにとどめた。また、洪水砂層(Ⅲ-2層)の堆積状況については第3章に記してある。

##### (2) 古代の洪水と被害地区

Ⅲ層以外でも、古代0～8期前半(7世紀前半～9世紀後半)の間には洪水砂の堆積がたびたび認められる。被害を受けた地区別に見ると、次のように分けることができる。

**旧河道内水田** 屋代遺跡群⑥区はもともと千曲川の河道であったため、水田への被害が頻繁に起こっている。特に、層位区分の基準とした第5～第3の各水田面を覆う洪水砂が、比較的大規模な例である。堆積した砂の厚さは、水田面上で5～15cm(付図5)を測る。自然堤防側の崖面で見ると、第4水田面を覆った洪水砂層は水田面より約0.9m高い地点にまで達している。第1水田面と第5水田面で鋤跡が見られた(PL27・41)が、季節を特定するには至っていない。第3水田面を埋めた洪水砂堆積以降、第1水田造成までの層では耕作痕が明瞭でなく、水田としては充分機能していなかった可能性が高い。

**幹線水路周辺** 古墳時代の旧幹線水路沿いで砂の堆積が認められる。屋代遺跡群①区の旧水路は埋積して浅くなり、蛇行、分流している(図版15・46)。こうした状況は、古墳時代に広がっていた水田が放棄された可能性を示している。集落が成立する前段階であり、遺物もないため時期は不明である。また具体的な被害についても不明である。

**集落域ほか** 屋代遺跡群⑤区集落のSB5092床面近くに砂の堆積が認められたが、砂をもたらした要因は不明である。

更埴条里遺跡K地区集落域や屋代遺跡群③b区畝状遺構(畝跡)の範囲では、Ⅳ-1層の上部に薄いシルト層が堆積している(図版2・227)。K地区集落では、6・7期と8期前半の住居の区分となっており、③b区では、畝跡が埋没している。洪水性の堆積物であるかは不明である。

#### 2 地震痕跡

##### (1) 液状化現象による砂脈

善光寺平南部地域の遺跡では、大地震に際して起きる液状化現象の痕跡である砂脈が発見されてきた。

その一部は、窪河原遺跡や屋代遺跡群⑥区の例も含め、すでに紹介されている<sup>(註2)</sup>。

## (2) 検出された地区と時期

更埴条里遺跡、屋代遺跡群、窪河原遺跡の調査範囲の中で、検出された地震による砂脈は、次の3つに大別できる。

- ① **善光寺地震(1847年)に比定される砂脈** 自然堤防Ⅱ群上に立地する窪河原遺跡(楡皮1991)から自然堤防Ⅰ群上の屋代遺跡群で見ついている。また、後背湿地Ⅰ群の更埴条里遺跡では確認されなかった。
- ② **9世紀中～後半に比定される砂脈・噴砂** 屋代遺跡群⑥区の旧河道内～③区の水田域(それ以南は不明確)で検出されている。⑥区では噴砂が認められた。
- ③ **7世紀後半の可能性を持つ砂脈** 屋代遺跡群⑥区、旧河道内の断面で検出された。

## (3) 調査の方法

**砂脈の到達点の認定** 今回の調査で発見された砂脈は、そのほとんどが1～2cm前後の幅しか持たなかった。特に、自然堤防Ⅰ群側ではその傾向が強い。そのため、地震の際に地表面まで到達できなかった挫折型砂脈(寒川1992)であるのか、砂脈先端が後世に削られたのかを判断しにくかった。また、遺跡のほぼ全域を覆っていたⅢ層洪水砂が、調査中の乾湿の繰り返しによる隙間に入り込み認定を難しくした。

**限定地区での調査** そのため、調査期間との関係を考慮し、砂脈のはっきりと捉えられる地区のみで限定的な調査を行った。①に関連する砂脈は最も砂脈幅の広い窪河原遺跡で層位的な把握を行うこと。②については、屋代遺跡群⑥区旧河道内で噴砂の層位的な把握と砂脈方向の確認のみを行った。③については、調査最終段階で確認されたため十分な調査を行っていない。また、①の砂脈については竪穴建物跡断面でも確認された。

## (4) 9世紀中～後半の砂脈と噴砂

**時期比定** 砂脈幅が細かったこと、善光寺地震に伴うと思われる砂脈が枝分かかれし、途中の層位で止まっている場合が見られたこと、などから判断が難しかった。その後、⑥b区の東壁付近のⅣ層中で噴砂が確認された(図版229)。この砂脈は古代1～3期の水田層など割いて上昇している。噴砂の面には時代を確定できるほどの遺物はないが、これより上層にあたるSD8029からは、古代6・7期の土器が出土している。さらに、その上層には8期前半の水田層(Ⅳ-1層)とそれを覆う洪水砂層(Ⅲ-2層)が存在する。このことから、地震が起きた時期は9世紀中～後半の可能性が高い。

文献に記載された大地震の内、この時期に含まれる例は841年(『続日本紀』)である。

**噴砂** 3000㎡弱の調査区内で噴砂が確認されたのは調査区東壁際の2カ所である。地震発生の当時、元々水田であった北側の平坦地には耕作の痕跡がなく、流路もほとんど流れのない湿地状態であったと考えられる。そのため、攪乱を受ける要因が少なく噴砂が残存したと思われる。噴砂の位置は現地表下2.6mである。1カ所(噴砂No.2)は調査区壁断面でのみ確認した(図版229-E)。噴砂No.1(図版229-D)は最大厚9cmで、平面での広がり約76×(48)cmである。噴砂を形成した砂脈は、幅1～5cmで、砂の供給源となる層までの調査は行えなかった。

**砂脈の方向** 調査期間の都合上で、極一部についてのみ砂脈の平面図を作成した(図版229-B)<sup>(註2)</sup>。現地でのメモと、調査区断面図を繋げて作成した砂脈方向模式図(図版229-A)を見ると、砂脈の方向はおおむね北西-南東方向を示す。当時、小さな流路が残る千曲川の旧河道方向は、ほぼ東西であり、50度前後ズレ

ている。このズレは、当時の地表面に近い層位の軟弱さとは異なった要因によって生じたと考えられる。**地震の違いによる砂脈形成の場所** 屋代遺跡群⑥区は、善光寺地震（1847年）の砂脈が多く見られた窪河原遺跡 H6区北部から約100mほどしか離れていない。しかし、この地区の砂脈のほとんどは古代の地震に関わるものであり、近世の砂脈は認定が難しかった。⑥区は7世紀以降、粘土～砂の堆積が進み、近世の段階で砂礫層は地表下10mほどであった。これに対し、窪河原遺跡は9世紀以降千曲川の氾濫原になっており、中世に離水した後も、千曲川が隣接していた。また、氾濫原であったため、砂礫層までは数m以下であった。こうした、自然条件の微妙な差が、液状化現象による被害の違いに関係したのであろうか。

#### (5) 7世紀後半代の砂脈

**7世紀後半代の砂脈** 調査終了間際、調査区断面の再確認を行って時点で、9世紀代の層位まで到達しない砂脈が、調査区西壁で確認された（図版229-F）。砂脈の幅は約1～14cmと幅広く、砂脈No.3は、下層に比べ第5水田対応層上部付近で幅を広げており、最大幅付近で止まっている。このことは、勢いがなく上昇を止めたと見るよりも、本来続いていた砂脈上部が後世の水田耕作によって壊された可能性が高い。砂脈の上層には古代1期後半（7世紀末～8世紀初頭）に比定される第4水田対応層（IV-Y6-4c-2層）が乗っている。また、砂脈は1期前半（7世紀後半）にあたる第5水田対応層を割いている。このことから、地震の発生は7世紀後半～8世紀初頭と考えられる。

#### 註

- 1 下記の参考文献によって紹介されている。
- 2 調査の都合上と砂脈が見えやすかった点を考慮して、平面図の作成は噴砂の面より1mほど下層の第5水田面で作成した。

#### 参考文献

- 寒川 旭 1992 『地震考古学』中公新書1096  
西山克己 1996 「長野県における地震跡」『発掘された地震痕跡』埋蔵文化財研究会ほか  
檜皮久義（地震観測所）1991 「松代付近の遺跡の発掘現場で発見された地震跡」『気象庁地震観測所技術報告』第11巻

## 第5章 遺 物

### 第1節 土 器

#### 1 古代の土器の分類

古代の土器の分類で一般的に用いられる方法は、土器を種類と器種とによって分類し、さらにその使用の場も加味したものである。ここでは、長野県埋蔵文化財センターが松本平地域の古代の土器を分類した方法（原1989、小平1990）をベースにしなが、善光寺平の古代の土器がより明確に把握できるよう独自の視点も加えながら論ずることとする。

##### (1) 土器の種類

素材、制作技術から以下のように分類される。

**土 師 器**：酸化焰焼成による軟質赤焼土器。ロクロ調整される。（甕類は、ロクロ調整の有無にかかわらず土師器とよぶことにする）

**非ロクロ土師器**：酸化焰焼成による軟質赤焼土器。ロクロ調整されない。

**黒 色 土 器**：ロクロ調整の土師器の一種。器面に意図的に炭素を吸着させたもので、多くはへら磨き技法を伴う。ロクロ調整でへら磨きがなされているのに黒色でないものも黒色土器の中に含めてとらえる<sup>(註1)</sup>。

黒色土器 A……………内面のみに黒色処理を施したもの。

黒色土器 B……………内外両面に黒色処理を施したもの。

**須 恵 器**：還元焰焼成による硬質灰色土器。窯による焼成でロクロ調整される。胎土、焼きの良好な D タイプと、やや不良な C タイプに分けられる。C、D タイプの具体例は「(5) 土器分析上の新たな視点」の項と巻頭図版 3 のカラー写真参照。

軟質須恵器……………須恵器の一種であるが、灰白色を呈し、胎土の緻密さと硬さがなく、明らかに胎土と焼きに質の低下が見られるもの。手触りは明らかに硬質の須恵器とは異なり、ぼそぼそ又はざらざらといった感じを示す。黒斑をもつ A タイプと、もたない B タイプに分けられる。A、B タイプの具体例は「(5) 土器分析上の新たな視点」と巻頭図版 3 のカラー写真参照。

**灰 釉 陶 器**：灰釉を施す硬質の陶器。

**山 茶 碗**：灰釉と同一の焼成であるが無釉の陶器。

**緑 釉 陶 器**：鉛釉を施す硬・軟質の陶器。

**輸 入 陶 磁 器**：中国製の青磁・白磁など。

表16 古代の土器 器種分類表 その1  
食膳具

種類	器種名	器種説明
非 ロ ク ロ 土 師 器	杯A類	須惠器杯蓋を模倣し、杯として使用したもの。底部が須惠器杯蓋の天井部を意識しているため丸みもち、体部に屈曲点を持ってたちあががる。たちあがり方は、ますますくなものから、外傾するものまでバリエーションに富む。
	杯B類	須惠器杯身を模倣したもの。たちあがり部が内傾している点が杯A類と異なる。
	杯C類	丸底で口縁が丸く終わるものを基本とし、丸底基調でその他の分類に入らないものも含め多様な形態をもつ。特に口縁部の形態は複雑、多様である。平底か丸底か判断が難しいため、杯I類と判断がつかないものもある。
	杯D類	深い半球形のもので口縁端部が明らかに内わんするもの。丸底のものが多いが平底のものも含める。
	杯E類	内面に稜をもち、たちあがり部が内わん傾向を示すもの。直線的なたちあがりの場合、腰部が明らかに丸みをもち碗的な器形になるものも含める。内面の稜は下あり、やや強めのもの、痕跡程度のもの等いろいろみられる。
	杯I類	平底で口縁が丸く終わるもの。平底か丸底か判断が難しく杯C類と区別がつかないものもある。
	杯L類	鈍い橙色の胎土をもち丸底の浅めの器形で、口縁端部がL字状に短くたちあがるもの。底部から体部にかけてへへ削りし、その他の部分はナデ調整される。
	高杯	杯類に脚台をつけたもの。
	鉢	口径に比して器高が高い深めの器。小型のものが多いが、やや大型のものも含める。形態は多様である。
	須 惠 器	杯A
杯B		箱形の体部に高台を付した形態で、主に杯蓋Bと一部杯蓋Aともセットをなす。法量によりI、II、III、IV、V、VIと分類できる。
杯G		へらによる底部調整をもつ直径11.5cm以下の無台の杯。杯蓋Aとセットをなす。法量の大ききめものは、杯Aと区別がつきづらいいものもある。
杯H		古墳時代からの伝統的な杯の承譜をひき、丸底で蓋受け部分を持ち、受け部から口縁部にかけてたちあがりをもつ。
杯蓋A		内面にかえりをもつ蓋。主に杯Gと、一部杯Bと対応する。
杯蓋B		内面にかえりをもたず、口縁端部を折り曲げる蓋。杯Bと対応する。

須 惠 器	杯蓋H	杯蓋Hからの伝統的な杯蓋の承譜をひき、碗形の杯を伏せた形態に近い。杯Hの蓋になる。
須 惠 器	皿A	扁平で直線的に開く体部をもつ無台の皿。皿Bの高台をはずした形態をもつ。
	皿B	扁平で直線的に開く体部をもつ有台の皿。灰釉陶器・黒色土器の皿Bに類似する。
	高杯	浅めの杯部に高めの脚台を付けた器。小型、中型がある。
	高鉢	高杯よりも浅く広めの杯部に、高杯より低く太い脚部を付けた器。
	鉢D	口径13cm～17cm前後の口径の割に器高の深めな無台の器。「碗」と呼ぶ方が適切かもしれない。
	鉢A	小さめの底部から体部は直線的に開き、頸部で緩く締まって口縁部で外反する鉢型の器。大小の法量がありロクロナデ調整される。
	軟 質 須 惠 器	杯A
黒 色 土 器 A	杯A	ややわん曲しながらたちあがる体部を持つ無台の杯。須惠器杯Aのように体部内面の見込部には指押さえがみられずなめらかに曲線をえがいてたちあがる。法量によりI、IIに分けられる。底部調整には、いろいろなタイプがみられる。
	碗 小 碗	内わん気味に立ち上がる体部に高台を付したもの。法量により碗と小碗に分けられる。
	皿A	口径12cm～13cm台前後で、器高が3.0cm以下の無台の皿。
	皿B	直線的に伸びる扁平な体部に高台を付した皿。
	盤B	足高台を有する碗型、または皿型の器。法量によりIとIIに分かれる。盤B Iは碗の脚を伸ばした形態になり、盤B IIは皿Bの脚を伸ばした形態になる。
	鉢A	口径は10cm台後半から20cm台中頃まで、黒色土器A杯AのB形態（器高5.0cm以上の深めのもの）を大きくした形のもの。素口縁であり片口をもつものもある。
	鉢B	口径は10cm台後半から20cm台中頃まで、須惠器鉢Aと同じ形態のもの、片口をもつものもある。
黒 色 土 器 B	碗 小 碗	腰に丸みをもって立ち上がり、高台の付いた深碗状の形態をとる器。法量により碗と小碗に分けられる。
	皿B	黒色土器A皿Bと同じ形態の皿。
	耳皿	土師器耳皿と同じ形態を持つ皿。有台と無台のものがある。見込部に一孔穿孔するものもある。

表17 古代の土器 器種分類表 その2

食膳具

杯A	体部がややわん曲しながら直線的に開く無台の杯。体部内面見込部に指押さえはみられない。底部調整は回転糸切未調整で、法量によりⅠ、Ⅱ、Ⅲに分けられる。
碗小碗	内わんぎみに立ち上る体部に高台を付したものを。法量により碗と小碗に分けられる。
盤B	足高台を有する碗型又は皿型の器。法量によりⅠとⅡに分かれるが、盤BⅠは碗の脚を伸ばした形態になり、盤BⅡは皿Bの脚を伸ばした形になる。
皿A	口径12cm台前後で、器高3.0cm以下の無台の皿。法量によりⅠ、Ⅱ、Ⅲに分けられる。
皿B	直線的に伸びる扁平な体部に高台を付した皿。
耳皿	口径10cm以下の小さな皿の口縁部をつまみあげたもの。有台と無台の両者の存在が考えられるが、屋代遺跡では無台のもののみである。見込部に一孔穿孔するものもある。
盤A	高い脚台をもった口径30cm前後の大型の器。
鉢A	口径20～25cm前後の深めの器。口縁は内わんせせず垂直に上方へ伸びる。
鉢B	口径20～25cm前後の深めの器。口縁は明確に内わんする。
碗A	体部にわずかに丸味をもち直線的に開く形態で台形あるいは三日月様の高台を付するもの。
皿	いわゆる丸皿。
段皿	いわゆる段皿。
耳皿	いわゆる耳皿で、有台と無台のものがある。

煮炊具

甗A	輪積み成形の後、外面をナデ調整する長胴甗。
甗B	輪積み成形の後、外面を刷毛目で調整する長胴甗。
甗C	体部外面をへら削りして薄く仕上げる甗。ケズリ調整する点では甗Hと同じだが、甗Hに比べ器壁ははるかに薄く、ケズリの方向も頸部に近くなるほど横方向となる。いわゆる武蔵型甗。
甗F	輪積み成形の後、外面をへら磨き調整する甗。壺形と甗形がある。
甗H	輪積み成形の後、外面をケズリ調整する長胴甗。ケズリ調整する点では甗Cと同じだが、甗Cに比べ器壁は厚く、ケズリの方向も縦方向が主体となる。
甗I	ロクロ調整で体部下半を中心にケズリ調整する甗。ケズリ調整以外にタタキ調整するものや、調整を行わずロクロ調整のみのももある。底部は丸底のもの平底のもの両者がみられる。いわゆる砲弾甗。
小甗A	輪積み成形の後、外面をナデ調整する小型甗。甗Aを小型化したもの。
小甗B	輪積み成形の後、外面をハケ調整する小型甗。甗Bを小型化したもの。

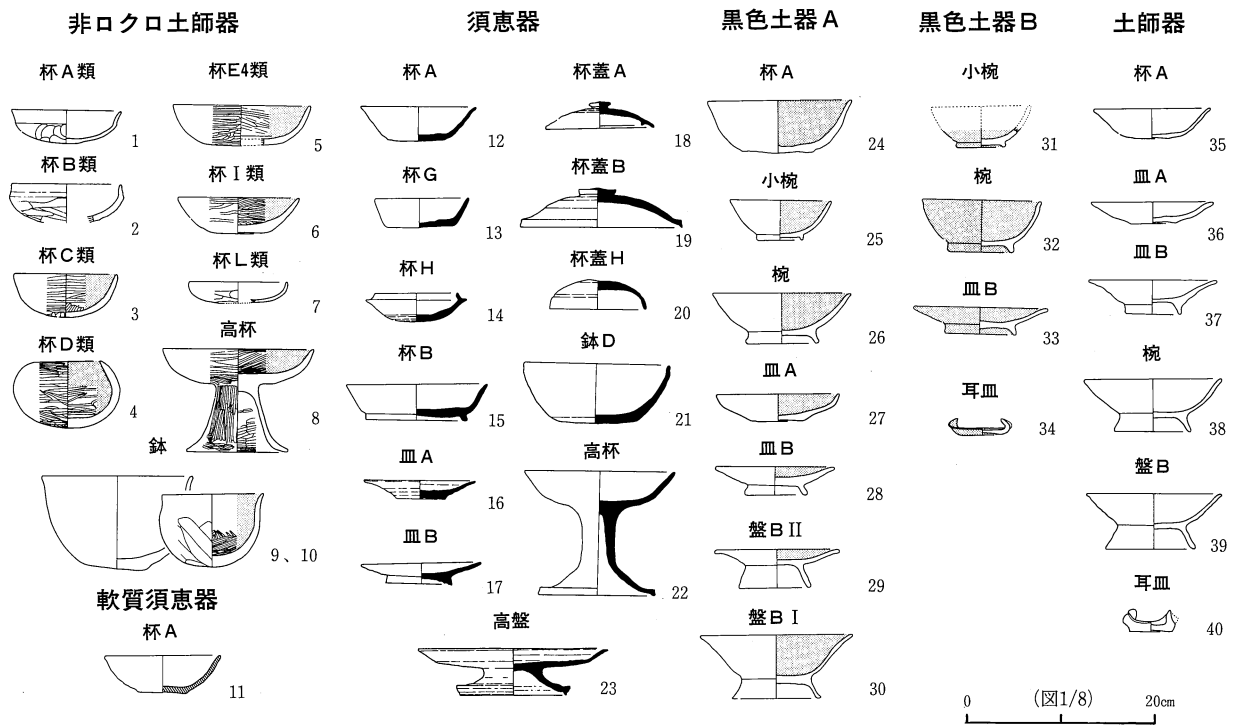
土 師 器	小甗C 小甗D 小甗H 鍋 甗 羽釜	甗Cを小型化した甗。高台がつくものもある。 ロクロ調整した小型甗で、体部にカキ目又はロクロ目が観察できる。底部調整は回転糸切りのものが多いが、手持へら削りのものやナデ調整のものもみられる。 輪積み成形の後、外面をケズリ調整する小型甗。甗Hを小型化したもの。 ロクロ成形で、体部下半を中心にケズリ調整する。調整は甗Iとなるが、甗Iに比べ口径が広く、器高が低い壺型を呈する。 いわゆる甗型土器。単孔のもの多孔のものがある。 いわゆる羽釜型土器。
-------	-----------------------------------	---

貯蔵具

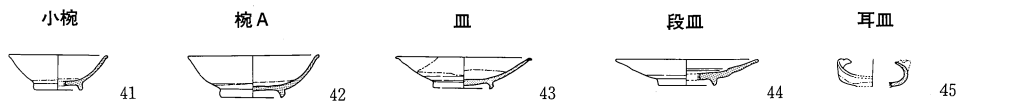
須 恵 器	甗A 甗C 甗D 甗E 横瓶 平瓶 壺 長頸壺A 長頸壺B 短頸壺A 短頸壺B 短頸壺D 平瓶 長頸壺 小瓶 短頸壺 瓶類	胴部外面にタタキ調整をもち、卵形の体部に長く外反する口頸部をもつもの。 胴部外面にタタキ調整をもち、卵形の体部に強く外反する短い口頸部をもつもの。 胴部外面にタタキ調整をもち、平底で肩部に凸帯をもち耳状の突起を付するもの。いわゆる凸帯付四耳壺。耳は4個が圧倒的だが3個のものもある。 胴部外面にタタキ調整をもち、肩のはった広口の甗。須恵器鉢Aと形態的に似るがタタキ調整の有無で区別される。 横に長い袋形の体部の横腹に短い口頸部を付するもの。一般的呼称に従う。 扁平な体部で、口縁部を天井の一方の端に付すもの。一般的呼称に従う。 体部に注口を有する壺。一般的呼称に従う。 体部から細い頸部が直立気味にのびるもので、体部が球状を呈するものをいう。口縁部で折り返し口縁部を作る。肩に把手の付くものなどがある。 体部は肩の部分で屈曲し、口縁部がラッパ状に開くもの。 ロクロナデ調整によって成形され、口縁部が直立して短く立ち上がるもの。口縁の立ち上がり方は内傾、直立、外傾とさまざま。松本平『総論編』で短頸壺Cとしていっているものも含む。 ロクロナデ調整によって整形された小形の短頸壺。以下の3つのタイプに分けられる。①胴径に比して口径が大きいもの、②胴径に比して口径が小さい壺形のもの、③口径10cm前後で外反する口縁をもつ壺形の器 ロクロナデ調整によって整形され、口縁部が強く外反し、口縁部を作るもの。 一般的呼称に従う。 一般的呼称に従う。 一般的呼称に従う。 一般的呼称に従う。 器面を丁寧に磨いた後、黒色処理を施した瓶類。有台のものと無台のものがある。
土 器	土 器	



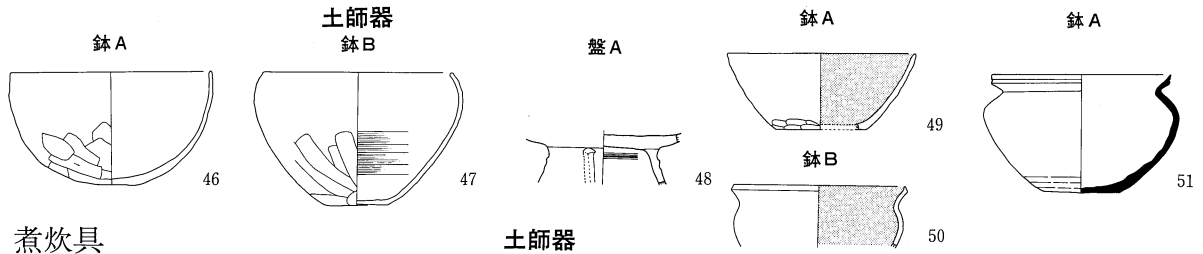
食膳具 1



灰釉陶器



食膳具 2 (鉢類等、やや大型のもの)



煮炊具

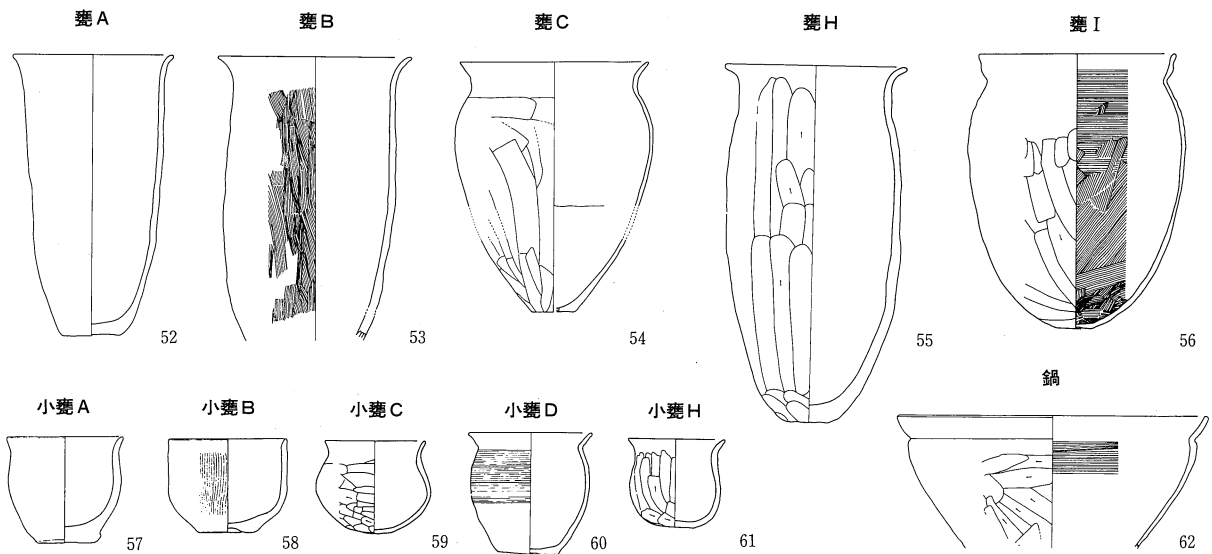
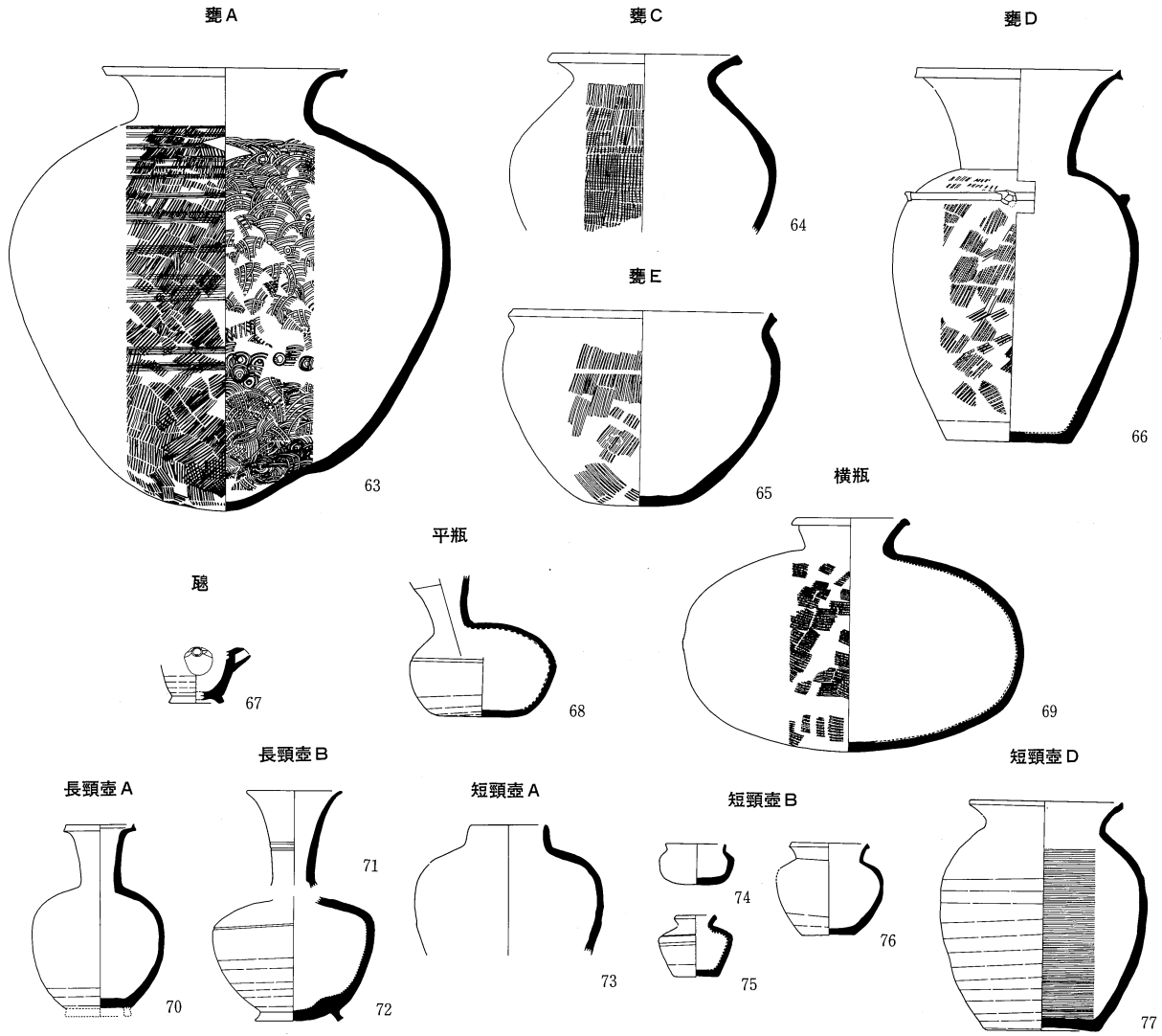


図24 古代の土器 器種分類 1

貯蔵具

須恵器



煮炊具

土師器

灰釉陶器

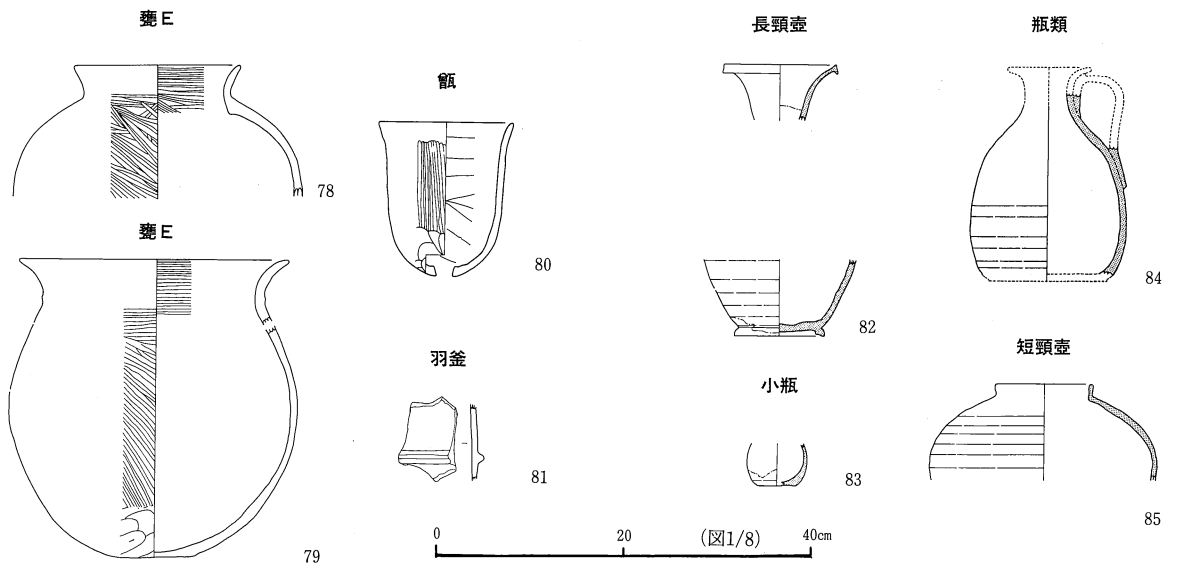


図25 古代の土器 器種分類 2

## (2) 器種

形態と製作技法さらに同一器種内の法量により表16～17と図24～25のように分類する<sup>(註2)</sup>。

## (3) 使用の場における分類

食膳具、煮炊具、貯蔵具に分類する。編年作成の関係上、食膳具は、食膳具1と食膳具2に分ける。

**食膳具1**：食膳に供する器。杯、椀、皿、高杯などの一般的に使用頻度の高い、大形でない飲食容器をさす。食膳具と呼ぶ場合は、食膳具1をさすこととする。

**食膳具2**：食膳に供する器の内、鉢や盤Aなどの大形のをさす。一部に非加熱の調理器具も含める。

**煮炊具**：食料を加熱加工する道具。甕、甗、羽釜等。

**貯蔵具**：食料を保存貯蔵しておく道具。壺、甕、瓶類等。

## (4) 集計法

各遺構出土の土器については、「(3) 使用の場における分類」にそって各遺構毎に出土土器組成表を作り、出土遺物の全体像をつかめるようにした。SBはすべての遺構について、SK、SD等のその他の遺構については重要遺構のみを行った<sup>(註3)</sup>。

この表に示される土器の集計法は、以下の基準に基づいている<sup>(註4)</sup>。

- ① 個体数の計測は、器種が明確に認定できるものの口縁部または底部が、8分の1以上残存しているものを1個体と数え集計した。また、口縁部または底部が残存していないものについては、その個体全体の8分の1以上残るものについて1個体と数えた。特殊品、貴重品（大甕、緑釉陶器、輸入陶磁器、時代の判定に役立つもの）等は、上記の基準を満たさないものであっても1個体として数えた。これらを推定個体と呼び、総数を推定個体数と呼ぶことにした。推定個体数は口縁部または底部両方をそれぞれ計測の対象としたため、実際の数量より多めになっている可能性はあるが、相対的な比較資料として大まかな傾向をつかむためには有効であろう。
- ② 各遺構の組成比の計算は、各遺構出土遺物を覆土一括として扱い、推定個体としたもの全ての重量を計測して行った。重量の計測は、原則として5g単位に計測し、少数第一位を四捨五入したため、100%にならないこともある。

## (5) 土器分析上の新たな視点

古代の土器を分析する新たな視点として次の2つの方法を導入した。

- ① 糸切りの須恵器杯Aの形態変化を、外傾指数や外面の底径の変化によってつかもうとしたのではなく、内面の底径を計る事によってつかもうと試みた。内面の底径は、内面の平坦面から著しく屈曲が変わる点を転換点とし、転換点どうしをデパイタで計測した。その計測値は土器実測図の内面部分に数値で記載した。単位はcmである。
- ② 須恵器杯Aの質の変化を編年上の時代を画する重要な指標と考え4つのタイプに分類し、特に軟質須恵器の登場に着目し、その定義を明確にして細分を行い利用した。

須恵器杯Aの質の4つのタイプを簡単に示すと以下のようになる。

## 胎土と焼きの状況

須恵器杯 A	不良	{ A タイプ (黒斑あり) B タイプ (黒斑なし) }	軟質須恵器と呼ぶ
	良好	D タイプ	

A、B、C、Dの各タイプの具体例をあげると以下のようになる。巻頭図版3のカラー写真も参照。

## A タイプの具体例

- ①黒斑をもつもの。
- ②うすい黒斑をもつもの。内外面の片面だけが黒斑を持つものも含める。
- ③胎土、焼きがBタイプに示した具体例に似るものも多いが、黒斑がなければDタイプとしてしまいそうなものもある。

## B タイプの具体例

- ①灰白色を呈し、精選されない胎土を持ち、小粒子の混入が目立つため粗くザラザラ又はぼそぼそした感触を持ち、固さを感じさせないもの。
- ②土師器の質感のように感じるもの。
- ③器面に気泡のような、ごく小さな穴がみられ、厚ぼったい印象をうけるもの。

## C タイプの具体例

- ①さわると粉状のものが手に付くようなやわらかな胎土をもつもの。
- ②ぬた状のものが付着した作りの悪いもの。

## D タイプの具体例

- ①硬質な焼きの一般的な須恵器をいう。
- ②BタイプまたはCタイプに近いようなものでも灰白色でなく、一般的須恵器にみられる本来の色が多少でも残っている場合もこれに含めることにする。

土器の実測図では断面のスクリントーンで各タイプを表現している(図26)。

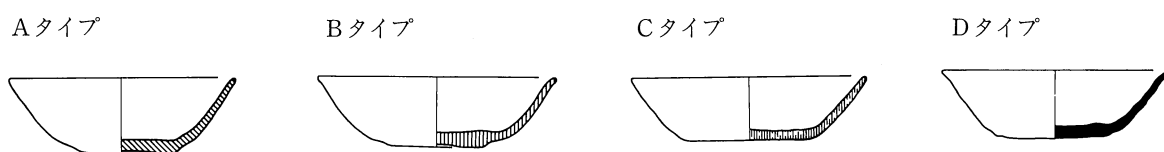


図26 須恵器杯Aの質の表記法

## 2 各遺構出土土器

ここでの記載は、SBについては遺構全部、その他の遺構については重要と考えたもののみを対象に行う。記載内容は、その遺構の年代を決定するために必要となった統計処理された基礎データと重要遺物についてである。ここでふれられなかった遺構の重要遺物については「第8章 成果と課題 第2節 古代の土器 重要遺物のまとめ」の項に一覧表で提示してあるのでそこを参照願いたい。

各遺構の食膳具の組成比は、推定個体を基本資料として重量比であらわし、非ロクロ土師器：須恵器：黒色土器：土師器の順に示した。必要に応じて個体数比も示してある。灰釉陶器をこの中に入れていないため合計が100%に足りない場合と、少数第一位を四捨五入するため合計が100%を超える場合がある。須恵器杯Aの内面底径の平均値と須恵器杯Aの質の個体数は、実測できたものを対象として統計値を出し

た<sup>(註5)</sup>。また、須恵器杯Aの質ではA、B、Dタイプを量的にくらべることを編年上の指標としたため、Cタイプのは除外して数値を出している。基本的に実測できた個体数で統計処理し、必要に応じて推定個体数も使用している。

灰釉陶器の型式については齋藤孝正氏にみていただいた見解をのせている。「 」をつけて型式名をかいているのは筆者が判断したものを示している。緑釉陶器の産地については、井上喜久男氏に御指導いただいたものである。分類は屋代遺跡群独自のものである。

遺物の記載順はSA-SB-SC-SD…といったアルファベット順とし、それぞれについて更埴条里遺跡-屋代遺跡群の順にしてある。SDについては同じ遺構に複数の名前が付いている例があるため、同じ遺構のものはいっしょに掲載した。そのため順番が番号順にならず検索しづらいところもあるが、SDの一覧表(表12・13)を参照の上検索願いたい。土製品は第3節に掲載したが『中・近世編』の対象となるものも掲載している場合がある。これは明らかに『古代1編』対象の遺物が混入している場合とか、または『古代1編』の遺物と関連させて考えることが必要と思われる遺物のためである。各遺構出土土器の年代は、屋代遺跡群の編年観に基づき記載する<sup>(註6)</sup>。

### (1) 竪穴建物跡(SB)出土土器

#### A. 更埴条里遺跡

##### SB9001 (図版230 PL42・56・57)

時期；古代6期 組成比；0：67：33：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.4cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=6個 13は畿内系黒色土器鉢である。全面横ミガキをほどこし、内面には暗文がみられる。11は畿内系面取高杯である。図化できながったが、もう2片の畿内系面取高杯の小片がある(PL42)。4は墨書、10は刻書でそれぞれ「冨」と読める。14は黒色土器Bで須恵器杯BVIを模倣したものであろう。須恵器杯Aの質には、Cタイプのものも多めにみられる(6・7)。

##### SB9002 (図版230 PL42・61)

時期；古代6期 組成比；0：80：20：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.4cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=5個 > D=3個 須恵器杯Aの質(推定個体数+実測個体数)；A+B=5個 < D=9個 9は墨書。12は「冨」の刻書が見られる。10は畿内系黒色土器で非ロクロ、内面は横ミガキ後黒色処理を施す。外面は化粧土をぬり磨いている。15は土師器盤A。土師器甕C(16・17)は2点みられ、いずれも口縁は「く」の字である。

##### SB9003 (図版231)

時期；古代7期後半 組成比；0：14：86：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.9cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 = D=1個 6は灯明具1、5は黒色土器Bで須恵器杯蓋Bの模倣である。12は外面にミガキはみられないものの両面黒色処理した杯Aである。

##### SB9004 (図版231)

時期；古代6期 組成比；0：60：40：0 組成比(個体数比)；0：63：38：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.7cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 < D=2個 土師器甕C(8・9)が2個体あり口縁は弱い「コ」と「く」である。3には「冨」の墨書が見られる。

##### SB9005 (図版231)

時期；古代7期前半 組成比；0：50：50：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.6cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=4個 > D=0個 6には、刻書(刻画?)がみられる。

##### SB9006 (図版231~232)

時期；古代6期 組成比；0：82：18：0 実測した須恵器杯Aの内径平均は6.9cm。内径の測定可能な須恵器杯Aの破片資料も含めた内径平均は6.6cm。古代5期から6期への移り変わる時期の様相を呈する。須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=4個 1・2・4・5・16は畿内系黒色土器の杯及び鉢である。非ロクロで橙色の胎土をもち外面を削るものが多く、内面を磨いた後に黒色処理している。暗文を持つものもある。ミガキ方向は、横方向主体で在地の黒色土器Aとは全く違う。胎土も明らかに在地のものとは異なる。須恵器杯Aでは、Cタイプのものが多めに見られる（11・12）。古代6期の標準資料である。

**SB9007**（図版232）

時期；古代7期後半 組成比；0：14：83：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.1cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=1個 > D=0個 5は光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器皿である。

**SB9008** 時期；切り合いから古代7期後半～8期前半 遺物少。

**SB9009**（図版232） 時期；古代7期 組成比；0：5：95：0 遺物少。食膳具に土師器はない。

**SB9010** 時期；切り合いから6期も含めそれより古い。遺物少。

**SB9011**（図版232） 時期；古代5期 煮炊具のみ出土。土師器甕Cが多い（1・2・4・5）。口縁部は「く」の字主体で、弱い「コ」が出始めている。

**SB9012**（図版233）

時期；古代6期 組成比；0：76：22：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.4cm 須恵器杯Aの質（推定個体数+実測個体数）；A+B=0個 < D=6個 同じ古代6期内で3軒の切り合いがあり、その中でも最古である。

**SB9013**（図版233 PL42）

時期；古代6期 糸切須恵器杯A内径平均；5.2cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=1個 > D=0個 同じ古代6期内で3軒の切り合いがあり、その中でも新しい。3は畿内系と思われ、非ロクロで内面に暗文がある。2は畿内系面取高杯である。

**SB9014**（図版233）

時期；古代6期 須恵器杯Aの質（推定個体数+実測個体数）；A+B=0個 < D=2個 遺物少。古代6期の家が3軒切り合っており、その真ん中の時期のものである。1は非ロクロで畿内系黒色土器の大皿である。

**SB9018**（図版233）

時期；古代8期前半 組成比；0：1：90：1 3は土師器のようにも須恵器のようにも見える小片である。図化できないが、光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器の小片もある。5は須恵器甕Dだが耳は3個しかない。

**SB9028**（図版233） 時期；古代8期前半 組成比；0：0：89：11 掘方から土師器杯A IIが出土している（2）。

**SB9036**（図版233～234）

時期；古代6期 組成比；0：64：36：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.2cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=1個 < D=7個 9は小さな割れ口をとまなう灯明具1である。3には墨書がある。

**SB9037**（図版234） 時期；古代8期前半 組成比；0：3：65：22 6は光ヶ丘1号窯式（後半）である。

**SB9043**（図版234 PL42 巻頭図版3）

時期；古代8期前半 組成比；0：1：66：12 床まで単層で洪水砂が埋没している。洪水によって埋没した住居であるが、遺跡を広くおおう洪水砂と同一のものかどうかは不明である。1は灯明具1。22に

は暗文がみられ、掘方出土である。灰釉陶器の出土が多い。15・17・18・19は光ヶ丘1号窯式。16はつけがけで器形も丸みがあり大原2号窯式。14もつけがけの可能性もあり大原2号窯式の可能性がある。これらはすべて東濃産、21は猿投産である。食膳具構成は黒色土器が主体で須恵器はわずかであり土師器の組成比が12%である。さらに光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器を多量にもつこと等、遺跡全体を広くおおう洪水砂を覆土にもつ住居と共通の土器様相を示しているため、この洪水の前後の時期の遺構と考へ、参考扱いだが編年表4でとりあつかっている。図化できなかつたが、京都洛北系で0類の緑釉陶器の小片も出土している。

**SB9050** (図版235 PL43)

時期；古代8期前半 組成比；0：5：65：27 糸切須恵器杯A内径平均；6.9cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 > D=0個 古代8期前半の標準資料である。覆土に洪水砂をもつ。9、11、16は黒色土器Aだが内面に磨きがない。5は灯明具1であり、更に底面に焼成前に1孔が穿たれている。26は小さな割れ口を1つ伴い内外面にすすが付着している。28は光ヶ丘1号窯式、27はつけがけで大原2号窯式である。24、25は杯部にしめる脚部の比率が高く盤BIである(それぞれ脚部が器高に対して42%、36%をしめる)。

**SB9058** (図版236 PL43)

時期；古代6期 組成比；0：55：45：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.9cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=2個 4の須恵器ミニチュア長頸壺の体部には穿孔が見られる。

**SB9059** (図版236 PL43・57)

時期；古代6期 組成比；0：82：18：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.2cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=20個 古代6期の標準資料である。須恵器杯Aの質ではCタイプのなものも多くみられ、Dタイプと判別が難しいものもある。墨書土器が6点([N]が1点、[V]が5点)みられる。27は灯明具1で分量も小さく、灯明専用に使われたものと思われる。

**SB9060** (図版237) 時期；古代6期 組成比；0：66：34：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.2cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=2個

**SB9061** (図版237) 時期；古代6期 組成比；0：53：47：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.6cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個

**SB9062** (図版237)

時期；古代6期 組成比；0：66：34：0 組成比(個体数比)；0：74：26：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.8cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=6個 1は灯明具2。2、3はすす付着土器である。

**SB9063** (図版237) 時期；古代6期 組成比；0：80：20：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.1cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 < D=5個

**SB9065** (図版237)

時期；古代6期 組成比；0：45：55：0 須恵器杯Aの質(推定個体数)；A+B=0個 < D=5個 須恵器杯Aは小片で図化できないが、Dタイプのみで内径値も6cm前半台である。

**SB9066** (図版237) 時期；古代8期前半 組成比；0：41：45：14 遺物少。4は口径17.5cmと小さめの土師器甕Iである。

**SB9067** (図版238 巻頭図版3)

時期；古代8期前半 組成比；0：13：73：9 糸切須恵器杯A内径平均；5.1cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=2個 > D=1個 VI層検出であり、覆土に洪水砂をもたない段階の古代8期前

半の標準資料である。検出状況からも、土器の面からも8期前半の良好なセットである。18は内面にミガキ後暗文を施す。14は「一」のヘラガキが底部に見られる。17は尾北系でa-2類の緑釉陶器である。灰釉陶器では13は光ヶ丘1号窯式（前半）。16は内面のみ施釉されており黒笹90号窯式（K90-1）である。22は小片だが羽釜と思われる。鏝は小さく短い。この時期には一般的でないが、混入でないとすると初現期の一形態を示すことになろう。

**SB9068**（図版239）

時期；古代6～7期 組成比；0：71：29：0 糸切り須恵器杯A内径平均；6.9cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=1個 > D=0個 遺物少。3の土師器甕Cの口縁部は「く」である。

**SB9069**（図版239）

時期；古代6期 組成比；0：93：7：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.8cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=1個 < D=4個 須恵器杯Aの内径平均が高いのは、4の軟質須恵器杯Aの内径がとびぬけて大きいためである。他は古代6期の内径値を示す。

**SB9070**（図版239） 時期；古代6期 組成比；0：64：36：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.5cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=2個

**SB9071**（図版239 PL61）

時期；発掘所見では2軒の重複があり、火床の周りから出土した一群と火床から離れた位置で壁を取り巻くように出土したややレベルの低い一群に遺物は分けられる。時期はほぼ同時期であり、古代6期（7期に近い）に位置付く。

**SB9072**（図版240 PL57）

時期；古代7期前半 組成比；0：77：23：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.9cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=5個 > D=0個 4には[大山]（篆書で[赤]）の墨書が見られる。

**SB9073**（図版240 PL43）

時期；古代6期 組成比；0：85：15：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.3cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=1個 < D=11個 古代6期の標準資料である。墨書が3点見られる。そのうち28は掘方出土である。5の須恵器皿Bは出現期のものである。

**SB9074**（図版241 PL42・43）

時期；古代6期 組成比；0：78：22：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.4cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=2個 5、6は畿内系黒色土器杯、8は畿内系黒色土器鉢。いずれも非ロクロである。畿内系黒色土器を模倣した可能性のあるものに7の大皿、3の小椀がある。両者ともロクロ使用だが、ミガキが横方向で在地のミガキ方と異なる。

**SB9075**（図版241） 時期；古代6～7期 組成比；0：8：92：0 糸切須恵器杯Aの内径平均；6.5cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=1個

**SB9076**（図版241） 時期；古代7期後半 組成比；0：22：78：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.3cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=1個

**SB9077**（図版241）

時期；古代6期 組成比；0：69：31：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.5cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=12個 古代6期の標準資料である。15は墨書、19は畿内系黒色土器の椀であり、非ロクロで内面に暗文を持つ。胎土、ミガキの方向ともに在地のものとは異なる。

**SB9078**（図版242）

時期；古代6期 組成比；0：56：39：5 糸切須恵器杯A内径平均；6.7cm 須恵器杯Aの質（実測



個体数) ; A+B=0個 < D=1個 胎土は在地のものでありロクロ使用でもあるが、明らかに在地の土器と違う器形、作りの一群がある。5の内面は黒色ではないがミガキをもち、黒色土器Aに分類される大皿で珍しい器形である。内面黒色処理したものに6の鉢がある。内面のミガキが横方向であり明らかに在地のものとは違う。古代6期に複数みられる畿内系黒色土器を意識した可能性もある。図示していないが、組成比で5%ある土師器杯Aは混入である。

**SB9079** (図版242)

時期; 古代7期 組成比; 0:43:35:0 糸切須恵器杯A内径平均; 6.1cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=0個 < D=1個 黒色土器A杯AIIの法量は、古代7期後半~8期にかけてみられる範囲内のものである。3の灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式(前半)のものである。

**SB9080** (図版242) 時期; 古代7期 組成比; 0:45:55:0 糸切須恵器杯A内径平均; 6.1cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=1個 = D=1個。3は朱墨硯である。

**SB9081** (図版242 PL43)

時期; 古代6期 組成比; 0:74:26:0 糸切須恵器杯A内径平均; 6.8cm 破片資料まで含めると6.7cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=0個 < D=3個 1は畿内系黒色土器杯、10は畿内系黒色土器鉢である。非ロクロで赤橙色の化粧土が塗られており、内面には暗文が見られる。9は灯明具1である。11は灰釉陶器平瓶の口縁部で黒笹14号窯式である。

**SB9084** (図版243)

時期; 古代7期前半 組成比; 0:53:45:0 糸切須恵器杯A内径平均; 6.1cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=7個 > D=5個 古代7期(7期前半)の標準資料である。13は灯明具1、19の灰釉陶器は黒笹14号窯式(K14-2)である。

**SB9085** (図版243)

時期; 古代6期 組成比; 0:68:32:0 糸切須恵器杯A内径平均; 6.5cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=0個 < D=2個 図化したものは全て掘方出土である。

**SB9086** (図版243) 時期; 古代7~8期 1の灰釉陶器は高台のみで、胴への立ち上がり部が意識的に破壊されている。底部縁辺加工土器に分類される。

**B. 屋代遺跡群**

**SB8** (図版244)

時期; 古代8期前半 組成比; 0:10:70:14 糸切須恵器杯A内径平均; 6.5cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=1個 > D=0個 8期前半の標準資料である。覆土に洪水砂をかなりの割合でもつ。2は灯明具1。25は掘方出土で墨書がある。灰釉陶器の21は黒笹14号窯式、19は猿投産で内面のみ施釉され重ね焼き痕が見られる。黒笹90号窯式(K90-1)である。20は両面ハケぬりで光ヶ丘1号窯式(前半)である。黒色土器A杯AIIには、内面ミガキを施さずに黒色処理したものが半分くらいみられる。

**SB19** (図版244)

時期; 古代6期 組成比; 0:63:37:0 糸切須恵器杯A内径平均; 6.7cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=0個 < D=2個 4の黒色土器A杯AIは外面にもミガキがある。

**SB36** (図版244)

時期; 古代6期 組成比; 0:78:22:0 糸切須恵器杯A内径平均; 6.8cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) ; A+B=0個 < D=6個 2の須恵器杯Aは墨書土器である。

**SB37** (図版245)

時期; 古代8期前半 組成比; 0:11:85:0 覆土に洪水砂を持つ。床下P14に図化できないが土師

器のような須恵器のような小片が1片ある。3の灰釉陶器皿はつけがけの可能性があり、もしそうだとすると大原2号窯式となる。

**SB38** (図版245) 時期；古代8期前半 組成比；0：4：88：4 遺物少。

**SB39** (図版245)

時期；古代8期前半 組成比；0：26：72：1 糸切須恵器杯A内径平均；6.2cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=2個 6の黒色土器B皿Bは朱墨硯である。底部の高台内部に朱墨が付着している。

**SB41** (図版245～246 巻頭図版3)

時期；古代8期前半 組成比；0：10：80：3 糸切須恵器杯A内径平均；5.9cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=6個 > D=0個 IV-Y1-2層検出であり、覆土に洪水砂をもたない段階で食膳具に明確に土師器が出土しはじめており、古代8期前半の標準資料となる。1・7の軟質須恵器杯Aは、黒班はあるものの土師器にも似ている。内面見込みにおさえがなくたちあがるため内径が測れない。15の黒色土器A杯A IIには内面にミガキがない。灰釉陶器の20は両面ハケぬりで光ヶ丘1号窯式(前半)、19はつけがけで大原2号窯式と考えられる。洪水前の遺構からこの型式の灰釉陶器が出土することは注目される。21は光ヶ丘1号窯式(後半)、31は猿投産で黒笹90号窯式である。6の黒色土器A杯A IIは、外面のみにすすが付着し小さな割れ口をともなう。図示できなかったが、産地不明でx類の緑釉陶器の小片がともなっている。27は土師器甕Cの削りをもった土師器甕Iであり、器壁は厚い。

**SB42** (図版246) 時期；古代6～7期 組成比；0：45：55：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.9cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個 遺物少。

**SB44** (図版246)

時期；古代8期前半 組成比；0：37：56：6 糸切須恵器杯A内径平均；6.1cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=2個 > D=1個 覆土には洪水砂が入っている。1と3の須恵器杯Aと皿はすす付着土器である。10の灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式(後半)である。

**SB45** (図版246) 時期；古代5期後半～8期

**SB47** (図版246～247 PL56)

時期；古代8期前半 組成比；0：11：73：16 糸切須恵器杯A内径平均；5.5cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 > D=0個 覆土に洪水砂を持つ。黒色土器A杯A IIには、内面にミガキをもたないものが半数以上をしめる。7は土師器としたが須恵器の可能性もある。10の灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式(後半)である。

**SB48** 時期；古代6～8期前半 遺物少。

**SB49** (図版247 巻頭図版3)

時期；古代8期前半 組成比；0：9：48：21 糸切須恵器杯A内径平均；4.5cm 須恵器杯Aの質(実測個体数) A+B=1個 > D=0個 2の黒色土器A皿Aは黒色ではないが内面にミガキがある。5の灰釉陶器椀Aの外底部には墨書があり、輪花もみられる。光ヶ丘1号窯式である。6の灰釉陶器長頸壺には「大」のカマジルシがみられる。光ヶ丘1号窯式(前半)である。4は猿投系でa-1類の緑釉陶器である。P出土の11は黒色土器A杯A IIで口縁部にゆがみをもち輪花を模倣している。提示できなかったが、黒色土器Aに内面にミガキをもたないものが1点ある。

**SB50** (図版247)

時期；古代8期前半 組成比；0：27：62：0 覆土に洪水砂をもつ。土師器の杯or椀の小片はあるが推定個体にならないほどの大きさである。1の黒色土器A杯A IIには内面のミガキがない。2の灰釉

陶器碗 A は光ヶ丘 1 号窯式（後半）である。

**SB51**（図版247～248 PL44）

時期；古代 7 期後半 組成比；0：10：80：0 古代 7 期後半の標準資料である。1 の黒色土器 A 杯 A II は灯明具 2 である。灰釉陶器が 4 点ある。7 と 10 は猿投産で黒笹 90 号窯式（K90-2）、9 と 11 は東濃産で光ヶ丘 1 号窯式（前半）である。食膳具構成に土師器がない段階ですでに光ヶ丘 1 号窯式が伴うことを知ることができる資料である。また、食膳具に須恵器が伴っていない点も注目される。

**SB52**（図版248）

時期；古代 8 期前半 組成比；0：12：82：4 覆土に洪水砂を持たない。8 の黒色土器 B 皿 B には底部外面に [太] の刻書が見られる。土師器杯 A or 碗は、かろうじて図化できる程度の小片だが覆土の 1 層、2 層に多い。

**SB53**（図版248）

時期；古代 8 期前半 組成比；0：55：40：5 糸切須恵器杯 A 内径平均；5.2cm 須恵器杯 A の質（実測個体数）；A+B=3 個 > D=1 個 須恵器杯 A が多いものの土師器杯 A も見られる。

**SB54**（図版248～249 PL57）

時期；古代 8 期前半 組成比；0：6：87：6 糸切須恵器杯 A 内径平均；5.6cm 須恵器杯 A の質（実測個体数）；A+B=1 個 > D=0 個 覆土に洪水砂を持つ。黒色土器 A 杯 A II に墨書が 2 点見られ、3 には [太]、6 には [吉] とある。13 の黒色土器 B 皿 B には [吉] の刻書が見られる。14 は故意に底部を打ち欠いており、底部を何らかの形で再利用した土器である。「光ヶ丘 1 号窯式」のものである。提示できなかったが黒色土器 A 杯 A II の内面にミガキがみられないものも 1 点ある。

**SB55**（図版249 PL56）

時期；古代 8 期前半 組成比；0：20：70：5 糸切須恵器杯 A 内径平均；7.5cm 須恵器杯 A の質（実測個体数）；A+B=1 個 = D=1 個 7 の土師器耳皿には底部穿孔がみられる。6 の灰釉陶器は黒笹 90 号窯式（K90-3）である。

**SB56**（図版249）

時期；古代 8 期前半 組成比；0：18：78：2 覆土に洪水砂をもつ。3 は土師器としたが須恵器にもみえる。覆土内には図化できないが土師器杯 or 碗のような小片がある。4 の灰釉陶器小碗は「光ヶ丘 1 号窯式」である。

**SB57**（図版249～250 PL61）

時期；古代 8 期前半 組成比；0：19：78：3 糸切須恵器杯 A 内径平均；5.4cm 須恵器杯 A の質（実測個体数）；A+B=1 個 > D=0 個 土師器のようにも、ミガキのとんだ黒色土器 A のようにも見える杯 A or 碗の小片が複数見られる。4 の黒色土器 B 皿の小片には [太] の刻書が見られる。

**SB58**（図版250）

時期；古代 6 期 組成比；0：81：19：0 糸切須恵器杯 A 内径平均；6.8cm 須恵器杯 A の質（実測個体数）；A+B=0 個 < D=2 個 5 は畿内系黒色土器である。燈色を呈し、非ロクロで外面底部から腰部にかけてはへら削りし、内面には横方向のミガキ後暗文が施される。2 は墨書である。

**SB59**（図版250 PL61）

時期；古代 8 期前半 組成比；0：19：76：2 糸切須恵器杯 A 内径平均；6.9cm 須恵器杯 A の質（実測個体数）；A+B=1 個 > D=0 個 2 は黒色土器 A 杯 A II で [金] の刻書がある。4、5 には内面にミガキが見られない。7 は「黒笹 14 号窯式」、8 は灰釉陶器碗の底部を再加工したものである。

**SB60**（図版250） 時期；古代 8 期前半 組成比；0：12：77：11 覆土に洪水砂をもたない。

**SB61** (図版250) 時期；古代6期 組成比；0：93：7：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.8cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個

**SB62** (図版250) 時期；古代7期 組成比0：0：100：0 遺物少。

**SB63** (図版250～251)

時期；古代6期 組成比；0：57：42：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.8cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=2個 < D=8個 古代6期の標準資料である。14には墨書がみられる。17の灰釉陶器は黒笹14号窯式(K14-2)である。土師器甕C(16・20)の口縁部は両者とも「コ」である。

**SB64** (図版251) 時期；古代6期 組成比；0：37：63：0 遺物少だが、古代6期の住居に切られており、黒色土器B小椀をもつことから古代6期の遺構である。

**SB65** (図版251)

時期；古代6期 組成比；0：80：20：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.7cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=3個 < D=15個 古代6期の標準資料である。2は灯明具2で小さな割れ口を伴う。土師器甕C(27・29)には口縁部が「く」と「コ」の両者が存在する。土師器甕B(28)も伴っている。

**SB66** (図版252)

時期；古代6～7期 組成比；0：60：40：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.6cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=3個 > D=0個 須恵器杯Aの質は悪く7期的であるが、それより質の良い須恵器杯BIV(4)と杯蓋B(1)がともなうため6～7期と時間幅をもってとらえておく。2、6にはカマジルシがある。2は内面のみにすすが付着している。小さな割れ口もある。黒色土器B皿Bに2点(7・8)刻書が見られる。5は黒色土器B杯AIIである。

**SB67** (図版252)

時期；古代7期前半 組成比；0：46：54：2 糸切須恵器杯A内径平均；5.9cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=7個 > D=1個 9は土師器杯Aだが、この遺構を切るSD124と重なる位置で、覆土でも高いレベルの出土のためそこからの混入と考える。また、この土器は内面に藁状の圧痕が見られる。3の須恵器杯Aは、内外面にすすが付着している。8の黒色土器A皿Aには「一」のへらガキがある。11の灰釉陶器短頸壺は静岡県静岡ヶ谷窯のもので、黒いぼつぼつ(硫化鉄)が表面にふき出ている。時期的には黒笹90号窯式に併行する。

**SB68** (図版252)

時期；古代7期前半 組成比；0：40：60：0 糸切須恵器杯A内径平均；7.1cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 = D=1個 推定個体も含めると、黒色土器A杯Aの底部調整は回転糸切未調整のものと、それ以外の調整をしたものの比は1：3で後者が多い。2は須恵器としたが土師器か須恵器か判断できない。3、4には墨書が見られる。

**SB69** 時期；切り合いから古代6期も含めそれより古い。 組成比；0：34：64：0 遺物少。

**SB70** 時期；切り合いと検出面から古代8期前半。遺物少。

**SB71** (図版253)

時期；古代8期前半 組成比；0：29：68：2 糸切須恵器杯A内径平均；6.7cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 > D=0個 覆土に洪水砂をもつが、一般的な洪水砂とは違う。覆土に図のとれない土師器杯Aor椀の小片がある。3はカマドの掘方出土で見込部に「午」の刻書が見られる。

**SB72** (図版253)

時期；古代7期後半 組成比；0：32：68：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.7cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=3個 > D=0個 古代7期後半の標準資料である。3の須恵器杯Aにはすす

が付着している。須恵器杯 A の質はすべて B タイプのもので、D タイプは存在していない点が注目される。

**SB73** (図版253)

時期；古代6期 組成比；0：75：25：0 糸切須恵器杯 A 内径平均；6.2cm 須恵器杯 A の質 (実測個体数)；A+B=0個 < D=3個 掘方からの遺物の出土も多い。掘方の糸切須恵器杯 A の内径平均は6.8cmで、覆土のものよりやや大きめである。

**SB74a** (図版253 巻頭図版3)

時期；古代8期前半 組成比；0：8：74：17 2は刻書、3・4の土師器碗には暗文がみられる。5は猿投系でa-1類の緑釉陶器で、他にも同様の小片が2片みられる (SB74で取り上げ)。図化できなかったが東濃産でハケヌリの灰釉陶器の小片がみられる。

**SB74b** (図版253) 時期；古代8期前半 組成比；0：20：75：5 糸切須恵器杯 A 内径平均；5.7cm 須恵器杯 A の質 (実測個体数)；A+B=2個 > D=0個

**SB75** (図版253) 時期；古代8期前半 組成比；0：15：85：2 覆土には土師器杯 A or 碗の小片が3片ある。5は墨書である。

**SB76** (図版254 PL61)

時期；古代8期前半 組成比；0：24：68：0 糸切須恵器杯 A 内径平均；6.8cm 須恵器杯 A の質 (実測個体数)；A+B=1個 > D=0個 覆土に洪水砂を持つ。掘方に図化できないが土師器杯 A or 碗の小片がある。4には外面に [太] の刻書が2カ所ある。5の灰釉陶器は黒笹90号窯式 (K90-2) である。SB76又はSB77から緑釉陶器の小片が2片出土している。1片は京都洛北系のo類で、もう1片は産地不明のx類に分類される。

**SB78** 時期；古代7期 組成比；0：32：68：0 糸切須恵器杯 A 内径平均；5.5cm 須恵器杯 A の質 (実測個体数)；A+B=1個 > D=0個 遺物少。

**SB80** 時期；古代7期 組成比；0：48：52：0 遺物少。

**SB81** (図版254) 時期；古代7期 組成比；0：0：100：0 遺物少。

**SB83** 時期；古代5期後半～8期？ 組成比；0：0：100：0 遺物少。

**SB84** 時期；古代6～7期 組成比；0：40：60：0 遺物少。

**SB85** 時期；古代5期後半～8期 組成比；0：86：11：3 遺物少。検出面から洪水前の時期である。

**SB86** (図版254) 時期；古代2期初頭～8期 遺物少。

**SB87** (図版254) 掘方からのみ出土がみられる。2には墨書がある。古代6期の遺構である。

**SB110** (図版254) 時期；古代6期 組成比；0：59：41：0 糸切須恵器杯 A 内径平均；5.6cm 須恵器杯 A の質 (実測個体数)；A+B=2個 < D=4個

**SB111** (図版254)

時期；古代7期前半 組成比；0：47：38：0 糸切須恵器杯 A 内径平均；5.5cm 須恵器杯 A の質 (実測個体数)；A+B=1個 > D=0個 3は黒色土器 B の杯 A であり、外面もミガキ後黒色処理を施してある。2の灰釉陶器は「黒笹14号窯式」である。4は器種不明だが内面暗赤色に塗彩されている。

**SB112** (図版254)

時期；古代6期 組成比；0：70：30：0 糸切須恵器杯 A 内径平均；6.5cm 須恵器杯 A の質 (実測個体数)；A+B=1個 = D=1個 推定個体も入れると、須恵器杯 A の質は A+B=120g < D=345g となり、Dタイプのほうが多い。

**SB113** (図版254)

時期；古代6期 組成比；0：62：38：0（へら切りの須恵器杯Aはのぞいて集計） 糸切須恵器杯A内径平均；6.3cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=1個 > D=0個 推定個体すべてで須恵器杯Aの質を見ると、A+B=2個 < D=3個となりDタイプの方が多い。1はへら切りの杯Aだが内径が6.3cmと小さい例である。

**SB114**（図版254） 時期；古代6期 組成比；0：100：0：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.6cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=1個 遺物少。

**SB115**（図版254）

時期；古代6期 組成比；0：81：19：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.9cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=1個 推定個体の須恵器杯Aの質にCタイプのものが多めに見られる。遺構はSB115aとSB115bに分かれるが、遺物は一括して取り上げられており、SB115として時期判断した。

**SB116** 時期；古代6～7期 組成比；0：85：15：0 遺物少。

**SB117**（図版254） 時期；古代6期 組成比；0：95：5：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.9cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=1個

**SB118**（図版254）

時期；古代6期 組成比；0：78：19：3 糸切須恵器杯A内径平均；6.6cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）A+B=0個 < D=5個 土師器杯Aor 碗の小片は混入。

**SB119**（図版254）

時期；古代7期 組成比；0：27：64：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.4cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=1個 > D=0個 4は無施釉の灰釉陶器皿であり光ヶ丘1号窯式（後半）。ミガキは見られない。3は灯明具2で小さな割れ口を伴っている。

**SB120**（図版255 PL44） 時期；古代7期後半 組成比；0：30：70：0 1は灯明具1で口縁全周を灯明用に使っている。2には意味不明の墨書がみられる。

**SB121**（図版255）

時期；古代7期後半 組成比；0：25：75：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.7cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=1個 > D=0個 3には「一」のへらガキがある。

**SB122** 時期；古代6期～7期 組成比；0：72：28：0 遺物少。

**SB123**（図版255） 時期；古代6期 組成比；0：46：54：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.4cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=1個 < D=2個

**SB124**（図版255 PL62）

時期；古代7期前半 組成比；0：49：51：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.4cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=4個 > D=2個 4には「一」のカマジルシがある。6には刻書がみられる。5の土師器甕？は内面が暗赤色である。

**SB125**（PL56） 時期；切り合いから古代6期 組成比；0：50：50：0 遺物少。

**SB126**（図版255） 時期；古代6期 組成比；0：79：21：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.0cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=0個 < D=2個

**SB127**（図版255）

時期；古代6期 組成比；0：58：41：1 糸切須恵器杯A内径平均；6.2cm 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=1個 < D=2個 図化できないが、土師器のように見える杯Aor 碗の小片があるが須恵器にも見える。

**SB128** (図版255)

時期；古代8期前半 組成比；0：41：56：3 糸切須恵器杯A内径平均；6.3cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 > D=0個 図化できないが小片で明らかに土師器杯Aor椀がある。

**SB129** (図版255) 時期；古代6期 組成比；0：58：42：0

**SB131** (図版255) 時期；古代8期前半 組成比；0：17：52：25 2の灰釉陶器は猿投産で黒笹90号窯式(K90-3)である。三日月高台が幅広で低くなり、見込の施釉がない。

**SB3006** (図版256 PL56)

時期；古代8期前半 組成比；0：12：76：9 糸切須恵器杯A内径平均；7.2cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個 覆土に洪水砂をもつ。5は黑色土器B杯A Iで刻書がある。図を掲載できなかったが黑色土器で内面にミガキがないものが存在する。11・12は光ヶ丘1号窯式である。

**SB3007** (図版256)

時期；古代8期前半 組成比；0：2：98：0 黑色土器Aで黒色のとんでしまったものが2片あるが、土師器の食膳具はない。しかし、覆土に明らかに洪水砂が入っている。

**SB3008** (図版256)

時期；古代8期前半 組成比；0：18：69：12 糸切須恵器杯A内径平均；6.3cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個 覆土に洪水砂を持つ。2の黑色土器A杯A IIには内面にミガキがなく暗文がある。7の灰釉陶器は尾北産で篠岡4号窯式の小瓶である。釉が青白色に白濁し、胎土がやや黄色っぽい。

**SB3009** (図版256) 時期；古代8期前半 組成比；0：51：48：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.5cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=1個 遺物少。

**SB3010** (図版257)

時期；古代8期前半 組成比；0：25：69：6 糸切須恵器杯A内径平均；5.4cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=2個 > D=0個 覆土に洪水砂を持たない。

**SB3011** (図版257) 時期；古代7期 組成比；0：27：72：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.7cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 = D=1個

**SB3013** (図版257)

時期；古代7期 組成比；0：28：66：5 糸切須恵器杯A内径平均；5.7cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 = D=1個 2の軟質須恵器杯Aの内径は3.9cmと非常に小さい。SB3013はaとbに分けられるが遺物として分離できるのはSB3013bの1～3のみである。

**SB3014** (図版257～258 PL44)

時期；古代7期後半 組成比；0：22：78：0 糸切り須恵器杯A内径平均；6.4cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=2個 = D=2個 古代7期後半の標準資料である。すす付着土器が2点みられる(11・14)。9は小さな割れ口から油状にすすが流れ出すように付着しており、灯明具2に分類できる。13も灯明具2。8は焼成後体部外面から穿孔を行った土器である。黑色土器の比率は高くなってきているものの、まだ東濃産又は尾北産の灰釉陶器の出土はみられていないところに特徴がある。

**SB3015** (図版258 PL44・56)

時期；古代8期前半 組成比；0：24：67：9 糸切須恵器杯A内径平均；5.7cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=2個 > D=0個 覆土に洪水砂を持たない。礎石建物ST3002(8期前半)に切られており、古代8期前半の開始を示す好資料となる。4はミガキはあるが黒色かとんでしまった杯である。食膳具に土師器のようにもみえる須恵器が多い。1は灯明具1。7は須恵器にもみえ土師器との区別

が難しい。6の灰釉陶器蓋は光ヶ丘1号窯式である。

**SB3016** (図版259 PL44・57)

時期；古代6期 組成比；0：58：42：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.2cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=4個 < D=9個 古代6期の標準資料である。墨書土器が4点みられる(5・6・17・21)。5はカマジルシも併せ持っている。13は一般的な須恵器杯B IIIと形が違ふ。16の見込み部のミガキは交差しておりこれも一般的なものとは違ふ。灰釉陶器の24は黒笹14号窯式または黒笹90号窯式、25は黒笹90号窯式である。6期末には黒笹90号窯式が出土し始めることがわかる良好な資料である。

**SB3017** (図版259)

時期；古代7期 組成比；0：67：33：0.3 糸切須恵器杯A内径平均；5.8cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 = D=1個 推定個体で見ると須恵器杯Aの質はA、Bタイプのものが多い。土師器杯Aの小片は一片(5g)で須恵器が多い構成のため7期とした。

**SB3018** (図版259) 時期；古代7期前半 組成比；0：67：33：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.7cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=5個 > D=2個

**SB3019** (図版259～260)

aとbに分離できる。分離できた遺物はaが1点、bが2点である。SB3019を一括して述べる。

時期；古代7期後半 組成比；0：14：86：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.7cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=2個 > D=1個 黒色土器A杯A IIの灯明具1が4点見られる。(SB3019-5・6、SB3019a-1、もう1点は未掲載)

**SB3029** (図版260 PL56)

時期；古代7期前半 組成比；0：59：40：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.8cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=3個 = D=3個 須恵器杯Aの質でDとしたものもBに近い。3はカマジルシ。須恵器杯Aの4は、口縁部の小さな割れ口のところに灯芯状のすすが付着しており灯明具2に分類される。8は京都洛北系でo類の緑釉陶器碗である。

**SB3030** (図版260) 時期；古代6期後半～7期前半 組成比；0：46：53：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.1cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=2個

**SB3031** (図版260～261 PL57)

時期；古代6期 組成比；0：66：34：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.1cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=0個 < D=10個 古代6期の標準資料である。掘方には須恵器杯Aの質でCタイプのものが多めに見られる。12の須恵器杯B VもCタイプで、杯A以外の器種で見られる例として珍しい例である。6期にCタイプの須恵器が多いことがわかる良好な資料である。4、10には墨書がみられる。[八代]と倒位で書かれ、遺跡名と同名の[やしろ]と読める。

**SB3032** (図版261) 時期；古代6期後半～7期前半 組成比；0：54：46：0 糸切須恵器杯A内径平均；5.6cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=1個 > D=0個

**SB3033** (図版261) 時期；古代8期前半 組成比；0：40：59：1 1は床下と覆土の接合である。土師器のようにも見える杯Aor碗の小片が2片ある。

**SB3034** (図版261 巻頭図版3)

時期；古代6期 組成比；0：62：37：0 糸切須恵器杯A内径平均；6.1cm 須恵器杯Aの質(実測個体数)；A+B=5個 > D=3個 須恵器杯Aの質(推定個体数+実測個体数)；A+B=7個 < D=24個 須恵器杯Aの質は推定個体まで入れるとDタイプが圧倒的に多い 須恵器杯Aにカマジルシが2点ある(2・4)。9は京都洛北系でo類の緑釉陶器であり、屋代遺跡群では初現期のものである。